

---

**バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ IFシリーズ**

さすらいの旅人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ IFシリーズ

### 【Nコード】

N0674W

### 【作者名】

さすらいの旅人

### 【あらすじ】

このお話は秋雨さん作「バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ」のオリキャラを使用するIF物語です。そして途中から作者である私が「バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ」の世界に介入してドタバタ劇を起こすと言う途轍もなくあり得なさ過ぎる物語です。そんな物は下らない、見たくないと言う人はスルーして下さい。（注： 因みにこの作品に付きましては秋雨さんより許可を頂いております）

## 光一×優子（前書き）

この話は光一と優子が恋人になる前の話です。

それと少しエッチなのでご注意ください。

## 光一×優子

これは光一が優子と恋人になる前の話しである。

「さして、帰ったら明久と秀吉をくっ付ける計画の事前準備でもするか。けどその前にさらに強力なスタンガンを買わないと……ん？ 優子が……」

学校が終わり、久遠光一が家に帰る前に新しいスタンガンを買おうとしていたその途中で木下優子を見かけた。優子は店の前のつろつろしており、悩んでいる様子であった。

「(アニメ〇トに入ったり出たりの繰り返しでまた悩んでる……アイツは一体何がしたいんだ？……)」

「(うーん。どうしよう……ここに限定のアレがあるから買いたいけど……ここで買ったならアタシのイメージが……でも……)」

「(あ……そういえばこの店確か……成程、そう言う事か)」

光一は優子の挙動不審な行動にこの店に何が売っているのかと考えると、すぐに理解した。

「(どうやらアイツは本を買うかどうか悩んでいるみたいだな……それも腐女子向けの……大方、買ったら優等生としてのイメージが崩れるかもしれないからどうするか悩んでいるんだろな……欲しければ買えばいいのに……はあっ……)」

あまりの馬鹿らしさに光一は首を横に振りながら溜息をついた。

「（見なかった事にしておこう……さてと）」

「うーん……うーん……って光一!？」

「ん？」

光一はスタンガンを買いに行く為に優子の後ろを通ろうとしたが、優子が光一に気づき驚きの声を上げた。優子に呼ばれた光一は顔を向ける。

「な……何で……光一がここに……」

「出来れば俺に気付いて欲しくなかったんだが……」

「そ……そんな事より光一!! み……見てたのね?!」

「……………」

「黙っていないで答えなさい光一!!」

「……あんな挙動不審な行動をしてたら、誰でも見ると思っが……」

優子が光一に近づいて問い詰めると、光一は静かに答えた。

「~~~~~!~!~!」

「お……おい……優子……お前何を……」

「忘れなさい~~~~い!~!~!（ブオンッ!~!）」

「うわ！？ お、落ち着け優子！！ そんな事しても記憶は無くならないぞ……！」

優子は光一の記憶を無くそうと持っている鞆で頭を殴ろうとしたが、光一はすぐにかわして優子を落ち着かせようとしていた。

「じゃあこれで忘れさせてあげるわよ……！！……！」

メキメキメキ！

「ぎゃあああああ……！！……！」

光一が優子にタワーブリッジで固められていた。

光一に関節技を仕掛けた優子は、倒れて気絶している光一を連れて路地裏に隠れた。

「……いつつ（ゴキッ！）……あゝ（グキッ！）……優子……お前なあ（ゴキッ）……人の話は最後まで聞けよ……あゝいてえ……」

「う……わ……悪かったわね。でも、光一があんな所にいるのが悪いんでしょ！」

「だからって記憶を無くす為に関節技を仕掛けるか？　ありえねえよ普通……」

光一は優子にはずされた骨を自身で戻していた……音を聞いているだけで痛そうであるが。そんな優子は謝罪をしながらも、自分は悪くないと主張している。

「それで、結局どうするんだ？　帰るのか？」

「……アンタに見られた以上、ここは大人しく帰るわ。いい、アタシがあそこに入ろうとしたって事は絶対言わないでよ！！もし誰かに言ったら……」

「……言ったらどうする？」

光一が聞いてみると優子はニッコリと笑みを浮かべて……。

「その時は二度と思い出させない為に、記憶が無くなるまで続けるからね。覚えておきなさい」

「（……コイツは人の骨を外しておいて、喋ったらアレ以上の事をするのかよ……）」

優子の警告に光一は呆れながら顔が引きつった。もしアレ以上の事をされたら自分は死んでしまうのではないかと危惧する光一であるが何故か釈然としなかった。

「（別に言うつもり何て無いのに何でそこまで必要以上に警告するんだ？……俺はお前との関係はもう終わった筈なのに）」

光一はもう優子とは完全に吹っ切ったのだが……。

「(アタシのバカ!! どうしてこんな風にしか言えないのよ!!!

光一に謝る筈だったのに……)」

優子はまだ諦め切れなかったようだ。

光一と恋人関係になりたいと思う優子であったが、へそ曲がり故にあんな言い方しか出来ない自分に腹が立っていた。そんな優子の心情を知らず、光一は少し懲らしめてやるうかと思った。

「(もういい、優子が謝ったらすぐに許そうかと思ったが止めだ。

ここでさっきの仕返しをしてやる……性的な仕返しをな……)」

光一は優子の感じそうな所は分かっているので、そこを重点的に突こうと考える。そして恨みを晴らそうと思った光一は優子に近づいて……。

「な……何よ光一? アタシに何か言いたい事でもあるの?」

「いいや……お前に仕返しをしようと思ってな……」

「え? ……んむ?!」

光一はすぐに優子にキスをした。逃がさない様に右手で優子の頭を掴み、左手で優子の肩を後ろに回してガッシリと固めていた。

「んん!? ……んんん!!! ……んむ……んあ……(だ……だめ! ……

光一にキスされたらアタシ……)」



優子は光一をすぐに突き放そうとしたが、舌を絡めてくる光一のキスが気持ちいいのか、徐々に力が入らなくなってきた。

「……んちゅ……ちゅぷ……はあっ……どうだ？ 気持ちよかったか？」

「はあ……はあ……はあ……だ……誰が……アンタのキスで……気持ちよくなんか……ないわよ……」

優子は精一杯抵抗しているつもりだろうが、光一は単なる強がりだというの分かった。その証拠に優子の頬は赤らめており、気持ち良さそうな表情をしている。

「へえ〜？まだそんな事言えるとはな……随分と気持ち良さそうな顔してたくせに……」

「……！！……ば……ばかあ！（//////////）」

光一の発言に優子は顔が更に赤くなった。

「どうやらキスだけでは満足出来ないみたいだな……今度はいろいろなところをいじってみるか……」

「な……なにを……ああん！！……だ……だめえ！」

光一は優子を立たせたまま壁に寄り付かせた後、両手で胸を触り始めた。

「…………ど…どこ触ってんのよ…変態…ああ…あん！」

殴ろうとする優子であるが、腕が完全に震えていてとても殴れる状態ではなく、光一に触られて感じているようだ。

「服の上から胸を揉んでるだけなのに随分感じているな…じゃあ次は直に揉んで…」

「や…止めて…そんなことされたらアタシ…ひゃん！　じ…直に触っちゃ…だめえ…ああん！！…み…耳もだめえ！！」

光一は制服のボタンを外してブラをたくし上げて直に触り、優子の耳を甘噛みする。優子は光一の攻めにさらに感じていた。嫌々と言いながらも耳を攻められている光一の頭を抱きしめている。まるでもっとして欲しいと言わんばかりに…。

「どうした？　こんなにされてんのに抵抗しないのか？　いつもの優子だったらもう既に関節技を仕掛けてくるのになあ…やらないんだったらお次は…」

「だ…だめえ光一…アタシ…これ以上はあ…！！…こ…光一？！　そ…そこは…んん…」

光一は優子のキスをしながら、左手で胸を揉み、右手で優子のスカーフトに手を入れてお尻を触り始める。

「んあ…んちゅ…ちゅぷ…はあ…（もう…だめ…光一に…キスされて…胸を触られて…吸われて…アタシのお尻まで触って…ああ…今度はアタシの下着に手を入れてきた…このまま光一と…しちゃうんだ…）」

優子は光一に下着に手を入れられている事で、完全に抵抗は無くなり光一にされるがままの状態であった。

「（もう……如何でもよくなってきた……早くしたい…光一と…したい）」

「どうやら完全に堕ちた様だな。もう少し抵抗してくるかと思ったけど、まあいいか。優子、このまま楽しませてもらうぞ」

「ああ……「ごういちい……はやくっ……」

「自分からおねだりするとはな……いいぜ。お前の望み通りにしてやるよ」

こうして光一は路地裏で何度も優子としていましたとさ。

光一×優子（後書き）

「バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ」の感想板で初めて書いた話です。

コレ以降から秋雨さんのお付き合いが始まりました。

それでは感想をお待ちしております。

それと感想に関してですが、許可を頂いた秋雨さんが何も言わない限り、“この作品はもう連載するな”、“2度と書くな”との批判をされましてもスルーさせて頂きますので悪しからず。

屋上での出来事

光一×愛子（前書き）

これは光一が優子とエッチした数日後の話である。

昼休みの屋上に久遠光一と工藤優子がいた。勿論、二人つきりである。

光一は工藤と座りながら談笑しており、その途中から先日の優子との出来事を話していた。

「へ〜そんな事があつたんだ、優子も相変わらずだね。ホントに素直じゃ無いんだから……………」

「アイツがあんな事をするのは今に始まった事じゃないが、流石にあの言い方には俺も頭に來たから仕返しをさせてもらった。」

「仕返しってどんな？」

「性的な仕返しだよ。まあ、アイツは気持ち良い顔してもっとして欲しいって強請つて來たがな。俺としては十分楽しませてもらったからいいが」

「……………（久遠君の攻めに優子は凄く感じていたんだな……………）」

光一の話の聞いている工藤はあの時の優子がどんな顔をしていたかがすぐに予想出來た。もし、光一にそんな事をされたら自分も同じ顔をするのかと工藤は考える。

「（久遠君って何処でそう言ったテク覺えたんだろ……………）」

「どうした工藤？考え事か？」

「え？…あ…いや…その時の優子はどんな顔してたのかな？って…」

「……ほづ？…聞きたいのか？」

「……あ…（やば）」

光一に考えている事を少し誤魔化す工藤であったが、それはかえって毒蛇だったかもしれないと悟る。

「じゃあ俺が優子をどういう風に仕返しをしたか、教えてやろうか？」

「あ…あの……そ…それって…どういこと？…」

光一はニヤツと笑いながら立ち上がり工藤に近づこうとするが、工藤は笑みを浮かべながらも座りながらジリジリと後ろに下がっている。

「どうした工藤？何故逃げるんだ？」

「だ…だから……それは……その……（ジリジリ…ドン！）…あ」

工藤は後ろに下がるもぶつかった音がしたので、後ろを見ると壁があった。光一は工藤に近づくと膝を曲げてしゃがみ、右手で工藤の頬に触れる。

「酷いじゃないか工藤、俺を見て逃げようとするなんて。そんなに

俺が怖いのか？ …… だったら心外だな」

「ち…違つよ久遠君。別に…怖いわけじゃないからね。ボクはただ…」

「ただ？」

「お…教えるつて…優子にした事を…ボクにも…するつて事？」  
「……………」

おそろおそろ光一に聞く工藤、光一は工藤の質問にフツと笑つて工藤の耳元で呟いた。

「……………もしかして、やつて欲しいのか？」

「（ビクッ！）…え…あ…いや……そ…そんな事は…」

光一の発言にしどろもどろになりながらも、しない事に安心したが…。

「何だよ。して欲しいならすぐに言えばいいのに……じゃあ望み通りにしてやるよ…」

そう言つて光一は工藤の顎をクイツと持ち上げてキスをしようとする。

「え？ ……ちょ……ちよつと待つて！…んん！！」

……………ここからは優子にやつた事と同じ事をするので省略させて頂き



ます。

10分後……………

「はあ…はあ…はあ…久遠くうん…気持ちいいよお…」

工藤も前回の優子と同様に頬を赤らめており、気持ち良さそうな表情をしていた。

「そう…そんな顔だよ工藤。俺が優子にしてやった事は…」

工藤の表情に光一は満足そうな顔をしていた。

「ああ…お願い久遠くうん…もっと…もっとキスしてえ…」

「もういいだろ？俺はただ優子にした事をやっただけなんだから…それにそろそろ授業が始まる。戻った方がいいぞ？」

光一は工藤から離れて屋上から出ようとしますが、工藤は行かせないかのように光一を抱き止める。

「ボクをこんなにしておいて止めるなんて酷いよお…ねえ久遠くうん…ボクと…しよ…」

「……授業が終わってからでいいんじゃないのか？」

「そんなに待てないよお……ボクもお我慢出来ない……授業なんてどうでもいいからあ……はやくう……」

「……とてもAクラスの生徒とは思えない発言だな……まあ仕方ないか、俺がこうさせたからな」

工藤の強請る発言に光一は少し呆れた表情をしていたが、原因は自分だから仕方ないかと思ひ反省する。

「お願いい……我慢出来ないのぉ……はやくう……」

工藤は光一の手を掴んで自分の胸を触らせ、自分の右手で光一の制服に手を突っ込んで触り始める。

「ボク……早く久遠君としたいよお……久遠君のテクでえ……ボクを一杯感じさせてえ……はあ……はあ……」

「……しょうがない、お前をこうさせた原因は俺だからな。それじゃあ目一杯感じさせてやろう……」

工藤の誘いに我慢出来なく無くなって来た光一は工藤に耳打ちをして……。

「工藤……して欲しかったら……此処で服を脱げ……（ボソボソ）」

「いいよお……久遠君の言うとおりに……（スルッ）」

光一と工藤は授業をほったらかして始めようとする。工藤は服を脱いで（ここからは省略）光一にされるがままの状態になっていたのであった。

さらに20分後……。

「工藤、気持ちいいか？」

「ああん！久遠くうん…もっと…もっとしてえ！」

工藤は光一にあちこちと感じる所を攻められてる事によって完全に堕ち、光一の虜となっていた。

そして……。

「ああ……光一……だめ…声……出ちゃう…んん！！」

何故か屋上の出入りに優子がいて、一人で自分の体を触っている手をさらに速く動かしていた。

「光一……光一……こういいい！」

ガタッ！

「!?!?!」

「ん？」

優子は近くにあった掃除用具入れを蹴つてしまい音を立てると、光一はその音に気づいたので行為を中断して屋上の入り口を見る。

「（確かにあそこから音が聞こえたな…誰か覗いているのか？）」

「はあ…はあ…どうしたの久遠君？」

「……………」

「はあ…はあ…ねえ久遠くん…続けてよお…ボク…もうちょっとで……………」

「……………工藤、悪いが一時中断だ」

「ええ！？ ……そんなあ！ ……ここで止めるなんて生殺しだよお……………お願いだから早く続けてえ……………」

光一は工藤から離れて懐にしまっている小型銃型のエアガンを持ちながら入り口に行こうとすると、工藤は嫌がるかの様に光一に抱き付きながら続けて欲しいと懇願した。

（因みに銃のモデルは「ベレッタM1919」と言う名の銃です。隠し銃として大変便利ですよ。 byさすらいの旅人）

「悪いな工藤。俺としてはまだ続けたいんだが……………あそこに観客が

いるみたいでな……」

「え？ ……それって誰かがボクたちを覗いて……」

工藤は光一の言っている事に気付いたので、光一と同様に入り口の方に目を向ける。

「そう言うことだ。そこにいる奴！ 出て来い！！」

シ~~~~~ン

光一が入り口に向かって言っても反応は無かった。

「……もしかして久遠君に気付いて逃げたのかな？」

「……いや、逃げてはいない。まだあそこにいる」

「どうして分かるの？」

「すぐに逃げたんなら、階段を降りる音が聞こえる筈だ。それが聞こえないなら、隠れているか、留まっているかのどちらかだ……工藤はそこにいろ」

「う……うん」

光一はダッシュして入り口に近づきドアを蹴って入り銃を構え……。

「誰だ!？」

「あっ!？」

「…………… って何だ、優子じゃないか。脅かすなよ」

光一は相手が優子と確認すると、構えていた銃をしまって優子に近づいた。

「そ…それはこっちの台詞よ!! アンタ、人にそんな物騒な物を向けないでよ!!」

「それ以前に何で優子がここにいるんだ? 今は授業中の筈だが…  
…」

「!!… …… それは… …… あ…愛子を呼びにきたのよ!! もう  
少しで授業が始まるのに教室に来ないから…」

まさか二人の性行為をしている所を見て自分もしていた何て口が裂けても言えない優子であった。

「へえ… …… 呼び戻そうとした割には随分と…」

光一は優子の服の乱れに何となく気付いていながらも敢えて優子に聞こうとすると…。

「ち…違っわ!! …… あたしは別に何もしてないわよ!」

「まだ俺はお前にここで何をしていたかとは聞いてはいないが?」

自分からボ口を出している優子であった。

「だ……だから……その」

「ふっ……大方、俺と工藤がしている所を見てそれに興奮して一人でしていた……ってどこか？」

「……！！ ……な……なんでそれを！！ ……はっ……！！」

「大当たりか……まあ予想は付いてたが……」

ピタリと言い当てた光一に優子は動揺したが、それはかえって墓穴を掘った事に気付くがもう遅かった。

「なんだよ……一人でしてないで、俺たちと一緒に混ざればよかつたろ？」

「……………」

優子は顔を真っ赤にして何も言えない状態だった。

「今度はダンマリか……じゃあすぐに喋らせてやる……」

「え？なに……なにを……あん！！ ……ちょっと……ああん！ ……光一……やめ……」

光一は優子に近づき優子の胸と触り始める。優子は気持ちいいのか、光一に触られていても抵抗はしなかった。

「何だよ……俺がちよっと触っただけでこれか……お前も随分とス

ケベになつてきたな……前は俺に関節技を仕掛けた時とは大違いだ」

「ち……ちがう……からあ……あたしは……ただ……あ……ああ……（き……気持  
ちいい……自分でするより……光一にしてもらった方が……すごくいい……  
……）」

言っている事と思っていることが矛盾している優子に、光一は再び  
再会しようとする。

「それじゃあ……優子も良さそうだし……また工藤と始めるか……」

光一は優子を工藤の所へ連れて行って説明した後に、工藤と再び再  
開した……今度は優子を交えて。

おまけ

光一と工藤が行為に夢中になつて20分前に……。

「……光一が……今度は愛子と……してる……ああ……アタシも……  
……光一としたい……」

優子は工藤を呼び戻すのに屋上に来ていたのだが、隠れて自分でや  
っていた。

最初は光一が工藤を攻めている所を見て思わず隠れたが、工藤の感



じている顔を見てると先日のを思い出して、あんな事をされたのだ  
と思いつきながら体が熱くなってきたので自分の体を触り始めたの  
だ。

「こ……こついちい……だ……だめ……こんな所で……あ……アタシ……もお」

頭の中で光一としているのを連想しているみたいで、向こうも向こ  
うで結構盛り上がった。

「どうだ工藤、気持ちいいか？」

「あん！……あん！……き……きもちいいよお」

と言つ訳で、そんなこんなで楽しんでる優子であったのだ。

屋上での出来事

光一×愛子（後書き）

次回は明久と秀吉のラブシーンですのでお楽しみに。

屋上での出来事？

光一×愛子×優子+明久×秀吉(前書き)

前回の続き物です。それではどうぞ!!

屋上での出来事？

光一×愛子×優子+明久×秀吉

「……ねえ秀吉、屋上が凄い事になってるね」

「……う…うむ。あ…姉上があんなに……」

明久と秀吉は屋上を覗いていると……。

「どうだ二人共？気持ちいいか？」

「あああ……いい……いいよお！凄くいいよお！」

「光一…光一…もつと…もつとお！」

光一が工藤と優子に纏めてエッチしている。

「ごっついちい……今度はあたしにしてえ…めちゃくちやにしてえ…」

「しょうがないな…優子は……（スッ）」

光一は気持ち良くさせようと優子の服の中に手を入れる。

「ああん…！いい…！いいよお…！」

「ああ……優子ずるいよお……ボクまだ途中なのにい……」

「ちょっと待ってる工藤、すぐに終わらせるから」

光一が優子を攻めていると、さつきまで攻めていた工藤がまたして欲しいと強請ってくる。

「ふむ……工藤はそろそろみたいだな」

「久遠君……もう我慢出来ないのお……ボクの体を弄ってえ……」

「あん！……駄目よ愛子お……光一は……このまま……あたしにい……」

優子は光一を離さない為にこれでもかと言う位に抱きついてた。

「おいおい優子、そんなに抱きつかれたら出来ないだろ……」

「いいのお……光一とこうしているだけで充分いいからあ……」

「全く……何時もの優子とは違って今は素直だなあ」

「駄目だよ優子お……独り占めはあ……」

工藤は光一の腕を掴むと、自分の胸の方へと手を置いて触らせる。

「おいおい、工藤もか？」

「あ！　だ……だめえ愛子お！　アタシが光一としてるのお……」

優子は工藤の行為を阻止しようとしているのか、工藤の胸を触っている光一の腕を掴む。

「おい優子、そんなに俺の腕を引っ張らないでくれ」

「ああ……久遠君……もつとしてえ……久遠君に触られるだけで凄く気持ちいいのお……………」

「だめ愛子お…………アタシがあ……………」

「やれやれ……………」

強請ってくる優子と工藤を見た光一は、纏めて相手しようと2人を攻め始める。

「ああ…………久遠君……………」

「こついちい…………もつとさわってえ…………アタシを一杯感じさせてえ……………」

二人は光一に攻められて嬉しそうな表情をしている。

「さて、どっちが先に果てるのやら……………」

光一はサディスティックな笑みを浮かべながら、2人を攻めていた。それを見ていた明久と秀吉は…………。

「…………うわあ…………凄いい光一…………工藤さんと木下さんにあんな事しちゃって……………」

「あの姉上が…………光一に…………気持ち良さそうに……………」

余りの光景に目が完全に釘付けだった。

「（やば！僕も見て興奮してきちゃった！！）」

「（ワシがもし明久にあんな事をされたら……って違うのじゃ！！ワシは何を考えておるのじゃ！？）」

明久は大きくなって股間に手を当てており、秀吉は自分が明久にされるとどんな気持ちいいかと考えていたがすぐに首を横に振る。

さて、何故この二人がここにいるのか分からないと思いますので少しく説明します。

それは光一が工藤とやる前の事……。

Fクラスの教室にて……。

「ねえ秀吉、光一が何処にいるか知らない？」

「光一？ワシは見ておらんぞ」

「そっか……うん、何処にいるんだろっ……」

明久は演劇の台本を読んで座っている秀吉に光一が何処にいるかを

聞いていたが、秀吉の回答に残念そうな顔をした。

「明久、光一に何か様じゃったのか？」

「光一に貸してたゲームの感想を聞こうかと思って」

「それは前にお主が光一に貸した『バイオハロード』かの？」

「そう。銃火器を使って相手をぶちのめすゲームを貸してくれて光一に頼まれた物だよ」

「確かにあれは光一が好みそうじゃの……」

皆さんも既にご存知の通り、武器を使って戦うのが光一の戦闘スタイルである。光一は普段からFFF団や清水美春・中林（Eクラス代表）や小山（Cクラス代表）に何度も追いかけられており、その度に勝負して撃退している。それだけでは鬱憤を晴らせない為に、明久から『バオオザード』を借りて、向かって来るゾンビやボスキヤラを光一に敵対してくるバカ共と連想し、銃火器で奴等を抹殺しているかの様に何度も何度もぶちのめしていたのだ。

「ははは……光一がアレを借りたいのは何となく分かるよ」

「確かにのう……此処の所、光一はストレスが溜まっておるからゲームで憂さ晴らしでもしなければやってられんのじゃろう」

明久と秀吉は光一がアレをやりたい理由の予想は付いていた。

「うん。Aクラスにも行って見たんだけど、光一が何処にもいなかったんだよね。雄二は霧島さんと一緒に仲良くお弁当を食べてい



たけど」

それを言った瞬間、FFF団が一斉に雄二を制裁する為にAクラスへ向かう準備をしていた。

「じゃったら屋上にいるのではないかの？ 光一の事じゃから静かに過ごしたいと言えばあそこしか考えられんのじゃ」

「ああ…そう言えばまだ屋上に行ってなかったね。ありがとう秀吉、助かったよ」

「そんな事で礼を言う必要は無いと思うのじゃが…」

「秀吉が言ってくれなかったらこのまま分らず仕舞いだったよ」

「そ…そうかの？ じゃったら…それはそれで」

秀吉は明久の発言に頬が赤くなった。何だかんだ言って明久の役に立って嬉しかったのだろう。

「じゃあ僕、これから屋上に行くから…」

「あ…明久。ワシも行くぞい…あっ！」

秀吉が立ち上がるうとした瞬間、立ち眩みがした。

「秀吉、大丈夫!？」

「ちょ…ちょっと立ち眩みがして…のわあ!」

「ひ…秀吉！？うわっ！」

秀吉は後ろに倒れそうになり明久の肩を掴んだが、秀吉の倒れる勢いが強かった為、明久は秀吉の方に倒れようとした。

「バターーン！！……チュツ（？）

「んっ？……ご…ゴメン秀吉！！」

「あ…明久……」

明久は秀吉を押し倒すような体勢になってそれと同時にキスしてしまつと、秀吉は顔が赤くなる。無論、ここは教室なので他の生徒も目に入っているので……。

「……」  
「吉井をコロセエエエ！！！！」  
「……」

「……抹殺！！」

「明久君！！ 木下君に何て事を！！！！」

「アキ！！ アンタ！！！！！！」

FFF団（+ムツツリー二）は攻撃対象を明久に変更し、姫路と島田も同様に明久に襲い掛かろうとしていた。

「不味い！！秀吉、目を瞑って！！！！」

「わ…分かったのじゃ！！！！」

秀吉は明久の指示に従って目を閉じ、明久はすぐに光一から預かった閃光弾を使った。

カッ！！！！！！

「……め、目が……！！！！」

「よし！逃げるよ秀吉……！！」

「う……うむ……！！」

明久は相手の目が眩んでいる隙に秀吉を連れてすぐに教室から出た。

「（ダダダダダ……！！！！）と……取り敢えず屋上に逃げるよ秀吉……！！」

「（ダダダダダ……！！！！）了解じゃ……！！」

そして二人は屋上へと向かったが、その先には光一と工藤と優子がエッチしていたのを覗いているのであった。

……………とまあ、こんな成り行きである。

「……………秀吉、光一って凄いテクニシャンだね……！！」

「……………うむ、あんな光一は初めて見るのじゃ……！！」

明久と秀吉は光一のしている事に驚く以外の他は無かった。

そして……。

「……………（ゴクツ）」

明久は光一の行為を見てか、さつきから秀吉の方を見ている。

「……………秀吉…僕もう我慢出来なくなって来ちゃった」

「ん？明久？」

「最初に言っておく……………ゴメン……………」

「明久…お主何を？……………んむう!？」

明久は秀吉にキスをした。

おまけ

「吉井は見つかったか!？」

「駄目です!!どこにもいません!!」

「くそ!!どこにいやがる吉井!!!! 奴には紐無しバンジー  
をやらせねば気が済まん!!」

FFF団は未だに明久を探し、制裁を下そうとしている。

「明久君！ 一体何処にいるんですか！？ いるなら返事をして下さい！！！！ そんなに酷い事はしませんから！！！！」

「そうよアキ！！ 出て来たら腕一本で許してあげるから！！」

姫路と島田も明久にお仕置きをやるうとしてしているみたいだ。

と言うかこの二人が明久に平然とお仕置きをするのはどうかと思う。そんな事しているから明久に避けられている事に姫路と島田は全く気付いていないのであった

「次は屋上へ向かうぞ！！」

「「「「おう（はい・ええ）！！！！」」」」

FFF団＋姫路＋島田は明久と秀吉がいる屋上へ向かったが…。

「ここにはいないみたいだ。次に行くぞ！！！！」

「「「「了解！！！！」」」」

屋上へ向かう階段の前でないと判断し、別の所を探し始めた。何故あいつ等は屋上にいる明久と秀吉の所に行かなかつた理由は……。

『（ピシユツ！）やれやれ……あのバカ共にも困つたものだ……』

私が近づかない様に階段に人払いの仕掛けを施していたのであった。

『2人の邪魔はさせん。ここで明久と秀吉には恋人同士になっても

『(…ミッホミッ)うら

私はそう言つと再び姿を消した。

屋上での出来事？ 光一×愛子×優子+明久×秀吉（後書き）

おまけで早くも私の登場でした〜！！

屋上での出来事？

明久×秀吉（前書き）

今回は何時もよりちょっと短いです。



屋上での出来事？ 明久×秀吉

光一達の行為を見て我慢出来なくなった明久は秀吉にキスをした。

「んん！……んむっ！……！」

明久の突然のキスに秀吉は驚いてすぐに離れようとするが、明久が離すまいと秀吉を抱きしめているので抜け出せずにキスを続ける事となった。

「（秀吉、絶対離さないよ！）」

「んんん……んあ……ああ……明久……やめ……んんん……んああ……（明久……舌を……）」

明久は自身の舌で秀吉の舌を絡み始める。それによって秀吉は明久のキスが気持ちよくなって来たのか、抵抗が弱まっており、受け入れ始めてきた。

「んあ……んちゅ……ちゅぷ……ちゅ……ああ……ちゅぱ……ちゅぷ……んん……ぷはっ……はあ……はあ……はあ……明久……」

「はあ……はあ……はあ……秀吉……」

キスを終えた二人は顔を赤らめ、抱き合いながら見つめ合っていた。

「あ……明久よ……いきなり何をするのじゃ……ワシは……男じゃぞ…………」

「はあ……はあ……秀吉、君が男や女なんて僕には関係ない……僕は……  
……秀吉が……欲しい……」

「……！！　な……何を言いだすのじゃ！？　お主、正気か！？」

秀吉は光一達に聞かれない様に小声で明久に怒鳴っていた。

「僕は本気だよ秀吉……好きな子とこう言う事をしたいからね」

「……（す……好き！？……明久が……ワシを……）」

明久の告白とも言える発言に秀吉は心臓の鼓動が速くなる。

「明久……ワシは見ての通り……男じゃ。……男のワシに……告白するなど……間違っておらぬか？」

秀吉は落ち着いて話している様にしているが、心臓の音が聞かれているのではないかと言う位バクバクとなっていた。

「間違つてなんかいないよ。僕は秀吉が好きだ……大好きだ……君を僕のものにしたい……」

「……（／／／／／／／／／／／／／／／／）」

秀吉の顔は茹蛸の様に真っ赤だった。

「秀吉……さつきも言ったけど、僕もう我慢出来ないんだ……それに……秀吉だって……こんなに興奮してるじゃないか……」

「あん！　あ……明久！？　何処を触っておるのじゃ！？　や……やめ

…」

明久は秀吉の股間に触り、触られている秀吉は明久にされている為なのか感じていた。

「悪いけど、服は脱がすよ」

「だ…駄目じゃ明久！こんな所で…」

明久は秀吉に有無を言わずYシャツを脱がそうとするが、秀吉が抵抗しているので簡単に脱がせてくれなかった。

「秀吉…そんな君にはこれだよ……」

「んむう！？ …んあ…やめ…あきひ…んちゅ…んん……んあ…」

秀吉は明久にキスをされて抵抗していた力が弱まり、その隙に明久は秀吉のYシャツを脱がした。

「ああ……秀吉の肌…綺麗だよ…」

「あ…明久……見るでない…恥ずかしいのじゃ…」

秀吉が上半身裸になって明久は見とれていたが、秀吉はすぐに明久から離れ、しゃがみながら背を向けて胸を隠すかのように腕を交差した。

「ふふっ…秀吉。自分は男だって言ってるのに、今やっている事は女の子の行動だよ」

「……！……これは……その……（明久に見られると……何か恥ずかしいのじゃ）」

「秀吉、君もしかして女の子？」

「ち……違つものじゃ……！……ワシは男じゃ……！……あ……！」

秀吉は明久に訂正をする為、思わず立ち上がって交差した腕を離し明久に胸を見せてしまった。

「み……見るでない……！……明久……！」

「秀吉……乳首があんなに立っているなんて……興奮してる証拠じゃないか……」

と、明久は秀吉に近づいて壁に手を付き……。

「ち……違つ……ワシは……ああん……！」

秀吉の乳首をつつつく。

「秀吉、気持ちいい？」

「あ……ああ……あん……！……や……やめ……るのじゃ……き……気持ち……よく……ないの……じゃ……！」

秀吉はポカポカと明久の頭を殴っているが、大して威力がないので無意味であった。

「強情だね。じゃあ……！」

「ああ！あん！…んむ…」

明久は両手で秀吉の乳首を攻めながらキスをする。秀吉はそろそろ墮ち始めており、無意識に抱きつきながら様に明久のキスに応えていた。

「んん…んむ……んちゅ……ちゅぱ…ちゅぷ…はあ…あむ…ちゅ…んちゅ（ああ…駄目じゃ…明久のキスが…気持ちよくて…もうどうでもよくなってきたのじゃ）」

「はあ……そろそろいいかい、秀吉？」

「はあ…はあ…はあ…はあ…明久……ワシを……もっと……気持ちよくして欲しいのじゃ」

そして秀吉はついに墮ちた。

「分かったよ。秀吉が満足するまで気持ちよくしてあげる」

「ああ…あきひさあ…はやくう……」

そして屋上の出入り口で明久は秀吉を攻め続けたとき。

おまけ

「まったく…明久と秀吉の奴、丸聞こえなのに全然気付いていないな」

「うわぁ…吉井君すごい…木下君をあんな風にするなんて…」

「……………（秀吉が…吉井君と…………）」

光一・工藤・優子は二人の行為を覗いていた。

「秀吉…自分は男だと言っておきながら、結局明久に身を委ねたな。まあ俺としては好都合な展開だ。これで俺の計画も次に移せるが、その前に……………」

光一は次の計画に移る前に武器のストックを補充した方がいいかもしれないと考えており……………。

「あれって男の子同士だけど、何故か男女の絡みに見えるよね」

工藤は2人のエッチが男女のエッチに見える事に不思議に見える……………。

「……………（秀吉が吉井君の攻めに、あんなに感じてる。ああ……………何か…これはこれで…いいかも）」

優子は2人の行為を見て何か良からぬ事を考えていそうだ。

さらにおまけ

「吉井はまだ見つからんのか!？」

「隈なく探していますが何処にもいません!！」

「くそ!！ 一体奴は何処にいるんだ!？」

「吉井君!！ 何処ですか!？」

「アキ!！! さつさと出て来なさい!！」

FFF団+姫路+島田はまだ探していた。

それを見ていた私は……

『アイツ等にはホントに呆れるな……仕方ない、ここは私が何とかしよう』

明久が戻ったところですからすぐにリンチをしそうな雰囲気だったのであの手を使うことにした。

『おいお前達!！ これを見る!！!』

「「「「「?」「」「」

私の声にバカ共が私の持っている携帯テレビの方へと振り向き……。

《……雄二、恥ずかしい……》

《何度も見られているのに今更恥ずかしがるなよ》





『まあ光一と明久の幸せの為に、あのゴリラには犠牲になってもらおう（ピシユッ）』

目的を果たした私は姿を消したのであった。

変わって体育館倉庫……。

「……私、雄二に抱かれて幸せ」

「……幸せじゃねえ！！あの野郎なんて事しやがる！！」

霧島は幸せそうに、雄二は私に恨み言を吐いていた。

私が予め雄二と霧島を捕まえて体育館倉庫に連れて行き、裸にさせて抱き合う状態にさせたのだ。

雄二がバカ共に始末されるのは……あともう少し。

明久の家にて（前書き）

これは光一が優子と寄りが戻って恋人になり、愛子も一緒になって二股の関係になった後のお話です。

それではどうぞー！

## 明久の家にて

ある夕方、明久の家のリビングで5人の男女が囲って座りながら談笑してた。

「……うつつ……僕と秀吉のエッチが光一達に覗かれてたなんて……」

「恥ずかしくて死にたいのじゃ……」

「何言ってるだよ、お前らだって俺達のを覗いていたじゃないか」

「そつだよ二人とも」

「お互い様だからね、吉井君、秀吉？」

明久と秀吉はエッチを覗かれていた事に顔が赤くなって顔を俯かせており、光一と工藤と優子は仕返しのもりか当然の様に主張していた。

「ま、俺としては非常に好都合な展開だったがな。お蔭で俺の計画が順調に進んでいる」

「光一、前から気になってたけど如何して君は僕と秀吉を結ばせようとしたの？」

「その方が俺やお前が幸せになれるからな。俺はこれでバカ共から同性愛者扱いされないし、明久は姫路や島田なんかより秀吉と結ばれた方がいいからな。やっと……やっと俺の計画がああ……!!!!」

光一が説明の途中でまた壊れた。

「光一がまたおかしくなってるよ!?!」

「こ…光一!?!落ち着くのじゃ!?!」

「久遠君、また壊れ始めちゃったよ……まあ分からなくも無いんだけど……」

「はあっ……光一をここまでにさせるFクラスって一体……」

明久と秀吉は光一を宥め、工藤は光一の壊れっぷりに同情し、優子は額に手を当てながら溜息を付いていた。

「……っは!?!……スマン、つい……」

光一は漸く落ち着き、宥めてくれた明久と秀吉に謝った。

「あははは……それにしてもちよっと気になる事があるんだけど……」

「どうした、何かあったのか?」

「僕と秀吉が屋上に逃げた時、姫路さん達追いかけて来なかったんだよね。それが不思議に思っ……」

「何だと? ……ってか、お前ら追い掛けられていたのかよ……」

「そう言えばそうじゃの、ワシ等は屋上にいたのにあ奴等が来る気配が全く無かったのじゃ……代わりに雄二がやられていたのじゃが」

光一の質問に明久が答えると、秀吉も明久と同様に姫路達が追い掛けて来なかった事に疑問を抱いていた。

「あんなゴリラの事はどうでもいいが、それは本当か？」

「うん、もし来てたら僕と光一が紐無しバンジーをやられていたかもしれないから」

「けどあ奴等が来なかったのじゃ、それが不思議で……」

「もしかして文月学園七不思議の一つかも……」

「あのね愛子、そんな非科学的な事がある訳無いでしょ……」

優子が愛子にそんな物は無いと言おうとした時……。

『（ピシュツ！）正解は私がアイツ等を遠ざけたんだよ』

「きゃあああ！……！」

「お……おい優子！？」

私が突然現れて優子の後ろで正解を言うと、優子は物凄く驚いて近くにいた光一に抱きついた。

『そんなに驚かないでよ木下さん』

「あ……あ……貴方がいきなり出て来るから驚くわよ……！…… ってか誰！……？」

「ゆ…優子…首を…締めるな……苦しい…」

「光一！？ 木下さん、光一を早く離さないと！」

「姉上！ 光一が死んでしまうのじゃー！」

「ほら優子、落ち着いて……」

私と光一を除く全員は優子を落ち着かせていた。

そして5分後……。

「ぜえっ…ぜえっ…あゝ死ぬかと思った……」

「ごめん、光一……つい……」

「危なかったよ。あと少し遅かったら光一がとんでもない事になってたよ……」

「全くじゃ、ここが危つく殺人現場になる所じゃったぞい」

「優子、久遠君は他の男の子と違って耐久力が無いんだから」

『そうそう、光一はモヤシ体型だから少し手加減しなよ。それともうちよっと落ち着きを持って……』

「……元はと言えばアンタ（貴方・お主）が原因だろうが（でしようが・じゃろうが）！！」「……」

『……すみません』

私が言うと5人は一斉に私に突っ込んできたので謝る事にした。

『っと、それでは光一以外の皆さんには自己紹介をしましょう。初めまして皆さん、私は“さすらいの旅人”と言います。以後お見知りおきを』

「は……はあ、どうも……」

「こ……此方こそ宜しくじゃ」

「よ……宜しく」

「宜しくね、さすらいの旅人さん」

私のいきなりの自己紹介で毒気を抜かれたかのように落ち着いた明久達は私に挨拶をする。

『ああそうそう、私の事は“旅人”って呼んでくれ。態々“さすらいの旅人”って呼ぶのは面倒だろうし』

「そんな事より旅人さん、アンタ今どさくさに紛れて俺の事をモヤシって言ったろ？」

明久達に呼び方を言っている最中に光一はどうでもいいかのように





「いてて……優子、お前なあ……」

『あたたたた……痛いじゃないか木下さん』

光一と私は命中した頭を抑えながら優子を睨んだが……

「これ以上やるとどうなるか分かってるわよね？（ポキポキ）」

「……………チツ！ 分かったよ」

『うゝむ、決着をつけたいがここは止めておこう……………』

優子が指の骨をポキポキ鳴らすと光一はすぐに銃をしまい、私は別に対して恐くないが光一がまた死にそうになると思ったので刀を収め懐に入れた。

「ねえ秀吉、光一の銃はまだいいんだけど旅人さんの刀はどうやってアレをしまっているんだろ？」

「明久よ、そこは突っ込まないほうがいいと思うのじゃ」

「そっだよ吉井君、下手に知ったら不味い事になると思うよ？」

「そ……そっだね……………止めとこう……」

秀吉と工藤が明久に余計な詮索をさせない様に言っと、明久はかえって危険かもしれないと思ったので止めた。

そして状況がようやく治まった10分後……。

『と言う訳で、私がバカ共を近付かせない様にちょっと仕掛けを施してね。その後、雄二を犠牲にさせたんだよ』

私は光一達に学園で手助けした事を説明していた。

「旅人さんが仕掛けたのか……どおりで……」

「旅人殿がやった事なら得心がいくのじゃ……」

「まあボク達にとっては良かった事だけだね」

「その点については感謝しておくわ（お蔭で吉井君と秀吉のエッチが見れたから……）」

「そう言う事だったのか。まあアンタなら何でもありだからな……俺としてはそこは感謝する所でもあるし。仕掛けに関しては聞かないでおくよ」

『賢明な判断ですね。そんな君にはこれを差し上げましょう』

私は光一に黒光りする物体を渡す。

「これは……サブマシンガンか……」

「」名答「」

「けどこんな小さい奴は初めて見るぞ……」

『それはステアー社のTMPって言って、携帯性を高める為にフォアグリップも外せるよ』

「何？（ガチャッ）……ホントだ……」

『隠し持つには凄く便利だと思うよ。で、いるの？ いらないの？』

でもエアガンだけどねと私は付け加えながら光一に欲しいかどうかを聞く。

「……………アンタとはいい関係になりそうだな。これは遠慮無く貰おう」

『いえいえ、これで君の計画が進められるのでしたらお易い御用ですよ。私にとっても君にとっても…ね』

「アンタも随分と悪だな……ククク」

『君ほどでは御座いませんよ……フッフ』

悪商人と悪代官みたいなやり取りをしている私と光一に……。

「ねえ、僕はあのやり取りをどうすればいいのかな？」

「 「 「  
.....  
」 」 」

明久の質問に3人は何も答えなかった。

明久の家にて（後書き）

早くも私の登場でした〜！！！！！！

明久の家にて ？

さて、私と光一のやり取りを終えて1時間後……。

「はあ〜美味かった〜。相変わらずお前の料理は美味しいな明久」

「う〜む、ワシもやはり料理の勉強をした方が……」

「吉井君、凄く美味しかったよ……けど……」

「……何か女として負けているような気が」

「お粗末さまでした、そういつてもらえて何よりだよ」

明久は全員に料理を奮ってパエリアを作った。光一は明久の料理を絶賛し、秀吉は自分も料理をした方がいいかと考えており、工藤と優子は複雑な気分になっていた。

「すみませんね、私にも晩御飯を作ってくれて。パエリア美味しかったですよ」

「いいですよ、旅人さんには恩がありますからこれくらい」

そして私は明久に晩御飯を作ってくれた事に感謝した。

「そう？ あれくらいで恩とは大げさだな、明久は……」

「いえいえ、だって旅人さんが何もしなかったら僕や光一が姫路さん達にお仕置きをされていたかもしれないし、秀吉とエッチする事

だって出来なかったんだから……」

「明久！！ お主何を言っておるじゃ！？」

私と明久の会話に秀吉がいきなり割って入ってきた。

「秀吉、何をそんなに怒ってるんだい？」

「お主がいきなり変な事を言うからじゃ！？」

「ははは……ごめん秀吉。でも旅人さんがいなかったら僕達、こんな関係になれなかったし」

「そ…それは……」

「だからそんなに怒らないでよ秀吉。折角の可愛い顔が台無しだよ？」

「（／／／／／）……あ…明久……」

明久は秀吉の頬に触れながら宥め、秀吉は顔が赤くなり潤んだ目で明久を見ていた。まるで二人つきりみたいな光景に……。

「あいつら……完全に二人だけの世界だな」

「ホントだね……でも光一君としては嬉しい光景だよね？」

「絵になる……いい……凄く良い」

光一と工藤はその光景に呆れているながらも微笑ましく見ており、優

子は頬に手を当てながら妄想に入っている。

『……………おい、イチヤ付くんなら人の目の届かない所でやってくれ。さっきからその腐女子が卑猥な妄想をしているぞ』

「「！……！」」

私が明久と秀吉に突っ込みを入れると、二人はすぐにハッと気付いて距離を取った。

「ちよつと旅人さん！ 腐女子ってあたしの事!？」

『君以外に誰がいるんだよ？ さっきまで卑猥な妄想をしてたろうが……………』

「し……してないわよ!！」

『じゃあ明久と秀吉がこの後どうなるか考えた?』

「そして二人はベッドの上で愛し合って……………ハッ!！」

『……………やっぱり考えてたじゃん』

私は優子の妄想癖に呆れの視線を送りながら言った。

「ひ……引っ掛けたわね!？」

「いや優子、さっきのは別に引っ掛けでも誘導尋問でも無かったぞ……………」



光一が私と同様に呆れの視線を送っていると……。

「~~~~~!!!!!!」

『!!!! (ガシッ!) ストップストップ!! ここで記憶を無くさせるために関節技なんて無しだよ!!』

優子が光一に関節技をやりそうな雰囲気だったので、私は羽交い絞めをしながら叱咤する。

「離して!! ここで光一の記憶を!!!!」

「おい!! 何で俺だけなんだよ!?!」

『ってか君、前回と似たような事やるうとしてない!?!』

優子は私から抜け出そうと必死に抵抗し、光一は何故自分だけだと優子を非難する。

「旅人さん! お願いだから離して!!」

「旅人さん!! 絶対に離すなよ!!」

優子はじたばたしながら私に離せと言い、光一は離すなときつく言っている。

「あはは……今度は光一と木下さんのターンだね」

「姉上……」

「はあ……優子ったらもう……」

明久と秀吉と工藤は優子の行動を呆れながら見ていた。

『つたく、何で私がこんな事を……仕方ない。光一、木下さんを落ち着かせる(スッ)』

「え？ ちょ……ちょっと旅人さん！？ 何を……」

「お……おい！？ 何で優子を近づけ……んむ！？」

「」「！……！」「」

私は優子に羽交い絞めをしたまま光一に近づいて優子を光一にキスをさせると、蚊帳の外であった明久達はいきなりの事に驚いていた。

光一と優子は突然の事に戸惑ったが……。

『ほれ光一、早くご自慢のテクで優子を落ち着かせる』

「んん？……(そう言うことか)」

「ん……んむ……んん……んあ」

光一は私の意図を読み、優子の頭を掴んで舌を絡めるキスを始めた。

『よし……(スッ)』

私はそっと優子を離すと……。

「んん……んちゅ……んあ……ああ……ちゅ」

優子はキスで気持ち良くなっているのか、抱きついて光一のキスに  
応えていた。

『おお、もう光一の虜になっちゃってるねえ』

「って光一君！ 優子だけずるいよ！ ボクも！！（バツ！）」

ようやく我にかえった工藤はすぐに優子を離して光一にキスをした。

「んちゅ……ちゅぷ……ちゅぱ……んああ……」

「んん……（…今度は愛子か）」

「ああ……あいこお……光一とはアタシがあ……」

「んああ……んちゅ……はあ……ダメだよ優子……光一君は……ボ  
クが……気持ちよく……するんだから……んん……」

「だめえ……光一はあたしのお……」

優子は愛子を引き離して再度、光一にキスをした。

「んんん……（やばい……こんなに連続してキスされると……俺は……  
……）」

『……おい、いつまでやってるんだ？』

「」「」「……」「」「」

私の一声にようやく気付いた光一・優子・工藤であった。

『お二人さん、そんなに光一を気持ちよくさせたかったら風呂場でやったらどうだい？』

「……………旅人さん、何で風呂場でやらなきゃいけないんだ？」

漸く冷静になった光一は私に風呂場を選んだ理由を聞いた。

『こんな所でやるより風呂場の方がやりやすいでしょ？ それともここでエッチして私達に見られてもいいのかい？ 私はどっちでも構わないぞ』

「……………明久、風呂借りるけどいいか？」

「ぼ…僕は別に構わないけど……………」

「そうか……………2人とも、風呂に入るぞ」

「う…うん」

「ボク、お風呂でするのは初めてだから楽しみだよ」

光一は顔が赤い優子と工藤を連れて風呂場に行った。

『3人は行ったか……………さて、どうするお二人さん？』

「……………」

私は明久と秀吉の方を見ると、2人は顔が赤いまま黙っていた。

「ぼ…僕のお風呂場で光一達がエッチするなんて……夢にも思わなかったよ……」

「あの姉上が……何の疑問も抱かずにすぐ行くとは……光一のキスはそんなに気持ちいいのじゃったろうか」

『それだけ光一のテクが凄いつて事だよ秀吉。体力無いのが欠点だけだね……』

「……………」

私が光一の欠点を言うと秀吉は納得したかの様な顔をした。

『その点、明久は光一と違って体力あるからね。やさしいキスをされてその後は何度も何度も……でしょ？』

「な……何でそれを!？」

「何故お主が知っているのじゃ!？」

私が言った事によって明久はどもり、秀吉は私が言った事に顔が赤くなり怒鳴った。

『そんな事どうでもいいから……ではお二人さん。今から覗きをしましょうか（パチンツ!）』

私が指を鳴らすとテレビの電源が付き、光一達の風呂場が映し出されていった。

「え!？ 何で僕の風呂場が映ってるの!？」

「お主は一体何をしたのじゃ!？」

『悪いけど、それは企業秘密だから教えない。じゃあ私は一時退散させてもらうから覗きを十分に楽しみなまえ(ピシユツ!)』

明久と秀吉の疑問に私は答えずに姿を消したのであった。

「消えた……………」

「本当にあの方は何者なのじゃ?」

明久と秀吉は私に対する疑問がさらに深まった。

「まあそれは別として……………秀吉、これどうする?」

「どうすると言われてもの?……………」

テレビを見るとそこには工藤と優子が自分の体を使って光一の体を洗っていた。

「……………」

明久と秀吉は無言で風呂場で光一達が始めているのを見て段々興奮して、此方もやってしまうのであった。

おまけ

翌日、学校の屋上にいる私と光一は……。

『では光一……始めるとしますか……（チャキツ！）』

「ああ……始めるか……バカ共の殲滅を（ガチャツ！…バチバチツ  
！）」

私は刀（非殺傷用）を持ち、光一は銃エアガンやスタンガン（100万ボルト）等を持って屋上から出ようとしている。

因みに光一が言ったバカ共とは……。

・坂本雄二

・姫路瑞希

・島田美波

・FFF団（+ムッツリーニ）

・清水美春

・玉野美紀

・久保利光

・常夏コンビ（常村勇作・夏川俊平）

以上のメンバーで、全員光一を恨んでいる連中であつた。

「この時を待っていた。もうあのバカ共にはウンザリしてきたからな、今度はこっちから反撃をしてやる」

『ハツハツハツハツハ、協力は惜しまないよおゝ光一』

「アンタがいれば千人力だ。では行こうか」

『了解』

『「いざ、”障害の抹殺”開始！！！！」』

邪魔者を排除する為に私と光一は動き出した。



明久の家にて ? (後書き)

今回はバカ共抹殺に私と光一が動きますのでお楽しみに!!!

それと秋雨さんに報告です。もうお気づきでしょうが、明久の家であつたラブシーンに關しましては、ノクターンで載せます。

載せたらお知らせします。

## 抹殺物語

私と光一が屋上にいる時……。

「何で僕がこんな事になっているの!？」

Fクラスの教室に明久が十字架の貼り付け状態になっていた。

「諸君、ここはどこだ!？」

「……最後の審判を下す法廷だ!！」

「異端者には？」

「……死の鉄槌を!」「」

「男とは？」

「……愛を捨て、哀に生きる物!」「」

FFF団が明久を処刑しようとしていた。

「……罪状を読み上げたまえ」

「はっ、須川会長。えー、被告吉井明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第2学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制わいせつ及び背信行為である。昨日未明、甲が第2学年Fクラスの生徒である木下秀吉（以下、この者を乙とする）に対して強制的にわいせつ行為を働いている事

が、協力者である坂本雄二氏より報告が確認され、現在に至る。今後、甲と乙の関係に対して十分な調査を行った後、甲に対してしかるべき対応を……」

「御託は良い。結論だけを述べたまえ！」

「イヤ付きながら登校していたので羨ましいであります！」

「うむ。実にわかりやすい報告だ！ よって吉井明久をここで処刑する……！」

実に迷惑極まりない身勝手な理由だった。

「ちよつと……！ そんな理由で僕を処刑するつもりなの！？ って言うか雄二……！ 君は何で余計な事を言ったんだ……！」

「皆、落ち着くのじゃ……！ ワシが明久と一緒に登校しただけで処刑などとはおかしいぞい！ ワシは時折、明久と登校している事はお主等も知っているであろう……！」

明久はFFF団にチクツた雄二に噛み付き、秀吉はFFF団を説得していた。

「明久と秀吉が一緒に歩いていて恋人同士のような雰囲気だったからな。つい報告しちゃったよ。それにお前ら、もう付き合ってるんだろ？」

「な……何で雄二がそんな事知ってるの……！」

「そ……それは……（………………）」

「……………おい、マジかよ?」

雄二は適当にカマを掛けたつもりだったが、明久と秀吉の顔が赤く  
なっているのを見て、本当に恋人同士になっているのが分かった。

「はっ! き…汚いぞ雄二!! 僕達を引っ掛けるなんて!!」

「……………まさか本当に当たるとはな。もしかしてお前ら、こんな事  
もしたのか?」

雄二が右手の親指と人差し指で丸い輪を作って、左手の人差し指で  
丸い輪を貫いた。

それを見た明久と秀吉は……………。

「……………(／／／／／／)……………」

「……………ホントに分かりやすい反応だな」

顔が真っ赤だった事に、雄二は二人の反応を見て少し呆れていた。

「……………おのれ吉井!! よもやそんな事をしていたとは!!」

「」

そんな雄二はともかくFFF団が嫉妬心MAXになって怒り狂って  
おり……………。

「明久君……………本当に木下君とエッチな事したんですね……………」

「アキ……どうやらアンタには本格的にお仕置きをしないとけないわね」

姫路と島田が紫色の暗雲を漂わせながら明久のお仕置きの準備をしていた。

「ちょっと待つてよ!? 姫路さん! 美波! どこから釘バットを持ってきたの!? そんなので殴られたら僕は死んじゃうよ! っつて言うか君たち僕を殺す気満々でしょ!?!」

「姫路に島田!! お主等も落ち着くのじゃ!!」

秀吉が説得しようにも、姫路と島田は聞く耳持たずであった。

「大丈夫ですよ木下君。ただお仕置きをするだけですから……」

「そうよ木下。アキが終わった後にアンタもお仕置きするけどね……」

…

「ワシにもするのか!?!」

姫路と島田の発言に秀吉は引いた。

「明久君、覚悟して下さいね?」

「アキ、これが終わった後に屋上から飛び降りてもらおうから」

「島田の言うとおりだ! 吉井を処刑した後に屋上から紐無しバンジーしてもらおう!?!」

「……そうだ……!」

最早コイツ等に何を言っても無駄な状態であった。

「だ……誰か助けて!! このままだと僕は死んでしまう……!」

「明久、運命だと思って諦めろ」

「元はと言えば、貴様が余計な事を言わなければこんな事にならなかったじゃないかバカ雄二……!」

「前にも言ったがな明久、俺はお前の幸せが一番ム力つくんだよ」

「この外道!! 残虐非道!!! 人間の形をしたゴリラ……!」

「ハッ! 敗者の台詞だな」

明久は雄二に罵倒を浴びせたが、雄二は余裕の顔をしている。

「では、これより処刑を始める……!」

「……おお……! (はい……ええ……!)」

須川の合図で明久を処刑しようとしたが……。

カツ……!

「きゃあ……!」

「な……何だ!? 目が……!」

「くくくくぐあああ!?!?!?!」

「な…何じゃ!?!」

「くツ!? いきなり何だ!?!」

突如、教室がいきなり眩しくなり全員が怯んだ。

と、その時……。

ガラッ!

「……やれやれ、もうおつ始めやがったか」

『……全く、こいつらの行動力には呆れるよ……』

サングラスを掛けた光一と私が教室に現れてすぐに磔にされている明久に近づいた。

『光一、手筈通りに秀吉を!! (チャキ……スパンスパン!)』

「了解、行くぞ秀吉! (グイッ!)」

「そ…その声は光一!?!」

私は明久を縛っている縄を持っている刀で切つてすぐに明久を連れて教室から逃げ出し、光一も未だに怯んでいる秀吉を連れて教室から逃げ出す。

「クッ！ おのれ！！ アイツ等は吉井と木下を連れて逃げたぞ！  
！ 追え！！！！」

「……了解！！！！（はい！！・分かったわ！！！！）」

漸く目が見えるようになったFFF団＋姫路＋島田は教室から出て、私達を追い掛け始めたのであった。

おまけ

そして教室には雄二一人だけがあり……。

「光一と旅人の奴、ああなる事が分かってて明久と秀吉を助けたか。だがいつまで持つことやら。さて（ゴロンッ）俺はここでゆっくり待つとするか」

雄二は高みの見物気分でゴロンと横になって決着を待った。

が……。

ガラッ

「……雄二」

「ん？ 翔子か。何か用か？」



突然現れた霧島が雄二に近づいて来た。

「……聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「……この本は雄二の？（スツ）」

「！……！」

霧島がとある本を見せると雄二は驚愕する。

「な……何でお前がそれを持っている！？」

それは雄二が部屋で嚴重に保管しているエロ本だった。

「……親切な人が教えてくれた」

「誰だそいつは！？　すぐにぶっ殺してやる！！　……ん？　紙切れか？」

雄二はエロ本に挟まっている紙を見てすぐに抜き取って見ると……。

“アツハツハツハ！　君の部屋に隠してあるエロ本は私が見つけたおいた。私にとって隠し物を見つけるのは造作も無い事だよ！　奥さんがいながら浮気なんて大それた事をする君には霧島にお仕置きされなさい！！　byさすらいの旅人”

それは私から雄二宛てのメッセージが書かれていた。

「あの野郎おおお!!　なんて事しやがる!!!」

「……その反応を見ると、やっぱりコレは雄二の物」

「……はっ!　しまった!」

雄二はうっかりボロを出した、雄二に霧島は……。

「……じゃあ、これは燃やす(シュボ!)」

「ま……待て!!　あああ!!!」

持っているライターでエロ本を燃やしたのであった。

「……次は私に隠していた事に対するお仕置き(スッ)」

「待て!　本を燃やしただけでなく、お仕置きまでするのか!?  
つてか何持っていやがる!」

霧島がムチ・ローソク・縄・猿轡を出す事に、雄二は少し引いた。

「……旅人さんが、“雄二をお仕置きするにはこれを使うといい”  
って言ってたから。さあ雄二、今すぐ……」

「あの野郎!!!　絶対にぶっ殺す!!!」

雄二は私に対する怒りを理由に教室から出ようとしたが……

「……逃がさない(バチバチ!!!)」

「ギヤアアアア~~~~~っ!!!」

霧島がスタンガン（50万ボルト使用）で気絶させたので逃げられなかった。

「……さあ雄二、お仕置きの時間」

そして霧島が雄二に対するお仕置きが始まった。

## 抹殺物語（後書き）

次回からは指定したターゲットを抹殺していくのでお楽しみに！！  
！

## 抹殺物語 ？

『よし、着いたな』

「後は待つだけだ」

私と光一は明久と秀吉を連れてバカ共から逃げて屋上にいた。

「どうするの二人とも！？ このままだと姫路さん達がここに来ちやうよ！？」

「ここでは逃げ場が無いのじゃ！？ 早く屋上から出ないと明久が紐無しバンジーをやらされてしまうのじゃ！？」

明久と秀吉は非常に慌てており、私と光一に詰め寄っていた。

「とりあえず落ち着け2人とも。」

『光一の言うとおりだ。君達は私と光一が何の意味も無く屋上にいると思っっているのか？ だとしたら、それは大きな間違いだよ』

「そ…それは……」

「まあ確かに……お主等がここにいると言う事は何かあると思うのじゃが……」

明久と秀吉が納得している時……。

バンツ！！

「いたぞ！！ 久遠と吉井だ！！！」

「……………覚悟しやがれええええ！！！！！！……………」

「明久君！！ 逃がしませんよ！！！」

「アキ！！ 大人しく観念しなさい！！！！！」

バカ共（FFF団+姫路+島田）が私達を見つけて一斉に囲んだ。

『おお〜物の見事に囲まれたねえ〜光一』

「そうだな」

「ちょっと！？ 何でこんな大ピンチに落ち着いているのさ二人とも！？ 僕達、絶体絶命だよ！！！」

「このままだと全員死んでしまうのじゃ！？？」

私と光一は冷静に見ながら武器を構え、明久と秀吉はどうしようもない位に慌てている。

「ここにいたなら丁度良い。久遠と吉井には今すぐに紐無しバンジーをやってもらおう！！ その前に、刀を持っている貴様は吉井を逃がした罪でこの場で今すぐ俺達が処刑してやる！！！！！！」

「……………死刑だ！！有罪だ！！！！！！……………」

「……………抹殺する！！！！！！……………」

「明久君のお仕置きを邪魔した貴方にお仕置きです!!」

「ウチ等の邪魔をした罪は重いわよ!!」

バカ共（FFF団＋姫路＋島田）は下らん理由で私を処刑するみたいだ。

『ふむ……光一、私が最初にバカ共を始末する。手を出すなよ？（スッ）』

「了解。アンタの実力を見せてもらっせ」

私は持っている刀で居合い抜き構えしながら言うと、光一は構えていた銃を下ろす。

「何をするかは知らんが、これだけの人数相手に一人で挑もうとはいい度胸だな！ その度胸に免じて一斉攻撃してやる!! お前等!! 行くぞ!!」

「……おお!!!!（ダッ!!）死に晒せえ!!!!」「……」

須川の合図でFFF団が私に攻撃を仕掛けてきたが……。

『愚か者共め（フッ!）』

「な…何だ!? 突然消えたぞ!! 何処へ行った!？」

私が突然消えた事にFFF団は驚いて回りを見るが見つけることが出来なかった。

「（速いな、俺でも見えないスピードを出すとは流石だ）」

「あ…あれ？ 光一、旅人さんがいなくなっちゃったよ!？」

「旅人殿!! 何処へ行ったのじゃ!？」

明久と秀吉も私の姿を探している。

「もしかして、明久君達を見捨てたんじゃ？」

「だったらアイツは後回しでいいわ!! 今ウチ等がやるのはアキ達よ!!」

「島田の言うとおりだ!! 久遠、どうやらあいつはお前達を見捨てたようだな!! 奴がいなければお前達を先に……」

島田の合図でFFF団が光一達に襲いかかろうとしたが……。

『（フツ!）残念ですが、見捨ててはいませんよ』

「「きゃあ!!」」

「ぬおっ!! 貴様いつの間に!？」

「しかも僕達の近くにいるし!？」

「どっしりどっしりじゃ!？」

「……………」



私が姿を現したことに光一を除く全員が驚いた。

『姫路と島田を除くバカ共に警告する。その場から一步でも動いたら大変な事になるぞ?』

「何を訳の分からない事を!! お前等!! もう一回行くぞ!!」

「…………おお!!! 死にさらせえええ!!!」

『やれやれ……動かなければいいものを(スー……パチンツ)』

FFF団は私の警告を無視して一步踏み出し、私が刀を納めた瞬間

……。

「……………\$!%\$¥#”#\$%’##!!!!!!……」  
「バタンツ!!」

突然、言葉にならない悲鳴を出して倒れた。

「え!?! な…何!? 何が起きたの!?!」

「何じゃ!? こやつ等が突然変な声を出しながら倒れたのじゃ!?!」

「旅人さん、一体何をしたんだ?」

明久と秀吉はFFF団とムツツリー二の異変に驚き、光一は私に何をしたかを聞いてくる。

『倒れている奴等をよく見てご覧？』

「「「？……………うわあ」「」

私が倒れている連中に指をさし、3人はそれを見るとすぐに原因が分かった。

それは……

「ぐおおお……………」

「か…かか……………あああ……………」

「おお…おつおつおつ……………」

「も…もう……………お婿に行けない……………」

「……………(ピクッ)(ピクッ)……………」

FFF団全員が股間に手を当てて悶えていたからであった。

『フフフフ……………バカ共相手には普通に攻撃するよりは金的攻撃が結構有効だな。』

まあ峰打ちだけどねと私は付け加える。

「にしてもあの一瞬でFFF団全員を倒すなんて見事だな。アイツ等一人一人に金的をやったのか？」

『勿論。ちゃんと一人ずつに、構え 居合いの金的 刀を納めるっ

て言つの繰り返しをやったよ。ムッツリーニは気付いたみたいだが、反応が少し遅れて私の攻撃の餌食となったけど……」

「……………あの一瞬でかよ……（全然見えなかったぞ）」

「……………この人って何者？（人間じゃないよ）」

「……………頼もしいのか、恐ろしいのか……よく分からぬお方じゃ……  
…（人間の領域を超えておる）」

私の台詞に3人は思った……私だけは絶対敵に回してはいけないと。

『さてと、FFF団やムッツリーニは仕留めたから……次はお前達だよ』

「「ひっ……！」」

倒れたFFF団を見て呆然となっていた姫路と島田だったが、私に名前を呼ばれた事に後ずさりする。

『さて、君達はどうやって料理してやるうか（スタスタ）』

私が二人に近づくと……。

「こ……来ないで下さい……！」

「近寄らないでよ変態……！」

姫路と島田は怯えながら来るなど言ってきた。

『おやおや、先程までの威勢は何処へ行ったのやら……っつか島田、人を変態呼ばわりとは失礼にも程が……まあそんな事はどうでもいい。ではお前達にもお仕置きだ（チャキ！）』

失礼な事を言う島田に突っ込みを入れようとするが、どうでも良くなったのでさっさと気絶させる為に刀を抜こうとする。

「い……いや……」

「あ……アンタ……それで女の子を切るつもりなの!？」

『いや、ただキツイ峰打ちをするだけだよ』

「どつちにしても、女の子を殴るなんてアンタ最低よ!！」

『……… 此処でそんな下らん事をほざくとは……… お前等は明久に最低極まりない事をしてるくせに、よくそんな戯言を私の前で言えるな』

「うんうん、全くだ」

島田がここで私を最低呼ばわりするが、コイツ等のやっている事も十分最低だと思う。吐き捨てるように言う私に光一は首を縦に振りながらウンウンと頷きながら賛同している。

「ね……ねえ旅人さん？ 何をするかは知らないけど2人に酷い事は………」

「明久、お主は何も言うでない」

「え？ でも秀吉……」

「いいのじゃ（姫路と島田には少しお仕置が必要じゃ）」

明久は私がやるうとしていた事を止めようとしたが、秀吉が阻止した。

しかし……。

『けど……まあ確かに島田の言う事には一理あるな（スー：パチン』

「お…おい旅人さん！」

私がコロツと変わったかのように刀を納めると光一が私に抗議した。

『勘違いするな光一。私は別に肉体的な痛みを与えるのを止めただけだ』

「……………じゃあ何をするんだ？」

『それはね……………こつするんだよ！！（パチンツ！）』

「「え？（ピシユツ！）」」

私が指を鳴らすと姫路と島田が消えた。

「姫路と島田が……………」

「消えちゃった!？」

「た…旅人殿！ お主はあの二人を何処へやったのじゃ!？」

『フッフッフッフ（ゴソゴソ）今2人はある部屋に連れて行きましたので、テレビをご覧下さい（スツ）』

私は懐から携帯テレビを出して3人に見せる。すると……。

《きゃあああああ！！！！！！！！！！！》

《いやあああああ！！！！！！！！！！！！》

画面に映った先は、姫路と島田がお化け達に追われていた。どんなお化けに追われているかは皆様のご想像にお任せします。

「ほお〜〜これはこれは、大変いい眺めだなあ〜。けど俺としては物足りないが……」

「ちよつと旅人さん。これ酷くない？」

「何を言っておる明久、あやつ等には丁度いいお仕置きじゃ」

光一は物足りない表情をしているがニヤニヤと見ており、明久は私に抗議をするが、秀吉は明久に当然のお仕置きと言っていた。

「なあ旅人さん？ 今映っているお化け達をもっと怖く出来ないか？」

『可能だよ。どんなお化けにしたいんだ？』

私が可能と言った瞬間に光一は凶悪な笑みを浮かべて私に変更内容を言ってくる。

「そうだなあ……姫路と島田にはバイオ○ザードのゾンビやエイリ○ンとの追いかけてっこをしてもらいたいんだが……」

『ほづ………君も随分と恐ろしい物を考えるね』

「ホントだったらもつと凶悪な怪物をけしかけて欲しいが……まあ今回はそれだけで勘弁してやる」

『……さすがは過激派筆頭ですな。でもちよつと待ってね』

私は携帯テレビを口元に当てて……。

『姫路に島田、聞こえるかい?』

《旅人さん!! なんて所に連れて来たんですか!? いやあああ  
!?!?!》

《さっさとウチ等を元の場所に帰しなさいよ!! きゃああ!!  
また追い掛けてきた〜!!》

姫路と島田は逃げながら私に猛抗議していた。

『君達が明久と秀吉の恋路を邪魔しないと誓えば今すぐにでも帰してあげるよ?』

《そんなの絶対嫌です!!》





「ちょ…ちょっと！？ ホントにいいの！？」

「明久よ、今の光一と旅人殿に何を言っても無駄じゃ」

そして私と光一はDクラスへ向かう準備をしていた。

おまけ

『よし、それじゃあ行く』

「ああ……つとその前に旅人さん、あそこ見てみる」

『ん？』

準備が終わった私と光一は屋上から出ようとした時、光一が指をさした方向を見てみると……。

「ま…待ちやがれ……」

「俺達は……まだ」

「終わって……ねえぞお……」

「てめえらを……ぶっころすまで……俺達は……死なん……」

「……抹殺」

FFF団とムッツリーニがフラフラとなりながらも起き上がるようにしていた。

「何だ、まだ生きていたか。意外としぶといな……暫くは立ち上がれないほどの一撃だったんだが」

「コイツ等の執念は半端じゃないからな。異端者がいる限り不滅だとアホな事を抜かしているし……」

私と光一は若干呆れながらも、根性を見せているFFF団にミクロほど感心した。

「光一、バカ共の止めは君に譲るよ。試しに昨日渡したアレの試し撃ちでもしてみたらどうだ？」

「そうだな、大して動けない良い的がいる事だし（ゴソゴソ）……コイツの威力を試してみるか（ガチャッ！）」

光一は私が以前渡したサブマシンガンを出してFFF団に銃口を……

「そらよ！！（ドパパパパパパ！！！！！！）」

「……………%）&（\$）%&（&）\$（&）&（）！！！！！！！！！！（バタバタバタバタ！！）」

下半身に向けて当てると、再び大事な所を当てられたFFF団とムッツリーニはまた倒れたのであった。

「「「「「……(ピクッ)……(ピクッ)……(ピクッ)……」」」」」

流石に2度も当てられたのか、今度は全員虫の息状態になっていた。

「へえ、片手なのにも関わらず、反動があんまり無くて使いやすいな」

『君向けにカスタマイズしたから扱いやすい様にしているからね』

「それは嬉しい事で」

『さてと、ゴミ掃除も終わったから早く次の目的地へ向かおう(スタスタ)』

「了解 (スタスタ)」

私と光一が屋上を出ると……。

「……秀吉、僕はあの2人を絶対敵に回したくない」

「……奇遇じゃの明久。ワシもそう思っておった」

明久と秀吉も続いて屋上を出た。

## 抹殺物語 ？

私は光一と一緒にDクラスへと向かっており、明久と秀吉もそれに同行した。

「2人と、俺と旅人さんから絶対に離れるなよ」

『もう既に、この騒動は他のクラスにも知れ渡っているからね。恐らくはこれを機に君達を狙う可能性があるからな』

「俺達が狙われるならまだしも、お前達が狙われたら折角立てた計画が台無しになるからな」

「分かったよ。光一と旅人さんの言うとおりにする」

「下手に別行動を取るより、お主等と一緒にいた方が賢明じゃからのっ」

『理解してくれて助かるよ』

私と光一の言い分に明久と秀吉は了承し、私は安堵した。

確かに光一の言う通り、明久と秀吉が狙われたら一巻の終わりだ。私が光一と一緒に抹殺する対象には久保や常夏コンビの片割れの常村が含まれているので、奴等がこの騒動のドサクサに紛れて明久と秀吉を狙うかもしれない。それだけは絶対に阻止しなければいけないのだ。無論、光一もそれが分かっているが故に明久と秀吉を私達と一緒に行動させている。

『さて、そろそろDクラスに着くな』

「今の所は何も起きていないけど……」

「甘いぞ明久、さつき旅人さんが言ったが既にこの騒動は知れ渡っている。だからもう……来たみたいだな」

『2人来たけど、約一名が物凄い速さでこっちに来ているね』

私と光一が向けた視線の先には……。

「久遠光一!!! 今すぐこの場で八つ裂きにしてやります!!! 大人しくモヤシ炒めになりなさい!!!」

「アキちゃ~~~~ん!!! 私がお着替えをしてあげる~~~~!!!」

清水美春と玉野美紀がやって来た。

『……………これはまた随分と灰汁の強い二人ですな』

「旅人さん、アイツ等はそんな生易しい奴等じゃないぞ。正直、俺としては余り戦いたくない……」

「ひいつ!ま…また玉野さんがやって来た!!!……」

「明久、落ち着くのじゃ」

光一はウンザリとした顔をしており、明久は玉野を見てこの間の戦いを思い出した事によって恐怖する。

そして清水美春と玉野美紀は私達と対峙し……。

「さあ久遠光一！！ 覚悟なさい！！ 貴方を殺し、その腕輪を美春の物に！！」

「アキちゃん、あなたに可愛い服を着てもらいたいの。だから私と一緒に更衣室に行こう」

私と秀吉を無視して勝手に話を進めていた。

『おい、私を無視しないで貰いたいんだが……』

「何ですか貴方は！？ 美春の邪魔をするのでしたら久遠光一と纏めて始末します！！！」

「ねえアキちゃん。今から私と〜」

『……………成程、光一と明久が嫌がる訳だよ』

私は清水と玉野の思考を読んでみたが、奴等の頭の中には考えている事が一つだけだった。清水は久遠光一を殺して腕輪を強奪し、玉野は明久を女装させて着せ替え人形にすることしか考えていなかった。

『じゃあ光一、今回も私が始末するけど……いいのかな？』

「構わない、寧ろアンタがやってくれ。」

「僕としては玉野さんを早く何とかして欲しいよ」

『はいはい、分かりましたよ。秀吉、恋人の明久が錯乱状態にならない為に傍にいてやれよ』

「分かったのじゃ」

秀吉は私の言うとおりにして明久の傍に立つのを確認すると、私は清水美春と玉野美紀の前に立ち塞がった。

『待たせてすまないね。それじゃあ始めるか』

「美春の邪魔をするのでしたら、先に貴方を片付けます!!!」

「アキちゃ〜ん！ 私とお着替えを……（タッタッタッタ）」

玉野が私の横をすり抜け様としたが……。

『私がそう簡単に行かせると思うか？（スッ）』

「アキちゃ〜ん!!!（ドンッ!）はうっ!（バタンッ!）」

『少し眠ってる』

私が手刀で玉野の襟首を目掛けて当てると玉野は気絶した。

「玉野さん!?! このブタ野郎!!! 女の子に手を上げるなんて最低ですわ!!!!」

『少なくとも、お前達がやるうとしている事に比べれば、まだ親切だと思っけど?』

私の言い分に清水は無視して汚らわしいような目で見てくる。

「やはり男なんて生き物は下種以下の存在ですわ!!! お姉さまにはそのブタ野郎では無く、美春が一番相応しいです!!!」

『お姉様ねえ〜……………島田は先程、私が始末したけどね』

「な…何ですって!?!」

私が島田と言った途端すぐに反応した。

『今は私の作った拷問部屋でお仕置きをしている最中だがな』

「あ…あなた……………お姉さまを……………」

『何だったら見せてあげようか? アイツがもがき苦しむ様子を……………』

私が携帯テレビを出して、清水に見せようとしたが……………。

「……………コロシマス……………」

『ん?』

「……………オネエサマヲ……………薄汚イ豚野郎デ汚シタ罪……………万死二値シマス……………!」

清水が何かに変身したかのように狂った顔をしている。

『……………これはエイ〇アンかい? それともバイオハ〇ードのゾ……………』



ンビかな?』

「うわあ……また変身した……」

「ひいつ!!今の清水さんは玉野さんより怖い!!」

「こ……これにはワシも……」

私が思った事を言うと、後ろに控えている光一達は大変嫌そうな顔をして引いている。

『うーん、これは予想外の展開だな。仕方ない、まずはコイツから片付けるとするか……っつて』

「キシヤアアアアア!!!!!!」

だったモ清水は私に飛び掛かってきたが……。

『ふんっ……遅いよ(ガシッ!)』

「グアアツ!!」

私は攻撃をかわしてすぐに首を掴んだ。

「旅人さん!! ソイツを真正面から掴んだらダメだ!!!!」

『何?』

光一が叫ぶように言いながら助言すると、私は光一の方に顔を向けたその時……。

「ガアアアアアア！……！！（ブオンッ！）」

『（ドゴツ！）グッ！……』

だったモ清水は私の脇腹に蹴りを入れたが、私は離さなかった。

「アアアアアア！……！！（ガリガリガリ！……！！）」

『痛っ……！！ この野郎……！！（ブンッ！）……』

今度は手首を引っ？いて来たから私は投げ捨てるかのように離れた。

「（シユタツ）ふう〜ふう〜」

私は思いっきり投げ飛ばしたつもりだったが、だったモ清水は着地した……四足で地面を着いて。

「くうふう〜っ……くうふう〜っ……」

『……本当に化け物を相手にしているみたいだな』

だったモ清水に引っ？かれた右手首をさすりながら、私は奴を化け物を見るような目で見る。

「そいつはさっき倒した奴等とは桁違いだ……！ 手加減抜きで攻撃した方がいい……！！」

『そうした方がいいみたいだね。ならば（チャキッ！）……』

「殺死殺死殺死殺死殺死殺死殺死」

『……………さつさと勝負を決めるか（スッ）』

これ以上は清水（だったモ）の相手をする気はないので、私はすぐに片付ける為、居合いの構えを取る。清水（だったモ）は私の構えに警戒してか、すぐには動かなかった。

「もしかして居合いで清水さんを？」

「どうやらそうみたいじゃな」

「そうになると、勝負は一瞬で決まるな」

明久と秀吉と光一は静かに見守っていた。

そして……………。

「（バツ！）キシヤアアアアアア！……………！」

清水（だったモ）は動き出して私に襲い掛かろうとしたが……………。

「（ピタッ！）（ピタッ！）（ピタッ！）」

突然、清水（だったモ）が私の懐の前で動きが止まった。

『はい終了了了了』

「え！？」

「何じゃと!?!」

「おい!?!もう終わったのか!?!」

私が終了宣言すると3人は何がどうなったのか分からない表情になった。

そして……。

「オ…オネエサマ…… (バタンツ!)」

だったモノ  
清水が咳きながら倒れた。

「おいおい旅人さん、一体どういう事だ?」

「旅人さんが何もしていないのに、清水さんが倒れちゃったし……」

「どづいうことが説明してくれんかの?」

『そう言つと思つたから、これを見てご覧』

私は問い詰める事を予想していたので、懐から携帯テレビを出して3人に見せた。テレビには私と清水が対峙して、清水が動いた瞬間……。

シャキン!…ドゴツ!…バキッ!…ドカツ!…ボゴツ!

私が刀を抜いて、清水の全身を16回峰打ちしていた。

『ご理解頂けましたか?』

「「「……………」」」

私の余りの早業に3人は何も言葉が出なかった。

『私としても女を殴る気は無かったが、アレ相手にそんな事を気にしてられなかったからな。すぐに終わらせたよ』

「「「……………」」」

『君達は女を殴る私を最低だと思っかい？』

「「「……………」」」

3人はまだ放心状態になっている様だ。

『…………君達がどう思っているかは知らないけど、私は間違った事はしていないからね。向こうが仕掛けてきたんだから』

「あ…いや、俺達は別にそう思っていないから」

「僕達としては助かったんだけどね……………」

「ワシ等はお主を最低だとは思っておらん」

『…………ありがとね。さて、清水が起き上がる前に…………（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと…………。

「いやあああああああ……!!」

「「「!!……!!」」」

『フッフッフッフ』

玉野がいきなり悲鳴を上げた事に光一達は驚き、私は笑みを浮かべる。

「だめえええええ!!!! アキちゃんは私がああ~~~~!!」

「た…旅人さん、玉野さんに何をしたの？」

明久は悲鳴をあげる玉野に何をしたかと私に問う。

『明久はもう驚かないんだね?』

「……………驚き疲れました」

『そうかい? まあいいや。玉野の悲鳴だけど、明久が美女達に囲まれている夢を見ているんだよ』

「え!?!」

「!!……!!」

「成程、確かにソレはアイツにとっては悪夢に等しいな」

私が玉野のしている夢の内容を教えると、明久は嬉しそうな表情になり、秀吉はムツとした顔になり、光一は玉野が悲鳴を上げている

事に納得した。

「旅人さん!! その夢の内容をもっと詳しく……(ゲシッ!) いったああ!!!」

「フンッ!!!」

明久は私に夢の内容を聞こうとしたが、嫉妬した秀吉に足を思いつきり踏みつけられた。

「い…痛いよ秀吉。な…何でそんなに怒っているの?」

「自分の胸に聞いてみるのじゃ!!」

「………やれやれ、今度は明久と秀吉の痴話喧嘩の始まりかな?」

「………秀吉があそこまで嫉妬するのは初めてだな」

私と光一は明久と秀吉の痴話喧嘩が治まるまで見ていた。

つづく………

おまけ

明久と秀吉の痴話喧嘩が終わって次の目的地に向かっている時……。

「「嫌あああああ~~~~~!!!!!!」」

まだエイ○アンから逃げる姫路と島田だった。

そして……。

「オネエサマアアアア！！！！！！」

だったモノ  
清水が加わり、2人を追い掛け始めた………正確には島田を追い掛けているのだが。

「「きゃあああああ~~~~~!!!!!!!!!!!!」」

そんなことに全く気付かない姫路と島田であった。



抹殺物語 ？（後書き）

今回はグダグダの内容でしたが清水と玉野を抹殺しました〜！！！！

次回をお楽しみに！！

それと感想もお願いします〜！！！！！！

## 抹殺物語 ？

明久と秀吉が痴話喧嘩をしている時……。

「秀吉、僕が悪かったから許して」

「フンツ！ 他の女子に現を抜かす明久など知らんのじゃ！！」

清水と玉野を始末した私は光一と一緒に明久と秀吉の痴話喧嘩を見ている。流石に渡り廊下で痴話喧嘩をさせるのはちよつとまずいと思つたので、場所をFクラスへと変えた。Fクラスに着くと霧島によつて屍とされた雄二が倒れていたが、私と光一は敢えて放置している……明久と秀吉は痴話喧嘩をしている為に気付いていないが。

「やれやれ、玉野のっている夢の内容を聞いただけで明久に嫉妬とはな……（ポンポン）」

「それだけ秀吉は明久の事が好きだつて証拠だろ？ 俺にとつては喜ばしい展開だ（ガチャガチャ）」

「私としてはさつさと次のターゲットを始末したいんだがねえ（ス……パチン）」

「まあ待ちなよ旅人さん、ここはあの二人が落ち着くまでもう少し待とう（ガチャガチャ）」

私と光一は明久と秀吉の痴話喧嘩を見物しながら武器の手入れをしている。私はもう刀の手入れが終わつたが光一はまだ銃火器のチェックがまだ終わっていない。

『まだ終わらない?』

「あと少しだ(ガチャガチャ)……とは言え、残りのターゲットはあと数人だからスタンガンだけで充分だがな」

『私に頼めばすぐに万全な状態にしてあげるんだけどねえ』

「こればかりは俺の方で手入れをしたいからな。すまないがもうちよっと待つてくれ(ガチャガチャ)」

『自分の武器は自分で手入れをするか……まあ下手に他人が手入れをするより自分でやった方がいいか』

「ガチャガチャそう言う事……(ジャコツ!)よし、終わった! それじゃあ銃器をしまつか」

光一は私と話しながらチェックを終わらせると、銃火器はポストンバックに入れて強力なスタンガンだけを手に持った。

『後はあの二人の喧嘩が収まるのを待つだけか』

と私は明久と秀吉を見ていたが……。

「……そうだね、夢とは言え僕は秀吉がいながら他の女の子に目を向けるなんて……確かに最低だ」

「あ……明久、ワシは別にそこまで……」

「いいんだよ秀吉。僕は……んん!?!」

明久が自分を卑下しようとしたが、秀吉はそうさせない為に自分から明久にキスをした。

「ん……ん……んちゅ……（秀吉……どうして？……でも秀吉のキスが気持ち良い）」

明久は突然のキスに戸惑ったが、すぐに秀吉を包み込むように抱きしめて受け入れる。

「ん……ぷはあ……明久よ、そんなに自分を卑下するでない。ワシはただ……明久を困らせようとしただけじゃ……じゃから、もうあんな事言わないで欲しいのじゃ……」

「……分かったよ秀吉。もう言わないよ」

「なら良いのじゃ……」

どうやら痴話喧嘩も収まりそうだった。

「ねえ秀吉、もう一回キスしていいかな？」

「良いぞ、ワシはお主とのキスは気持ち良いから何度でもしたくなるのじゃ……ん」

明久が目を瞑っている秀吉に再びキスをしようとしたが……。

『「……ゴホンッ！　ゴホンッ！」』

「……！……」

私と光一がわざとらしい咳払いをすると、2人は見られている事に気付いて即座に離れた。

『あゝアツイアツイ、ただでさえ暑い教室なのに更に暑く感じるよなあゝ光一？』

「全くだ。明久と秀吉は俺を日射病にさせる気か？」

「……………  
（……………）  
……………」

明久と秀吉は私と光一に茶々を入れられると顔がトマトみたいに真っ赤となっている。

『お二人さん、イチャ付くのは構わないが、私達がない時にやっ  
てくれよ』

「そうだぞ、少しは周りを見てからイチャ付いてくれ。周囲を気にしないとバカ共が嗅ぎ付けて……………」

と、私と光一が言っている時……………。

ガラッ！！

『ん？』

「何だ？」

「……………」

「「久遠光一！！覚悟しなさい！！」」

出入り口を見ると中林（Eクラス代表）と小山（Cクラス代表）が現れたので、明久と秀吉は2人が出てきた際に私と光一の近くに寄った。

『今度はEとこの代表か…』

「何だ、中指と小指か…」

「「誰が中指（小指）よ！！ いい加減覚えなさい！！！！」」

『アハハ……光一はもうすっかりその呼び方で定着しているんだね』

光一は自身の扱っているオカルト召喚獣で使っている巨大拳骨の名前で言うと、中林と小山は過敏に反応して訂正するように怒鳴ってくる。

「俺もいるぞ！！！」

『「ああ、クズ野郎もいたんだ」』

「根本だ！！！」

そして根本（Bクラス代表）も現れると私と光一はハモって同じ呼び方で言う。

「全く！ あれだけの騒動を起こしておいて、また同じ事をやるなんて信じられない！！！」

「Fクラスは本当に騒動が絶えないわね!! これだからクスは困るのよ!!!」

「お前等いい加減にしるよな!!」

「よく言うよ。その騒動のドサクサに紛れて俺を袋叩きしようとするお前等に言われたくないな」

中林・小山・根本は揃って光一を罵倒するが、光一もすぐに言い返す。

『(スクツ) やれやれ…… Dクラスの玉野と清水に続いて今度はコイツ等か(チャキツ!)…… 予定外のターゲットだが始末しておこう』

私は立ち上がって、清水を始末した時の様にまた居合いをやって片付けようとするが……。

「待ってくれ旅人さん、今度は俺がやる。アンタはそこで見物しててくれ」

『いいのか?』

「いつまでも旅人さんに任せるのもいけないからな。それにアイツ等は俺を」ご指名だし」

『そうかい。じゃあ任せた。ほれ二人とも、少し離れるよ(グイッ)』

「え？ ちょ… ちよつと!？」

「た… 旅人殿!？」

私は光一の戦いを見物する為に明久と秀吉の腕を引っ張って少し離れると座り込む。

「ほ… 本当に光一だけで任せていいの？」

「奴等の事じゃから何かをやりそうな気がするのじゃが……」

『大丈夫。あいつ等のやる事は予想が付いているから、もう手は打つてある』

「け… けど」

「それでも不安なのじゃが」

明久と秀吉は不安になっているが、私は気にしなかった。

「じゃあやるか。俺は召喚獣でも喧嘩でも、お前らのお好きなように受けて立つぜ？（バチバチ!）」

両手にスタンガンを装備して3人を待ち構える光一。

「何か勘違いをしている様だけど、私達は模擬試召戦争を申し込みに来たのよ!」

「これだからクズは困るのよね！ 野蛮な考えしか持っていないんだから!！」



「覚悟しやがれ久遠！！今回は竹中先生を連れてきた！！先生、召喚許可をお願いします！！！」

「お前等……人の苦手科目でやるのかよ………」

『もうなりふり構ってられないんだね……。アイツ等の頭の中は光一を倒す事しか考えていないよ』

どうやら3人は古典担当の竹中先生を連れてきて光一と模擬試召戦争をやるみたいだ。その事に私は3人を呆れながら見ている。

「こ……古典勝負、承認します！！！」

「……サモン！！！！」

竹中先生が出てきて召喚フィールドを出すと、3人は召喚した。

が……。

「あ……あれ？ 召喚獣が………」

「何で出てこないのよ！？」

「先生！ これはどう言う事ですか！？」

3人の召喚獣が出てこないのが根本が竹中先生に問い詰めた。

「え？ え？ わ……私にも何が何だかさっぱり………」

『フッフッフッフ……探し物はコイツ等の事かな？（スツ）』

「……え？ ……あ~~~~~!!!!!!」

3人は私の方を向くと、私が持っている召喚獣を見て大声を上げた。因みに中林・小山・根本の召喚獣は元のデフォルメサイズに戻っている。

「旅人さん、いつの間に!？」

「何故お主があやつ等の召喚獣を持つておるのじゃ!？」

「何か面白い展開になっているな……」

明久と秀吉も驚いていたが、光一は私が何かをしたと言う事に気が付きながらも面白そうに笑みを浮かべている。

「何でアンタが持っているのよ!？」

「それに操作が出来ない! どうして!？」

「おいお前! 俺達の召喚獣に何をしゃがった!？」

『ふふふ……教えてもいいけどその前に（スツ）』

私は竹中先生の方を見ながらこう言った。

『竹中先生、貴方には退場していただきます』

「これはどういことですか!？ 貴方は生徒の召喚獣に何を『悪

いけど企業秘密で』っていつの間に!？」

竹中先生も反論し私を問い詰めようとするが、私が一瞬で竹中先生の懐に入ったので出鼻を挫かれた。

『今すぐ此処から退場しないとあなたの髪の毛はカツラだって事を学園中に公表しますよ? (ボソツ)』

「!!!! …… す… すいませんが私は急用を思い出したので退場します!！」

秘密を公表すると耳打ちをしたら、竹中先生は顔を青褪めながら退場した。けれど竹中先生がいなくなったのにも関わらず、フィールドがまだ残っている。

『フフフフ……さて、ここからが面白くなる所だ』

「おいちよつと待て!!! 何で竹中先生がいなくなってもフィールドがそのままなんだよ!？」

『それは私の方で弄らせて貰った』

「アンタ教師でも無いのに何でそんな事できるのよ!？」

『悪いけど企業秘密で教えない』

「と言うか私達の召喚獣を返しなさい!！」

『やなこつた』

根本と小山の質問に答え、中林が返せと言っても私は拒否した。

『けどまあ秘密にするのもなんだから教えてやろう……根本の質問であつたけど、今このフィールドは私が操作して、召喚獣達の方にも私の操り人形にさせてもらった。そうしたのは……』

そして私は先日にて、学園長とのやり取りを話し始めた。

先日にて、私は学園長に会って召喚フィールドと召喚獣を操作する権限を要請していた。

「冗談じゃ無いさね。何でアンタみたいな得体の知れない奴にそんな事をしなければいけないさね」

『まあ至極当然の返答ですね。ではこうしませんか？』

当然、学園長は得体の知れない私にそんな事を許可するわけが無いのは予想が付いていたので、私は学園長とある取引をした。

そして取引をしたら学園長は……。

「フンッ！ そんな取引にアタシが応じるわけないさね、さっさと帰んな。アタシの目が届いている所ではそんなマネはさせないよ」

それも突っぱねて私に帰れと言ってくる。

『あらそうですか、残念ですね。では失礼します……（グラッ！）おっと！ あれ？ 何か落としたな………まあいいや』

「くれぐれも、アタシや教師の目が届いている所で勝手な事をするんじゃないよ」

『はい』

私はある物を落として学園長室を去った。

これは一見、学園長は私との取引は拒否しているように見えるが………言い換えればこう捉えることが出来る。「学園長や教師の目を盗んでやるのは構わない」と………つまり取引は成立していたのだ。

そして……。

「おや？ 何かを落としたみたいだねえ。仕方ないね、これは預かっておこう（スッ）」

学園長は私が去る前に落とした小切手を拾うと懐にしまう。因みにその小切手には“1000万円”と書かれていたのであった。

『と言う訳で、今の私はフィールドや召喚獣を自由に設定する事が出来るって事だ。理解出来たか？』

「旅人さん……ババア長にそんな事を……」

「何とまあ……」

「まあ妖怪ババアにして見れば、悪くない取引だろうな」

私の話を聞いていた明久と秀吉は呆れの視線を送り、光一は確かに有効な手だと感心する。

「お前！ それ完全に買収したって事だろ！？（待てよ？ これはあの野郎の秘密を掴んだも同然じゃ……）」

「学園長も何考えてんのよ！！ こんな奴にそんな許可をするなんて！」

「って言うか貴方！！ そんな事して許されると思っているの!？」

根本は口では避難しつつも内心では私に対する弱みを握ったと思い、中林と小山は私を罵ってくる。

『お前達は人の事より、自分の身の心配をしたらどうだ？ この召喚獣達には……（ピンッ！×3）』

「……イタツ！……」

私が召喚獣にデコピンをすると3人はのけ反る。

「な……何で痛みが!？」

「観察処分者の恭二はいいとしても、どうして私達まで!？」

「お前!! 俺達の召喚獣に何をした!？」

『言つたる? 私はフィールドや召喚獣を自由に設定する事が出来るって。私の方で召喚獣の痛みを召喚者にフィールドバックするよう設定しておいたんだ。お前達の事だから光一に苦手科目で模擬試召戦争をやると思は付いてたから手を打っておいたんだよ。ほら光一、コイツ等と何時までも時間掛けたくないからこつちを痛めつくな。思う存分にね(ポイツ!)』

「へえ〜そりゃいいや、じゃあ遠慮なくやらせて貰うか(バチバチ!)」

私が根本達の召喚獣を光一の近くに投げると、光一は3人の召喚獣にスタンガンを向ける。

「旅人さん、こうなる事を予想していたんだ」

「あの3人の襲撃も予想していたのじゃな」

明久と秀吉は私の先読みに感心していた。

「不味いわ!! 私達の召喚獣が!!」

「恭二!! 早く止めて!!」

「って何で俺だけ!？」

「もう遅い、さっさとくたばればバカ共(バチバチバチ!!!)」

光一が召喚獣にスタンガンを当てると……………。

「いやあああああ~~~~!!!! (ボタンッ!)」

「ぎゃあああああ~~~~!!!! (ボタンッ!)」

3人は見事に悶え苦しみ、気絶した。

「さて、五月蠅い連中を始末したからAクラスに向かうとするか」

『待つて光一。その前にコイツ等には記憶消去を(スッ…………トンッ  
×3)これで良しっ』

「確かにソイツ等の記憶を消さないと後々面倒な事になるな」

私はAクラスに向かう前に気絶している根本達の額に指を当てて、  
先程の記憶に関しての消去をする為に暗示を掛ける。

『では気絶しているコイツ等は放っておいて行くとしましょう』

「よし、次はアイツだ」

私と光一は屍となっている中林・小山・根本を無視してAクラスへ  
と向かった。

「…………ねえ秀吉、さつき光一が使ったスタンガンがやたらと威力が  
高くなかったかな?」

「あのスタンガンは確か旅人殿が渡した物だった筈じゃ。恐らく特



注品のスタンガンじゃろう」

「でもさあ……これは余りにも……」

明久と秀吉は召喚獣を見てみたが、真っ黒こげになっていた。

「……………秀吉、僕は何も見なかったことにする」

「奇遇じゃの明久、ワシもそう思ってた」

明久と秀吉は私達の後を追う様にAクラスへと向かったのであった。

そして……。

「ま……待ちやがれ旅人……てめえよくも翔子に……俺の秘蔵本を……」

雄二が目を覚ましながら私に恨み言を呟いていたが、既に気絶している根本達しかいなかった。

## 抹殺物語 ？

私達4人はAクラスに向かっていた。

『さてと、次はAクラスで久保を始末しなければな……………』

「久保をどういう風に始末するんだ？」

『それはね……………』

「あの〜？ 質問していいですか？」

私が光一に久保の抹殺方法を教えようとしたが、明久が私に質問をしてきた。

『なんだい？』

「久保君は僕達が起こした騒動では全く関わっていないのにどうして始末する必要があるんですか？ 悪い人じゃないと思うんですけど……………」

『……………』

明久の質問に私・光一・秀吉は答えられず無言になった。

「……………どうしたんですか？」

『あ……………それはね……………アハハハ……………まあ色々（ポリポリ……………』

「（ポンッ）明久……お前は知らなくていいんだ」

「お主や久保の為でもあるから知る必要は無いのじゃ」

私はバツが悪く頭を掻きながら目をそらして言葉を濁し、光一は明久の肩に手を置いて悟らせるように言い、秀吉は知る必要は無いと言った。

「?????」

当然、明久は私達の言っている事が分からず、頭に「？」ばかり浮かんでいた。私としては永久に分からず仕舞いになって欲しい。

『……秀吉、明久を絶対に離すなよ?』

「無論じゃ、ワシは明久の恋人じゃからな」

「頼むぜ秀吉、ここはお前がしつかりしないとな」

「光一に言われなくても分かっているのじゃ」

「あの……? 僕の質問に……明久!」は……はい!」

私はすぐさま明久の言葉を大声を出して遮ると、明久は私の大声に怯む。

『後で説明するから、今は私の話を黙って聞いてくれ……頼む』

「え? あ……はい……分かりました」

私の真剣な表情に後退る明久であったが一応了承してくれた。

『オホンッ！ では気を取り直して久保の抹殺方法だけど……』

私は3人に説明を始めた。

場所は変わってAクラス。

「ねえ優子、さっき聞いた話だけど光一君と旅人さんが騒動を起こしているみたいだよ」

「知ってるわ。秀吉と吉井君に対する障害の抹殺だつて旅人さんから聞いているから」

優子は学校に来る前に私とばったり会ったので、今日の騒動の事について聞かされていた。本来ならAクラスの模範生として止めなければいけない立場であるが、優子としては明久と秀吉の恋路を応援しているので敢えて黙っていた。

ぶっちゃけ、明久と秀吉のリアルボーイ斯拉フRBLが見たい為である。今までは本の中でしか見れない物が現実に起きているから、乙女（腐女子）としてこんな美味しい場面を見逃したくないのが優子の本音である。

優子も当然、明久と秀吉の恋路を応援しているので何も言わないでいる。

「そう言えば……今は自習時間だけど、あんな騒動が起きているの  
にどうして先生達は何もしていないのかな？」

「ああ、それは旅人さんが“学園長に今日は自習時間にしてくれる  
ように頼んでくる”って言ってたわよ」

「……………旅人さんの事だから、きっと多額なお金を使って解  
決させていると思うんだけど」

「その学園長は職員室にいる先生達に“何が起きても絶対に此方か  
ら手を出さないように！”って言ってるんじゃないかしら？」

工藤と優子の推理は大当たりである。もし私が此処にいたら2人に  
ピタリ賞として何かあげたい位だ。

「ん？ 確か吉井君と弟君に対する障害の抹殺って言ったよね？」

「そうだけど？」

愛子の質問に不可解に思いながら答えると……………。

「……………もしかして久保君もターゲットの一人に入っているのか  
な？」

「……………多分そうかもしれない」

それはすぐに解消された。

「じゃあもうじき、光一君と旅人さんが此処に来そうだね」

「……かもしれないわ」

工藤が優子が私達がそろそろ来ると思っている時……。

バタンツ！

「「！！！」」

『「失礼しまゝす！！！」』

「お…お邪魔しまゝす………」

「失礼するのじゃ………」

私と光一は堂々と大きな声で言っ入り、明久と秀吉は控えめに言っ入り。

「……ホントに来たね」

「噂をすれば影かしら？」

愛子と優子は予想していたとは言え、まさか本当に来るとは思わなかったようだ。

「久遠光一！！　ってそれに吉井君もいるじゃないか！？　……あれ？　何故、吉井君と木下君があんなにくっ付いているんだ？」

久保は光一が来た事に敵意を燃やしたが、明久が秀吉と一緒に歩いている事に疑問を抱く。

「何だ何だ？」

「久遠と吉井と木下さんの弟と……誰だあの人？」

「見たことない人だな……」

「誰か知ってる？」

Aクラスの生徒は私を見て不思議そうな顔をしている。それは当然であろう、生徒でも教師でもない私が学校にいるのが不思議なのだから。

そんな中、私は……。

『え〜では先ずAクラス代表の霧島翔子さんはいらっしやいますか!?!』

「……旅人さん、何の用？」

霧島を呼んだ。

『先日、貴方に渡した本はどうでしたか？』

「……雄二のだったからお仕置きをした」

『ほほ〜う、それは何よりです』

「……貴方はとても良い人、感謝する」

『いえいえ、どういたしまして』

霧島は私が教えた情報とブツを渡したことに感謝しているので私も大いに満足である。

「旅人さん、それは後回しにしてさっさと始めようぜ」

『はいはい、分かったよ。では明久と秀吉、手筈通りに頼むよ』

「は……はい……分かりました」

「了解したのじゃ」

明久と秀吉は私の指示通りに動き、スクリーンの近くに立った。

「で……ではこれから、僕と秀吉から大事な話があります！」

「静かに聴いて貰いたいのじゃ！」

「……………?」

Aクラス生徒全員は何が何だか分からなかったが、取り敢えず静かにした。

「ではAクラスの皆さんにお知らせします。実は……僕と秀吉は……えっと……」

「……………明久、早く言うのじゃ！（ボソッ）」

「わ……………分かってるよ！（ボソッ）……………え……………ええと……………その……………」



明久は未だに言いづらく戸惑っている最中、私と光一はコソコソと優子と工藤にそっと近づく。

『やお二人さん』

「ちょっと旅人さん、これは一体どう言う事？」

「ボクには何が何だかさっぱり分からないんだけど……」

「2人には悪いが説明している暇は無い。今は俺達の言われた通りの事をしてくれないか？」

『光一の言つとおり、とりあえず君達の手を貸してもらいたいんだ。いいかな？』

私と光一はすぐに手を貸してもらおうように頼むと……。

「ま……まあ……あたしは別にいいけど」

「後でちゃんと教えて下さいね」

優子と愛子はすぐに了承した。

そして明久と秀吉は……。

「何だ？ 何が言いたいんだ？」

「早くしてくれー！」

「勉強する時間が惜しいんだけど〜！」

「吉井君、君は一体何が言いたいんだい!？」

「え……あ……そ……その……え〜と……」

明久はまだ言つてなく、Aクラス生徒達から野次を飛ばされていた……久保は嫌な予感がしながらも明久に質問をしているが。

「明久よ! いつまで戸惑っておるのじゃ!」

「そ……そんな事言われたって……」

「もういい! ワシが代わりに言つてのじゃ!」

流石の秀吉も明久が言わない事に痺れを切らして代行する事にした。

その光景を見ていた私は……。

『明久のバカ! あれ程言っておいたのに。くそっ!』

予定外な事が発生した為に舌打ちをした。

「仕方ない旅人さん、ここは秀吉に任せよう」

『……………そうするしかないな……………本当は明久本人に言わせたかったんだが……………』

「……………ねえ優子、ボクはもう段々分かってきたんだけど」

「奇遇ね愛子、あたしも分かってきたわ」

私と光一は優子と工藤を連れて明久と秀吉の近くに待機している。

「皆に聞いてもらいたいの是他でもない！ーワシは……」

そして秀吉が言ったのは……

## 抹殺物語 ？

「ワシは……明久とは恋人として付き合っているんじゃない！」

秀吉がでかい声で叫ぶながら明久に抱きつく……。――

「くくくえ〜〜〜〜〜〜！！！！？？？」

「くくくきゃあああ〜〜〜〜〜〜！！！！」

「え？……なん……だって……？」

Aクラス男子は驚嘆の声をだし、Aクラス女子は（嬉しそうに）悲鳴を上げている。そして久保は秀吉の発言に石みたいに固まった。

『まずは第1段階成功だな。光一、第2段階に移るぞ』

「了解。2人とも、手筈通りに頼むぞ」

「分かったわ」

「何だか面白くなってきたかも」

私と光一は明久達に近寄り、優子と愛子は久保の近くに寄っていつでも捕まえられるようにスタンバイしていた。

「ワシは明久の事が大好きじゃ！ 離したくないほどに！！（ギユウツ！）」

「ひ…秀吉！？ そんな台詞は……」

明久は秀吉の予想外な台詞を言う事に声を掛けるが……

「ワシは明久を生涯愛する事をここに誓うのじゃ！！！」

秀吉は明久に抱きしめている力をさらに込めて大告白をする。

「……」

「……頑張つて……！ 私達は応援してるから……！！！」

「

男子達は口を開けて呆然とし、女子達は明久と秀吉に声援を送った。

「う……嘘だ……これは……何かの……間違いだ……は……ははは」

「うわあ……久保君が」

「…壊れ始めて来ているね」

久保は台詞が途切れ途切れになっており壊れた人形のように笑い始めたのを見て、優子と工藤は少し引き気味になる。

「け…けどよ！ いくら木下さんの弟が女の子っぽいからって男同士は不味いだろ！？」

「人として間違っているぞ！？」

「そりゃ木下さんより可愛いのは分かるけど……」

「俺としては木下さんより木下秀吉に告白したい!!」

男子達がやっと回復すると、当然抗議をしてきた………後に言った2人は優子に喧嘩を売っている発言であるが。

「（あの2人は後で絶対に絞めてやる）」

当然それは優子に耳に入っており、言った2人をターゲットロックオンしていた。

『男子の皆さん方、貴方達の言う事は御尤もです。しかし!!』

「今から流す映像を見れば納得するぞ!!」

私と光一はスクリーンの近くで教室全体に聞こえるように大きな声で言う。

『それではご覧下さい!!（パチンツ!!）』

私が指を鳴らすとスクリーンの電源が付き、ある映像が流れた。

その映像とは……。

《明久君、エッチな本を持つのはいけませんよ?》

《アキ、お仕置きをしてあげるわ》

《ひ…姫路さん!? 美波!? ちょ…ちょっと待って! 本を持っている位でぎゃあああ!!!!!!》

エツチな本を見ている明久にお仕置きをする姫路と島田……。

《女の子をいやらしい目で見る明久君にはお仕置きです!!》

《骨の2、3本は覚悟しなさい!!》

「待つて!! 僕はただ道を聞かれたただけでぎゃあああああ!!  
!……!」

道を迷っている女の子を明久が助けようとすると、いやらしい事をやりそうだと勘違いしてお仕置きをする姫路と島田……。

《明久君、不潔です!! 女の子じゃなく久遠君に興味があるなんて!?!》

《ウチにはアキの本心が分からない!!》

《待つてよ!! 何で召喚獣の融合でこんな誤解をされなきゃいけないの!?!》

光一の召喚獣と明久の召喚獣が融合しようとする時、明久と光一を同性愛者扱いする姫路と島田……。

《大丈夫か明久?》

《うつつ…… 何で姫路さんと美波は僕が何かをする度にお仕置きをされなければいけないの?》

《明久よ…… 大丈夫かの?》

《ひ…秀吉…》

《（ギユウツ）大丈夫じゃ…ワシが付いておる。お主は何も悪くない》

光一が泣いている明久を慰めている時に、明久をそっと抱きしめる秀吉…。

《秀吉…僕も…女の子が信用出来ない》

《明久、ずっとお主の傍におる。ワシは明久を裏切らないのじゃ》

《ほ…本当に？》

《無論じゃ》

《う…う…う…う…うわあああああ…！！！！（ギユウツ）！！！！》

《明久、ワシはずっとお主の傍におるぞい》

泣きじゃくりながら抱き締める明久をあやす様に抱きしめている秀吉…。

と言った映像が流れた。

「ちょ…ちょっと待って！？ こんな映像が流れるって話は聞いてないよ！！ それに僕はそんな酷い目に…むぐ！」



『明久、君は何も言わないように』

明久はそこまでやられていないと言おうとするが、私が咄嗟に手を  
使って明久の口を塞ぐ。

そして映像を見たAクラス生徒は……。

「う……う……う……う……う……う……う……う……う……う……」

「よ……吉井……お前……」

「そんな酷い目に遭わされていたのか……何て不憫な奴だ……」

「心が荒んでいた吉井を木下の優しさで救われたんだな……」

「これじゃあ木下を好きになるのは当然だよ……」

久保を除いた男子達は涙を流しながら明久に心底同情し……。

「吉井君……辛かったのね……」

「あんなの酷過ぎるわ……」

「束縛するなんて間違ってる……」

「吉井君……私達は木下君との恋を力一杯応援するわ……」

「頑張つて吉井君……」

優子と工藤を除いた女子達は熱いエールを明久に送る。

『それでは皆さん！！ 吉井明久と木下秀吉をカップルと認める方は大きな声で“賛成！！”と叫んで下さい！！』

Aクラス生徒達の心が一気に傾いたのを確認した私は多数決で決めるようとする…。

ババババババ！！！！

久保を除くAクラス生徒達全員は手を上げて……。

「『賛成します！！！！！！！！！！！！！！！！！！』」

と、一致団結するかのようにな声揃えて言ったのであった。

「それでは過半数を超えましたので吉井明久と木下秀吉をカップルと認め……」

「反対だ！！！！！！！！」

そして光一が締めを括ろうとしたが、いきなり久保が大きな声で反対と叫んだ。

『（フツ……予想通りの反応だ）……おいおい久保君。明久と秀吉の仲に水を差すのはいけませんな』

「全くだ。ここの空気を読めよ久保」

私と光一は久保に抗議をしたが……。

「ふざけるな!! あんな嘘の映像を見せる君達に言われたくない  
!!!」

『これは異な事を。私が見せた映像は真実だと言うのに』

「僕は今まで吉井君を見てきたが、あんなに荒んでいる吉井君は見た事が無い!!」

『……………(まるでストーカーしているような発言だね  
え……………自覚していないと思うが)』

「……………(やはりこいつは明久の為に早急に始末する  
必要があるな)」

久保の発言に呆れる私に対し、すぐに始末しようと考え光一であった。

「……………ねえ秀吉、久保君の発言に途轍もない寒気を感じただけど  
……………どうしてかな?」

「明久よ、お主は気にしなくて良いのじゃ」

明久は久保の発言に背筋に寒気が感じ、秀吉は寒がっている明久を  
落ち着かせる。

『それで? いくら君が反対した所で今の状況を覆せるとは思えな  
いけど?』

「くっ!!!(確かに今のままでは覆す事は出来ない……………ならば!!)」

「

久保は何か閃いたみたいで、近くにいる優子と工藤に話しかけようとする。

「木下さん！ 工藤さん！ 君達なら分かるだろ！？ あれが嘘の映像だつて事を！？」

「え？ あ…そ…それは……」

「う…う…え〜とお……」

「君達は吉井君や木下君と一緒に行動しているじゃないか！ 認めたくないがそこにいる久遠光一もな！！ それにもし吉井君があんな酷い目に遭っていたら君達が黙って見過ごす訳が無いじゃないか！？」

『（成程ね……考えたな、久保）』

久保は優子と愛子が時折Fクラスに行っている所を見ているので、明久がどんな状況になっているかを知っていると踏んで聞いたのだろう。それは当然、他のAクラス生徒達もそれを知っている。もし優子と工藤が此処で「明久はあんな酷い目に遭っていない」と言うのと、Aクラス生徒達は2人の言葉を信じて私達を疑いこの状況を覆す事が出来るのだから。

「そうだろう二人とも！？」

『（まあ確かにそれは有効な手だよ……だけど）』

確信がありながらも優子と愛子に問う久保であったが……。

「久保君……旅人さんが見せた映像は本当よ」

「え!?!」

優子が真実と言った事により久保は驚嘆し…。

「優子の言うとおりでだよ久保君、吉井君は姫路さん達に今まで酷い目に遭わされていたよ」

「な!?!」

工藤も同様に真実と言われて口が塞がらなくなってしまいう久保であった。

『(フッフッフ…悪いがそれは既に対策済みなんだよ)』

「(優子と愛子に予め言っておいて正解だったな)」

私と光一は久保が絶対に優子と愛子に話し掛けると思ったので、前もって2人に口裏を合わせる様に頼んでおいたのだ。

「くっ!?!…こんな事が!?!」

流石の久保もこうなる事は予想出来なかったのだろう。

『さて、2人の証人も真実だと言っている。久保君、ここは素直に明久と秀吉の恋仲を応援しようじゃないか』

「そうだぞ、これ以上はもう何を言っても無駄だ。いい加減に認め

る事だな」

私と光一が久保に負けを認めるように言うと…。

「おい久保！ まだ続ける気か！？」

「もう茶々を入れないでくれ！！」

「吉井君と木下君の仲を邪魔しないで！」

「いくら久保君でもこれ以上は許さないわよ！」

Aクラス生徒達が久保に抗議をする。

「くっ！ こ…こうなったら最終手段だ！！（ダッ）」

久保は明久に近づきキスをしようとするが…。

「（ガシッ！）駄目よ久保君、秀吉と吉井君に何をするつもりなの？」

「（ガシッ！）無粋な真似をしちゃ駄目だよ、久保君？」

「（ジタバタジタバタ！）は…離してくれ2人とも！」

優子と工藤がそれぞれ久保の腕を掴んで動きを止めていた。

『（フフフフ……お前が最終手段をやるのも予想済みだ）』

「（ホントに久保は俺の思ったとおりの行動をしてくれるな）」

それは言うまでもなく私と光一が2人に久保の動きを止める様に頼んであった。

「ふふふ……ごめんなさい久保君（ボソツ）」

「もう久保君に勝ち目は無いよ（ボソツ）」

「……ま……まさか君達は……」

『おっと！ それ以上の言葉は不要だよ（パチンツ）』

「……！！！！（こ……声が出ない）」

優子と工藤の発言に久保は2人がグルだと分かったが、私が指を鳴らして久保を喋らせないように沈黙させた。

『さあ明久！ 秀吉！ Aクラス諸君の為に此処でキスをしてもらうよ……！』

「え！？」

「な……何じゃと！？」

「成程な（ボソツ）……そりゃいいや。2人とも、ここは熱いキスを見せ付けてやれ」

私の提案に明久と秀吉は予想外な事に驚き、光一は私の意図が分かっつて2人にキスをするように促す。

「これはまた予想外な展開ね」

「優子、そう言っている割には楽しそうじゃない」

「……………!! (止めてくれ!!!)」

優子と工藤は楽しそうな顔をし、久保は見たくないと言わんばかりに抵抗するが2人に拘束されて動けない。

「……………秀吉、僕達はもうキスする事は決定なんだね」

「……………ここはもう諦めるしか無いじゃろう。旅人殿の事じゃから、ワシ等が断った所で別の手を考えていると思うのじゃ」

「……………そうだね。旅人さんは僕達の考えている事は予想しているだろうし」

明久と秀吉は観念してキスをする事を決めた様だ。

「じゃ……………じゃあ行くよ?」

「う……………うむ……………ん……………」

明久は秀吉の肩に手を置きながらキスをした。

「……………きゃああああ……………!!……………!!……………」

「……………おめでと……………!!……………!!……………」

女子達は大変嬉しい悲鳴をあげ、男子達は祝福を祝った。



「……………（バタンッ!）」

久保は明久が秀吉にキスをする所を見て、石になりながら気絶した。

『（バツ!）では皆さん!! 明久と秀吉に!!』

「（バツ!）盛大な拍手をお願いします!!!」

私と光一が腕を上げながら言うと、Aクラスの教室に大きな拍手が響いていた。

## 抹殺物語 ？

2 - Aで久保を抹殺した私達は優子と愛子を連れて3年の教室に向かおうとしていた。

『では3年の常夏コンビの片割れである常村をを始末しに行きますか』

「……………」

『光一、どうしたの？』

「…………いや、何でもない」

『ならいいけど』

光一がいつもの調子じゃないのは既に分かっている。何しろ、常夏コンビのいる教室には前回倒した光一の兄である大神白夜がいるのだから。倒したとは言え光一にとって凄く因縁のある相手と同時に、これまで抹殺してきた奴等とは全然レベルの桁が違う。恐らく一番の強敵とも言えるだろう。

『心配するな光一。お前のお兄さんがもし来たら私の方で始末するから』

「けど…………」

何かを言おうとする光一であるが…………。

『光一始末するのはお兄さんじゃない、常村だ。いいね？』

「……………分かった」

私が念を押して言うと渋々了承したのであった。

「光一、僕等が付いてるから」

「ワシ等がおるから心配するでない」

「もしアンタがまた暴走してもアタシがすぐに止めるから」

「今度はボクも一緒に止めるよ」

「……………ありがとな」

明久・秀吉・優子・工藤の励ましに、光一は4人に感謝した。

『うむうむ、素晴らしき友情と愛ですなあ。思わず涙が出てしまいます（スツ）……………ん？』

私は涙が出たので、ハンカチを出して目を拭こうとしたが……………。

「ここにいやがったか旅人！！ てめえ覚悟しやがれ！！！」

『……………つち！ 折角のいいシーンが……………』

階段に上がる直前に雄二リョウジが現れたので私は大きく舌打ちをした。

「おいてめえ！！ いま俺の名前のルビにゴリラって入れたろ！？」

『はて、何の事やら。私何も知らないよ雄二』

「人をゴリラ呼ばわりしてんじゃねえ!!」

完全にゴリラ呼ばわりされている雄二はキレかけていた。

『まあそんな事はどうでもいいとして……霧島め、仕留め損ねたよ  
うだな』

「ってか雄二、お前まだ生きていたのか？」

「あれ？ 何で人間の形をした雄二がここにいるの？」

「（ピキッ！）てめえらなあ……」

「お主等……」

私と光一と明久がそれぞれ好き勝手な事を言っていると、雄二は頭に青筋を浮かべながら3人を睨んでいる。そのやり取りを見ている秀吉はは呆れながら見ていた。

「どうやら坂本君も抹殺対象の一人だったみたいね」

「もしかして旅人さんが教室で代表と話していたのは、坂本君の抹殺についての事だったのかな？」

優子と愛子は私がAクラスの教室で霧島と話した内容を思い出しながら雄二を見ている。

『で、君は私に何か恨みでもあるのかな？』

「しらばっくれるな！！ てめえ俺が嚴重に隠していたコレクションを翔子に渡しやがったろ！？」

『ああ〜アレね』

「その所為で翔子にコレクションを燃やされるわ、お仕置をされるわでこっちは散々な目に遭ったんだぞ！！」

「妻がいるくせにエロ本を持っているからだろ？ 自業自得じゃないか」

「俺は独身だつて何度も言ってるだろうが！！」

光一がちよつとしたツツコミをすると雄二はすぐに独身だと言いつす。

『どつやらコイツは私に用があるみたいだから……さっさと片付けるか（チャキッ！）』

「待つて旅人さん！ 雄二は僕に始末させて！！」

私が居合いをやるうとするが、急に明久が待ったを掛けて私の前に出る。

『明久が？』

「あのゴリラの所為で僕は地獄に行く所だったんだ！ 僕の手で絶対ぶつ倒す！！ お願いします旅人さん！ ここは僕に譲って下さ

い!」

『……………ふむ』

力強い熱意に私は……

『……………(ポンッ)いいだろう、任せよう。ただし……………(ボソボソボソ)……………必ず勝てよ』

明久の肩に手を置きながら耳打ちした後、明久にエールを送った。

「了解!」

そして明久は雄二と対峙する。

「待たせたね雄二、君は僕の手で始末するよ」

「はっ! いい度胸だな明久、てめえ如きが俺に勝てると思ってるのか?(ポキポキ)」

「勝てるから僕が出てきたんじゃないか。そんな事も分からないの?」

「面白え! やってみやがれ!!(ダッ!)」

雄二は明久に襲い掛かり……。

「おらあ!(ビュオッ!)」

「おっと!(スカッ!)」

攻撃するが明久はサツとかわして防戦一方になる。

それが5分ほど続くと……。

「(さてと……雄二が明久に気を取られている隙に、と。……よし、これで完了)」

「あの悪鬼羅刹と言われた雄二の攻撃をよくかわしているな」

「明久が頼もしく見えるのじゃ」

「吉井君がここまで粘るなんて」

「坂本君も予想外だろうね」

私は何やらコソコソと何かをしており、光一・秀吉・優子・工藤は明久が防戦一方とは言え雄二の攻撃を悉くかわすのに称賛していた。

「どうしたの雄二!? (スカッ!) 攻撃が単調だよ!? (スカッ!)」

「ちっ! ちょこまかとかわしやがつて!! 何時までもお前に構ってらねえんだよ!! さっさとくたばりやがれ!! (ビュオッ!)」

「雄二が無くて、僕はお前に用があるんだよ!! (スカッ!)」

早く決着を付けたい雄二であったが、明久が何度もかわしている事にイラついて攻撃が荒くなっている。

「（雄二は私に復讐する為に早く明久と決着を付けたいが、明久は焦らすかのようにかわしていると言った所か。まあ雄二も明久がそこまで粘るとは思っていなかったんだらうな）」

私は2人の戦い方を見て分析しながら様子を見ており、明久と雄二は1m程の間を開けて対峙している。

「じゃあ今度は僕から攻撃をさせてもらうよ！（スッ！）」

「ほお？ 今までかわしてばかりいたお前が何をやる気だ？」

どうせ下らない小細工をするだらうと思っている雄二は大した事は無いだらうと高を括っていたが……。

「ふっ……………あ！ 雄二の後ろに霧島さん！！！」

「何！？」

明久の言葉によりすぐ後ろを向いてしまった。

「隙あり！（ダッ！）」

「バカが！！そんな手が通じるかよ！！（ビュオッ！）」

明久が雄二に攻撃をしようとしたが、雄二は見抜いていたかのよう  
に迎撃する。

「うおっとー！（ピタッ！）」



「くそっ！ これでもダメか！」

けれど明久は雄二と対峙している30cm手前で急に止まった事により、雄二の攻撃をかわして再び距離を取る。

『そろそろだな(ボソツ)……………(トントントントント)』

「!!!!!!」

私が足音を3回立てると、明久は何か気付いたかのような顔になった。雄二はそれに気づかず明久に話し掛けてくる。

「明久、バカなお前にしては考えたが、俺がそんなちやちな手で倒せるわけ無いだろうが」

「まあそうだろうね、僕もあの程度で雄二を倒せるとは思ってないし」

「何だと？」

明久の言葉に雄二は疑問を抱き始めた。

「所でさあ雄二、いきなり話は変わるけど何時になったら霧島さんにプロポーズするの？」

「そんなの一生ねえよ!!」

突然の明久の質問に雄二は激昂しながら言い返す。

「じゃあさあ、僕がもしこの勝負に勝ったら雄二が霧島さんにプロ

ポーズしてもらったのはどうかな？」

「誰がするか！！ それにお前が俺に勝てるなんて万に一つの確立もねえ！！」

「だったら尚更、僕が勝った場合、霧島さんにプロポーズしてよ。どうせ僕が雄二に勝てる確率は万に一つも無いんでしょ？」

「……………」

明久の提案に嫌そうな顔をしている雄二であるが…………。

「……………フン！ いいだろう！ お前が万が一にも俺に勝つ事が出来たら翔子にプロポーズしてやるよ！！」

『（掛かった！）』

どうせ勝つのは自分だと思って承諾すると、私は獲物を釣れたかのように笑みを浮かべる。

「ふ〜ん……………その言葉に嘘は無い？」

「当然だ！ だがそれは俺に勝ってから言っ事だな！！ 行くぜ！！（ダツ！！）」

雄二は再び明久に襲い掛かろうとしたが…。

「だってさ、霧島さん」

「バカが！ 同じ手が2度も通じるわけが……………」

「……雄二、嬉しい」

「……………!……………(ピタッ!……………(ギギギギギ))」

雄二は後ろから聞き覚えのある声が聞こえたので急に止まり、汗をかきながらゆっくりと後ろを向いた。

「……………しよ…翔子…」

「……………私、この時をずっと待っていた」

霧島が顔を赤くなりながら雄二をうつとりとした表情で見ている。

「へえ〜明久にしては随分と考えたな。1回目のはフェイクで、2回目で霧島が本当に来るとは……………」

「しかし、明久はどうして霧島が来るのを分かっていたのじゃ?」

「代表はさっきまでここにいなかったのに……………」

「どうやってここに来たんだろう?」

明久の予想外な策を使った事に光一達は驚いていたが……………。

『実は私が携帯を使って、霧島をここに呼んだんだよ』

「……………ええ!?」

私が種を明かすと4人は更に驚いた。

『皆が明久と雄二の勝負に釘付けだったから気付いていなかったと思うけど、私はコソコソと携帯のメールで霧島を此処に呼んだ後に足音をたてたんだ』

「そう言えば……旅人さんが足音をたてた事には気付いていたが……」

光一は私と明久がそんな事をしていたとは微塵にも思っていなかったから大いに驚く。

『明久の肩に手を置いてた時点で作戦は実行されていたんだよ』

「……ああつ！」「……」

光一・秀吉・優子・工藤はそのときの事を思い出した。

私は明久の方に手を置きながら……。

『アイコンタクトをしる明久<sup>ポッポッ</sup>……必ず勝てよ（明久、雄二に霧島をプロポーズ

させる為の策を使う。先ずは隙を見計らって霧島がいると言う嘘を言え）』

私は明久に耳打ちした後、明久にメールを送った。

「了解！！（分かったよ旅人さん！）」

そして明久は雄二と対峙する。

という事である。

「成程な、明久にしては妙に考えている策だと思ったら……実はア  
ンタが一枚噛んでいたのか」

『そう言う事。いくら明久でも悪鬼羅刹と呼ばれる雄二を倒せると  
は思えなかったから、手を貸したんだ』

「旅人殿は本当に先を見据えておるのう」

光一と秀吉は感心する中、勝負は決しようとしている。

「霧島さん！ 僕が勝ったら雄二は霧島さんにプロポーズをするか  
ら動きを止めてて！！」

「……分かった（ガシッ！）」

霧島は雄二に羽交い締めをして動けなくさせた。

「は……離しやがれ翔子！！ 明久てめえ！！ 正々堂々の勝負に汚  
ねえ手を使いやがって！！ 男の風上にも置けない奴だな！！ 恥  
を知りやがれ！！」

雄二の台詞に明久は蔑んだ目で見ており……。

「雄二……僕はこつ言い返させて貰つよ」

「何をだ!？」

「それは敗者の台詞だよ」

雄二に言われた事をそっくりそのまま返したのであった。

「てんめえ!!(ガシツ!)って翔子、離せ!!」

「……嫌」

雄二は明久に敗者と言われて怒りのボルテージが上がったので、明久に襲い掛かるうとしたが霧島に押さえられている為に無駄だった。

「さて雄二、覚悟してもらつよ(スツ……バチバチ!)」

「お……おい待て明久! それで俺を気絶させるつもりか!？」

明久が懐からスタンガンを取り出して電源をオンにすると……。

「気絶? そんな生易しいものじゃ無いよ。このスタンガンで……お前の股間に当ててやる!!」

「!!!!!! よ……よせ!! そんな事したら俺は死ぬ!!!!」

とんでもない事を言い放ってきたので、雄二は顔を青褪めながら止

めると言い返して来た。

「大丈夫、もし雄二の大事な所が不能になったとしても旅人さんが元に戻してくれるから」

「戻ったとしても最悪な事に代わりねえだろうが!!」

『そこは私に任せておいて〜』

「おい雄二、いい加減に負けを認めてさっさと地獄に落ちろ」

「テメエ等も好き勝手ほざいてんじゃねえ〜!!」

雄二は必死に抵抗しながらも明久と私と光一の台詞に突っ込む。

しかし……。

「だってさ雄二……さあ……死にさらせえ〜!!!!」  
「ダッ!!」

「や…止める〜!!!(バチバチバチバチ!!!!)《》&  
'\$%'\$%&%(&'&)'&%!!!!」

明久が突進してスタンガンで雄二の大事な所に当てて感電させると、雄二は悲鳴にならない声を出した。

「ふん、いいザマだな雄二」

「吉井君もそれだけ坂本君に恨みを持っていたのね」

『まあ自業自得と言う事で』

光一と優子と私は何事も無く雄二の最後を見て……。

「明久は何と恐ろしい事を……」

「あれはやりすぎじゃないの？」

秀吉と工藤は明久の行動に少し引いていたのであった。

「&” \$%# ’ #% ” ’ …… (ボタンッ!)」

そして雄二は意味不明な言葉を言いながら気絶して倒れる。

「……旅人さん、雄二を元に戻して」

『はいはい(パチンッ!)……はい復活』

いつの間にか雄二から離れていた霧島は私に雄二を回復させるように頼んだので、私は指を鳴らして股間が黒焦げになっていた雄二を元の状態に戻した。

「って旅人さん！ 戻すの早すぎるよ！ 雄二には暫く激痛を味合  
わせないと……!!」

『いや……雄二はもう十分味わったからこれ位で勘弁してやりなよ』

「……まあいつか、雄二の叫び声を聞けただけでも十分だし。じ  
ゃあ霧島さん、雄二をお持ち帰りしていいよ」



「……分かった（ズルズル）」

霧島は雄二を連れて去って行った。

## 抹殺物語 ？

雄二を始末した明久は私達の所に戻ってきた。

「よくやったな明久。あんなゴリラに相手に策を使って倒したのは驚いたぞ」

「そ…そう？ 旅人さんの力を借りて倒したのに何か照れるな……  
(ポリポリ)」

「何言ってるんだ。助力があっても明久が勝った事に変わりない」

「あ…ありがとう光一」

明久は光一からの賛辞に照れながらも嬉しい表情をする。

「ホントに凄かったわよ吉井君……そして代表にはずっと坂本君の手綱を引っ張って貰わないとね、永遠に……」

『木下さんも益々光一に似てきたねえ』

「まだ坂本君がやった事を根に持っているんだね」

「姉上は結構根に持つからのう」

光一に似てきている優子に私と工藤と秀吉は過激派がもう一人増えそうだと思った。

「まあとりあえず、これであのゴリラも霧島から言い逃れが出来な

「くなつたな」

「そうは言っても光一、坂本君の性格を考えると適当な理由を付けてまた逃げるんじゃない？」

「心配ない優子、その時は旅人さんに頼んで、雄二を捕まえた後に媚薬を飲ませて霧島とエッチとして貰うから」

「流石光一　ちゃんと抜かりないわね」

「当然。雄二の不幸…もとい霧島の幸せの為なら俺は何だってするからな」

「そうね。代表には幸せになつてもらわないと」

『（光一は雄二を陥れる事に関してはちゃんと後先の事を考えているな。それに賛同する優子も本当に光一化してきているし……）』

私は光一と優子の会話を聞いて内心、恐ろしく二人を見ており……。

「うんうん、雄二にはやっぱり霧島さんと一緒じゃなきゃね」

「……………」

明久は光一と優子に賛同し、秀吉と工藤は私と同様に光一と優子を恐ろしく見ていた。

『まあ今はあの2人の事は置いて……では今度こそ3年の教室に向か…………』

「お前らさつきからづるせえんだよ……！」

私が向かおうと言い切る前に常夏コンビの常村と夏川が階段から降りてきた。

「久遠！ 吉井！ またテメエ等の仕業か……！」

「揃いも揃って相変わらず騒ぎを起こすクズ共だなあ！」

「しかも刀を持った変な奴まで加わっていやがるし、侍気取りのバカがいるなあ!?」

常夏コンビは私達を挑発しているが……。

『ふむ、向こうからやって来たか。こっちから行く手間が省けたな』

「旅人さん、あいつ等は俺が始末するよ」

「僕も加勢するよ」

『いや、明久は秀吉を守ってくれ。あの変態モヒカンが秀吉に何か仕出かしそうだし』

「旅人さんの言うとおりだ明久、お前は秀吉の傍にいてくれ」

私と光一と明久は揃って無視していた。

「テメエ等無視してんじゃねえよ……！」

『五月蠅いな！ お前らを始末するのに話し合っているんだから！』

！』

「そこで大人しく待つてる！！　すぐに終わらせてやるから！！」

「て…てめえら（怒）」

私と光一が怒鳴りながら挑発すると常夏コンビはすぐに切れた。

「秀吉、僕が付いているから大丈夫だよ。木下さんと工藤さんも危ないから下がってて」

「う…うむ、分かったのじゃ（何故じゃ？　あの常夏コンビの片割れを見た途端に悪寒が走ったのじゃ）」

「頑張つてね旅人さん！　光一！」

「応援しているから！」

明久が秀吉・優子・工藤を下がらせる………秀吉だけが何故か常夏コンビの片割れである常村を見て怯えていたが。

「2人とも、秀吉達を下がらせたよ」

『「苦勞さん、それじゃあ始めますか（チャキッ！）」』

「よし、変態モヒカン俺がやるから旅人さんは変態ハゲを頼む（バチバチッ！）」

『了解』

明久達が下がるのを確認すると、私と光一それぞれの武器を持って構える。

「誰が変態だ!!」

『「アンタ等だよ、変態」<sup>ヒン</sup>』

「揃って同じ事言いながら指をさしてんじゃねえ!!!」

漫才でもやっているかのようなやり取りをしている私たちであった。

「ってそんな事はどうでもいい!! 久遠! 吉井! 俺達を怒らせた事を後悔させてやるぜ!!!」

「そうだ! 特に吉井!! テメエをぶっ倒した後に木下を頂くぜ!!!」

『「……………おい光一、常夏コンビの片割れの一人が妙な事を言ったが私の気のせいか?」』

「奇遇だな旅人さん、俺も幻聴が聞こえたよ。まさか変態モヒカンが俺の優子を頂くなんて随分いい度胸だな」

私と光一は常村の言っている木下が誰かは分かっていたが敢えて惚けた。

「違う!! 俺が言ってるのはそんなハズレ女じゃなく、木下秀吉の事だ!!!」

「!!!!!!(ビクッ!!!)」

「……………（ピキッ！！）」

「（あ…優子が怒った）」

『「」（ああ…言っちゃったよ）」』

常村の発言によって秀吉は恐がり、優子は頭に青筋を浮かべている。そして工藤と私と光一と明久は内心揃って同じ事を思った。

「あ…明久よ、今物凄い寒気を感じるのじゃが（ビクビク）」

「大丈夫だよ秀吉！ 僕が秀吉を守るから（ギュウツ！！）」

明久は恐がつている秀吉を落ち着かせるように抱きしめるのを見た常村は……………。

「よ…吉井！！ てめえ木下を抱きしめてんじゃねえ！！」

「何であなたにそんな事言われなければいけないんですか？（ギョウ）」

「明久（／＼／＼／＼／＼／＼／）…嬉しいのじゃ」

「！！！！…な…何でだ木下？ どうして吉井に抱きしめられてそんな嬉しそうに顔を赤らめて……………」

とても信じられない顔をしていた。

『知らないだろうから教えてやる。実は明久と秀吉は恋人同士だよ』

「因みに秀吉のバージョンは既に明久に奪われている。ってな訳で変態モヒカン、秀吉の事はもう諦めるんだな」

「……………」

私と光一は常村に真実を告げると常村は無言だったが……。

「……………うわあああああああ……！！！！！！！！！！」

「お……おい常村！！　しつかりしろ！！」

いきなり慟哭するかの様な叫びを上げたので、夏川は常村を宥めるように大人しくさせる。

「お……おのれ吉井！！　よくも木下を汚しやがったな！！　テメエは絶対にぶっ殺す！！！！（ダツ！！）」

明久を殺す事しか考えていない常村は血涙を流しながら襲い掛かるうとしたが……

『おい変態モヒカン、明久を殺したかったら先ずは私と（スー……チヤキ！）』

「俺を倒す事だな（バチバチ！）」

私と光一はそれぞれの獲物を持ちながら立ち塞がった。

「どきやがれ！！　テメエ等には構ってられねえ！！」



『そうは行かないよ、明久と秀吉には近づかせん（スツ）』

「そして優子と工藤にもな（バチバチ）」

私は居合いの構えをしており、光一はスタンガンを六爪流の如く持っている。

「さつきから何度も言わせるな久遠！！ 俺にはあんなハズレ女に興味はねえって言ってるだろうが！！」

「……………（ブチッ！！）」

常村の発言に優子は完全に切れた。

「（スタスタ）ねえ2人とも、ちょっとアタシに代わってもらえるかしら？」

『ん？ 何を言ってるんだ木下さん、ここは下が……………』

「そつだぞ優子、俺たちに任せ……………」

私と光一は後ろを見た途端に言葉が止まった。

そこには笑みを浮かべた優子が立っていたが、殺気とも言えるオーラを放っていた。例えるなら、某アニメであるスー―ヤ人の様なオーラを放っているのだ！！ って言えば分かるかな？

「もう一度言っわ二人とも、代わってもらえる？」

『は……………はい……………どつぞ……………』

「お…お通り下さい」

「ついでに貴方達の持っている武器を貸してくれる？ ああ光一は懐にしまつてある銃を貸してくれないかしら？」

『「」どうぞどうぞ（スッ）「」』

私と光一は優子に道を開けながら武器を渡すと、優子は常夏コンビの前に立ちほだかる。

「ああ！？ 何だよハズレ女！ お前に用はねえよ！！」

「……………（ブチブチブチ！！）今すぐそのふざけた口を塞いでやるわよ、序でにそこにいるハゲもね！！（チャキツ！ ガチャ！）」

「おい！ 俺は関係無いだろ！！」

夏川は優子の発言に突っ込んだが、キレている優子に何を言っても無駄だった。

「どけハズレ女！！ 俺は今すぐ吉井を「死になさい（ドゴツ！！）」  
\$&# '\$%”！！！！」

「常村！！ てめえよくも「アンタもね（ダアン！ ダアン！！）」  
\$&# '\$%” ’！\$%！’ #！！！！」

優子は一瞬で常村の懐に入って私の持っている刀で股間を思いつきり殴り、夏川には銃口を股間に目掛けて撃つと……………。

『す……一瞬で変態モヒカンの懐に入って男の急所を殴った……  
(私の高速移動を使っているし)』

「おまけに銃でハゲの股間を正確に当てているし……」

私と光一は優子の神技とも言える動きに凄く驚嘆した。

「か……かか……」

「な……何で俺まで……」

常夏コンビは股間に手を当てながら倒れていた。

「す……凄いね木下さん」

「……姉上が旅人殿と光一の武器を簡単に扱っておるのじゃ」

「……ねえ、武器を持った優子はもしかして光一君以上じゃない  
?」

明久と秀吉と工藤も私と同様に優子の神技に驚いている。

「アンタ達、この程度で終わると思わないですよ？ まだまだこれか  
らなんだから！！（バキッ！ ドゴッ！ ダアン！ ダアン！）」

「「ぎゃあああああ……！！！！！！」」

そして優子は常夏コンビを刀と銃を使って滅多打ち（撃ち）を開始し、私達は優子の気が済むまで黙って見続けていた。

そして私達はこう思った……。

『「「「「「（絶対に敵に回したくない）」「」「」』

## 抹殺物語 ？

バキッ！ ドゴッ！ ボゲッ！ ドガッ！ グシャッ（？）

「……ねえ、木下さんはいつまで続けるんだらう？」

「……早く姉上を止めたほうがよいのでは？」

「……でも今の優子を止めるのはちょっと……」

明久と秀吉と工藤は未だに殴り続けている優子を見ても止める事が出来なかった。あれから5分以上経っても優子はまだ刀と銃を使って常夏コンビを痛めつけており、銃が既に玉切れになっても握りしめながら殴っている。銃は殴る物で無いのだが、私が頑丈に出来ている銃だから殴っても大丈夫だと教えると、優子は玉切れの銃をカイザーナックルみたいに使って殴っているのだ。

『止めるぞ光一』

「ああ」

流石にこれ以上は常夏コンビが気の毒だと思った私と光一は……。

『（ガシッ）木下さーん、そこまでにした方がいいと思うよー？』

「旅人さん、離してくれろ？」

「もう十分だ優子、手を止めてくれ」

「何言ってるのよ光一、まだまだこれからよ」

常夏コンビを殴り続けている優子の間に入って止めながら、私が両腕を押さえて光一が武器を取り上げた。

「光一、武器を返して？」

「元々は俺と旅人さんの武器だろうが……」

『これ以上あの屍共を殴り続けても意味無いよ？』

私は常夏コンビを見るように言うと……。

「……（ピクッ）……（ピクッ）……（ピクッ）……」

最早喋る事が出来ない完全な虫の息状態になっていた。

「何言ってるのよ、この2人にはこれから紐無しバンジーをやって貰うんだから」

『ちよつと待て!! 君は死人に更に鞭を打つのか!?!』

「人をハズレ扱いするバカ達には当然の報いよ」

『駄目だ……優子は完全に目がイッてる。こうなったら……』

優子の目が本気だというのが私はすぐに分かったので、非常手段を使おうと決めた。

『（光一、ご自慢のテクを使って優子を落ち着かせろ！ もうそれ

しか手は無い!!」』

「（了解、俺もそう思ってた所だ）」

私が光一に向かってアイコンタクトをすると、すぐに了承する。

「優子、俺はお前をハズレだなんて微塵も思っていない。だから……」

「え？ こ…光一、何を…んん!？」

光一は優子にキスをした。

「んん…んむ…んちゅ…ちゅぷ…」

「…んむ…ちゅ…ちゅぷ…はあっ…落ち着いたか？」

「……………（プイッ）…いきなりキスしないでよ……………バカ……………」

光一からのキスを終えると、優子は顔が赤くなりながら背けていた。

と、その時……………。

「ずるいよ優子！ 光一君にキスされるなんて!？」

それを見た愛子は私達に近づき、光一にキスをねだってきた。

『どつやら落ち着いてくれたみたいだね。それじゃあ離すよ（スッ）』

「……ごめんなさい旅人さん、アタシ……」

『気にするな、落ち着いてくれて何よりだよ（スー…パチンッ）』

私は光一が持っている刀を返してもらって鞘に収める。

『それじゃあ、ターゲットは全て抹殺したから終了！！（パチンッ  
！）』

キーンコーンカーンコーン！

私が指を鳴らすとチャイムが鳴り出した。

「旅人さん、このチャイムは何なの？」

明久の質問に……。

『自習時間終了のチャイムだ。以降は普通に授業と補習をやって  
もらうよ』

「……ええ……!?」「」「」

私が答えると全員が嫌そうな顔をしていた。

「おいおい旅人さん、それは無いだろ？」

「そんな〜!? これから授業なんて嫌ですよ〜!」

「ワシも色々と疲れたから、このまま帰りたいのじゃが……」



「これから誰もいない所で光一とエッチしようかと思ってたのに……」

「ボクもだよ……」

光一・明久・秀吉・優子・愛子は一斉に私に向かって不満をぶつけて来る。

『私としても君達を帰らせた所だけど、それは無理だ。ただでさえ学園長に頼んで長めの自習時間を設けたんだからね』

「どうせなら妖怪ババアにまた金を差し出して俺達を帰らせてくれないか？ アンタならそれ位は出来るだろ？」

『それは無理だよ光一。学園長は“自習時間が終わり次第、授業を再開させる”と言ってたからね。これ以上はどんなに差し出しても要求は呑めないみたいだよ』

私が帰らせる事が出来ない理由を話すと、光一と明久はキレそうな顔になった。

「あの妖怪ババア！ 旅人さんから多額の金を貰ったくせに、こういう時だけ教育者振りしやがって……！」

「ねえ光一、今すぐあのババアを抹殺しに行かない？」

「それはいい案だ、行くぞ明久！」

「了解……！」

光一と明久は学園長室に向かおうとしたが……。

『止めんか!! (スツパアアン!! x2)』

「ぐはっ!! (ボタンツ!)」

私は即座に懐からハリセンを出して、光一と明久の頭を引っ叩いて気絶させた。

『アホかお前等!! 学園長を抹殺したら、私のやった事が全部パアになるだろうが!!』

「旅人殿、明久と光一は気絶しているのじゃ」

『え? ……ゴホンツ! 3人共、明久と光一を保健室に連れて行って』

「……分かったのじゃ」

「……はあっ、光一とエッチしたかった」

「我慢しようよ優子、ボクだって同じなんだから」

気を取り直して私が指示を出すと、秀吉と優子と愛子は明久と光一を担いで保健室に行った。

『行ったか……よし』

私は5人が保健室に行ったのを確認すると階段に向かってこう言った。

『そこにいるんだろ大神白夜、そろそろ出てきたらどうだ？』

「……………よく気付いたな。完全に気配を消していたつもりだったが」

何と光一の実兄である大神白夜が階段から降りてきた。

『あららくホントにいたんだねえ。いるかもしれないと思って適当に呼んだんだけど……………』

「よく言う。常村と夏川を遊んでいる時に貴様は常に警戒していたであろう？ 私に対する警戒をな」

『はて、何の事かな？』

白夜の指摘に私はわざとらしく惚けた。

「貴様は私が動こうとする度、すぐに動けるように構えていたな。あの愚弟を守る為に」

『……………』

「私は不意打ち等という下らん真似はするつもりは無かったが？」

『……………念の為の用心だと思ってくれ。それに私はまだお前の事を知らないからな』

「……………ふんっ」

私が言い返すと白夜はつまらなそうに鼻息を鳴らす。

『それで、アンタは何の用で此処に来たんだ？ よもや私と光一のバカ共の抹殺興味を抱いたとも言えんが……それともこの2人の敵討ちをしに来たのかな？』

「下らん。それに何故私がそんなクズ共の敵討ち等をせねばならん。ソイツ等がどうなるうが私の知った事ではない」

『おいおい、こんな奴等でも一応はお前と同じAクラスの生徒だろ？ それに代表であるアンタがそんな事を言っちゃあ……』

「私は敗者に一切の情けはかけん」

『……………あつそ』

どうやらコイツはかなりの実力主義者であり、敗者には物凄く厳しいみたいだ。

『って話が脱線してるじゃん！』

「貴様が変な事を聞くからであろう、異物」

『……………突っ込みどうも。……………ん？』

白夜に突っ込まれた私であったが、妙な呼び方をされた事に私は顔を顰めた。

『おい白夜、何だその呼び方は？』

「異物こそ馴れ馴れしく私を名前で呼ぶな」

『そんな事はどうでもいいだろうが!! 私には“さすらいの旅人”と言う名前があつて決して異物では……』

私が白夜に名前の呼び方を訂正しようとしたが……。

「そんなふざけた名前を名乗っている貴様には相応しい呼び方であろう。それに貴様……普通の人間ではないだろうか？」

『……………』

白夜の指摘に私は無言となった。

「ふざけた力を持っている上、あの身体能力だ。とても人間が持つ力では無いと思うが？」

『……………確かに、お前の言うとおり私は異物同然の存在だ。そう捉えても可笑しくは無い。しかし分らん、お前は私が能力を使つたり撃退する所は見えていない筈なのに……何処で知つた?』

「貴様が雌豚と対峙している時に見させてもらった……偶然だがな」

『……………あの時か』

Dクラスの清水美春と対峙した事を言っているのである。どうやらその時、白夜が私の戦いを見て興味を抱いたのかもしれない。

『神に選ばれし者である白夜には、さぞかしつまらん戦いだっただろう? お前だつてその気になれば、あんな精神異常者を簡単に……』

……』

「雌豚はどうでもいい、私は貴様に興味を抱いたのだ。私と互角の力……いやそれ以上の力を持っているかもしれない貴様に」

『……………（やっぱり）』

当たって欲しくない予想が見事に当たってしまった。

「あの時は高揚したぞ……貴様を倒せば私は更なる高みへと登る事が出来る、とな」

『……………』

「思わず貴様と一戦交えようかと思った位だ。今でも貴様と戦いたいとウズウズしているが」

『……………やるんだったら私は構わないよ（スッ）』

私が居合いの構えをすると……。

「私もそうしたい所だが、生憎こちらは授業があるのでな。それは次の機会にとっておこう」

『……………そう（スッ）』

白夜がやらないと言ったので構えを解いた……しかし白夜は今すぐにでも闘いたいかのような顔になっていたが。

『ではいずれ貴様と戦う為の場所を用意しておこう。その時は……』

私に挑んだ事を心の底から後悔させてやる』

「ふっ、異物こそ私を失望させるなよ」

『…………… 白夜のご期待に添えるかどうかは分からんが』

「それと…………… 私が倒すまで誰かに負けたら許さんぞ。貴様は私の更なる高みへと登る通過点なのだから」

『…………… 知るか（ピシュツ！）』

そうして私は姿を消し……………。

「くくっ…………… 奴と闘う際には技を全て奪い取り、屈服させてくれる」

白夜は滅多に見ない笑みを浮かべて自分の教室へと戻った…………… 倒れている常夏コンビを放置して。

抹殺物語 ？（後書き）

以上、抹殺物語でした~~~~!!!!

次回からはアッチの方の話になりますのでお楽しみに!!!!

秋雨さんは分かりますよねえ？



寸劇劇場 文月BASARA (9/27 内容を少々追加しました) (前書き

今回は寸劇ですので、凄く短いので御了承下さい。

寸劇劇場 文月BASARA (9/27 内容を少々追加しました)

寸劇? 屋上での戦い

キャスト

伊達政宗役 久遠光一

片倉小十郎役 吉井明久

ザコ役 FFF団

屋上でFFF団に囲まれた明久と光一。

「光一、ここは僕が道を開くから、その隙に脱出を！」

「ふん! つまんない事を言うなよ明久！」

光一は明久の気遣いを鼻で笑い……

「LETS SHOW THEM! HA!」

一人突っ走って行き、FFF団を倒していくのであった。

「全く……しょうがないなあ光一は(ダッ)」

明久も光一に続いてFFF団を倒す。

「そらあ（バンッ！ バンッ！）甘い！（ババンッ！）」

「ぐあっ！！」

「くそう！！」

FFF団を次々と打ち倒していく光一だったが……。

「久遠！ その首もらったあ！！（ビュオッ！）」

「！！」

背後からFFF団の一人がバットを使って光一をぶん殴ろうとしていたが……。

「どりゃあ！！（ビュオ！）」

「おぶっ！」

「明久……」

明久が光一の背後から襲おうとしたFFF団の一人を持っている木刀で蹴散らした。

「油断しちゃ駄目だよ！ 光一！」

「何だ？ 俺の背中を明久が持つんじゃないのか？」

「勿論だよ！！（ビュオ！）僕が光一の背中を守るって既に決めて

いるんだから!!」

「フツ! よく言った明久!」

明久の言葉に嬉しくなった光一は明久と一緒に構える。

「付いて来い! 怪我するんじゃないぞ!!」

「了解!!」

明久と光一は持っている武器を構えて……。

「せいやああ!!!!」

「くああああ!!!!」

光一と明久の渾身の一撃でFFF団の半分を倒し……。

「でやああああ!!!! (ダダダダダダ~~~~!!!!)」

そして光一と明久は残ったFFF団を倒す為に同時に突進して行った。

寸劇? 3年の試召戦争

キャスト

毛利元就役 大神白夜

兵士役 常夏コンビ、高城率いるAクラス生徒達

参謀役 小暮葵

3 - Aクラスにて……。

「Bクラスの前衛を始末して来いと命じた筈だぞ？ 何故そんなに  
梃子摺っている？」

「そ…それが……連中が思いのほかしぶとくて……」

「アイツ等が集団で攻めてくるから……」

試召戦争にて大神白夜が常夏コンビに前衛を倒してくるように指示  
していたが、常夏コンビはAクラスに戻って現状を報告していた。

「使えない奴等だ……もういい（スッ）」

「え？（ドゴツ！）ぐあっ！」

「常村！ おい大神！ 何で（バキッ！）ゴフッ！！」

「高城、その無能共をつまみ出せ」

白夜は常夏コンビを気絶させた後、高城と呼ばれている生徒に廊下  
に放り出すように指示する。指示された高城は他の生徒と一緒に気  
絶している常夏コンビを運んで廊下に放置した。

「お前達もよく覚えておけ。誰であろうと使えない奴は、全て切り捨てる」

「……………」

白夜が威圧感を放ちながら教室にいる生徒全員に言い放つと、生徒達は白夜に怯えるかのように黙って佇んでいた。

「クズ共が使えないなら、私自ら出る」

「代表自らですか？」

「ああ、使えん前線部隊……いや、Bクラス如きに梃子摺るクズ共には制裁をする必要があるからな」

白夜の隣にいる小暮葵が心配そうに問うが、当の本人は問題無いと言わんばかりに教室から出る。

そして白夜は前線に立ち……。

「よく見ておけクズ共、これが神に選ばれた私の戦いだ。サモン！」

「う……うわああ……！！！！」

「ま……待ってくれ大神！！俺達は味方だ……！！」

白夜は召喚獣を出してBクラス生徒、味方であるAクラス生徒の召喚獣を薙ぎ倒した。

AクラスとBクラスの前衛を纏めて始末した白夜は単身、Bクラスへと向かっている。

「さつさと来るがいいクス共。貴様等が何を考えた所で、私の前では無意味だ」

「……くそっ！！ 中堅部隊！！ 全員突撃っ！！！！」

「「「「うおおおっ！！！！！！！！！！」」」」

単身で来る白夜にBクラス生徒達は、どうやって倒そうかと悩んでいたが、やぶれかぶれになって、召喚獣全てを一斉に白夜の召喚獣に襲い掛かるが……。

「ふんっ、下らん」

その台詞と共に、白夜の召喚獣が手を突き出して、操っている宝剣が薙ぎ払うかのように召喚獣を吹き飛ばした。

前方のBクラス生徒の召喚獣を倒した白夜であったが……。

「「「「うっちもいるぞっ！！！！！！！！！！」」」」

「「「「うおおおっ！！！！！！！！！！」」」」

「気付かないでも思ったか。消える」

背後からも襲い掛かって来た事に、白夜は何の焦りも出さない。白

夜の召喚獣は再び手を突き出し、背後から来ている召喚獣達を宝剣で吹き飛ばす。

「所詮、貴様等はその程度の存在だったという事だ。さっさと失せろ」

「くっ………だが、これで時間は稼げた！！ 遠距離部隊！！ 構えろ！！」

「何？」

中堅部隊長の一人が号令を上げると、後ろからは銃器や弓、魔法タイプの召喚獣達が白夜の召喚獣に狙いを定めている。

「そんな連中で私を倒せるとでも思っているのか？」

「いくらお前でも一斉に攻撃をされたらタダでは済むまい！！ 放て〜〜〜！！！！」

遠距離タイプの召喚獣達は一斉に白夜の召喚獣に攻撃をしてきた。

しかし……。

「まだ無駄だと言う事が分からないみたいだな」

白夜の召喚獣の周りにある全ての宝剣が一斉に振ると、強風が襲うかのような突風を放ち、白夜の召喚獣に向かってきた弾丸や矢や魔法が全て撥ね返って、遠距離タイプの召喚獣と中堅部隊長の召喚獣がやれてしまった。



「ば…ばかな…全て跳ね返したと…!!」

「邪魔だ、クズはさっさと補習室にでも行ってる(ドゴッ)」

「ガハッ!」

「……」

邪魔だと言わんばかりに中堅部隊長を裏拳で黙らせて進むと、遠距離部隊は白夜に攻撃をされたくない為か、自ら補習室へと向かった。

そして……。

「さて、残るは貴様等だけだな」

Bクラスに着いた白夜は怯えているBクラス代表と近衛部隊に顔を向ける。

「な…何故だ!? 貴様は弟によって弱体化した筈ではなかったのか!?」

「………言いたい事はそれだけか? ならばさっさと消える」

白夜の召喚獣が手を突き出すと、全ての宝剣が一齐にBクラス代表と近衛部隊の召喚獣に止めを差して勝利したのであった。

「所詮は有象無象のアリ共だったな」

「流石ですね、単身でBクラスを圧倒するとは」

「あんな連中に梃子搦る貴様等の方が、どうかしていると思うがな」

「……………それは申し訳ありません」

白夜の辛辣な言葉に小暮はすぐに謝るが、当の本人の白夜はあまり気にしていない。

「まあいい、次の試召戦争で相応の結果を見せれば、私は何も言わ  
ん」

「と仰いますと、再び代表の弟さんと闘っておつもりですか？」

「ああ。だが今はまだ、その時ではない。時期が来たら仕掛ける…  
…（それと同時に、別の目的もな……………）」

「どうかなさいましたか？」

「……………いや、何でもなし。小暮、戦後の後始末は貴様に任せる」

「承知しました」

「（光一を倒した後は……………異物、次は貴様だ）」

寸劇劇場 文月BASARA (9/27 内容を少々追加しました) (後書き

寸劇？は戦国BASARA弐 伊達政宗のオープニング

寸劇？は毛利元就のオープニングと豊臣秀吉のオープニングでした

{ } ! ! ! ! !

寸劇劇場 文月BASARA ? (前書き)

今回は短めの完全ギャグです。

寸劇劇場 文月BASARA ?

寸劇? 模擬試召戦争にて

キャスト

前田利光役 坂本雄二

まつ役 霧島翔子

エキストラ 久遠光一・吉井明久・鉄人

Fクラス前の廊下で模擬試召戦争をしている明久と光一であった。

「翔子〜!」

「……雄二!」

雄二と霧島が夫婦仲良く手を握っており……。

「俺達二人を邪魔する奴等は!!」

「……馬に蹴られて地獄に落ちなさい」

ダンスをしながら台詞を言い……。

「我等!最強夫婦!!」

霧島をお姫様だっこして、揃って台詞を合わせた……何故か2人の背後にはハートが浮かんでいたが。

「……………やれやれ、随分と幸せな夫婦だな」

「……………見てるこっちが恥ずかしいよ」

「……………坂本と霧島、イチャ付くのは試召戦争が終わった後にしてくれ」

光一と明久は坂本夫婦の登場の仕方に少し引いていると、審判である鉄人が注意する。

「なあお二人さん？ 模擬試召戦争中なんだが、攻撃していいか？」

光一が2人に声を掛けても…………。

「…………雄二、貴方の体はとても遅いから、すぐに抱きしめて欲しくなっちゃう」

「そうか？ 俺は翔子を見るとすぐに抱きたくなるぞ。その綺麗な肌や髪を見るとな…………」

「…………（ポツ）もう、雄二はエッチなんだから」

「ははは、しょうがねえだろ。翔子が綺麗なんだから」

互いに惚気ていた。

「……………本当に幸せな奴等だな」

「……………光一、雄二と霧島さんは完全に二人だけの世界に入っているから、もう止めにしない？」

「……………そうだな。と言う訳で鉄人、俺と明久は補習を受けるから棄権する。」

雄二と霧島の余りに夫婦愛に模擬試召戦争を放棄して光一は鉄人に言うが……………。

「……………はあっ……………今回は特別に補習をしなくても構わん。俺もあの2人には付いて行けん」

鉄人は光一の提案を受け入れて召喚フィールドを解除して去って行った。

「流石の鉄人も嫌になってたみたいだな」

「あ……………もう早く行こうよ光一。何だか砂吐きそうになってきた」

「ああ、行こう」

そして光一と明久も去って行く。

「ハッハッハッハッハ、翔子」

「……………雄二」

雄二と霧島は未だにラブラブオーラを放ちながらイチャイチャしま

くっっていた。

寸劇？ 寸劇？の続き

キャスト

ザビー役 さすらいの旅人

前田夫婦役 坂本夫婦

サンデー毛利役 大神白夜

チエスト島津 島津さやか

『 最高級のお肉ちゃん達もうちよっと待っててね 』

文月学園の調理室にて、私はステーキを焼く為の準備をしていた。

と、そんな時……。

「よし、今の内だ翔子（サツ！）」

「……うん（サツ）」



坂本夫婦は私が準備をしている最中に肉が入っている箱を持ち逃げして行った。そんな事が起きている事を知らない私は準備を終えて肉が置いてある方へと近寄る。

『さあ～お肉ちゃん達～準備が……あれ？』

肉が無い事に気付き、坂本夫婦が箱を持って行きながら調理室から出るのを見たので……。

『あ~~~~~！ 私の好物があ~~~~！ 待て~~~~！ 雄二と霧島！』

「翔子、逃げるぞ！」

「……うん！」

雄二と霧島は全速力で逃げ出した。

『「うら~~~~！！！！ 返しやがれ~~~~！！！！」』

「翔子、全力で逃げないとアイツにお仕置きをされるぞ！」

『逃げても隠れても無駄だ！お前達は袋の鼠だ！！』』

私が追い掛けている最中、2人は颯爽と逃げていたが……。

「私が間違っていました旅人様……ん？ お前達か。私はオールマイティ白夜！ 跪け！！」

目の前には私に懺悔している白夜が雄二たちに気付いて、名乗りを上げて対峙した。

『よし！ 戦略情報部隊長 兼 攻撃部隊長、オールマイティ・白夜！ その二人をひっ捕らえる！！』

「私こそが戦略情報部隊長 兼 攻撃部隊長オールマイティ。お前達、観念して大人しくしろ！！」

「な…何で大神白夜が！？ つてか光一から聞いた話とは全然キャラが違うぞ！？」

「……久遠のお兄さんが何故？」

白夜の登場に雄二と霧島は大きく戸惑った。

「私は旅人様に倫理を教えられた。今までの愚かな行為の償いの為に、私は旅人様に尽くす！！」

「キャラが変わり過ぎにも程があるぞ！？」

「……雄二、今はそんな事を言っている場合じゃない。旅人さんがもう少しで来る……！！」

『さあオールマイティ！ お前の力を私に見せてみる！！』

「心得ました！ さあお前達、旅人様が食べようとしている肉を今すぐ返すのだ！」

白夜は2人に襲い掛かったが……。

「今はテメエに構ってられないんだよ!!」

「……それじゃあ」

「うっ……私の名は……オールマイティ……」

雄二と霧島のコンビネーションですぐに倒されてしまった。

『おいオールマイティ！ まだ使命を終えていないぞ！』

オールマイティ白夜の所に着いた私は介抱するが、彼は虫の息状態である。

「も…申し訳ありません……旅人様……（ガクッ!）」

『チッ！ やはり洗脳しては本来の力が出ないか!』

完全に気絶してしまった白夜を見て、洗脳したのは失敗だった気付く私であった。

『まあいい、なら次だ!!』

私が意気込んでいる最中に、雄二と霧島はずっと逃げていたが……。

「ああ〜旅人様〜。旅人様は偉大です〜そして貴方達も旅人様に教えられて下さ〜い」

雄二と霧島の目の前に現れたのはミニスカ巫女服を纏った島津さやかだった。

『お色気部隊長、セクシー島津！ その夫婦を捕まえる！！』

「こら〜！ 旅人様の大好物を早く返しなさい！」

「次はアンタかよ！？」

「あたしは切り込み隊長をやっています〜す」

「アンタも旅人に洗脳されているのか！？」

島津の行動に雄二が操られていると聞くが……。

「あたしは面白そうだったから、旅人教に入っているだけだよ。  
と言う訳で、旅人様のお肉を返してね〜」

本人はノーと言いながら坂本夫婦に襲い掛かってきた。

「…………お腹を空かせた翔二と雄子が待っている。何としてもここは  
逃げ切る！」

「あれ？（ドンッ！）うっ！」

霧島の渾身の一撃でセクシー島津は倒されてしまった。

「ああ…………見える…………カメラを持った天使が…………」

『え？ もう負けたの？…………そりゃないよ、さやかちゃん。折  
角報酬として、コスプレ衣装を進呈したのに』

島津があっさりやられてしまった事に、私は涙を流してガツクリとしている。

雄二と霧島はその隙に逃げているが……。

『私の可愛いお肉たち……！！ 返事をしてくれ……！ 米沢！  
松坂！ 神戸！』

「ってこれ全部高級肉かよ!？」

「……やはり私たちの目に狂いは無かった」

私の叫びに雄二は一人突っ込みをし、霧島は思った通りと言わんばかりの表情をしていた。

「よし！ 玄関に着けばこっちのもんだ!」

「……待ってて翔二と雄子、もうすぐで……」

2人は逃げ切ったと思っていたが……。

『（ピシュッ!）待ちやがれ!』

「げっ!」

「……逃げ切れたと思ったのに」

私が突然姿を現して立ち塞がっていた。

『やっと会えたな、ってか初めから転送して先回りすれば良かった

よ。まあそんな事より坂本夫人。それ返してくれたら、いい物あげるよ?。」

「……そんな言い方しても渡さない!」

「旅人! 俺達夫婦の力を見せてやるぜ!」

「ハッ! この私に勝てると思うなよ!! (チャキッ!)」

私は刀を持って応戦したが……。

「グハッ! ……くそう、二人の揺るがない愛の絆の前では勝てないか(ガクッ)」

「違うな旅人、俺達夫婦が最強だ!」

「……私たちの前に敵はいない」

坂本夫婦には勝つ事が出来なかった……と言っても態と負けたのだが。

「さあ翔子、息子と娘が待っているから早く帰るぞ」

「……うん」

こうして雄二と霧島は私が食べようとした肉を持って家に帰ったとさ。

## 江藤愛奈 光一達に会う

文月学園が昼休みの最中……

「ねえ光一、初めて鳥の唐揚げを作ってみただけど……どうかな？」

「どれどれ（パクツ…モグモグ）……美味しいじゃないか」

「ほ…ホントに？」

「本当だ。優子は料理の才能があるよ」

「……ありがとう」

Aクラスの教室で、光一が優子の手作り弁当を食べ……。

「ねえ光一君、ボクの作った卵サンドも食べてみてくれない？」

「ああ、いいぞ（モグモグ）……美味しいな、愛子も料理の才能があるんじゃないか？」

「初めて作ってみただけど、上手く出来てよかったよ」

工藤の手作りサンドを食べていた。

「愛子は凄いわね。卵サンド以外にも他のサンドがあるけど、全部一人で作ったんでしょ？」

「ボクは優子が凄いと思うよ。そんなに手の込んだおかずを作る何て羨ましい」

「俺としてはどっちも凄いやだな」

とてもラブラブな雰囲気を出している3人である。

「……雄二、私達も久遠達に負けない」

「待て！ お前は俺に何を食わせようとしている！？」

「……普通の卵焼き」

「そんな毒々しい紫色した卵焼きがどこが普通だ！？ 何か入っていると思えんぞ！？」

光一達の前方には、雄二を椅子に縛り付けて卵焼きを食べさせようとしている霧島がいた。

「光一達は幸せそうだね、秀吉」

「そうじゃのう、じゃが雄二の方は少々危険な感じがするぞい」

「あんなゴリラはどうでもいいよ。さあ秀吉、僕達も早く食べようよ」

「う…うむ。あ…明久よ、ワシも弁当を作ってみたのじゃが……（カポッ）どうかのう？」

「秀吉が？ どれどれ……へえ、美味しそうじゃない」



こっちもこっちでラブラブな雰囲気を出している明久と秀吉であった。

「ああ！ 吉井君が木下君に弁当をお食べさせている！ 僕も一緒に吉井君と……（パンツ！）うわっ！」

明久に近づこうとする久保であったが、光一がすぐに銃で威嚇射撃をされるので近づくことが出来なかった。

「おい久保、いつまでも見苦しい真似をするな。お前は明久にフラれたも同然なんだからいい加減諦めろ」

「くっ！！ おのれ久遠光一！！！」

光一の台詞に久保は怨念を込めた視線を光一に送っている。

とまあ、そんな現状に……。

『失礼しまゝす！！』

私が出来て来た。

「ん？ 旅人さんか」

『やつほゝ光一。随分と幸せそうなムードだねえ』

「そうか？」

『うんうん。木下さんと工藤さんの愛情が込められたお弁当を食べ

ている君はとても幸せ者だよ』

「そりゃあ、優子と愛子は俺の大事な恋人だからな」

「（／／／／／／／／／／）」

『あらら坂本夫婦にも負けていないほどのラブラブだねえ』

私が光一達を茶化していると……。

「誰が夫婦だ旅人！！俺はまだ独身だ！！」

雄二が猛烈な勢いで抗議した。

『もう夫婦同然だろ？坂本とはあんなに激しいことをしておいて』

「……旅人さん、そんな恥ずかしい事を言わないで（ポツ）」

「勝手に翔子を籍に入れるな！！ってか、てめえがそうさせたんだろっが！！」

『そうそう光一、君に会わせたい女の子がいるんだよ』

「俺に？」

「無視してんじゃねえ〜！！！！」

叫んでいる雄二を無視して私は本題に入る。

「旅人さん、光一に会わせたい女の子って？」

「一体誰なのじゃ？」

『まあ待ちな二人とも。それでは……愛奈ちゃん！ 入って……！』

「は……い」

私が叫ぶとドアから一人の文月学園の制服を着た女の子が入ってきた。

「初めまして……！ 旅人さんに呼ばれた江藤愛奈です」

「あ……愛子！？」

「愛子がもう一人！？」

「ボクが目の前にいる！？」

「え！？ 工藤さん！？」

「く……工藤の生き写しじゃ！？」

愛奈の顔を見て驚いている光一達の他に、霧島や雄二や久保に他の生徒も愛奈を見て驚いている。

『フッフッフッフッフ……見事に驚いてくれましたねえ』

「旅人さん、あの人がボクに似ている工藤さんかな？」

『そつだよ愛奈ちゃん。君の黒髪以外はそっくりだよ』

胸は別だけどねと私は内心付け加える。

「工藤によく似ているな……けど胸が全然違う」

「……雄二、旅人さんが連れてきた女の子を見ちゃダメ（バチバチ！）」

「ま……待て翔子！俺はただ単に（バチバチ！）ギヤアアアア……！！！！！！」

愛奈を見ていた雄二は霧島によって（光一特製）スタンガンでの制裁を喰らっていた。

『雄二はどうでもいいとして……っつかアンタ等、いつまで呆然としてるの？』

「「「「「……………」」」」」」

『似すぎてて声も出ないと言った所か？』

「面白い顔になってますねえ」

『では元に戻すために……愛奈ちゃん、光一に抱き付け』

「了解です えいっ！（ギユウツ！）」

「！！！！」

愛奈が光一を抱きしめると、光一は漸く正気に戻ったが……。

「むぐむぐむぐー!!(苦しいから離れてくれ!!)」

「ちょ…ちょっと貴方! 光一に何してるのよ!？」

「ちょっとくボク達の光一君から離れてくれない？」

「そんな怖い顔をしないでよ　ボクはただ久遠君にスキンシップをしているだけなんだから」

優子と工藤が抗議していたが、愛奈は軽く流していた。

「むぐむぐ……………」

『おい愛奈ちゃん、早く光一を離さないと不味いよ?』

「大丈夫ですよ。それに久遠君だって嫌なら自分から離れてくれると思いますし」

『いや…………光一が窒息寸前だよ?』

「え?…………く…久遠君!？」

「……………(ピクッ…ピクッ…………)」

「…光一!？」

「…しっかりするのじゃ!?!」

愛奈の大きな胸に顔を当てられていた為、光一が酸欠状態になっていた。

5分後

「あ~~~~死ぬかと思った」

光一を何とか回復して思いっきり深呼吸をしている。

「ゴ…ゴメンね久遠君。ちょっとやり過ぎちゃった」

『全く、愛奈ちゃんの胸で顔を当てられて窒息するとはな……』

「旅人さんがその人に変な事をやらせるからでしょ!？」

「優子、そんな怒らずに……」

優子が私に怒鳴っているのを工藤が宥めた。

「…………でもちよつと光一が羨ましかったな(ボソツ)」

「ムッ!(ギユムツ!)」

「ひ…ひへよひ! いひゃいひゃいひゃい!」

明久の小声が聞こえたのか、秀吉は明久の頬を思いっきり抓ると、

明久は物凄く痛そうな顔をしている。

『明久と秀吉の痴話喧嘩はどうでもいいとして……光一、お前少し体力付けなよ。愛奈ちゃんに抱きしめられて、何の抵抗も出来ないのを見てて少し情けなかったぞ』

「ほっとけ！ 俺だって出来るならそうしたいんだよ！！」

私の発言に光一は何とかしたいように言ってるが、読者もご存知の通り虚弱体質な為に鍛えようにも無理だ。

「思ったんですけど、久遠君ってあんまり力ありませんよね？ 凄い人だっけって聞きましたけど……」

『光一は武器を持つと凄く強いが、運動能力は全然無いんだ。その所為でエッチも1回限り何だよ』

「……………」

「……………」

痛い所を付かれた光一は反論出来なく、優子と工藤もそれが事実な為にフォロワー出来なかった。

「ま……まあ人それぞれだから……久遠君、頑張ってね」

「……………」

「あははは……………」

光一の気の無い返事に愛奈は苦笑しか出来なかった。

「所で旅人さん、アンタは何で愛子似である江藤を俺に会わせただ？」

『特に深い意味は無いよ。愛奈ちゃんが過激派筆頭である光一がどういう人か見てみたいと言って、学園に連れて来たんだ』

「ふうん……これで分かったら江藤？俺はこんなに体力の無いダメ人間だって事が」

「ちょっと光一、そんなに自分を卑下しないでよ」

「光一君には良い所が一杯あるんだから」

自身を卑下する光一に優子と工藤が……。

「光一は優しくしてアタシ達を大切にしてくれるし……」

「いざと言う時にはボク達を護ってくれて頼もしいし」

「それに……エッチだって凄く（ボソボソ）」

「ボク達を気持ちよくしてくれるテクニシャンだし」

「お……おい二人とも、何もそこまで言わなくても……」

光一の良い所を言っていた。

『だそうだよ愛奈ちゃん』



「ふうん、なるほどね」（旅人さんが言ったとおりの人だね）

光一を良い所を言っている優子と工藤に愛奈は微笑ましそうに見ている。

「おい2人とも、江藤が呆れているぞ」

「だって光一が……」

「恋人として黙っていられなくて……」

「それに例え誰に何を言われても俺は……（チュツ×2）二人を大事にするからな」

「（//////////）」

光一は優子と工藤に頬にキスをして、2人は顔を赤らめた。

『さて愛奈ちゃん、3人がイチャ付き始めたから私達は失礼しよう』

「そうですね、邪魔しちゃ悪いですから……それに」

愛奈が明久達の方を見ると……

「僕が悪かったよ秀吉、どうか機嫌を直してくれないかな？」

「フンッ！ 江藤の大きな胸に見とれる明久なんか知らんのじゃ！（プイッ）」

「じゃあ僕が秀吉一筋だつて事を証明するから（スツ）」

「ん？ 明久、何を？ …… ンンン」

明久が秀吉の顎をクイツと持ち上げてキスをした。

「んん……………これで分かったかな？」

「（ノノノノノノノノノノ……………ずるいのじゃ、明久はいつもそうやってワシを……………」

そして明久と秀吉もイチヤ付き始める。

『うわ～～あっちもイチヤ付いているよ』

「他の生徒がいるつて事を全く気にしていませんよね？」

『まあ明久と秀吉を応援しているから微笑ましく見ているからね。それより愛奈ちゃん、あっち見てご覧』

「え？ ………………うわあ……………」

愛奈が私が指した方向を見ると……………

「よし……いい……君……………が……………きの……した……君と……………キス……………して……………いる……………」

久保が壊れたロボットの様に声が途切れ途切れになっていた。

「……………アレ何なんですか？」

『久保をアレ呼ばわりか……実はね（ゴニョゴニョ）』

私は愛奈に久保の事を耳打ちして教える。

「ふう〜ん、あの人って実は吉井君の事が好きなんですか。まあどうでもいいや」

『おや？ 愛奈ちゃんにしてはちょっと珍しい発言なこと』

「ボク、見苦しい人はあんまり好きじゃ無いんで」

『アハハハ……』

バツサリと切る愛奈に私は苦笑した。

『それじゃあ失礼しますか』

「そうですね」

『それでは皆さん！これで失礼します！（パチンツッ！）』

「また会いましょう〜！！」（ピシュツッ！）

私が指を鳴らすと、私と愛奈が姿を消した。

寸劇劇場 文月BASARA ? (前書き)

警告 今回は白夜が完全にキャラが変わっていますのでご注意ください。  
い。

寸劇劇場 文月BASARA ?

寸劇? オールマイティ白夜誕生編

キャスト

ザビー役 さすらいの旅人

ザビー教の教徒役 FFF団

サンデー毛利役 大神白夜

やられ役 常夏コンビと3-A生徒達

3-Aの教室にて……

バタンツ!

『やつほ〜! 皆さんお元気ですか〜!?!?』

私が入って早々に大きな声で挨拶をしていた。

「げ! またアイツだ!!」

「何である野郎がここに来ているんだよ!?!」

常夏コンビは大変嫌そうな顔である。

『ザココンビはどうでもいいから、アッチ行ってね』

「「ぶざけんなよ!!」「」

『用があるのは白夜なんだよねえ〜』

「何の用だ異物？ 私は忙しい。さっさと失せるんだな」

白夜も同様に私に対して大変嫌そうな顔をしていた。

『そんな事を言わずに 今日ねえ〜君にいい話を持ってきたんだよ〜』

「話だと？」

『そう 私は配下を集めていて万能な人を募集しているんだよ！だから君を私の配下に……』

「失せる異物。私はそんな物に興味は無い」

すぐに断る白夜であったが……。

『そう言うだろうと思ったから、強制的に私と戦ってもらおうよフィールド展開!!』

「何!？」

私はすぐに召喚展開フィールドを展開して模擬試召戦争を始めると、白夜は驚愕する。

『さあ、白夜、私が勝ったら配下になってもらうよ、出て来い！我が同士の捨て駒FFF団！』

「……………うお……………！！！！」「……………」

「お…おい大神！何か変な集団が来たぞ！？」

「慌てるな、貴様等はさつさと防衛戦を展開しろ。しかし愚かだな異物、実戦ならいざ知らず模擬試召戦争を挑むとは」

『フッフッフ……さあ、君は私の配下になるがいい……………！！！！』

私は刀を持ち、洗脳しているFFF団は3-A生徒達相手に模擬試召戦争を始めた。

5分後

「そんな落ちこぼれのクズ共を率いた所で勝てると本気で思っていたか？」

『あら……………役に立たない連中だね……………』

FFF団がAクラス生徒達に瞬殺され、鉄人に補習室へと連れて行かれた。そして私一人だけとなりAクラス生徒達に囲まれている状態である。

「後は貴様だけだ異物。神に選ばれし者である私に試召戦争で挑んだ事を後悔させてやるう」

「覚悟しやがれ！！ てめえにはこの間の恨みがあるから甚振ってやるぜ！！ ぎゃはははははは！！！！」

「泣いて謝るなら今の内だぞ！！ ぎゃはははははは！！！！」

「常村と夏川、貴様等は黙れ。異物と話しているのは私だ、貴様等ではない」

「……………」

白夜は常夏コンビの不快な笑いをすぐに黙らせると、2人は大人しくなった。

『（フム………… 予想通り、白夜の召喚獣以外は全部出ているな）』

「（異物の事だから何か考えているだろうが…………）さて異物、貴様はこれをどうやって逃げ切る？ 私に跪くなら今の内だぞ？」

内心では警戒している白夜であるが、余裕な顔をして私を見ていると…………。

『フッフッフッフ…この私を…甘く見るなよ 　ここにいる召喚獣達！ 私の命令に従って同士討ちしろ！』

そして召喚獣達はすぐに同士討ちを始めた。



「な…何だ！？ どうして召喚獣が同士討ちを！？」

「どう言う事だ！？」

「ちょっと！ 何しているのよ！？」

白夜以外のAクラス生徒達はパニックになっており、召喚獣の点数はゼロになって鉄人に補習室へと連行された。

『さてと、漸く二人つきりになったねえ〜白夜』

「……………成程な。異物、召喚フィールドに細工を施したな？」

『はて、何の事かな？』

「惚けるな。貴様が此方の連中の召喚獣が全部出たのを確認した後  
に同士討ちをしると命令をした。自分しか動かせない召喚獣が異物の  
命令に従ったと言う事は、このフィールドに貴様が細工を施した  
としか考えられん」

白夜の推理は的確であった。

『あれだけのやり取りで気付くとは…………流石は神童と呼ばれるだけの  
事がありますな〜。他の連中だったら何が何だか分からない顔になっ  
ていたのにねえ〜』

「私をクズ共と一緒にするなよ異物。貴様の存在自体が異物だから、  
こう言う事は造作も無いのだろう？」

『ハッハッハッハッハ！ まあ間違っではないねえ〜。言ってお

くけど、さっきの命令権は一回限りだけでね。同じ手はもう使えないから』

「なら丁度良い、貴様は私自ら屠ってくれる！ サモン！」

私の言っている事が嘘ではないと分かった白夜は、すぐに召喚したが……。

《炎の刀、一！》

《氷の刀、二！》

《雷の刀、三！》

《風の刀、四！》

《闇の刀、五！》

《《《《《5人揃って！ 文月最強連隊、五本刀！！》》》》》

それぞれが、色が違う鎧と剣を装備した5人の白夜がポーズを決めて参上したのであった。当然、その召喚獣に白夜は激昂する。

「何だこれは！？ 異物！！ 私の召喚獣に何をした！？」

『アハハハハハハハハハ！！！！ あゝ面白え〜〜〜〜！！！！ ダア〜〜ハハハハハハハハ！！！！！！』

憤慨する白夜を無視して、私は床に膝を付いて腹を抱えながら大笑いする。

《主よ！　ここは我々が！》

《敵を屠りますので！》

《どうかそこで！》

《見物してて下さい！》

《さあ行くぞ！　我等五本刀の力を異物に見せてやるのだ！》

「止める！！　私はそんな命令を下していない！！　さっさと下がらんか！！！！」

言いながらポーズをする白夜の姿をした五本刀に下がるように言ったが無視された。

『アハハハハハ！！　い…言い忘れていたけど、私の命令権が無くなった次は…くくく…とあるゲームキャラに変身して、召喚獣が意思を持つようにプログラムしているから…ぷくくく…あはははははは！！！！　だ…ダメだ、五本刀の白夜を見ると…ぷぷぷ……笑いが…あはははははははははは！！！！』

内心は光一もここに連れてくればよかったと思う私に白夜は更に激昂する。

「異物~~~~~！！！！！！！！！！」

《《《主を侮辱するのは許さん！！　喰らえ！！　文月最強砲

！！！！》》》

「止めんか貴様等~~~~!!!!!!」

何時の間にか大きな大砲を出して私をロックオンしていた五本刀だ  
つたが……

ドツカ~~~~ン!!!!

《《《《《グアツ!! やられた~~~~!!!!!!》》》》》

『ア~~~~ハハハハハハハハハ!!!!』

大砲が爆発して無様に自滅した五本剣に私はさらに大笑いした。

「~~~~~!!!!!!!(ブチツ!!!!) 異物!!! 貴様は絶対に許さ  
ん!!!!!!」

今度は白夜が私に襲い掛かってきて攻撃を仕掛けたが……。

『甘いよ (スッ)』

「なっ!?(トンツ)」

私はすぐにかわして、白夜の額に人差し指を当てた。

「か…体が動かん……異物! 貴様何をした!!」

『フフフフ~~~~』

そんな事より白夜

私に敗北したから配

下になって貰うよ さあ！ ペンを持って、配下になる倫理の書類にサインサイン！』

「じょ…冗談じゃない！！ 誰が異物の配下になるか！！ な…何故私の腕が勝手に……」

白夜の腕が勝手に私が出した書類にサインをしている。

『フフフフフフ…それはねえ、君が心から私の配下になりたいからなんだよ』

「ふざけるな！！ 貴様がそうさせているだけだろ！！ ……………あ……………」

白夜はサインした後、急に大人しくなった。

「フツ…倫理とは何であろうな」

『フフフフフ…あと一息だ……………』

10分後

「私はオールマイティ白夜！！ 旅人様！ 私に倫理を教えてください！！！」

『お〜〜！ 私の素晴らしき配下、オールマイティ白夜！ 君に倫

理を教えてあげるよ！」

白夜は完全に私の配下となった。

「はい！」

『それではオールマイティ！ 今から倫理の授業を始めるよ！』

「心得ました旅人様！！」

こうしてオールマイティ白夜が誕生したのであった。

寸劇？ オールマイティ白夜のその後

キャスト

かすが役 木下優子

北条氏政役 小山友香

本願寺顕如役 中林宏美

「久遠が風邪で弱まっているって情報があったわ！！ やるなら今よー！！」

「そうね！！」

Cクラス代表 小山とEクラス代表 中林が屋上にいる光一を狙おうとしていたが……。

「行かせはしない！」

「き…木下さん!？」

「なんで此処に!？」

優子が階段の前で小山と中林を待ち構えていた。

「あたしは光一の剣、光一に仇名す敵は全て……倒す！」

「木下さん！ 貴方はどうしてあんな奴の味方をするの!？」

「あんな危険人物を庇ってもアンタの為にならないわよ!？」

「誰が何と言おうとアタシは……戦う！ サモン!！」

優子が出した召喚獣は……戦国BASARAのキャラであるくの一  
“ かすが ” の姿をした優子であった。

「何なのよそれ!？ 貴方の召喚獣とは全然違うわよ!！」

「って言うか、何でそんなに胸が大きいのよ!！」

「そんな事を言う前に早く召喚獣を出したら？ 出さないと棄権と見なされるわよ?」

「くっ！ サモン！！」

小山と中林が召喚すると……。

《かつての栄光を取り戻すわ~~~~！！！！ きれいいい~~~~！！！！》

《私は中林宏美である！ 筋肉が全て！ ア〜ハツハツハツハ！！》

戦国BASARAのキャラである “北条氏政” の格好をした小山と、“本願寺顕如” の格好をした中林であった。

「見苦しいのと暑苦しいのが現れたわね」

「何なのよ！？ このふざけた格好をした召喚獣は！！」

「そんな事はどうでもいいから……さっさと倒されなさい！！」

“かすが” の姿をした優子の召喚獣は2人の召喚獣達に襲い掛かり、一撃で倒した。

「こんな負け方は納得できないわ~~~~！！！！」

『戦死者は補習~~~~！！！！！！』

「いや~~~~！！！！」

『な〜んてね』



「「え？」」

鉄人が来たかと思った小山と中林であったが、そこには私がいた。

『西村先生に代わって私が君達に授業をしてあげるよ　倫理の授業をね！！！』

「「そんなの嫌よ！！！」」

『敗者である君達に文句は言わせませ〜ん　オールマイティ！  
2人を視聴覚室へ！！』

「心得ました！　さあお前達！　今すぐ旅人様の倫理を受けるがいー！！」

「「嫌〜！！！」」

私の配下であるオールマイティ白夜が小山と中林を連れて視聴覚室へと連行した。

『ハッハッハッハッハ！　流石はオールマイティ！　仕事が早いねえ！　にしても木下さん、よく似合っているねえ〜その召喚獣』

「ありがとう。所で旅人さん、2人を連れて行った人って……」

『白夜だよ』

「……………」

白夜のあまりの変わり様に優子は言葉を失う。

『君の依頼で白夜を真人間にしてくれって言ったじゃないか』

「……………」

『まあそれは後で話そう。それじゃあ私は視聴覚室で倫理を教えるよ』  
アディオス (ピシユッ!)』

私は視聴覚室へ向かうために姿を消すと……………。

「……………確かに心を入れ替えるように頼んだけど……………変わり過ぎ  
て逆に不気味だわ……………」

優子も愛する光一がいる屋上へと向かった。

視聴覚室で……………。

『さあ、君達の名前は?』

「私はヒステリー小山です!」

「私はマッスル中林です!」

見事に私に洗脳された小山と中林であった。

「よろしい　それでは倫理の授業を始めましょう!」

「「はい!」」

「ああ旅人様！ 私にまた倫理を教えてください！」

「……………旅人様……………！！ 俺達にも倫理の授業を……………！！  
！……………」

白夜とFFF団（根本も一緒にいる）も私の倫理の授業を習いたいみたいだ。

『いいだろう！ 君達にもまた倫理を教えてくださいよう！！ さあ！  
授業を始めようじゃないか！！』

「……………ありがとうございます！！……………」

そして私の倫理の授業が開始された。

寸劇劇場 文月BASARA ? (後書き)

確か感想版では光一が大笑いをして、白夜がキレていたような気がしましたね。

## Fクラス殲滅物語（前書き）

久々の更新です！

それではどうぞー！

## Fクラス殲滅物語

私は学園に向かっていたが……。

『何で君まで付いて来るのかな?』

「いいじゃないですか、久遠君に会っても罰が当たる訳じゃないんですから」

愛奈が一緒にいた。

『学校行かなくて良いのかい?』

「大丈夫です 今日が開校記念日でお休みだから問題ありません」

『……あっそう』

「ところで旅人さん、学校に着いたらボクの着ている服を文月の制服にして貰えませんか?」

『……はいはい、分かったよ』

「流石旅人さん、話が分かる」 (ギユウ!)

呆れながら答える私に愛奈が嬉しそうに抱き付いてくる。

『……愛奈ちゃん、胸を押し付けて私に抱きつくのは止めてくれる?』

「別にいいじゃないですか」

『……………まあいい、早く文月学園に向かうよ』

「はい」

そして私と愛奈は文月学園へと向かった。

Fクラスの教室にて……………。

「……………（取り敢えず旅人さんのお蔭で回復はしているが、余り油断できないな）」

「どうしたの光一？ さっきから腰を摩ってるけど……………」

「何処かぶつけたのかのう？」

光一が腰を摩っているのを見た明久と秀吉は聞いてみる。

「……………何でも無い」

「いや、何でも無いって言いながら腰を摩っても……………」

「余計気になるのじゃ」

「何だ光一？ お前腰を使う様な事をしたのか？」

「……………雄二か」

茶々を入れる雄二に光一は顔を顰める。

「無理すんなよ光一、モヤシのお前に激しい運動は体に悪いからな（ニヤニヤ）」

「モヤシ言うな！」

「そうだよ雄二、光一に失礼だよ」

「お主は氣遣うと言う言葉は無いのかのう？」

明久と秀吉は雄二に呆れながら言う……………

「はんつ！ こんな奴に失礼も氣遣いもあるかよ。俺は光一と明久の不幸を見るのが生き甲斐でな」

「やっぱり僕も入るんだね」

「当然だ、お前等の幸せなんか俺が壊してやるよ」

「よく言う、お前だって霧島と幸せな一時を過しているくせして……………おまけに卒業したら……………」



「あれはあのクソ野郎が仕組んだ事だ!!!」

光一が言い切る前に雄二が回りに聞かせないように大声を出して遮る。

「おい雄二、旅人さんに失礼だろ？」

「あんなバカでクズで最低なクソ野郎に失礼もクソもあるか!!!」

『ほお〜？ 随分いい度胸をしているなあ』

「!!!!!!」

雄二が聞き覚えのある声に後ろを向くと……。

「旅人!!!!!!」

「旅人さんか……」

「あれ？ どうしたの旅人さん？」

「お主は相変わらず神出鬼没じゃのう……」

雄二は憎らしげに私を見ており、光一と明久は特に驚かず、秀吉は私のいきなりの登場に呆れる。

そして……。

「ああ!!! 貴方は!!!」

「アンタ！…あの時はよくも……」

「総員戦闘準備をせよ！！」

「……」「了解！！」「……」

姫路と島田は私の顔を見ると怒った顔になり、FFF団は私に対する迎撃準備を開始していた。

『やれやれ……私が登場しただけで、どうしてこんな騒ぎになるのかねえ？』

「それだけアンタが憎いつて事だろ？俺も余り人の事は言えんが

……」

「はあっ……旅人さんは悪い人じゃないんだけど……」

「此処の連中はそうは思っておらんからのっ」

光一、明久、秀吉は私に近づきながら思った事を言う。

「旅人、テメエよくも翔子に下らん相談をしやがったなあ……」

『そうかい？あれは雄二や霧島さんにはとてもいい相談だったと思っけど？』

「てめえは何処まで俺の自由を奪えば気が済むんだ！？」

『はて、自由？霧島さんに縛られている君にそんな物があつたの？』

「て…テムエ……！」

雄二は私に襲い掛かりたい位に拳を強く握りしめている。

「貴方の所為で私達がどれだけ恐ろしい目に遭ったと思ってるんですか!？」

「化け物に食われるかと思っ たわよ!？」

『君達が下らない事をしなければ、あんな目に遭わなかったと思うんだが?』

「うんうん、全くだ」

姫路と島田の言い分に私が突っ込むと、光一がそれに同意する。

『ついでにFFF団、いつでも私に襲い掛かって構わないぞ?』

「言われなくてもそのつもりだ!！」

「「「「「うおおおおお〜〜〜!!!!!!!!!」」」」

FFF団が襲い掛かってきたが……。

『その時はお前達のアレが不能になるまで痛めつけてやるから覚悟しておけよ』

「「「「「「……………」」」」」

『もしくはお前達を気絶させた後に、オカマバーへ放り込んでやる』

「……………すみませんでした……………!!!!!!!!!!」

私の脅しに負けたのであった。

「オカマバーってアンタ……………」

『ハツハツハツハ！ 私の友人にはあるオカマがいてね、鉄人並の強さを持っているよ』

「鉄人のオカマ……………オエツ！」

「気持ちワル!!！」

「そ…それは勘弁して欲しいのう」

「ウプツ！ 鉄人のオカマ姿なんて冗談じゃねえ!!！」

「き…気持ち悪いです……………」

「ウウツ！ アンタ、何て事を言うのよ!?!」

「……………ウプツ!!！」

「……………オエエエエエ……………!!!!!!!!!!」

『……………おいお前等、私は誰も西村先生とは一言も言って無いぞ?』

Fクラス全員が余りに失礼な事を考えているので、私は訂正を求める。

『と言うかお前等って想像力豊かだねえ』

「アンタが恐ろしい事を言うからだろ!？」

「何て気持ち悪いのを想像させるんですか!？ 鉄人のオカマ姿なんて!！」

「一瞬吐きそうになったのじゃ……」

光一、明久、秀吉に続き……。

「思わずむさ苦しい鉄人が醜い化け物になったかと思っっちゃったじやねえか!？」

「恐すぎますよ!！」

「そんな事考えさせないでよ!！」

雄二、姫路、島田も同様に……。

「……気持ち悪すぎる……」

「鉄人のオカマ姿は見るに耐えねえよ!！」

「……………あんな人外な化け物のオカマは嫌だ!！」……………」

「……………」

ムツツリー二と須川率いるFFF団も私に抗議した。  
が……。

「貴様ら良い度胸だな」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

『おや、噂をすれば影ですな』

鉄人……もとい西村先生が何時の間にか教室にいた事に、Fクラス生徒全員は一斉に驚くが、私は特に驚きはしなかった。

「揃いも揃って俺の悪口を言うとは……どうやら補習の時間を倍にした方が良さそうだな」

「ま……待て鉄人!! 俺達は鉄人の事は一言も言っていない!!」

「僕たちは誰も先生の悪口は言っていない!!」

「このクソ野郎が俺達を嵌めようとしてやがるんだ!!」

光一と明久は即座に否定し、雄二は原因は私だと言う。

『光一と明久はまだいいとして、雄二……貴様と言う奴は……』

「黙れ!! 言い訳した所で補習の時間は変わらない!! それとも更に倍にしてほしいか!？」

「「「勘弁してくれ〜〜!!!」「」」

『あらあら……』

聞く耳持たない西村先生は普通の授業から補習に変更し……。

「おい、確か貴様は“さすらいの旅人”と言ったか？」

『ええ、そうです』

「すまないが、今すぐこの教室から出てっくれ。バカ共の補習を始めなければ行かんなのでな」

『ほ〜い（ガラッ!）………それじゃあ皆、補習が終わった後にまた会いましょうね〜』

私に退室する様に言って来たので私は教室から出ようとする。

「待て旅人さん!!! アンタから鉄人に言っしてくれないか!? 俺達は無実だつて!!!」

「そうですよ! 元はと言えば旅人さんの所為なんですから!!!」

「この状況をどうにかして欲しいのじゃ!!!」

「旅人テメエ!!! 自分だけ逃げようとしてんじゃねえ!!!」

「どうしてくれるんですか!?!」

「ウチ等をこんな目に遭わせてタダで済むと思わないでよ!？」

「……許すまじ!……!」

「貴様も鉄人と一緒に補習を受けやがれ!……!」

「……」

私が教室から出ようとするのとFクラス全員が揃って私に抗議する。

『君達に言う事はただ一つ……口は災いの元だよ (ピシャツ!)』

「さあお前等! 補習を始めるぞ!……!」

そしてFクラスの教室から断末魔の叫びが聞こえたのであった。

おまけ

Fクラスが補習をしてしまった為……。

「旅人さん、どうしてFクラスが補習をする事になっちゃったんですか？」



『そこは聞かないで……』

「はあっ……折角、久遠君に会いたかったのに」

隣の空き教室で待機していた愛奈がFクラスに入る事が出来なくなつた。

『大丈夫だよ、補習が終わったらすぐに会えるから』

「それってどれ位ですか？」

『確か西村先生が補習の時間を倍にするって言ってたから………2時間位かな』

「うわあ……ボクだったら絶対逃げ出しそう………」

『そうさせないのが西村先生なんだよ』

と私が行っている矢先に隣から……。

ドカツ！ バキッ！ ドゴツ！

“脱走などさせるか……！！”

“嫌だ……！！……！！……！！”

西村先生と脱走者の無残な声が聞こえた。

『ほらね』

「……………」

西村先生の強さを知る愛奈であった。

さらにおまけ

問題

次の意味を持つことわざを答えなさい

“余計なことをして、思わぬ災いを受けること”

江藤愛奈の答え

藪をつついて蛇<sup>へび</sup>を出す

さすらいの旅人のコメント

はい正解。でも私としては……

さすらいの旅人の答え

藪をつついて西村<sup>鉄人</sup>先生を出す

江藤愛奈のコメント

旅人さん、それってFクラスの皆が余計な事を言ったからですか？

Fクラス殲滅物語 ？（前書き）

ちょっと遅れました。申し訳ありません。

## Fクラス殲滅物語 ？

西村先生の補習が始まって2時間が経とうとしている。

『そろそろ補習が終わる頃かな……はい王手！（パチン）』

「ああっ！ また負けたく！」

『フッフッフッフ……もうちよつと先を読まないかねえ』

私と愛奈は将棋をやって勝負を終えた。

西村先生の補習が終わるまでの間に、私と愛奈は空き教室でトランプゲームやチェス、将棋などの色々なゲームをして時間を潰していた。本当だったら優子と工藤も呼びたかったが、いくら自習中とは言え呼び出すのは不味いと思ったので、愛奈と二人っきりでゲームをしていた。

『言うておくけど、私と愛奈はエッチな遊びなんかしていないからね』

「旅人さん、誰に言ってるの？」

『気にしないで（キーンコーンカーンコーン）……漸く終わったか』

私が言っている時にチャイムが鳴り出した。

「それじゃあFクラスに行きますか」

『そうだね（パチンツ！）……ではレッツゴー』

私が指を鳴らして、今まで使っていた遊び道具を消し、愛奈と一緒にFクラスへと向かった。

Fクラスの教室にて……。

「補習はここまでだ、今後は俺に対する悪口を言ったら3倍に増やすからな（ガラツ…ピシャツ！）」

西村先生が補習終了と言って教室から出ると……。

「や…やっと終わった」

「僕……今にも頭がショートしそう……」

「…二時間はきつかったのじゃ」

光一・明久・秀吉は相当参った顔をしており……。

「くそそう……全部あのクソ野郎の所為だ」

「……この恨みは絶対晴らす」

「「「「「「絶対殺してやる」」」」」」

雄二・ムッツリーニ・FFF団は私に恨み言を言い……。

「ふうっ…キチンと復習しないとイケませんね……」

「ううっ…全然覚えられなかったわよ」

姫路は特に苦にならず、島田はKO状態の一步寸前であった。

「ねえ光一、旅人さんは一体何しに来たのかな？」

「さあな、取り敢えず旅人さんが来たらちよつと嫌味を言わせて…

…」

貰つと言おうとした光一だったが……。

ガラッ！

『やあ～皆さん！ 補習はきつかったですか？』

「さすらいの旅人を殺せえ………!!!!!!!!」

「「「「「「うおおおおお」」」」」」

私が教室に入ってきたが、FFF団がまた一斉に襲い掛かってきた。

『邪魔だ雑魚共!! (ドガッ! バキッ! ドゴッ! グシャッ!)』

「『『『『『『ギヤアアアア~~~~~!!!!!!!!!!』』』』』」

口で言っても懲りないと思ったので、私は瞬時に刀を抜き、峰でFFF団(+ムツツリーニ)全員をKOする。

『全く、このバカ共には学習能力と言う単語が無いのか?』

「刀一本でFFF団全員倒したか……」

「相変わらず凄いね……」

「まるで剣舞を見ているかのような感じだったのじゃ」

光一・明久・秀吉は私の攻撃に感心し……。

「あのクズ野郎相手には正面からじゃ勝てねえのか……!」

雄二は何とか私を倒そうと策を練っており……。

「あの人にお仕置きを出来ないのが悔しいです!」

「あの外道をどうやって倒せば……!」

姫路と島田は口惜しく私を見ている。

『光一、君にお客さんだよ』



「客？」

『お〜い！ 入ってきた〜！』

倒れているFFF団を尻目に私は廊下に待機している愛奈を呼んだ。

「やつほ〜久遠君」

「え…江藤！？」

文月の制服を着た愛奈の登場に光一は驚く。

「あれ？ 君は確か……」

「お主はこの間、Aクラスで昼食を食べていた時の……」

「何で此処にいるんだ？」

愛奈の事を知っている明久、秀吉、雄二も光一と同様に驚いており……。

「あ…あの人は工藤さん？……でもちよつと違う……」

「……………Das Sein alles diese Bru  
st!?! Es ist die Anspielung für  
das Haus!?! (訳：何なのよあの胸は!?! ウチに対す  
る当て付けなの!?!)」

姫路は愛奈を見て工藤と勘違いし、島田は愛奈の胸を見た途端にシ  
ョックを受けてドイツ語で叫んでいる。

「旅人さん、ポニーテールの子が何かおかしいんですけど……」

『気にするな、アレは敗者の戯言だ』

「はあ……」

取り敢えず私に言われて島田の事を気にしないようにする愛奈は卓袱台に突っ伏している光一に近づく。

「久遠君、昨日はどうも（プルン）」

「ああ……」

「ふふふふ……何処を見てるの久遠君？」

愛奈の胸を間近で見た光一はゴクリと唾を飲むのを見た愛奈は、笑みを浮かべながら光一の顔を間近で見る。

「い……いや……何でもない」

「もしかして……またしたくなってきた？」

「べ……別にそんなんじゃない！」

「冗談だよ。ちょっとからかっただけなのに、久遠君ったらカワイイ」

「人で遊ばないでくれ……」

愛奈のからかいに光一は顔を顰める。

「ねえ光一、昨日って何の話？」

「光一よ、昨日は一体何をしておったのじゃ？」

「何を隠していやがるんだ光一？」

明久、秀吉、雄二は光一の様子がおかしかったので昨日の事を聞いてみた。

「明久と秀吉には後で教えるが、お前には教えねえよ」

「そうか……じゃあ江藤、お前は昨日光一と何してたんだ？」

雄二が光一に聞いても無駄だと分かったので、聞く相手を変えた。

「さあ？ 何だろうねえ」

「俺としては是非とも聞きたいんだがなあ」

『おい雄二、人のプライベートの事を聞くのは無粋にも程があるぞ』

愛奈に聞き出そうとする雄二に私は叱咤したが……。

「なあ江藤、教えてくれよ」

「黙秘します」

私を無視していた。

『……………仕方ない、霧島に雄二が愛奈ちゃんに迫ってるって連絡を……………』

「待て！！ てめえは俺を殺したいのか!？」

私を無視していた雄二がすぐに反応した。

『お前が私を無視するからだろ』

「てめえは人の話を無視して勝手に翔子と話を決めてるじゃねえか  
!?!」

『何の事かな?』

「こ…この野郎……………!」

私が雄二とじゃれあっていると……………。

「光一、江藤さんに会って昨日は何してたの?」

「教えて欲しいのじゃ」

「ああ……………江藤、話してもいいか?」

「ボクは別に構わないよ」

「そうか……………実は(ボソボソ)」

光一は愛奈から許可を得ると、明久と秀吉に昨日の出来事を教えた。

「ええええええ!? ま…マジで!?!」

「それは本当か!?!」

「ば…バカ! 声大きい!」

明久と秀吉は凄く驚いた声を出したので、光一はすぐに二人の口を塞ぐ。

「だ…だって、そんな羨ましすぎる事を言われたら誰だって…(ボソボソ)」

「明久だって昨日は秀吉とヤツてたんだろ?(ボソボソ)」

「でええええええ!!! ど…どうして…!?!」

「何で光一が知っておるのじゃ!?!」

光一が言い返すと、明久と秀吉は顔が紅くなってまた大きな声を出す。

「旅人さんが教えてくれた」

「旅人さん!!! (殿!!!)」

「ん? 何だ?」

明久と秀吉はいきなり私に向かって大声を出した。

「何で光一に言ったんですか!？」

「お主はワシ等のプライベートを何じゃと思っておる!？」

『はあ？ 何を言ってるのかさっぱり分からないんだが？』

明久と秀吉が憤慨しながら私に文句を言っているが、私は何の事を言っているのが全然分からなかった。

「だから!! 昨日、僕と秀吉がエッチしている事を光一にバラしたんですよね!？」

『!!!! お…おい待て明久! それは……』

私は明久の口を塞ごうとしたが……。

「おまけに光一は光一で、木下さんと工藤さんと江藤さんで4Pなんて羨ましすぎる事をしたそうじゃないですか!? どうして僕達に教えてくれなかったんですか!？」

明久は光一のエッチまで暴露してしまった。

「あ…明久よ……」

『……………このバカ』

秀吉は暴露した明久を呆れて見ており、私は頭に手を置きながら明久にバカと言いながら呆れる。

『おい明久、此処を何処だと思ってんだ?』

「え？……あ……し……しまった！！」

明久は自分がとんでもない事を言ってしまったと今更後悔していたが……。

「（ゴゴゴゴゴゴ！！）明久君……また木下君とエッチしたんですか？　これはお仕置きをしないといけませんね……」

「（ゴゴゴゴゴゴ！！）アキ……今からアンタの骨をウチが全部折ってやるわ……」

姫路と島田は怒り明久に対する嫉妬のオーラを纏って臨戦態勢を整えており……。

「光……てめえと言う奴は人に3股何て濡れ衣を着せておいて……（ポキポキ）」

「……明久と光、許すまじ！！！！」

「おのれ吉井明久！！！！　久遠光！！！！　貴様等は絶対死刑だ……！！！！！！！！！！」

「……………コ……口……ス……！！！！！！！！！！」

雄二、ムツツリーニ、何時の間にか復活した須川とFFF団も怒りオーラを纏い臨戦態勢になっている。

『阿呆！　どうしてくれる！？』

「明久！ 周りを見てから言え！」

「お主は何て事を言うのじゃ！？」

「う……ごめんなさい……」

「うわ……何か教室の回りがどす黒いオーラで纏わり付いているよ……何なのこれ？」

私・光一・秀吉・明久・愛奈は何時の間にか固まっており、私と光一と秀吉は明久を叱咤した。叱咤された明久は3人に謝るがもう遅い。

「アキヒサク……ン、オシオキノジカンデスヨ……」

「アキ……ラクニハコロサナイワヨ……」

「明久、光一……許さねえ！ 特に光一！！ てめえだけは俺の手で絶対殺してやる！！」

「……モクヒョウホソク！！」

「ゼツタイコロシテヤル……ナンデオマエラミタイナクズヤロウガイイメニアツテイルンダ……。トクニクオンコウイチ……キサマミタイナトリプルスキュウイタンシャハゼツタイオレガコロシテヤル……！！！！！！」

「……クオンコウイチ！！！！ ゼツタイクロス！！！！」

「！！！！！！」



(雄二を除く) バースーカー状態になったバカ共が一斉に襲い掛かってきた。

『取り敢えず逃げるか(ゴソゴソ……ヒュッ!!)』

私が懐から白い玉を出して床に向けて投げると……。

ボンッ!!

大量の煙が発生した。

『おいお前等!! 逃げるぞ!!』

「了解!!」

「分かった!!」

「了解じゃ!!」

「え? え? え?」

『愛奈ちゃん! 君も早く逃げるんだ!!』

「わ…分かりました!!」

私の指示で光一、明久、秀吉、愛奈は煙が出ている最中に教室から逃げ出した。

「逃がさねえぞ貴様等!! 絶対捕まえるから覚悟しやがれ!!」

「アキヒサク~~~~ン、ニゲナイデクダサイヨ~~~~」

「ニゲタラオシオキデキナイジャナイ」

「……ニガサナイ!!」

「ツカマエテミンチニシテヤル~~~~!!!!!!」

「~~~~ウオオオオオオ~~~~!!!!!!!!」

「~~~~」

バカ共は私達を追い掛け始めた。

Fクラス殲滅物語 ? (後書き)

次回からはバカ共殲滅です!!

お楽しみに!!!

## Fクラス殲滅物語？

バカ共（雄二＋姫路＋島田＋ムッツリーニ＋FFF団）から逃げ切り……

「ったく！ 雄二は逆恨みだろうが、他の連中には怒りを通り越して呆れるな………」

『何でアイツ等は人の色恋沙汰であそこまで暴走するんだよ！？』

「ゴメン光一、旅人さん。僕が余計な事を言っただけに………」

「彼奴らにはもう何を言っても無駄じゃろつな………」

「ホントに旅人さんから聞いたとおりの人たちだったね」

光一、私、明久、秀吉、愛奈は一時身を潜めていた。

その場所は……。

「アンタ等、今度は一体何を仕出かしたさね……ここは隠れる場所じゃ無いんだがねえ」

学園長室であった。

『学園長、先日はどうも。落とし物は見つけてくれましたか？』

「落とし物……ああアレかい？ 見付からなかったから諦めたよ」

『そうですね……次はちゃんと見つけて下さいね』

「ああ、分かったよ」

俺と学園長のやり取りに……。

「「「……ああ、そう言う事か」「」」

「？」

光一、明久、秀吉は気づいたが、愛奈は全く分からなかった。

「所で旅人さん、バケモノ何かと話しても面白くないぞ」

『……光一、お前は目上の人を敬うって気は無いのか？』

「いいんだよ旅人さん、そのくそジャリに恭しい態度を見せられたら凄く不快だからね」

『……学園長、貴方もですか』

つくづく仲の悪い光一と学園長に私は呆れた。

そんな時、ドアの向こうからは……

「何処に行きやがった!？」

「アキヒサク~~~~ン、ニガシマセンヨ~~~~ン」

「サツサトウチラニツカマリナサイ!」

「……マツサツ！！！」

「コロシテヤル〜〜！！！！！！」

「~~~~~殺死殺死殺死殺死殺死！！！！！！！！！！」

怒り狂ったバカ共（雄二+姫路+島田+ムツツリー二+FFF団）  
の声が聞こえた。

「ひ……姫路さん達が僕たちを探し回っているよ……」

『……………アイツ等にはキツイお仕置きをした方がいいのかな？』

「出来ればそうして欲しい。あのバカ共にはいい加減ウンザリしているからな」

「じゃが光一よ、暴走している姫路達はいいとしても雄二がおるのじゃぞ？ 雄二は前から旅人殿の対策を練っておるようじゃ。そう簡単には行かんぞい」

「だろうな。あのゴリラが何もしないなんて考えられん」

『へえ〜、雄二が私の対策をねえ〜。どうやって私を倒そうとして  
いるんだか』

光一と秀吉の会話を私は面白く聞いていた。

「余裕な顔をしていますね……………僕だったらどうすればいいか悩ん

「じゃいますよ」

『そうかい？ 私は楽しみだけど……さてと、そろそろバカ共を鎮圧する為に動くとしますか』

「旅人さん、動くってどうするつもりだ？ 雄二の事だから既に手は打っていると思うぞ？ 今頃ムツリーニが仕掛けた盗撮カメラを使って探し回っているから、此処がそろそろ見付かるのも時間の問題だ」

『フツ……こつちだって考えがある。愛奈ちゃん、ちょっと手伝ってくれないかな？』

「いいですけど、何をすればいいんですか？」

『まずはね……とその前に……』

私は座っている学園長に近づくと……。

『……学園長、また今日も騒動が起きますので、今の内に迷惑料を払っておきます（スッ）』

懐から小切手を出して学園長に渡した。

「……それをすぐに渡すって事は、何か見返りがあるんじゃないのかい？」

『察しがいい事で。私達がバカ共を始末するまで、他の教師たちには一切手を出さないようにして貰えますか？』

「ふむ……………いいだろう。アンタの方で鎮圧してくれるんなら、こっちとしては願ったり叶ったりだよ」

お願いを言つと学園長は承諾してくれた事に安堵する。

『ありがとうございます』

「出来るだけ早めに頼むよさね。もしアイツ等の暴走が世間に知れ渡ったら大恥だよ」

『了解しました』

「……………」

私が学園長と取引をしている場面を4人は無言で見ていた。

私達を未だに見つけることが出来なかった雄二はムツツリー二と半数のFFF団を連れてFクラスの教室に戻っていた。

「ムツツリー二！ まだ光一達は見付からないのか!？」

「……………まだ探している最中」



雄二はムツツリー二に学校に設置している盗撮監視カメラを使って私達を探していた。

「くそ！ ムツツリー二の包囲網をどうやって……………はっ！ 分かったぞ！！（ピッ）須川！ アイツ等は学園長室にいる！！」

《リヨウカイシタ……………スグニツカマエテヤル……………》

「まだ光一達を殺すなよ？」

《ワカッテル……………》

携帯で須川に連絡した雄二はすぐに学園長室に行くように指示する。

「任せたぞ！（ピッ）……………ちっ！ 俺とした事が盲点だった。アイツ等が隠れるならあそこしか考えられないからな」

「……………学園長室には設置していなかった。と言うより妖怪の盗撮をする気は無い」

「誰も好き好んでババアの部屋に行く訳が無いと思っていたが……………あのクソ野郎がいた事をすっかり忘れ……………ん？ 待てよ……………旅人がいつまでもコソコソ隠れている訳が……………はっ！ しまった！！」

雄二はすぐに携帯を取り出して須川に連絡をしようとしたが……………。

「……………電話が繋がらねえ……………くそ！ もうやられたか！！」

「……どう言う事だ？」

「あのクソ野郎が須川達を始末しやがった」

時間を少し遡り、場所はまた学園長室に戻る。

バタンツ！！

「ヨシイ~~~~~！！！！　クオン~~~~~！！！！　ミツケタゾ  
~~~~~！！！！」

須川率いるFFF団が学園長室に入ってきた。

が……。

「うわぁ〜ホントに旅人さんの言ったとおり来たね」

そこにはソファアに座っている愛奈しかいなかった。

「き…君は久遠光一に汚された巨乳ちゃん!!」

「くくくく やっぱ胸がでえくくく!!!!」

須川とFFF団は正気に戻って、愛奈の胸をじろじろと見ている。その事に愛奈は特に気にしていなかった。

「だったら…今度は君達がボクの体を（チラッ）…汚してみる？」

「くくくくく!!!!!!!!」

愛奈がスカートを少しだけ捲ると、FFF団は愛奈の足をガン見する。

「（ゴクッ）そ…それはつまり……」

「（ゴクッ）俺達と……」

「（ゴクッ）エッチして……」

「（ゴクッ）良いって事なのか？」

「（ゴクッ）いいのか？」

唾を飲み込んで愛奈に確認を取るFFF団。

「ふふふふ……いいよ。ボクの体を好きにして（ムニユ）」

と言った愛奈が自分で胸を揉むと……

「…………ウオオオオオオ………………!!!!!!」

FFF団が一斉に愛奈に襲い掛かり始める。

が……。

「ふふふ……ゴメンなさい（ピシュッ!）」

愛奈が突然消えた。

「あ……あれ!? き……消えた!?!」

「ど……何処だ!?!」

「巨乳ちゃ……ん!!」

「何処にいるんだ……!?!」

「出て来てくれ……!!」

いなくなった愛奈をFFF団は愛奈を探しているがどこにもいなかった。

『纏めて来るのかと思っていたが、須川とFFF団の半分か……拍子抜けだな』

「…………!!!!!!……き……貴様は……」

『やあ』

天井から私の声が聞こえたのでFFF団は顔を上に向けると、そこには天井に張り付いている私が出た。

『雄二やムツツリー二がいなかったのは残念だが、取り合えず貴様等を始末させて貰う』

「!!! 逃げるぞ!!!」

「「「「了解!!!」」」」

流石に一度やられたのか、須川達は学園長室から出て逃げようとしていたが……。

ガチャガチャ!!

「な…何で開かない!?!」

『(ストン)フフフフ……お前達が此処に入った瞬間、学園長室の扉を封鎖するように設定しておいた。私でなければ扉を解除する事は出来ない仕組みになっているよ……さて、どう料理してやるうか(チャキツ)』

「「「「ヒイツ!!!」」」」

私が張り付いている天井から下りて須川達に説明して刀を抜くと、須川達は怯え始める。

「ま…待ってくれ！ 俺たちが悪かった！！ だから！！」

「………不能にさせないで下さい！！」「……」

『……………自分達が不利になった途端に助かる為の降伏か。本当に救い様の無い連中だな』

土下座をする須川達を私は蔑みの目で見る。

「俺達は貴方様の傘下に入ります！！」

「………どうかお許しを！！！！」「……」

『……………今更コイツ等を叩きのめしても意味は無いか（スッ）』

「………じゃあ！！」「……」

須川達が許してくれると思えば顔を上げると……。

『貴様等にはコレを味わって貰うよ（パチンッ）！』

「……………！！！！！！ ウギヤアアアアア……………！！！！！！！！」

！（バタンッ！！）「…………」

私が指を鳴らした事により、断末魔の叫びをあげながら倒れて気絶した。

『先ずは須川とFFF団半数か、大した収穫じゃないな。おっと、光一達を呼び戻すか（パチンツッ！）』

私が指を鳴らして封鎖していた扉を解除した。

『扉を解除したから入ってもいいよ〜！』

ガチャ！

扉が開くと光一、明久、秀吉、愛奈、学園長が入ってきた。

「旅人さんって他にも面白い能力を持っていたんだな。いきなり須川達の叫び声が聞こえたが、一体何をしたんだ？ 今コイツ等は気絶しているけど」

『フッフッフッフッフ……西村先生が汗を掻いて筋トレしているシーン  
を頭の中に叩き込んでやった』

「……」

「え？ 西村先生って……さっきFクラスで補習をしていた先生ですか？」

入ってきた光一が質問に答えると、愛奈以外の全員が揃って無言となった。

「鉄人の筋トレか……地獄にも等しいな」

「そんな暑苦しいのを頭に叩き込んでたなんて……うわ想像したくない！」

「さぞかしむさ苦しかったじゃろうな……」

「西村先生の事は悪く言うつもりは無いが……アタシも見たら気絶するさね」

『ハツハツハツハツハツハ！！』

私が笑っているのを見た光一達はこう思った。

この男は絶対に敵に回してはいけないと言う事を……。

「あの先生ってそんな恐ろしい人なのかな？……ボクはともそうは思えないけど……」

西村先生の事をよく分かっていない愛奈は未だに疑問を抱いていた。



## Fクラス殲滅物語 ？

場所は屋上に変わる。

FFF団の半数をある部屋へと転送した私は学園長室を出て、光一達と一緒に屋上にいた。

『よし、それでは第2段階の案でも考えますか』

「第2段階って………また罠を仕掛けるのか？」

『勿論だよ光一』

「そんな回りくどい事しないで、俺とアンタでさっさとあのバカ共を始末すればいいんじゃないか？」

光一は私のやり方に些か不満みたいだ。

『確かにそうすればあつと言つ間に終わるけど、今回は雄二が必死に策を練っているだろうから、敢えて真正面からやるのを避けているんだ』

「いつも真つ向から仕掛けるアンタにしては珍しいな」

『あの野生のゴリラでも、一応は神童と呼ばれたほどの頭脳の持ち主だからな』

「………確かに、悪知恵を働かす事に長けているゴリ二には、それ相応の警戒をしておいた方がいいかもしれないな」

私の言い分に光一は納得してくれたみたいだ。

「旅人さんと光一って雄二を認めているのか貶しているのか、どっちが分からないね」

「恐らく両方じゃろう……………」

「アハハハ……………それにしても旅人さん、どうして屋上に来たの？」

明久と秀吉は私と光一を見て呆れた目で見ていたが、愛奈は屋上に来た理由を私に聞く。

『ここだと作戦を練れるからね』

「でも久遠君が言っていましたけど、盗撮監視カメラは此処にも設置してあるんじゃないですか？」

『それは問題無い。屋上に仕掛けられているカメラには偽の映像を流してあるから』

「……………相変わらず素早い手際ですね」

『いや、それ程でも』

「……………」

愛奈は私の行動に感心と呆れが混じった目で私を見ている。

『さてと、第2段階はどんな手で行こうか……………うーん』

「旅人さん、策が思いついたから次は俺にやらせてくれないか？」

『光一が？ 別に構わないが……どうするつもりだ？』

立候補する光一に私は承諾しながら作戦内容を聞く。

「それは……江藤、悪いがもう一働きしてもらえないか？」

「いいけど……ボクに頼むって事は、学園長室で旅人さんが考えた  
貰みたいなもの？」

「ああ、残ったFFF団を片付ける為にな」

「でもさつき旅人さんや久遠君が言ってたよね？ 坂本君って結構  
頭が良いんでしょ？ だからそれについての対応策は考えているん  
じゃないの？」

愛奈は同じ手は使えないんじゃないかと思っただけ……。

『確かに雄二は考えているかも知れんが、あのFFF団は別だ』

「あのバカ共は理性より本能を優先するからな」

「そうだね、雄二が何を言っても絶対に何が何でも女の子優先に向  
かっていくと思うし」

「簡単に引つ掛かる奴等じゃからのう」

「そ……そうなんだ……」

私達の言い分に愛奈はどれだけFFF団が単純な人たちなんだろう  
と思った。

「ではバカ共の事を分かったみたいだから、次に俺の指示通りに動  
いてくれ」

「う…うん、分かった」

「それじゃあ江藤、あそこに立ってくれ」

「は…い…っ」と

愛奈は私の指示通りに場所に立つ。

「よし。旅人さん、すまないが教室に置いてある俺の武器を此処に  
転送してくれないか？」

『転送って……光一が始末するのか？』

「ああ、その為に俺の武器を使ってすぐに片付ける。俺が今持って  
いる武器はコレだけだからな」

光一は持っている拳銃とスタンガンを出す。

『光一にしては随分と珍しいな。大して持っていないなんて』

「鉄人の補習があつたからこれしか持てなかつたんだ……おまけ  
にあの騒動で持って行く事が出来なかつたし」

『ふうん……けど武器を転送してくれって言われても、すぐに転送をしたら光一が武器を持ったって警戒するんじゃないか?』

「大丈夫だ。俺の武器なんか気にしなくなる位の事をやるから」

『ならいいが……』

「じゃあ旅人さん、これから手順を説明する。アンタが……」

光一は残ったFFF団を誘い出す為の策を話し始め……。

「秀吉、光一は何をするんだろう?」

「さあのう、まあここは黙って見守るしかないのじゃ。光一の事じやから、何か策を思いついたのじゃろう」

「久遠君は一体何をするのかな」

明久達は光一がやる事を見ていた。

Fクラスの教室では……。

「……と言つ訳だ」

「成程、いくらアイツでもソレに持ち込まれたらやらざるを得ない  
つて事ね」

「でも大丈夫なんでしょうか？ 旅人さんが先に先制攻撃をされた  
ら……」

雄二の説明が終わると、島田は納得し、姫路は心配そうな顔になる。

「大丈夫だ、もしあの野郎が先に仕掛けても仕掛けなくてもそれ相  
応の手はある。おい近藤」

「何だ？」

「これを持ってあそこへ行け（スッ）」

「……………！（ニヤリ）……………了解した」

ガラッ……………ピシヤ！

雄二が近藤にある者を渡すと、近藤は笑みを浮かべながら教室から  
出て行った。

「坂本、近藤に一体何を渡したの？」

「ふっ……後で分かるさ。おいムツツリーニ、奴等は見付かったか？」

「……まだ見付からない。………！！！」

「どうした？」

「……画像が」

「何？」

雄二がムツツリーニが見ているノートパソコンを見ると……。

ザザザザザ………パツ！

《やあ雄二》

「てめえ………！」

先程までノイズだった画面がいきなり私が映った。

《全くお前等には呆れるよ。どうして人の恋愛や幸せを、そんなにぶち壊したいのが理解出来ない。お前等は静かに見守る事は出来

ないのか?》

「うるせえ! 俺はアイツ等の幸せがムカつくだけだ!」

「エッチな事をする明久君には当然のお仕置きです!」

「元はと言えばアンタが原因でしょうが!」

「……異端審問会は人の幸せを許さない!」

「「「「そつだそつだ!」」」」

《……………》

雄二たちの言い分に更に呆れる私であった。

《……………なあお前等、ここで光一や明久を許してくれたら、私は今すぐにでもこんなバカな事は止めるけど?》

私が和平の提案を出すか…………。

「断る!」

「どうして明久君を許さないといけないんですか!」

「ふざけんじゃないわよ!」

「……………異端者共を許す気は無い!」

「「「吉井と久遠は絶対殺す!」」」



《……………そうかい、なら私も貴様等を容赦なく叩きのめしてやる。覚悟しておけ（プツッ！）》

雄二達は聞く耳持たずだったので、私は言いたい事を言った途端に画面が暗くなった。

「おいムツツリーニ！ あのクソ野郎は何処にいるか分かるか!？」

「……………奴の居場所は……………見つけた。体育館倉庫だ」

「よっしゃ！ 光一と明久の前に旅人の野郎から始末しに行くぞ！  
」！」

「……………おお……………!!!!!!」……………

雄二達はすぐに体育館倉庫に行こうとしたが……………。

パッ！

《あゝあ、屋上にいても凄く暑いな……………（プルン）》

「……………!!!!!!」……………

ノートパソコンから愛奈が映っていたので足を止める。

「江藤愛奈！？ 何でコイツが!?!」

「どつどつ事でしょう?」

「……………コイツもウチの敵よ」

「……………(ジー)」

「……………(ジー)」「」「」

雄二と姫路は何故愛奈が映っているのかと疑問を抱き、島田は憎らしそうに睨んでおり、ムツツリー二とFFF団は愛奈の揺れた胸を凝視していた。

《誰か屋上に来てボクを涼しい場所に連れてってくれないかなあ? そうしたらお礼にエッチな事をしてあげるのに (プルン! ……チラッ)》

「……………!……………」

「え…江藤さん! エッチなお礼なんてダメですよ!」

「(ギリギリ!) あの女はウチに対する当て付けのつもりなの!?!」

「(何だ? いきなりコイツが映って何かを誘っているような…まさか!) っておいお前等!! 何処に行く!?!」

愛奈の狙いが分かった雄二は、すぐに屋上へ行くこととするムツツリー二とFFF団に待ったをかける。

「止めるな坂本！ 俺達は屋上に行かなければならねえ！！」

「巨乳ちゃんを早く涼しい所に案内しなくては！！」

「彼女を見捨てるなんて俺達には出来ねえ！！」

「俺達は助けに行くんだ！！」

「……………エッチに興味は無いがこんなチャンスは滅多に無い！（ボタボタ）」

「落ち着けお前等！！ コレは罠だ！！」

FFF団とムツツリーニを何とか落ち着かせようとする雄二であったが……………。

《キャ！ ちょ…ちょっと久遠君、どこ触ってるのぉ》

《（モミモミ）別にいいだろ、俺とお前の仲じゃないか。それにしても江藤の胸はホントに大きいだけじゃなく柔らかくて揉み応えがあるなぁ》

《だ…だからって…………… ああん！ そんなに揉まないでえ！》

《はっはっは…………… 暑さなんか忘れさせてやるよ（モミモミ）》

《あ…ああ…………… ダ…ダメエ…………… そんなにしたら…………… おかしくなっちゃうよぉ……………》

「……………」

画面では光一が愛奈の胸を揉んでいるのを見たムツリー二とFF  
F団は……。

「クオンコウイチヲコロスゾ〜〜〜〜！！！！！！！！！！」

「『ゼツタイコロシテヤル〜〜〜〜！！！！！！！！！！』」

「……マツサツ！！！！」

プツツ！

怒り狂った武藤を先頭にFFF団が屋上へと向かった直後、ノート  
パソコンに映っていた画面が消える。

「くそつ！ あのバカ共が！！ 旅人の野郎！！ またやってくれ  
やがったな！！」

「ど……どうしましょう坂本君！？ これでは体育館倉庫に行く事が  
……」

「あの外道を討ち取る折角のチャンスが……」

「これじゃあクソ野郎と戦えな………ハッ！ いいや違う！！  
あの野郎は屋上にいる！！」

「「ええっ！？」」

「俺とした事が旅人の掌で踊らされていたとは……クソが！！」(ド  
スッ！)」

雄二は自分の迂闊さを呪って床を殴る。

「ど…どうして旅人さんが屋上にいると言う事が分かるんですか？」

「アイツは体育館倉庫にいますでしょ？」

「光一達の身に何かが起こると、常に傍にいて守っているあの野郎が別行動をするなんてありえねえんだよ！」

「けど、土屋が体育館倉庫にいるって……」

「あの野郎はその気になれば居場所なんて簡単に誤魔化せる。引っ掛かったバカ共は旅人が体育館倉庫にいると思っ込んでいるからな」

「そ…それじゃあ屋上に行った土屋君たちは……」

「今頃、旅人が始末しているだろうな……こうなったらあの手で行くしかない！（スッ）」

雄二は携帯を出して誰かに連絡しようとした。

それと雄二達はまだ気付いていない。

教室にあった光一のポストンバックが無くなっている事と、今回の策は光一が考えた物だという事を。

そして屋上に……。。

「H A H A H A H A 〜〜！！！！ 罨に引っ掛かってくれてありがとよ！！ おバカさん達！！（ドバババババババババ！！！！！！）」

「『『『『ギヤアアアアア〜〜〜〜！！！！！！！！！！ 何でコイツが武器を持っていやがるんだ〜〜！！！！！！！！！！』』』』」

雄二の思惑は外れており、光一が残ったFFF団を始末していた。

『雄二の奴は光一が護身用程度の武器しか持っていないから簡単に倒せると思っていたんだらうけど……』』

「まさか旅人さんが光一の武器を転送させていたなんて思ってもいないだらうね」

「雄二達が旅人殿と話している最中にポストンバックを転送させておったからのう」

『フフフフ…… アイツ等は私に気を取られていたばかりに、ポストンバックが消えていた事には全く気付いていなかったからなあ』』

愉快と言わんばかりに私は笑みを浮かべている。

『どうだい愛奈ちゃん？ 武器を持った光一は』』

「うわあ……やる事が容赦無いですね久遠君」

『あれが過激派筆頭と呼ばれる理由さ』

「いいの旅人さん？ 光一だけ任せておいて」

「明久よ、下手に光一に加勢すると巻き添えを食ってから止めておいた方がいいのじゃ」

光一がFFF団を始末している所を見物していた私達であったが……。

「癖になるなよ！！（バチバチバチ！！！！）」

「……………アバババババババババ！！！！！！！！！！」

『おお、光一BASARRAだ』

「久遠君が戦国BASARRAの伊達政宗みたいですね」

スタンガンを6本出して指で挟んで舞うかのように当てる光一であった。

おまけ

「……畏だつたか……！　すぐに戻って雄二に報告しなければ……」

屋上の入り口でムツツリーニが逃げようとしていたが……。

『ムツツリーニ、簡単に逃げれると思うなよ』

「……！！！」

いつの間にか階段には私が立ち塞がっていた。

『さて、お前には取り敢えず一時的に気絶してもらつぞ（チャキツ！）』

「……！！！」

私が刀を持って構えるのを見たムツツリーニは身構えるが……。

『なぐんてな　これでも喰らつてる　（パチンツ！）』

「……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

居合をやるのではなく、指を鳴らしてムツツリーニに汗まみれになっている鉄人の筋トレシーンを頭に叩き込んだのであった。

「……………（ボタンツ！）」



『はい、FFF団捕獲完了』

ムツツリーニが気絶した事に、全てのFFF団を捕まえた私は笑みを浮かべるのであった。

しかしこの時の私はまだ気付いていなかった。FFF団がまだもう一人残っていた事に。

## Fクラス殲滅物語？

光一が残ったFFF団を始末したのを確認したので、私はとある部屋に転送させた後に光一達と一緒に屋上を出た。

2階の廊下で……。

『それでは残ったバカ共を殲滅しに行きますか（チャキツ！）』

「そうだな、俺達を殺そうとする奴等にはお仕置きをやらなとな（ジャキツ！）」

私は刀を、光一は銃火器を持ってFクラスの教室に向かっていた。

「もう二人は完全にやる気満々だね」

「旅人殿と光一がああなった以上は、もう誰にも止められんぞい」

「あの二人、まるでこれから戦場に行くみたいな感じだね」

一緒に行動している明久、秀吉、愛奈は私達を見てそれぞれ思った事を言う。

と、そんな時……。

『あれ、そう言えば……』

「どうしたんだ？ 旅人さん」

私がふと何かが引つ掛かると光一が私を見る。

『FFF団の事なんだが……』

「FFF団？ もう全員始末しただろ」

『いや、一人いなかったんだよ。確か近藤って奴が』

「……………言われてみれば確かにそうだな」

光一も始末したFFF団の連中を思い出すと一人いなかったと気付く。

『今日のFクラスは一人も欠席はしていない筈だよな？』

「ああ、アイツも俺達を殺そうと躍起になってたからな」

『だとしたら、近藤がない理由は……雄二か』

私が雄二が何か策を使ったかと思った時に……。

ピンピンパンポン

“連絡いたします！ 船越先生、船越先生。さすらいの旅人さんが2階の廊下で待っています。男と女の大事な話があるそうです！”

『なに！！？』

放送の内容を聞かれた私は戦慄したが……。

『あ…あの野郎、まさか……』

“そして2-Dの清水美春さん、清水美春さん。2-Fの島田美波がさすらいの旅人に猥褻行為されました。今すぐその罪人を成敗して下さい!!!”

『誰が餅を叩く音の暴力女なんかそんな事をしなきゃいけないんだ〜!!!???』

思わずスピーカーに突っ込む私であった。

「餅を叩く音？ それってどう言う事？」

「擬音語にすればわかるぞ、明久」

「え？ えっと……ペタンペタン……ああ、そう言う事が」

「島田が聞いたら絶対に怒りそうじゃな」

「でもそれって島田さんだけじゃなくて他の女の子も怒ると思うよ」

私の突っ込みに明久達は容易に島田の事だと連想していた。

「まあそんな事より……まさか雄二の奴、旅人さんを倒す為に人外の連中を使って……」

『けどアイツがこんな手で私を倒せるとは思ってない筈だけど……あ、もう来たよ』

私と光一が雄二の考えを思索していると前方から船越先生とバーサ

「カー状態の清水がやって来た。」

「(ダダダダダ!!!) さすらいの旅人さ〜ん!! 大事な話  
つて何ですか〜!!?!?!?!?」

「(ダダダダダ!!!) コノブタヤロウガ〜!!!! オクモ  
オネエサマヲ〜!!!!」

しかも物凄いスピードで此方に向かってきている。

『……………船越先生はともかく、清水は以前と同じく化け物になっ  
ているなあ……………しかも4足歩行で』

「あのクソゴリラめ、嫌な奴を連れて来やがって……………」

「ヒイイツ! また清水さんが来たよ!？」

「清水のあの姿はもう勘弁して貰いたいのじゃが……………」

「な……………何なのあの子? 何かの映画に出て来るバケモノみたいだよ  
……………」

私と光一は厄介な連中が来たと思い、明人と秀吉は物凄く嫌そうな  
顔をしており、愛奈は清水を見て怯えていた。

そして船越先生とバーサーカー清水が私との距離が1mになり……………。

「「シャアアアアア〜……………!!!!!!!!」」

『……………取り敢えずアンタ等は邪魔だから消えなさい(パチンツ!)』

襲い掛かってきた所を私が指を鳴らした瞬間に2人の姿が消えた。

『やれやれ、どんだけ手間を取らせるとは……』

「旅人さんってホントに凄いやな、あつと言う間に消しちゃうんだから」

「2人は何処へ行ったんですか？」

『取り敢えずこの騒動が終わるまでお仕置き部屋に幽閉しておいた。清水は牢屋だかな』

「そ…そうなんだ。まあ清水さんの場合はそれが正しいかもね……」  
明久の質問に私は2人の居場所を教えたと、明久は納得する顔をした。

『しかし雄二は一体何のつもりで、こんな下らん真似をしたんだ？』

「確かにのう。普通の相手なら有効な手じゃが、旅人殿では全くの無意味じゃ」

『……………おい秀吉、それはどう言う意味だ？』

「え？ あ…いや…べ…別に深い意味は無いのじゃ……………ワシはただ旅人殿が相手だと問題無いと思って言ったのじゃ」

『ほっ？』

秀吉が思ったことを言ったので私が問い詰めると取り繕うかのよう  
に言う。

『ふくん……秀吉が私をそう言う風に見ていたとは意外だったよ』

「じゃ……じゃから……」

『私は悲しいよ秀吉。まさかお仕置きをする相手がこんな近くに  
いたとはなあ〜（チャキツ！）』

「ヒイツ！（バツ！）」

私が刀を抜くと秀吉は光一の背に隠れる。

「ちょっと旅人さん！ 僕の秀吉にお仕置きをしたら……」

「おい旅人さん、悪ふざけが過ぎるぞ？」

『あらバレた？』

「……………え？」

「ふふふ……………」

明久が秀吉を守ろうと私の前に立ち塞がるが、光一が私のやってい  
る事が演技だと分かったのでそれを指摘すると私はあっさりと認め  
た。明久と秀吉はキョトンとした顔になり、愛奈は面白そうに見て  
いる。

『よく分かったね光一』

「あんな見え透いた芝居に気付かないわけ無いだろ」

『怒気も込めたつもりだけど?』

「顔が怒ってても目が完全に笑っていたぞ」

『おやおや、光一の前では通用しないみたいだね』

「これでもアンタの相棒だからな」

光一の思いがけない台詞に私は少々驚く。

『へえ〜? 相棒は明久じゃないのかい?』

「確かに明久は俺の相棒だが、こう言った荒事に関しては俺とアンタは相棒同然の関係だろ?」

『……………確かにそうだね、お互い派手な事を行っている仲だし……………』

光一の言い分に私は素直に受け入れる。

「ほら秀吉、いつまで俺の背に隠れているんだ」

『悪かったよ秀吉、私も少々悪ふざけが過ぎた(スー…パチンツ)』

「わ…ワシもすまなかったのじゃ」



私が刀を鞘に納めると秀吉は謝りながら私に近づく。

「旅人さん、もし光一が指摘しなかったら本当に秀吉をお仕置きしてたんですか？」

「まさか。そんな事する訳無いだろう」

「……………じゃがワシから見れば本当にやりそうじゃったぞい」

『お仕置きって言っても秀吉が抵抗しないよう縛り付けた後に、昨日の明久と秀吉の愛の営みを全校放送しようかと……………』

「充分キツイお仕置きですよ！・なのじゃ！」

『冗談だよ、ハツハツハツハツハ！！』

私のお仕置き内容を言うと明久と秀吉は揃って私に突っ込むと、私は大笑いをする。

「旅人さんったらホントに人をからかうのが好きなんだから……………」

「江藤も旅人さんに、いつもあんな風にかかわれているのか？」

「いいや。ボクは旅人さんと一緒にからかう方だよ」

「……………そうか」

光一と愛奈が私達のやり取りを見ていると……………。

「ここにいたか、さすらいの旅人！」

「見付けましたよ」

『「「「「ん？」「」「」』

私達が声が聞こえた方を見ると、そこには鉄人と学年主任の高橋先生がいた……… ついでに何故か雄一・島田・姫路もいる。

「げっ！ 鉄人！」

「高橋女史もかよ……」

「何故あの二人が此処に？」

「どうしたんだらう？」

『西村先生と高橋先生じゃありませんか、一体何の御用です？ 学園長からこの騒動に関しては一切手を出さない様にと言われた筈ですが？』

明久と光一は登場した2人の先生の顔を見た途端に嫌そうな顔をしており、秀吉と愛奈は疑問に思い、私は取り敢えず此処に来た理由を聞いてみた。

「そつだな。確かに学園長から手を出すと言われてたが……」

「ですが貴方がやった事に関して見過ごす訳には行きません」

『私がやった事？ バカ共を鎮圧しているだけですが？ 後はその3人をお仕置きすれば完了なんですがね』

私が2人の後ろにいる雄二たちを見ると、雄二が何かニヤついていた。

『（アイツ……何を考えている？）』

私が雄二の頭の中を読もうとしたが……。

「さっきの放送でお前が島田に猥褻行為をしたそうじゃないか」

「ですから詳しい話を聞かせて貰う為、貴方を連行させて頂きます」

『はあ？』

「おいおい2人とも、旅人さんがそんな事する訳が無いだろうが」

鉄人と高橋先生の言い分に私は呆れ、光一がアホらしいと思いつつも私に助け舟を出す。

「ちよつと先生方！ あの放送を信じているんですか！？」

「アレはでつちあげの放送じゃぞ！」

明久と秀吉も同様に助け舟を出す……。

「旅人！！ アンタよくもウチを弄んでくれたわね！！ 絶対許さないんだから！！」

「と言っているが、どう説明するんだ？」

島田が涙目で私に訴えてきており、鉄人が私に言い逃れが出来ない証拠だと言わんばかりに言う。

『おい島田、私がいつお前を……………（成程、そう言う事か）』

私が島田に突っ込もうとしたがアイツ等の狙いが読めた。

そして雄二、島田、姫路がここにいるという事も……………しかし姫路は何故か若干後ろめたい表情をしていたが。

『（雄二……………貴様は私に冤罪を被せる気だな。そうはさせんぞ）』

雄二の思惑をすぐにぶっ壊すと誓う私であった。

おまけ

放送を聴いていた3 - Aでは……………。

「おいおい聞いたか？ あの野郎が猥褻行為をしたって」

「みたいだな、これであのクソ野郎も学園からいなくなる訳だ」

常夏コンビは私がいなくなるだろうと喜んでおり、他の生徒も同様であった。

恐らく他のクラスの生徒も私が学園からいなくなると思っているだろう。

だが……。

「（バカ共が、あの異物がそんな下らん真似をする訳が無かるう）」

大神白夜だけは否定していた。

「（恐らく異物に恨みを抱いている奴が考えた策だろうが……愚かだな。そんな幼稚な策で倒せると思ったら大間違いだ。何処の誰かは知らんが、貴様のやる事は簡単に覆される。逆に異物の怒りを買うだけだ）」

白夜は雄二の策を蔑み、私が覆せるのは当然と言わんばかりの表情をする。

「（異物、その程度でやられる訳が無かるう？ 貴様を倒すのは私なのだからな）」

白夜が教室から出ようとする……。

「おい大神、何処に行くんだ？ 自習中とは言え、教室から出るの  
は不味いぞ？」

「貴様には関係の無い事だ（ガチャ……ボタン）」

声を掛けられた夏川を一蹴しながら教室から出た。

「チツ！ 相変わらず嫌な野郎だ……」

「よせ夏川、下手に言つとまた……」

「くそつ！ あの野郎が代表だなんて……」

夏川を宥める常村に、他の生徒も白夜に対して嫌な感情を抱いている。

だが……。

「やれやれ、彼らは全く分かっていますね。大神君がいるからこそ、Aクラスとしての秩序を保っていると言つ事に」

「全くだ。陰口でしか抵抗出来ない奴は、その程度の奴等と言つ事だ」

白夜の賛同者である岩崎賢一、新田和馬は違つた。

「それにしても、確か“さすらいの旅人”と言いましたか……あの大神君がその人に興味を興味を持つとは意外でしたね」

「まるで自分と互角に戦える相手を見つけたかのような顔だったな」

「僕等も一度会ってみたいですね。どれほどの人なのかを」

「ソイツと一度手合わせしてみたいものだ」

岩崎と新田は白夜に興味を抱いている私にいつか会おうと考えているのであった。

## Fクラス殲滅物語 ？

『まさか鉄人と高橋女史を味方に付けるとは……やってくれるねえ』

私は雄二がまさかここまでやるとは思わなかった。悪知恵を働かす事に長けているとは分かっていたが、鉄人と高橋女史を呼ぶのは想定外だ。

雄二がまさか強力な味方を付けて私を倒そうとは物凄く意外だったのだ。

『自力で私を倒せない為に敢えて援軍を呼んだって所か……そこは認めるよ』

確かに自分が勝てない相手にはそれ相応の相手をぶつけるのが戦の常道である。私も雄二の立場だったら多分同じ事をしているだろう。だが……。

『けどな雄二、人に濡れ衣を着せるのは頂けないなあ』

冤罪まで認める気は無かった。

どうせ雄二の事だから、普段の私に対する恨みを晴らす為に考えたのである。そうでもしなければ冤罪等と言っふざけた真似はしない筈である。

『雄二、この騒動が終わったら貴様には地獄を見せてやるから覚



悟しておけ。』

私は雄二に死んだ方がマシと思わせるお仕置きを味遭わせてやる  
心に誓った。

とまあ私が内心で雄二のお仕置きを誓つと……。

「おい島田！ お前何考えている！？」

「美波！ いくら何でもこれはやり過ぎだよ！」

「旅人殿がそんな事をする男で無いのは、お主だって知っておるじ  
やろー！」

「以下同文です！」

光一、明久、秀吉、愛奈は島田に猛抗議をする。

しかし……。

「何言ってるのよ！ ウチはコイツに散々な目に遭わされたのよ！  
？」

「それはお前が明久に下らない事をしたからだろうが！！」

「だからってウチにあんな事して許されると思ってるの！？」

島田が言い返したので光一がそれは自業自得だと言つ。

「とにかく旅人！ ウチはアンタを絶対に許さないからね！！ そ

「うよね瑞希!？」

「え…ええ…まあ」

『（ん？ 姫路の様子が少しおかしいな）』

私は島田が勢い込んでいるのに姫路が何故か消極的だった事に疑問を抱く。

『（何処か後ろめたさを感じる………どうやら姫路は乗り気じゃないみたいだな）』

光一達が言い争っている最中に私は冷静に周りを分析している。

『（雄二と島田は私に対する復讐でやる気満々だが、姫路だけは私に対して申し訳ないと言った所か。これはチャンスかもしれないな）』

私は勝てる確立が上がったと確信する。

「ええい！ 何時まで言い争っている!！」

「さすらいの旅人さん、貴方は私達と一緒に指導室までご同行をお願いします」

鉄人と高橋先生は話は終わりだと言わんばかりに私を連れて行くこうとする。

「待て！ 旅人さんは無実だ!！」

「そうじゃぞ！ 島田の言っている事はでたらめじゃ！！」

「そうですよ！ これは雄二が仕組んだ事です！ その証拠に雄二が笑っているじゃないですか！？」

明久が雄二を指すが……。

「何言つてやがる明久、俺は心の傷を負っている島田を助けてここまで来たんだぞ？」

「このバカ雄二！ お前はそんな汚い事をして恥ずかしいと思わないのか！？」

「おいクソゴリラ！ こんな事をしてタダで済むと思っているのか！？」

「さて、何の事だ？」

明久と光一の言い分に雄二は惚ける。

『よせ2人とも、ここで雄二に何を言っても無駄だ』

「けど！」

「このままじゃ旅人さんがホントに捕まっちゃいますよ！」

『安心しろ、ちゃんと手はあるから』

私を守るかのように立ち塞がった光一と明久であったが、私が2人の間を通過して鉄人と高橋先生に近づく。

『西村先生、高橋先生、お待たせしましたね』

「島田にやった事を認めるようだな」

「では指導室に行きましょう」

2人は指導室に行こうとしたが……。

『それはお断りします』

「「なっ!?!?」「」

私の言葉に驚く。

「「どう言う事だ!?!?」

「貴方は罪を認めたのでは!?!?」

『私が何時そんな事を言いましたか?』

「だが現にお前は……」

『そんな身に覚えの無い事を尋問された所で私は無実だといひ続けます。ですから、そんな無駄な事はしませんので』

「「……………」

キツパリと言い切る私に鉄人と高橋先生は無言となる。

「へっ！ そうこなくっちゃな！（ジャコッ！）」

「やっぱ旅人さんが素直に従う訳がないよね！」

「当然じゃろう！」

「ですよね〜」

私側である光一、明久、秀吉、愛奈はさも当然と言わんばかりに賛同する。

「いいのか旅人？ そんな事したら余計疑われるのがオチだぞ？」

『心配無用、ちゃんと無実を証明するので』

「ほう？ この状況をどうやって覆すんだ？」

『それはもう少しで分かるよ』

余裕な顔をしている雄二に私は軽口で返す。

「雄二！ お前のその余裕面をすぐに消してやるからな！！」

「あと島田と姫路！ お前ら覚悟しろよ！！」

「いくらなんでも、こればかりは許せんじゃ！！」

明久は雄二を睨んで言い、光一と秀吉は島田と姫路を睨む。

「へえ？ それは見ものだな」

「何よ！？　ウチは当然の主張をしているだけよ！？」

「……………」

雄二は未だに余裕な表情をしており、島田は嘘じゃないと主張し、姫路は顔を伏せている。

『おやおや……………』

明久、光一、秀吉は私を守ろうと戦闘態勢に入るのを見た私は意外な顔をする。

「お前等！　そいつを庇い立てする気が！？」

「止めなさい、貴方達も指導室に連れて行かれますか？」

鉄人と高橋先生はバカな真似は止めると言う。

「生憎、旅人さんがいなくなると俺達が困るんでな！」

「ここで旅人さんが捕まって学園からいなくなるのは嫌だからね！」

「黙って見過ごす訳には行かないのじゃ！」

「それはボクもです」

『あらら〜、私も随分と慕われたもんだね〜』

光一達の言い分に私は感動した。

「……………お前等がそこまで言うなら仕方ない」

「では貴方達も纏めて指導室に連れて行くことにしましょう」

鉄人と高橋先生は光一達も指導室に連れて行こうと決めたみたいだ。

『おや、やる気ですか？（チャキツ！）』

「上等だ！（ジャキツ！ バチバチ！）」

私と光一が武器を構えると……………。

「……………お前等は教師に向かってそんな物騒な物を使うのか？」

「久遠君の武器はオモチヤですからまだ良いとして、貴方の持っている刀は銃刀法違反ですよ？」

鉄人と高橋先生は呆れた。

『「心配無く、これは模造刀ですので」』

「……………え？」「……………」

『……………待てお前等、何だその反応は？』

私が模造刀と言うと、明久、光一、秀吉、雄二、島田が嘘だろ？  
と言わんばかりの顔をする。

「いや、アンタそれでロープを切っただろ？」

「模造刀では絶対切れないと思いますけど……」

「ワシ等はてつきり本物の刀だと思っていたのじゃが……」

『……………阿呆！！ 私がそんな物騒な物を使う訳が無いだろうが！？ それと光一！ あの時は技で切ったんだよ！！』

光一は以前に明久が異端審問会にロープを使って十字架に貼り付けにされていた時の事を思い出していた。

その時に私が刀を使ってロープを切った所を見た光一は、アレは本物の刀だと思い込んでいたのである……それは他のFクラスの生徒も私の持っている刀が本物だと思っていたみたいだが。

しかしそれは違う、あの時は本当に技で切ったのだ。あまりしつくり来ないだろうが、要は剣の達人が切れない刀でも何故か切れてしまふと言う神技みたいな物である。

『ってか光一！ そんなのどうでもいいだろ！？ 早くこの場を切り抜けるぞ！（チャキツ！）』

「あ…ああ！（ジャコツ！）」

私がどうでもいいと光一に言うと、光一は動かこうとする。

「残念だがお前達の思い通りには行かないぞ！ 承認！！」

「何！？」



鉄人が召喚フィールドを展開すると光一は驚いた顔をする。

『あらあら、召喚フィールドですか。てっきり西村先生が私に挑んでくるかと思いましたが』

「お前だけならな。だが今回は久遠達がいるから、敢えて此方を選択した」

「学園長から聞いた話では、貴方は桁外れの身体能力をお持ちのようです。ですから、試召戦争で挑ませて頂きます」

鉄人と高橋先生の言い分に……………。

「あの妖怪！ 余計な事を言いやがって！！」

「どうするんです旅人さん！ 召喚フィールドを展開されたらこっちが圧倒的に不利ですよ！！」

『（成程、雄二はこれも見越して2人を呼んだと言う訳か）』

光一は学園長に悪態を吐き、明久は不利な状況になった為に私にしがみ付き、私は雄二のもう一つの狙いが分かった。

『（鉄人と高橋先生を味方に付けて試召戦争で挑めば私に勝てると思っただらうな……………）』

と私がそう思っている矢先に……………。

「鉄人！ 高橋先生！ 俺達も加勢するぜ！！ 島田！ 姫路！」

「旅人！ 今迄の恨みを晴らさせてもらうわよ！！」

「お前等！ ドサクサに紛れて！」

「ずるいよ雄二！ 美波！ 姫路さん！」

「お主等ここぞとばかりに加勢するのは卑怯じゃぞ！！」

雄二達の参戦に光一達は卑怯だと罵る。

「何言つてやがる！ 教師のピンチに加勢するのは当たり前だ！」

『よく言う。私を倒すチャンスが無駄にしたくないだけだろ？』

「言ってる意味が分からねえな！ 鉄人、ソイツは任せたぞ！」

「何故お前が仕切るのかは分からんが、取り敢えず“さすらいの旅人”の相手は俺がしよう。高橋先生、貴方は久遠達をお願いします」

「分かりました」

雄二が仕切る事のに気に喰わない鉄人であったが、今は私の相手をする事に専念する事にした。

高橋先生は雄二達と一緒に光一達の相手をするみたいであるが。

『（ふむ……此処までは光一との打ち合わせ通りだな）……仕方ないねえ。光一、明久、秀吉、雄二達は任せたよ。愛奈ちゃんの下がつててね』

「はあ？（よし、俺の思った通りの展開になっているな）」

「「「え？」「」」

「「「な！？」「」」

『何かご不満でも？』

私が光一達に役割分担を言うと、姫路を除いたこの場にいた全員が驚いた顔をする。

「おい旅人さん、まさかアンター一人で鉄人と高橋女史と戦う気か！  
？（旅人さん、鉄人と高橋女史は任せたぞ）」

『まあいいからいいから、君達は早く後ろの3人の相手をしてね（了解だよ）』

「無理ですよ！　いくら旅人さんでもあの2人相手に試召戦争では勝てませんよ！？」

「ココはワシ等が高橋先生と雄二達の相手をするからお主は西村先生を！」

光一に特定のアイコンタクトをしながら会話をしており、明久と秀吉は食いついてくる。。

『確かに光一は高橋先生に一度勝ったけど……』

「それを知ってるんなら！」

『けど今回は雄二達も参戦するんだ。例え光一が高橋先生に勝ったとしても、雄二達が弱っている光一を倒そうと漁夫の利を占めそうだしね』

「！！（チツ！ ばれてたか……まあいい。どの道、あの野郎を倒せれば……）」

私が光一を説得している最中に雄二が狙いを読まれていたかと内心で舌打ちをするが、私が敗れば光一達も簡単に倒せるだろうと思っただ。

「だからってアンタに無茶は……」

『じゃあ光一達が雄二達を早く始末してから、援護してくれるかい？ それならいいだろ？』

「……………分かった！ 俺達が雄二を倒すまでやられるなよ！ 行くぞ明久！ 秀吉！」

「うん！」

「了解じゃ！」

漸く分かってくれた光一は明久と秀吉を連れて雄二達に挑もうとする。

『さてと……それでは始めますか！』

そして仮の模擬試召戦争が始まった。

おまけ

2階の階段の近くで……。

「本当に坂本の言うとおりの展開になった。これでさすらいの旅人の勝機が完全に無くなったな」

雄二の指示で動いていた近藤がコッソリと隠れて私達の状況を見ていた。

「アイツを倒せばあそこにいる巨乳ちゃんは……」

「おい貴様、さっさと其処をどけ」

「うるさいな！ 今良い所なんだよ！」

「……クズ如きが神に選ばれし者である私に口答えをするとはな」

「え？ ……な！？ お…お前は！？」

近藤が後ろを見るとそこには光一の兄である大神白夜がいた。

「邪魔だ（ドゴッ！）」

「グハッ！（ボタンッ！）」

白夜が近藤を一撃で倒して気絶させた。

「ほお？ 異物が西村先生と高橋先生を相手に試召戦争をするとはな……」

白夜は私が鉄人と高橋先生を相手にしている所を見て意外な展開だと思った。

光一の事は全く眼中に無いみたいだが……。

「異物が劣勢か……まさか貴様が此処で負ける等と言う愚かな真似はしないだろう？」

私の劣勢な状態を見た白夜は気に食わなさそうに見ている。

「異物、貴様を倒すのはこの私だ。此処で負けたら私が貴様を制裁してやる」

そして白夜が足を運んで向かったその先は……。

Fクラス殲滅物語 ?

光一、明久、秀吉が雄二達と対峙し、愛奈は私の近くにいる。

『(やれやれ、本当に光一の展開どおりになったね)』

私は雄二達に会う前の屋上で事を思い出す。

屋上で、私がFFF団を転送したのを確認すると……。

『それじゃあ雄二達に会いに行くとしますか』

「これでもう雄二には勝ち目がありませんね」

「チェックメイトと言った所じゃのう」

「後は久遠君が坂本君達にお仕置きをするんですよね？」

『ああ。光一が雄二に容赦しない所を見せる為だね』

私が明久、秀吉、愛奈と話している最中に光一だけが無言だった。

『よし！ それでは雄二達に会いにFクラスへ……』

「旅人さん、ちょっといいか？」

『ん？』

屋上から出ようとした私に光一が待ったを掛けた。

『どうしたの光一？』

「雄二の事を考えていてな」

『……ほっ』

『現在FFF団が始末されて、雄二の所には姫路と島田がいるだけだ。FFF団と言う強力な捨て駒が無くなった以上、アイツが旅人さんに勝てる確立は極めてゼロに近い』

『……確かにそうだね』

光一が現在の状況分析を言っていると私は納得する。

「雄二の性格を考えて、例え勝てない戦いでも最後まで挑もうなんて言う気は全く無い」



『だろっね、もし雄二がそう言った素振りを見せる時は何か一発逆転の策を使って……………おい光一、まさか……………』

「ああ。雄二がまだ此処に来ないと言う事は……………旅人さんを倒す策がまだ残っているって事だ」

光一の説明に私はハッと気付いた。

「け…けど光一、もしそうだとしても雄二はどうやって旅人さんを倒すつもりなの？」

「ワシ等が考える限りでは無いと思うのじゃが……………」

「雄二は恐らく、鉄人が高橋女史を味方に付けるつもりだろう」

『（あの下らん放送と島田の三文芝居で2人を味方に付けたとはな）

最初は鉄人や高橋女史が雄二を大して信用していないから味方に付くとは余り考えていなかったが、まさか光一が言ったとおりの展開になったのは、完全に私の誤算だった。

こんな事になるんだったら、始めに雄二を始末しておけば良かったと後悔していた私であつたが……。

『（まあいいや、どうせ雄二は光一の策にあつさり嵌つてやられるだろうし……）』

私が目の前の2人に負けた所で、私の無実が晴れることに変わりはないのだから。

『（でも折角だから、最強教師組に勝つてみるとするか……負けたらオールマイティ白夜に何か言われそうだし）』

異物！！ その名で呼ぶな！！！！

『（あれ？ 何やらテレパシーが届いたような気が……）』

私は何処からか白夜の声が聞こえた気がしたので勝たなければ不味いと思つた。

「ホントに大丈夫なんですか？ 旅人さん一人だけで……」

と、私が考えていると愛奈が私に話しかけてくる。

『平気平気』

「……………まあ旅人さんがそう言うんでしたら」

愛奈は私から離れようとするが……………。

『ああそうそう、君にはコレを渡しておくよ（スッ）』

「このスイッチは何ですか？」

私がスイッチを渡すと愛奈はまた何かが起きる物じゃないかと聞く。

『後で分かるよ。ついでに光一の近くに寄ったらソレをチラっと見せておいて』

「……………何のスイッチかは知りませんが、取り敢えず分かりました。」

そして愛奈は私から離れて光一の所へと向かう。

『待たせてすいませんね。では始めましょうか』

「貴様が何故、自分から俺と高橋先生に試召戦争で挑むのかは知らんが、随分といい度胸だな」

「学園長から話は聞いています、貴方に挑む際には召喚獣を使って戦うようにと」

『（うん、全く持ってその通りです）』

私が“抹殺物語”を終えた数日後に再び学園長に会っていて、自分も試召戦争に混ざる事が出来る様にして欲しいとの要請をした。最

初は嫌な顔をして断った学園長であったが、多額の寄付金を渡した際には快く引き受けてくれた。学園長は私が試召戦争に参加する場合、自身に必ず痛みがフィードバックされる様にとの最低条件を出されたが、私自身としては特に問題無いので了承した。

と言う訳で、私は生身でも試召戦争に挑むことが出来るようになっていたのである。

「俺としては本当なら貴様と拳で語り合いたかったが、状況が状況だからな。ここは確実に勝たせて貰う」

「教えて差し上げましょう、貴方のやる事が無謀だと言う事を……」

『フフフ……どうかな?』

「……………」

私の余裕そうな表情に鉄人と高橋先生は警戒している。

「取り敢えず、お前を連行する為に全力で叩き潰す!! サモン!」

「では私も……サモン!!」

2人は召喚獣を召喚した。

が……。

《(ギューイイイ~~~~ン!!!!!!)》

《我は誇り高き学年主任、高橋洋子！》

2人が出ると思っていた召喚獣とは全然違っていた。

「何だこれは！？」

「私達の召喚獣が！？　　と言いかどうして私があんな恥ずかしい衣装を！？」

『へえ〜良く似合っているじゃないですか』

鉄人と高橋先生が戸惑う中、私は似合うと言う。

二人の召喚獣は戦国BASARAに出てくるキャラクターで……

・鉄人の召喚獣……甲冑に身を纏って豪槍を持っている“戦国最強本多忠勝”の格好をしている鉄人

・高橋女史の召喚獣……傭兵集団雑賀集の頭領　雑賀孫市の格好をしている高橋女史

であった。

『フフフフ……そんな姿に変えられていたなんて予想外ですよね（ボソツ）』

「……まさか貴様は試召戦争の参加以外にも……」

「変えたのですか……学園長に内緒でシステムの内容を……」

『あら聞こえてました？ 安心して下さい、この模擬試召戦争が終わったら元に戻るように設定してありますから』

「……どうやら貴様には島田にやった猥褻行為の他にも聞く事が増えたみたいだな」

「後でじっくりと聞かせて貰います」

『「自由」……私を倒せたら話ですけど！（チャキッ！）』

私は刀を抜いて二人の召喚獣に挑んだ。

光一達のほうでは……。

明久と秀吉と一緒に雄二達と対峙している光一であったが……。

「（さてと、此処までは旅人さんと屋上で打ち合わせした通りの展開になっているな。旅人さんには悪いが、鉄人と高橋女史を足止めさせてもらっよ）」

実はこの役割分担は既に決まっていた事だった。あの時は私が鉄人

と高橋女史と戦うのを渋々と従った光一であったが、演技であったのだ。明久と秀吉もそれは了承済みである。

「（雄二、俺がお前の考えを見抜いていないと思ってたみたいだが、それは大間違いだ）」

そして光一は屋上での事を思い出す。

再び屋上での会話に戻る。

『で？ その雄二がどうやって鉄人と高橋女史を味方に付けるんだい？』

「恐らく雄二は旅人さんがこれまでやって来た悪行を言いふらすつもりだろう」

『……………悪行は否定しないけど、それはバカな事をした雄二の自業自得じゃないのか？』

悪行と言う単語に引っ掛かる私であったが、否定出来ない為に話を続けた。

「確かにそうだが、あのゴリラはそんなの関係無く、意地でもアン

夕に仕返しをしたい筈だ。例え卑怯な手を使っても……」

『「」……ありえる「」』

「そ…そうなんだ……」

私、明久、秀吉は光一の言い分に納得し、愛奈は雄二がどういう奴かが分かった。

『しかし鉄人はいいとして、どうして高橋女史までを味方に付ける必要がある？ あの先生が私の相手をした所で3秒も持たないよ』

「……3秒って」

「……速すぎじゃ」

「……」

「確かにそうだが、雄二は高橋女史を味方に付けるのは……旅人さんに試召戦争で挑む為の布石だ」

明久、秀吉、愛奈が呆れる中、光一は高橋女史を味方に付ける理由を言う。

『……アイツは召喚獣を使って私と戦う事が出来るって事は知らない筈だよ？』

私はここにいる光一達と学園の教師達しか知らない秘密をどうやって知ったかを光一に聞く。



「この間、雄二が教室でブツブツと呟いている時に偶然聞こえたんだ。“あのクソ野郎は試召戦争に参加出来るのか……なら好都合だ”ってな」

『……………何処かで盗み聞いたか』

「てな事で、雄二が高橋女史を味方に付ける理由はそう言う訳だ」

光一の説明に私は大いに納得する。

『成程ねえ、だったらそうさせない為にフィールドを展開出来ないようにした方がいいかもな（スツ）』

私が文月学園のフィールドを展開出来ないように指を鳴らそうとするが……………。

「待て旅人さん、アンタはシステムを弄る事も出来るんだよな？」

『可能だけど……………』

「だったら俺に考えがある、旅人さんには悪いが、もし鉄人と高橋女史が試召戦争で挑む事になったら一人で相手をしてくれないか？」

『それは構わないけど、光一達が雄二を倒すのか？』

「ああ、雄二が試召戦争で挑んだ事を後悔させる為の策がある……………」

「（しかしまあ、鉄人と高橋女史の召喚獣はホントに似合ってるな。あそこまでしつくりするとは予想外だった）」

光一が考えた策の一つで、私に特定個人の召喚獣の外見と中身を変えて欲しいとの事であった。

「（後は雄二達が召喚獣を出せば……勝手に自滅してくれる）」

と、光一が慌てふためいている雄二を見る。

「あの野郎！ まさか俺が試召戦争で挑むのを分かった上で、召喚システムを弄ってやがったのか!？」

「どうするの坂本!？ これじゃ坂本の作戦が……」

「島田！ 余計な事を言うな!」

「あ……ご……ごめん」

思わぬ事態に雄二が顔を歪ませていた所を、島田が焦ってポロツと口を滑らせたがすぐに黙らせる雄二であった。

が……。

「やっぱりそう言う事だったか」

「ホントに光一と旅人さんの言った通り、雄二は悪知恵を働かす事に長けているんだね」

「まあ、そこが雄二らしいじゃろう」

光一、明久、秀吉はバツチリ聞いていた。

「!!! チツ! バレちまったか……まあいい、こっちの目的が達成された以上は旅人にもう勝ち目はねえ。見た所、鉄人と高橋女史の召喚獣は凄く強そうだし、あの野郎は逆に自分から勝率を下げてみたいなものだ。やられるのは時間の問題だな。そしてあのクソ野郎が倒されたら、鉄人と高橋女史がすぐこっちに来てお前等もすぐに倒されるシナリオになる」

「旅人さんの状況分析か……流石は元神童と呼ばれただけの事はあるな（だがな雄二、その分析はすぐに覆されるぞ）」

光一は一応、雄二の冷静な状況判断は認めているが、内心では甘い分析だと思っている。

と、そんな時……。

「久遠く〜ん! ボク応援してるからね〜!(チラッ)」

「!!!! ああ、頑張るから俺の勇姿を見てくれ(よし、仕込み

は完了だ」

光一は愛奈がチラッと出したスイッチを確認すると、何事も無かったかのようなフリをして愛奈に手を振る。

「随分と余裕な顔をしてやがるな光一、お前等の頼みである旅人が負けそうだったのに……」

「どうかかな？ 旅人さんがそう簡単に負けるとは思えないけど」

「実戦ならそうかもしれないが、試召戦争だったら話は別だ」

「そうかい、だったら早く旅人さんを援護する為にお前等をさっさと倒させてもらおうよ！ サモン！」

「「サモン！」」

光一、明久、秀吉が召喚すると……。

《過激派筆頭、久遠光一！ 推して参る！！》

《君の相手はこの……吉井明久だ》

《光一と明久の絆の為に！ 木下秀吉 いざ参る！》

光一は“伊達政宗”、明久は“片倉小十郎”、秀吉は“徳川家康”の格好をしている召喚獣であった。

「流石は旅人さん。上手く出来ているじゃないか」

「僕が片倉小十郎……嬉しいな」

「ワシが徳川家康とは……これはこれでいいかもしれん（男として見られる事じゃし）」

大変満足している光一達であった。

「お前等の召喚獣も変わってんのかよ!!」

「そんな事より坂本！　ウチ等も早く召喚しないと不味いわよ!!」

「そうだな！　行くぞ島田！　姫路!!」

「うん！」

「は……はい……」

「」「サモン!」「」

雄二と島田が勢いよく召喚する中、姫路は余り乗り気ではなかったが一応召喚した。

そして雄二達の召喚獣は……

Fクラス殲滅物語 ？

雄二達が召喚獣を出すと……。

「……………」

「おお〜雄二と島田の召喚獣はよく似合ってるじゃないか」

「美波の召喚獣がちよつと……」

「姫路の方は何と言うか……」

雄二、島田、姫路が無言の中、光一、明久、秀吉は見て思った事を言う。

何故なら……。

《坂本の本分とは！ 一に美波！ 二に美波！ 三に美波だ！ 坂本雄二、最も大切な者を守ろう！ この命に賭けて！》

《坂本の本分とは！ 一に家！ 二に武芸！ 三に雄二よ！ 坂本雄二が愛人！ 美波、雄二の所にある所！》

《時を穿つたら、此処に辿り着きました！ さあ、それを証明しましょう！》

雄二の召喚獣……“前田利家”の衣装を身に纏い、豪槍を持っている雄二

島田の召喚獣……“まつ”の衣装を身に纏って、薙刀を持っている  
島田（胸はペタンコである）

姫路の召喚獣……“鶴姫”の衣装を身に纏い、弓を構えている姫路  
言うまでも無く、この3人の召喚獣も私によって変えられていたの  
である。

「旅人のクソ野郎が……！！ 俺達の召喚獣まで変えていやが  
つたな……！！！！！！」

「何でウチが坂本の愛人なの！？ 旅人はウチを何だと思ってるの  
よ……！！」

「可愛い衣装ですね」

雄二、島田が憤慨しており、姫路は召喚獣を見てうっとりしている。

「いやいや、旅人さんはホントに良い仕事をしてくれたよ。まあそ  
れを考案したのは俺だけ……（けど何で旅人さんは姫路の召喚獣  
を鶴姫にしたんだ？ ……まあいいか、俺としては雄二を始末出  
来れば……）」

光一は私が姫路の召喚獣がどうして鶴姫になっているのかが疑問で  
あったが、当初の目的が変わっていないので気にしない事にした。

「光一！！ コレはてめえの仕業だったのか！？」

「アンタは何て事をしてくれるのよ！？」

「いいじゃないか、お前等は愛人関係だから文句無いだろ？」

「「大有りだ！（よ！）」」

サラツと言う光一に、雄二と島田は猛抗議する。

「てんめえ！！ 人を愛人関係に仕立て上げたのにも拘らず、召喚獣までこんな風にしゃがって！！」

「絶対に許さないんだから！！ もうアキに完全に誤解されたじゃない！！」

「雄二、島田とはもう愛人なんだから、いい加減に事実を認めたらどうだ？ それと島田、誤解されたって言うが、お前の場合は自業自得だろ？」

「「愛人じゃないって言うてるだろうが！！（でしょうが！！）」」

「息ピッタリじゃないか（よし、そろそろだな）」

雄二と島田を賛辞する光一は仕掛けの最終段階に入ろうとする。

「（あゝあ。雄二と美波は完全に逆上してるね……）」

「（光一の思惑通りに動かされておるとは知らずに……）」

「私が巫女だなんて……ちょっと恥ずかしいですけど嬉しいです…

…」

明久と秀吉は光一の掌で踊らされている雄二と島田をほんの少しだ



け気の毒に思い、姫路は私に感謝しながら自身の召喚獣を見て感激している。」

「（何故か知らんが姫路は最初から戦う気が無かったみたいだな。旅人さんがソレを見越して姫路の召喚獣を鶴姫にしたって事が……なら好都合だ）……江藤！ アレを押せ！！」

「え？ あ…うん、分かった（ポチッ！）」

「アレだと？」

光一は愛奈に例のスイッチを押せと指示すると、愛奈はソレを押した。雄二はスイッチを押した愛奈を見ながら光一のやる事に疑問を抱く。

「よし、後は待つだけだ」

「光一、てめえ何をしやがった？」

「俺が教えなくても、後で分かるよ」

「（何だ？ 光一は一体何をやるうとしてやがる？）」「

「坂本！ そんな事はどうでもいいから、さっさと久遠を倒すわよ！！！」

「！！！！ 待て島田！！！」

島田の召喚獣が光一の召喚獣に攻撃をしようとし、雄二が待ったを掛けるが……

場所は変わってAクラス……。

「またFクラスが騒ぎを起こしているみたいね……」

「光一君達は大丈夫かな？」

「大丈夫でしょ？ 旅人さんがいるんだから」

「それもそうだね」

優子と工藤が今回の騒動に呆れながらも、私がいれば安心だと思っ  
ていた。

「それにしても、Fクラスはホントに騒動を起こすのが好きみたい  
ね」

「今回は何が原因なのかな？」

「どうせまた光一と吉井君の恋愛に関して、また騒動を起こしてい

るんでしょ……」

「けどさあ、それはもう前回の騒動で旅人さんが鎮圧させたんだよ。また同じ事をするとは思えないんだけど……」

「……確かにそうね。一体何が原因で……」

工藤の言い分に優子はどうしてまた騒動を起こしているのかを考えていると……。

「……2人とも、ちょっといい？」

「代表？」

「どうしたの代表、ボク達に何か？」

霧島が優子と工藤に声を掛けてきた。

「……旅人さんから聞いたんだけど、優子も私と雄二の結婚式の内容を考えているって本当？」

「勿論よ、アタシは友人代表としてのスピーチを任されているから」

「……ありがとう、優子。結婚式が待ち遠しい」

「焦らないで代表、結婚式は逃げたりしないんだから」

「……（坂本君も光一君と優子と旅人さんの前では絶対に逃げられないね……）」

霧島と優子のやり取りを見た工藤は雄二を気の毒だと思った。

と、そんな時……。

パツ！

「何だ？ スクリーンが突然……」

「映ってるのって……久遠君達じゃない」

「久遠達が何で坂本達と試召戦争をしているんだ？」

突然、スクリーンから光一達が雄二達と試召戦争が映り出した。

因みにこれは愛奈が押したスイッチが、光一達の状況が映し出される仕掛けになっていたのである。

「光一……召喚獣が……」

「何でゲームのキャラクターになってるの？ 吉井君達も変わっているけど……」

「……………」

優子と工藤は光一達の召喚獣を見て疑問を抱いていたが、霧島は雄二と島田の召喚獣を睨むようにしてジッと見ている。

「(ゴゴゴゴゴゴ！！！！)……優子、愛子」

「な……何かしら？」

「ど……どうしたの代表？ 何か怖い顔をしてるけど？」

「……雄二と島田の召喚獣を見ると、何故か不快な気分になるのはどうして？」

「そ……それは………」

「え……えつとお………」

ドス黒いオーラを撒き散らす霧島を見た優子と工藤はすぐに答える事が出来なかった。

言ったら最後、霧島が坂本と島田を確実に殺しそつだと思つ位に……。  
が……。

「坂本と島田の召喚獣つて戦国BASARAに出てくる“前田利家”と“まつ”だったな」

「確か2人は夫婦の筈だ」

「何だ。坂本と島田つて愛人関係じゃなくて、実は夫婦みたいな関係だったのか？」

「意外な関係だな」

スクリーンを見ていたAクラスの男子達が暴露してしまった。

それを聞いた霧島は……。

「（ギリリ！！！！）…………ユウジトシマダガフウフ？ ナニソレ？」

「ヒイツ！ だ…代表！ 落ち着いて！！」

「あ…あれは召喚獣だよ！！」

目を紅く光らせて幽鬼になったかのような顔になったので優子と工藤は何とか怯えながらも宥めようとする。

しかし……。

《雄二、貴方の体はとても遅いから、すぐに抱きしめて欲しくなっちゃう》

《そうか？ 俺は美波を見るとすぐに抱きたくなるぞ？ その綺麗な肌や髪を見るとついな……》

《もう、雄二はエッチなんだから》

《ははは、しょうがねえだろ。美波が綺麗なんだから》

「……………（汗）」

スクリーンから雄二と島田の召喚獣がとんでもない発言をしてしま

ったので、優子と工藤は大量の冷や汗を流しながら一巻の終わりだ  
と思った。

「……フフ……フフフフ……ユウジ……ワタシヲウラギッタノネ？」

「あ……あの……代表、アレはね……」

「しょ……召喚獣が……勝手に言ってるだけで……」

「……ユウジ……シマダ……アナタヲチヲコロシテ……ワタシモシ  
又……」

バビュンッ！！

優子と工藤の説得を無視した霧島は物凄い速さで教室から出た。

「……行っちゃった」

「……はつきり言って、今の代表を止める事が出来るのは旅人さ  
んだけだよ……」

「旅人さん、貴方は一体何て事をしてくれたのよ……」

優子と工藤は召喚獣を変えたのは私に対してとんでもない事をして  
くれたと思った。

だが2人は勘違いをしている。これは光一が考えた策だと言う事を  
……。

場所は2階の廊下に戻る……。

「おい雄二、霧島と言う奥さんがいながら島田との浮気はいけ  
ないなあ……」

「ふざけんな！！ てめえが仕組んだんだろうが！！ それに俺は  
まだ独身だ！！」

「アンタはドコまでウチ等を陥りたいのよ!？」

「旅人さんを陥れようするお前等が言う台詞じゃないけど……」

雄二と島田の突っ込みに光一はすぐに切り返す。

「もう許せねえ！！ 島田！ 光一をすぐにぶっ倒すぞ！！」

「ええ！！ 覚悟しなさい久遠！！」

完全に切れた雄二と島田は光一に襲いかかろうとしたが……。



「お？ もう来たか……」

「……ユウジ……シマダ……」

「しょ……翔子!？」

「霧島さん!？」

何時の間にか霧島が来ていた……それも目を紅く光らせて幽鬼の顔になっている霧島が。

「な……何で翔子が此処にいるんだ!？」

「違うのよ霧島さん!! これは久遠の策略で!！」

「……イイワケナンカキタクナイ……サモン!」

聞く耳を持たない霧島は召喚獣を出した。

その召喚獣は……。

《ユウジ……ワタシトイツシヨニジゴクヘイキマシヨウ?》

織田信長の妹君である“お市”の格好をした霧島であった。

しかも『参』での“お市”で、霧島の地面の周りには黒い手が出て  
いる。

「」  
「」

「……サアユウジ……ワタシトイッシヨニ……シンデ？（ダッ！）」

《……イッシヨニアソボウ？（ダッ！）》

狂化した霧島は召喚獣と一緒に雄二と島田に襲い掛かって来ると……。

「逃げるぞ島田！！（ダッ！）」

「分かってるわよ！！（ダッ！）」

雄二と島田は試召戦争がどうでもよくなったかのように霧島から逃げるのであった。

「（ダダダダダ！！）光二……！！ てめえ覚えてろよ……！！！！」

「（ダダダダダ！！）この恨みは絶対忘れないんだから……！！！！！！」

「……ニガサナイ……！！」

そして2人は霧島との地獄の追いかけつこが開始された。

「はっ！ お前等が下らない事をするからだろつが」

「けど光二、ちょっと酷くない？」

「雄二と島田が霧島に捕まるのも時間の問題じゃろう……」

「大丈夫だ。あの2人は必死に逃げているから、そう簡単に捕まらないだろう……さてと、おい姫路」

光一は明久と秀吉に問題無いと言つと、未だに召喚獣を見ている姫路に声を掛ける。

「え？ ……あ…はい！」

「お前はどつする気だ？ このまま俺達と戦つか？」

「……………いえ、棄権します。それでは……………（タッタッタッタ）」

「お…おい！」

姫路が棄権発言をしたと同時にその場から去つて言った。

「どつしたんだらう姫路さん、彼女だけでも僕達と互角にやり合えるほどの実力はあるのに……………」

「そう言えば姫路は雄二と島田と違って、あまり戦う気が無かったみたいじゃの」

「……………（旅人さんは姫路が戦う気が無いと分かってたのか？）」

姫路の行動に疑問を抱く光一達であった。

「まあいい。姫路が自分から棄権してくれたなら、こっちとしては都合が良い。俺達は早く旅人さんの援護に……」

光一が私の所へ行こうとしたが……。

ドッカーン!!!

「「「!!!!!!」」」

いきなりの爆発音に足を止めた。

「な……何だ!？」

「何!? 何があつたの!？」

「……あそこを見るのじゃ!!!」

「「……な!？」」

秀吉が私がいる所へ指をさすと光一と明久は驚愕した。

その先には……。

「くっ! 西村先生、申し訳ありません」

《フハハハハ、これで終わりですよ高橋先生》

召喚獣であろう“松永久秀”の格好をした私が高橋先生の召喚獣の背後を取って剣を突きつけていた。

《高橋先生、卿は単純でしたなあ。私が態と隙を見せただけで、こんな簡単に引つ掛かってくれるなんて……》

「……………」

《フフフフフ……では貴方の誇りを頂きますか（ザシュッ！）》  
私の召喚獣が止めを指すと、高橋先生の召喚獣が消えた。

「高橋先生！！」

『フフフフフ……次は西村先生、貴方の番ですよ』

「くっ！ 貴様！！」

鉄人の召喚獣とデカイ刀を持った私が対峙していた。

「……………ど…どうなっているんだ？」

「ち…さあ…………」

「ワシにも分からんのじゃ」

未だに状況を把握できていない光一達は呆然となっているばかりであり……。

「……………ふんっ。あれ位はしてもらわないとな」

傍から私の戦いを見ていた白夜はあたかも当然の様に言い放っていた。

Fクラス殲滅物語 ？

《フハハハハハ……高橋先生、卿は暫くそこで大人しくして貰いますよ》

「くっ！」

《戦いに敗北した者は勝者に黙って従う、それが世の心理ですよ》

高橋先生を嘲笑う私の召喚獣に……。

「な……何で旅人さんが“松永久秀”に？」

「アレって悪役キャラの筈だよね？」

「しかし……旅人殿はどうやって高橋先生を倒したのじゃ？」

光一・明久・秀吉は戸惑うばかりであった。

私の召喚獣がどうやって高橋女史を倒したのかは少し時間を遡る。

「……どうやら貴様には島田にやった猥褻行為の他にも聞く事が増

えたみたいだな」

「後でじっくりと聞かせて貰います」

『ご自由に……私を倒せたら話ですけど！（チャキツ！）』

私は刀を抜いて二人の召喚獣に挑んだ。

『まずは銃の扱いに慣れていない高橋先生！ 貴方だ！！』

「初めて使う武器ですが、甘く見ないで下さい」

「さすらいの旅人！ 俺を忘れないで貰おうか！」

ブオンツ！！

『うおっと！！』

高橋女史の召喚獣に先制攻撃をしようとした私であったが、鉄人の召喚獣が阻むかのように攻撃してきたので回避せざるを得なかった。

「高橋先生、貴方は援護をお願いします」

「分かりました」

「それと此方が2人とは言え、絶対に気を抜かないで下さい。あの男は何を考えているか予想が付きませんので」



「ええ。何しろ召喚システムを独自に変更する事が出来るお方ですので、まだ何か隠しているのかも知れませんし」

『……………其方が凄く有利な立場だと言うのに、そこまで警戒しますか？』

2人の話には心外だと言わんばかりに突っ込む。

「確かにそうだな。だが俺の勘がこう言ってるんだ。お前みたいな得体の知れない男には、全力を持って戦わねば危険な気がするとな」

『フツ……………それは買い被り過ぎですよ!!（ダツ!!）』

私はターゲットを変更して鉄人の召喚獣に挑んだ。

『そらっ！（シャキンッ!）』

「甘いわ!!」

ガキンッ!!

『なっ!?!』

鉄人の召喚獣を居合いで切り伏せようとした私であったが、鉄人の召喚獣が腕を出して刀を弾いた。

「どっした！ 貴様の攻撃はその程度か!?!」

『くっ！ 思っていた以上の硬さだな！ 流石は本多忠勝だ!』

「今度は此方から行くぞ!!」

ブオンツ!

『やばっ!(バツ!)』

「私もいる事をお忘れなく」

ダアンツ! ダアンツ! ダアンツ!

『ぐっ!(カンツ! カンツ! カンツ!)』

鉄人の召喚獣をかわした私であったが、高橋女史の召喚獣も攻撃を仕掛けてきたので私は銃弾を刀で弾く。

が……。

「隙あり!!」

ブオンツ!

『げっ!(ガギンツ! グググググ!!!)……っっっ!』

鉄人の召喚獣の豪槍が迫ってきたので私は刀を使って受け止めた。

『「」…これは中々…重たい一撃ですなあ…（グググググ！！！）』

「その細い刀で受け止めるとは中々やるではないか」

『そ…それはどうも！（ググググググ！！！）』

鉄人の召喚獣の攻撃を今でも防いでいた私であったが……。

「ですが“さすらいの旅人さん”、終わりです」

『げっ！ やばっ！！』

高橋女史の召喚獣の銃身が私に狙いを付け……。

ダアンツ！ ダアンツ！ ダアンツ！ ダアンツ！  
ダアンツ！

『くそっ！（バツ！）』

撃ってきたが、持っている刀を捨ててかわした。

『はあっ…はあっ……今のはあつぶねえ〜！ 刀を捨ててかわさなかつたら即座にやられてたよ……』

「……………貴方の身体能力は本当に凄いですね。銃弾を刀で弾くだけでなく、かわす事も出来るんですから」

私が何とか交わす事に安堵している中、高橋女子は私に呆れながら賛辞を送っていた。

『いや、それ程でも……』

「ですが、刀を捨てた貴方にはもう勝ち目はありませんよ？」

『……………』

「高橋先生、油断しないで下さい」

「分かっています。しかし……」

私を最後まで侮るなと言う鉄人であったが、高橋女子は提案を出してきた。

「さすらいの旅人さん、出来れば降参してもらえませんか？」

「な!？」

『……………何のつもりです?』

高橋女史の提案に鉄人は驚き、私は顔を顰める。

「しかし高橋先生、奴が降参するとは……」

「西村先生、私達は彼を指導室へ連行するのです。試召戦争で勝つ為ではありません。それに学園長から聞いた話では、彼は吉井君と同様に相手に受けたダメージを受けるそうです」

「……………まあ確かにそうですが、それは奴が自ら望んだ事です」

「もし続けるとしたら、我々が彼を甚振る事になってしまいます。それは教師として許されません」

「……………」

高橋先生の言い分に鉄人は分かつてはいるが、私がそんな簡単に諦めるとは思えなかった。

「と言う訳ですので、貴方には降参してもらいます。いいですね？」

『私は自分から降参する気はないんですけど……………』

「この状況下で貴方が勝つ確立は無いと言うほどに等しいです。それを分からない貴方ではない筈です」

『……………』

「私としても、これ以上は無益な戦いをするつもりはありません。もし貴方がこのまま降参してくれれば……………」

高橋女史が言っている最中に……………。

『生憎、私はそこまで素直な人間じゃないですよ。高橋先生の提案は却下させて頂きます』

「なっ!?!?」

『もし私がここで降参なんかしたら、相方の光一にどやされてしまいますからね。ですから、最後まで続けます』

私は高橋女史の提案を蹴った事によって、高橋女史は驚いた顔をす  
る。

「……………本当に降参しないでよろしいのですか？ このまま続  
けると、貴方を甚振ってしまう事になりますか？」

『降参するより、華々しく散って負けたほうがマシですよ』

「高橋先生、コイツに何を言っても無駄です。久遠と一緒に行動し  
ているこの男が早々に降参をするのはありえません」

「……………なら仕方ないですね。貴方を戦闘不能にしてから指導室  
へ連行させて貰います」

鉄人に言われた高橋女史は試召戦争を続ける事にした。

「だがさすらいの旅人、この状況をどうする気だ？ いくら貴様と  
言えども勝てないのは分かっている筈だ」

『確かにそうですね、このまま戦っても私の敗北は自明の理』

「それが分かっているなら……………」

『ですから、此処は助っ人を呼ばせて頂きます』

『助っ人だと？』

私の助つ人発言に鉄人は不可解な顔をする。

「貴方の言う助つ人とは久遠君達の事ですか？ ですが彼等は今、坂本君達と試召戦争中ですよ」

『光一達じゃないですよ高橋先生。私の助つ人は……サモン！！』

「「なっ!?!」」

私が召喚獣を呼ぶことに鉄人と高橋女史は驚愕する。

そして……。

《卿は何が欲しい？ 物か？ それとも私の命か？ ならば欲望のまま奪うといい。それが世の心理》

私が呼び出した召喚獣は、“松永久秀”の格好をした私であった。

『……………私の場合はランダムで呼び出されるが……………よりもよつて松永かよ……………』

「まさか召喚獣まで呼ぶ事が出来たとは……………」

「貴方は何処までシステムに介入を……………」

私が召喚獣を呼んだ事に顔を顰める中、鉄人と高橋女史はシステムを弄った私に驚いていたが……………。

《そう言わないで下さいよ、元はと言えば主がランダムで呼ぶように設定しているんですから》

『ああ、そうでしたねぇ』

「「なっ!?!」「」

私の召喚獣が意志を持って私と話している事に更に驚く。

『まあ呼んじまったのは仕方ない。おい、ここは分担して倒すぞ』

《分かっていますよ。では私はあそこの見目麗しい御婦人を……（  
チャキッ!）》

『あっそ。それじゃあ私は西村先生を倒すから（パチンツ！ズン  
ツ!）』

私の召喚獣が十束の剣を持ち、私は指を鳴らしてデカイ刀を出した。

《ほお〜中々大きい刀ですな》

『これは斬岩刀 “青嵐” って言ってな。島津義弘が使っていた刀  
だ』

《それはそれは。出来れば欲しいですなあ……》

『高橋先生に勝てたらあげるよ』

《そうですね……では！（ダッ!）》

私の召喚獣が高橋女史の召喚獣に襲い掛かった。



「！！！！ 高橋先生！ 驚くのは後です！ 今は試召戦争に集中を！」

「は…はい！」

鉄人が放心している高橋女史に湯を入れると、高橋女史は気を取り直した。

《ハハハハハ、本当に卿は見目麗しいですなあ》

「貴様の相手はこの俺だ！！！」

《西村先生に用はありませんよ。私は高橋先生と戦いたいのです》

「貴様には無くても俺には用がある！ 覚悟しろ！！！」

鉄人の召喚獣が私の召喚獣に攻撃を仕掛けるが……。

『（ガキンツ！）やらせませんよ』

「クツ！ 貴様か！」

私が青嵐を使つて受け止めた。

『流石は“青嵐”だ。西村先生の攻撃を受けてもビクともしない』

《では私はその隙に（ダツ！）》

「ま…待て！！！」

『貴方の相手は私ですよ、西村先生』

私と鉄人の召喚獣の小競り合いが続く。

《フッフッフ、では高橋先生、始めましょう》

「くっ！」

ダアンッ！ ダアンッ！ ダアンッ！ ダアンッ！

《おっと！（ヒュッ！） 危ないですなあ！！（ヒュヒュッ！）》

高橋女史の召喚獣は私の召喚獣に銃を放つが難なくかわされている。

「さすらいの旅人さんと同様に、貴方も簡単にかわす事が出来るみたいですね」

《それ程でも。けどいけませんなあ、そんな物騒な武器は》

「私とて好きでこんな武器を使っているではありません」

《では卿の本来の武器は違つと？》

「私の武器は鞭です。あの人が余計な事をしなければ、貴方を簡単に捕まえる事が出来たのですが……」

《それは残念ですねえ。主に代わって私が謝りますよ》

「……………貴方は私をバカにしているのですか？」

高橋女史は私の召喚獣の話し方が気に入らないのか顔を顰めている。

《とんでもない、私は本心で言っているのですよ》

「……………とてもそうは思えませんね」

《そうですね。……………では戦いを続けるとしましょう(ダッ!)》

「!!!」

《隙だらけですよ(ザンッ! ザンッ! ザンッ!)》

「しまったっ!」

私の召喚獣は一瞬で高橋女史の召喚獣の懐に入って滅多切りをしていた。

《銃は不便ですねえ。懐に入られると、こんな簡単に……………》

「くっ!」

高橋女史の召喚獣は私の召喚獣から離れて距離を取る。

《形勢が変わりましたなあ、高橋先生?》

「私を甘く見ないで下さい!!!」

ダアンッ！ ダアンッ！ ダアンッ！

《おお恐い恐い（ヒュヒュッ！）》

高橋女史の召喚獣は連続で私の召喚獣に撃ち続け、私の召喚獣はずつとかわしていた。

「貴方に近づかれなければ、此方に勝機はあります！」

《フム……このままでは卿に近づけられませんねえ。では……》

高橋女史の召喚獣の銃が玉切れになったのを確認した私は足を止めて……。

《ごうしましょう（パチンッ！ ドッカーーン！）》

「なっ！？」

指を鳴らすと、私の召喚獣と高橋女史の召喚獣の間から爆発を起しました。

いきなりの爆発で、高橋先生は驚いて目を見開いた。

煙が晴れると……。

「……………いない、まさか彼は自害を……………」

《何故私が自害しなければいけないんですか？》

「！！！！」

私の召喚獣の声が聞こえた方へ顔を向けると、そこには私の召喚獣が高橋女史の召喚獣の後ろを取って剣を突きつけていた。

「あ…貴方……」

《あんな爆発で私が自害すると本気で思っていたのですか？》

「くっ！ まさか私が……」

《高橋先生、卿は単純でしたなあ。私が態と隙を見せただけでこんな簡単に引っ掛かってくれるなんて……》

「……………」

《フッフッフ…では、貴方の誇りを頂きますか（ザシュッ！）》

私の召喚獣が止めを刺すと、高橋先生の召喚獣が消えた。

Fクラス殲滅物語 ？

『さあ西村先生、後は貴方一人だけです』

「くっ！ まさか貴様が召喚獣を出すとは完全に誤算だった……」

“青嵐”を使って鉄人の召喚獣の武器を受け止め続けている私に、鉄人はしてやられたと言う顔をしていた。

『フフフフ……流石の西村先生でも召喚獣の事までは考えていませんでしたか？』

「一応は考えていたが、それは取り越し苦労だと思つて大して気に留めていなかった……」

『しかし私が召喚して予想外だったと……残念でしたね』

私が笑みを浮かべて鉄人が悔しそうな顔をしていたが……。

「……………高橋先生がやられた以上、俺だけでも貴様を倒す……」

『……！！（グググググ……） そうこなつくちゃ……！！（バツ）』

表情を一変して私を全力で倒そうとした。私は鉄人の召喚獣との鏖迫り合いを止め、距離を取って構える。

『では始めましょうか（スッ）』

「……………来い……」

『(ダッ!) デヤアアアア~~~~!!!! (ブオンツ!!!)』

私は鉄人の召喚獣に挑み、“青嵐”を使って攻撃をした。

.....

ガキイイイイインツ!

私の“青嵐”と鉄人の召喚獣の槍が剣戟の音を激しく奏でる。

白熱する私と鉄人の召喚獣の戦いに……。

「す……すげえ……旅人さんが鉄人の召喚獣と互角にやりあってる……」

「凄まじい戦いだよ……」

「しかも戦いが戦国BASARAその物じゃ……」

「ボク初めて見た……旅人さんが本気で戦っている所を……」

光一達は息を呑んで見ていた。

そして……。

《ハツハツハツハ。さすがは我が主だ、私と高橋先生との戦いが見  
戯に見えてしまう》

「さ……さすらいの旅人さんがこれ程までとは……」

私の召喚獣と高橋女史も観戦するかのように見ており……。

「……………ほお、中々やるではないか」

傍で見ている白夜も賞賛している。

「ね……ねえ光一、僕達も旅人さんの戦いに参加したほうが……」

「止めておけ、あんな戦いに俺達が割って入ったら邪魔になるだけ  
だ」

明久が私に援護しようとしたが、光一がそれを止めた。

「け……けど、光一の作戦では僕達が雄二達を倒した後、旅人さんに  
加勢するって話だったじゃないか」

「その予定だったんだが……あれじゃ俺達ではどうしようもない」

「明久よ、本当は光一とて助太刀したいのじゃ。だからここは堪え



るのじゃ」

「吉井君、ここは旅人さんに任せようよ」

「……………分かったよ」

それでも言おうとした明久であったが、光一の腕が震えながら手を握り締めているのを見て渋々と従った。

「（旅人さん、アンタとは一度ガチで戦って見たいよ……………）」

戦いを見ている光一は私に畏怖しながらも、頭の中では私と全力で戦いたいとの闘争本能が訴えていた。

……………

私と鉄人の召喚獣との戦いが5分経つと……………。

『はあっ……………はあっ……………はあっ……………はあっ……………』

「はあっ……………はあっ……………はあっ……………はあっ……………」

私と鉄人の召喚獣が再び距離を取って、互いに息を切らしていた。

まるで数時間戦っていたかのような息の切らし方だ。

『はあっ…はあっ…どうしたんですか西村先生？ 私とは違って召喚獣を操っているだけなのに、随分とお疲れですねえ』

「はあっ…はあっ…まさか貴様がここまでやるとはな……」

私は所々でダメージを負って重たい武器を振り回して息が上がっているのに対し、鉄人は大量の汗を掻いて息が上がっていた。

どうして鉄人がこんなに息を切らして汗を掻いているのかと言うと、鉄人は全神経を使って召喚獣の操作に専念していたのだ。少しでも気を抜けば最後、私にやられるからである。

それに加えて実戦さながらの戦いだったので鉄人のアドレナリンが高まり、この5分の戦いが数時間戦っているような感覚になって大量の汗を掻いていると言う訳だ。

『（こんな戦いは私も初めてだよ）』

最初は遊び気分で試召戦争を出来るように設定した私であったが、まさかここまでの戦いになったのは予想外であった。

『はあっ…はあっ…私はバトルジャンキーではありませんが、こう言う戦いも悪くないですね』

「はあっ…はあっ…俺としては貴様と直に戦ってみたいがな」

『ハハハ……それは勘弁！！（ダッ！）』

私は再び鉄人の召喚獣に挑み……。

ガンツ！ ガキツ！ キンツ！

さらに闘争が激しくなった。

『くっ！！ 流石は本多忠勝だ！』

「さっきから気になっていたが！ 何故俺達の点数が表示されていない！？」

ガンツ！ キンツ！ ガンツ！

『私の方で点数を表示しないようにシステムを弄ったんですよ！！』

「何故そんな事をした！？」

キンツ！ ガンツ！ ガキツ！

『そっちの方がスリルあっていいじゃないですか！！』

「この試召戦争にスリルなど必要ない！！」

ガキンツ！ ガンツ！ キンツ！

『その割には西村先生だつて楽しんでる顔をしているじゃないですか！？ この戦いを！？』

「それは貴様が相手だからだ！！」

キンツ！ ガンツ！ ガキンツ！

鉄人の召喚獣と凄まじい戦いを繰り広げて集中しながらも私と召喚獣に意識している鉄人は会話をしていた。

この戦いに……。

「『『『』……………』』』」

光一達は完全に無言になっており……………。

《ハッハッハッハッハ、素晴らしい戦いですよ》

「……………」

私の召喚獣は私と鉄人に賛辞を送っており、高橋女史は光一達と同様に無言になっており……………。

「負けたら許さんぞ、異物」

傍で見ている白夜は、私が負けたら制裁すると心に誓っていた。

そして……………。

『ハアアアア……………！！！！！！！！』

「ウオオオオ……………！！！！！！！！」

ガキンツ！ キンツ！ ガンツ！ キンツ！ ガンツ！ ガキンツ！  
ガンツ！ ガキンツ！ キンツ！

剣劇で勝ったのは……………。

「隙ありだ“さすらいの旅人”……！」

『しまった……！（ドゴツ……）……ぐふっ……！』

私の一瞬の隙を付いた鉄人の召喚獣が一撃を与えてきたので、私は吹っ飛ばされた。

『ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ ハアツ！ くそっ………』

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！ はあっ！ （落ち着け！ 今は下手に踏み込んではいかん……）」

怯んで体勢を整えようとしている私であったが、鉄人はすぐに向かつては来ずに心を落ち着かせていた。勝利するのに焦って突っ込んでしまえば、すぐに私からのカウンターを喰らってしまうと直感しているのだ。

『ハアツ！ ハアツ！ どうしたんです？ 私を倒す最大のチャンスだったのでは？』

「はあっ！ はあっ！ 俺の勘が告げているんだ。今行ったらやられるとな。はあっ！ はあっ！」

『ハアツ！ ハアツ！ そうですね……（くそ！ 見破られてたか……！） わざと隙を見せたのが仇となったか……！』

鉄人の予想は正しかった。

さっきの剣劇で私がわざと隙を見せて、鉄人の召喚獣の一撃を喰らって怯んだ所を見せて突っ込ませ、カウンターをやるうと言っ魂胆

であった。

それを鉄人に見抜かれた為に私は内心で舌打ちをする。

『くっ！ やばっ……さっきの一撃でフラフラしてきた』

「はあ……はあ……どうやら限界のようだな」

『……それはお互い様でしょ？ 貴方だって普段やらない事に全神経を集中しているから、フラフラしていますよ？』

「……………」

『どうです？ こんな勝負を何時までも長引かせたら、お互い無駄な体力の消耗になります。ここでそろそろ決着を付けませんか？』

「……………」

私の提案に鉄人は無言になっているが……。

「……………いいだろう」

『（よし！）』

要求を呑んでくれた事に私は感謝した。私とて何時までもこんな戦いを続ける訳にはいかなかったのだから。

『ではお互いの最高の一撃で決着を付けましょう（スッ）』

「……………（スッ）」

私は一刀両断をする為に“青嵐”を上段で構え、鉄人の召喚獣は突進をする為に豪槍を中段で構える。

.....

そして私と鉄人の召喚獣が構えて2分経った。

「（.....こ...光一、何で二人は動かないの？）」

「（動かないんじゃない、動けないんだ）」

「（ど...どうして？）」

明久が私と鉄人の召喚獣が未だに動いていない事に疑問を持って光一にアイコンタクトをしながら聞く。

「（さっき旅人さんが言ってただろ？ 最高の一撃で決着を付けるって）」

「（う...うん。...って事はまさか）」

「（次で勝負が決まる）」

「.....（ゴクッ）」



漸く意図が読めた明久は、また私と鉄人の召喚獣の方を見て息を呑む。

「（勝ってくれ、旅人殿）」

「（頑張れ旅人さん）」

秀吉と愛奈は私が勝つように祈り……。

《（次の一撃で勝敗が決まる。では私が合図を出すのでしょうか）》

「……………」

私の召喚獣が合図を出そうと指を鳴らそうとしており、高橋女史は見守っている。

そして……。

「（もう勝負は見えたな）」

白夜はつまらなくなったかのような顔になりながらも、じっと見ている。

《（フッフ……では）……（パチンッ！）》

私の召喚獣が指を鳴らすと……。

ドッカーン！

爆発音がなった。

.....

ドッカーン！

爆発音が鳴ると.....。

『「うおおおおお~~~~~!!!!!!」  
『

それが合図かの様に私と鉄人の召喚獣が動き出した。

『ダアアア~~~~!!!!!!（ブオンッ!!!!）  
『

『うおおお~~~~!!!!!!（ビュオッ!!!!）  
『

お互いが持っている武器で攻撃をし.....。

ガキイイイイイイイン!!!!!!

凄まじい音を鳴らした後に、私と鉄人の召喚獣は背中を見せ合って距離を取っていた。

「……………」

私と鉄人は無言であったが…………。

ピシッ！

『ぐっ！！』

“青嵐”に罅が入ると私は膝を付き…………。

「……………見事だ“さすらいの旅人”」

鉄人が私を賛辞すると…………。

パキンッ！

鉄人の召喚獣の豪槍が折れて…………。

「まさか…………俺を倒すとはな……………」

シューウウウウ~~~~~

召喚獣自体が消えた。

『西村先生……私の勝ちだ!!!』

そして私は勝利宣言をする。

Fクラス殲滅物語 ? (前書き)

白夜が少しばかりキャラ変わっていますのでご注意ください。

## Fクラス殲滅物語 ？

私が鉄人に勝利すると……。

「ま……まさか西村先生までもが……」

《（パチパチパチ）いやいや、中々素晴らしい戦いでしたよ我が主》

「旅人さん凄くいい」

高橋女史は信じられない顔をし、私の召喚獣と愛奈は私を賞賛しており……。

「凄いなあ旅人さん、まさか鉄人を倒すなんて」

「僕達に加勢する必要は全く無かったみたいだね」

「凄まじい戦いで、ワシ等の出番は無かったのう」

光一、明久、秀吉は加勢する事が出来なくて残念だったが、私の勝利を喜んでいた。

「やるな“さすらいの旅人”、この俺を倒すとはな……」

『今回の試召戦争は私がシステムを弄って有利に運んだに過ぎませんよ。もし本来の試召戦争でしたら、私が負けているんですから』

「……………それでも俺と高橋先生を倒した事に変わりはないがな」

『フフフ……まあ今はその話は置いておきましょう。さて、私が島田にやった猥褻行為についてですが……』

私がそれは冤罪だと言おうとした時……。

「言わなくても分かっている、冤罪なのだろう?。」

「に……西村先生!？」

『ほう?。』

鉄人は私が猥褻行為をしていないのが分かったみたいで、高橋女史は驚いた顔をする。

『一応聞いてもいいですか? 先程まで私を指導室に連行しようとした貴方がどうしてそう思ったのかを……』

「戦って分かったのだ。貴様の込めていた一撃には、とても邪念が感じられなかった」

『……って事は、そんな一撃を繰り出す私に猥褻等と言う真似は絶対しないと?』

「そう言う事だ」

『「」……………「」』

鉄人の理由に私と高橋女子は無言になり……。

「おいおい、そんな理由でかよ……どこの格闘漫画だ?。」

「ま…まあいいんじゃない光一、旅人さんの無実が証明出来たんだから」

「鉄人らしい理由じゃのう……」

《………これはどう言う風に突っ込めばいいんでしょうか？》

「ぼ…ボクにはちょっと付いて行けないかも……」

他の面々は呆れ顔になっていた。

『………まあそれで私が無罪放免になるならいいでしょう。あと召喚システムですが、もう元に戻してあるので以降の試召戦争は問題無いですよ』

「そうか、ならばこの件に関しては特別に目を瞑るとしよう」

「西村先生！？ 彼の猥褻行為が無罪なのは分かりましたが、召喚システムに関しては別です！ 今すぐ彼を学園長の所へ連れて行くべきです！…！」

私の言い分に鉄人は納得してくれたが、高橋女史は納得できなかった。彼女としては早く私を連行したいのだろう。

「高橋先生、我々は“さすらいの旅人”に敗れたのです」

「で…ですが……」

「それにこの男が召喚システムを弄れるなら、我々が召喚フィール



ドを出せなくしようと思えば出来た筈です。なのに敢えてそれをせずに我々が有利な試召戦争で挑み、そして勝った」

「……………」

「ですから敗者となった我々は大人しく退くべきです」

鉄人の言い分に高橋女史は……………。

「……………分かりました。この件に関してはもう何も言いません」

未だに納得がいかない顔をしているが、敗者となった自分に権利は無いと無理に納得させた。

「では“さすらいの旅人”、俺達はこれで失礼する」

「……………次は絶対負けませんよ」

『あ、行く前にちょっと待って下さい』

鉄人と高橋女史が去ろうとするのを私は引き止めた。

『お二方、もしかやこれから鬼ごっこをしている雄二と島田を捕まえるつもりですか？』

「ああ、奴等には聞きたい事が山ほどあるんでな」

「何故こんな事を仕出かしたのかを聞く為に指導室へ連れて行きませぬので」

『（やはりな……）』

鉄人と高橋女史は私が思ったとおりの事を考えていたみたいだ。

『そんな事をする必要はありませんよ、アイツ等には私の方で尋問しますから。ですからお二人は、もう戻って結構ですよ』

「……本当にそれでいいのか？ お前は今この学園で猥褻行為を働いたというレッテルを貼られているんだぞ？ 俺達の方で口添えをした方がいいんじゃないのか？」

『御心配なく、そこも私の方でやっておきますので』

「……いいだろう、敗者となった俺達は黙ってお前の指示に従おう。高橋先生、行きましよう」

「え……ええ……」

鉄人は雄二達を捕まえるのを止めて高橋女史を連れて職員室に戻り、高橋女史は私の指示に疑問に思いながらも鉄人に付いて行った。

鉄人と高橋女史がいなくなると……。

「旅人さん、ホントに良かったの？」

「2人がいれば旅人殿の無実を証明出来たのじゃが……」

「何か考えでもあるの？」

明久、秀吉、愛奈が速攻で私に聞く。

この3人からしてみれば折角のチャンスを無駄にしていると思っ  
ているのだろうが、私にとっては好都合なのだ。

「3人共、旅人さんが他人の力を使って無実を証明したいと思うか  
？」

《私が思うに、我が主は何かをやるかと予想していますが……》

光一と私の召喚獣は私の狙いが分かっていた。

『っておい、お前はまだ消えてなかったのか？』

《つれない事を言わないで下さいよ。私としては暫く此処に……》

『お前の要望は却下だ（パチンツ！）』

《……酷い主だ（ピシユツ！）》

私が指を鳴らすと、私の召喚獣は姿を消した。

「なあ旅人さん、ちょっと聞きたい事が……」

『悪いけど、私の召喚獣について聞きたいなら却下させて貰つよ。  
今から説明すると長くなるから』

「そ…そうか」

『無論、明久達もだぞ。いいな？』

「わ…分かりました」

「う…うむ……」

光一、明久、秀吉は聞きたがったが諦める事にした。

『それにしても……ゴメンな愛奈ちゃん、こんな騒動に巻き込んでやって』

「いいですよ。ボクもそれなりに楽しませて貰いましたし。久遠君が凄く強いのも分かりましたから」

『そう言ってくれると助かるよ』

愛奈の言葉に私は安堵した。

「そう言えば旅人さん、FFF団を何処かに転送させていたが、雄二と島田も連れて行くつもりか？」

『勿論だ。あの二人はまだ霧島と追いかけてここをしてみると思うが……』

私が光一に言っている最中に……。

「見せて貰ったぞ異物、貴様の戦いをな……」

『「「「「「！」「」「」』

白夜がいきなり現れた。

『白夜……』

「兄貴!!」

「光一のお兄さん!？」

「どうして白夜殿が此処に!？」

「えっと……誰？」

白夜の登場に驚く私達であったが、その中で光一だけが過剰な反応をする。

「てめえ!! 何の用だ!？」

「愚弟に用は無い。あるのは異物だけだ」

「何だと!？」

白夜の言葉にキレた光一は武器を持って襲いかかろうとしたが……。

「（ガシッ!）光一!! 落ち着いて!!」

「（ガシッ!）落ち着くのじゃ光一!!」

「離せ二人とも!! 俺は……俺は!!!!」

明久と秀吉によって止められた。

「ど……どうしたの久遠君!? 何時もだったら聞き流している君が

……」

『明久と秀吉、光一を連れて教室に戻れ』

「うんー！」

「分かったのじゃー！」

愛奈が光一の豹変に驚いていると、私は明久と秀吉に指示を出す。

「ふざけるなー！ いくら旅人さんだからって……！」

『悪いけど光一には少し眠って貰うよ（パチンッ）』

「！……！ お……俺は……（ガクンッ）」

私が指を鳴らすと、ジタバタと暴れている光一は突然の眠気に襲われて眠ってしまった。

『さあ二人とも、光一を教室へ』

「……（コクッ）」

明久と秀吉は眠っている光一を担いで教室に戻り……。

『愛奈ちゃんも明久達と一緒に行ってくれ』

「は……はい」

愛奈も教室に行かせた。

『これで良しと。さて……』

「あの愚弟に随分と気を遣うんだな」

『それでも一応は光一の相棒だね。戦いに関してだけど』

「相棒か……下らんな」

私の相棒発言に白夜は切り捨てる。

『白夜にとっては下らないだろうが、相棒と言うのは結構良いもんだぞ？ 互いに相手を信頼して、背中を守るんだから』

「異物にそんな物は不要だろう」

『……まあいい、此処でお前と相棒についての議論をする気はない。それで私に何の用だ？ まさか世間話をする為に来た訳ではないだろう？』

白夜に何を言っても無駄だと分かっている私は話題を変えた。

「……………」

『おいおい、そこでダンマリかよ。まさか弱っている私に試召戦で挑む気か？ 目障りな私を倒すチャンス逃さない為に……』

「ふざけるな。私がそんな下らん真似をすると思うか？ 弱った貴様を倒した所で何の意味は無い」

ふざけて言った私の言葉に白夜は少々怒り気味に言う。

『……………白夜にフェアプレーがあつたなんて意外だよ』

「勘違いをするな。貴様を万全な状態で倒す事に意味があると言っている」

『ほづ？』

『それによつて私は更なる高みへと上る事が出来るからな』

『……………つまり私は白夜の為の踏み台つて事か？』

「そう、貴様は私を高みへと導く踏み台だ」

『……………(カチン!)……………言ってくれね』

白夜の踏み台発言に私は少々頭に来た。

「私は事実を言ったに過ぎん。尤も……………貴様が西村先生と高橋先生に負けていたら話は別だったが」

『……………成程、お前が此処に来たのは私が試召戦争で負けていないかの確認に来たという事か』

「そう言う事だ。もし異物が負けていたら私が代わりに処刑していたがな」

『……………あっそう』



私は白夜の身勝手な言い分に呆れていたが、正直、勝つてよかったと思う。疲弊した状態で白夜に襲われでもしたら確実にやられていたのだから。

「だが貴様は勝利し、更には私の恰好の獲物になってくれた。そこは感謝しておく」

『あんまり嬉しくない礼だよ』

「用件はそれだけだ。次に会う時まで万全な状態にしておくんだな」  
白夜は言いたい事を終えると去って行く。

『（あんにやろう、言うだけ言って去るとは……ちょっと仕返ししてやる）……おい待て白夜』

「……………（スタスタ）」

『待ちなよ、我が同士 オール……』

ブオンツ！

『うおっとー！』

「異物！！ その名で呼ぶな！！！！」

一度は無視した白夜であったが、私が白夜の洗礼名を呼んでいる最中、いきなり私に接近して回し蹴りを放ったが即座に避けて距離を

取った。

『凄い反応速度だな、言い切る前に攻撃をするとは』

「貴様……………私がやっとの思いで忘れた恥を……………」

『あら失礼　つついってしまいましたよ。でも思い出すなあ』  
あの時の白夜は“旅人様！　私に倫理を教えてください！！”  
つて懇願されて……………』

「……………！！！！（ギリギリギリ！！）」

私がオールマイティ白夜だった頃を言うと、白夜は歯軋りしながら  
キレそうな顔をしていた。

『そつだ！　いつそ白夜の真の姿を光一に教えてやろう！　それが  
いい！　うんうん！』

「……………貴様……………生きて帰れると思つな！！！！」

完全にキレた白夜は再び私に襲い掛かってきた攻撃をしてきたが…  
…。

『おつと！（ピシュッ！）』

「……………！！！！」

私はすぐに姿を消した。

“ハッハッハッハッハ！　冗談だよ白夜、そう怒らないですよ。つて

「私が万全な状態で倒すんじゃないの？」

「出て来い異物！！　すぐに始末してやる！！」

廊下に響く私の声に白夜はデカイ声を出しながら私を探している。

“ハッハッハッハッハ！　やなこった。じゃあまたね白夜”

「~~~~~！！！！！！　クロス……異物は私の手で絶対クロス！！」

白夜はもう一つ私を倒す口実が出来たとき。

Fクラス殲滅物語 ? (後書き)

次回はバカ共のお仕置きです。

**Fクラス殲滅物語 ？（前書き）**

この話でFクラス殲滅物語は終了となります。  
それではどうぞ！！

## Fクラス殲滅物語 ？

ここは私が作ったお仕置き部屋である。

『フッフッフッフッフ……さうて、お仕置きタイムだよ 』

その部屋には私を含めた気絶中のFFF団・ムッツリーニ・坂本雄二・島田美波がいる。

因みに雄二と島田はお仕置き部屋に転送する前に未だ狂気と化した霧島に追われていたので、逃走中の時に転送させ、霧島には私の方で気絶させて記憶を消しておいた。そうでもしなければ霧島は雄二と島田を本当に殺してしまいそうだったから。

それと下らん放送を流した近藤もいる。何故かコイツは2階の廊下で気絶していた事に私は疑問だったが、探す手間が省けたのですぐに転送させたであつた。

しかし……。

『本当だったら光一達も連れて行って、アイツ等のもがき苦しむ所を見せてやりたかつたが……流石に今回はかりダメージは大きいからな、それに……』

気がかりなのは光一であつた。

私が白夜と話し終えて教室に戻ると、光一はすぐに目覚めて私に突っかかって来たのだ。

それと同時に“凶王”になりかけていたので、私が光一に暗示を掛けて白夜と会った事を忘れさせた。

『今日の事を忘れさせても、白夜に対する憎しみはまだ消えないだろうが……』

本当であつたら白夜に対する憎しみも無くそうとした私であつたが、こればかりは光一の問題であるのでそこまで干渉しなかつた。

『まあ光一は後で私の方で何とかしておこう………それでは話題を変えて（パチンツ！）』

私が指を鳴らすと………。

「………はっ!? 此処は!?!?!?!?!」

「………此処は何処だ?」

「!!! 旅人!!!」

「アンタ、ウチ等を此処に連れて来て何をするつもりなの!?!」

気絶していた連中が起きた。

『フッフッフッフッフ………これから君達にある物を鑑賞してもらおうよ』

「ぶざけんな!!! 誰がためえの思惑通りに………（ジャラジャラ!）  
!）な………何だコレは!?!」

私に逆らおうとする雄二が襲いかかろうとするが立つ事が出来なかった。

『抵抗しても無駄だよ、その鎖は簡単にほどける代物じゃないからね。無論、お前達もだよ』

雄二や他の連中にも鎖で頑丈に縛っている。

「……………俺達をどうする気だ!?」「……………」

「……………何をするつもりだ!?」

「まさかアンタ、ウチ等を甚振る気なの!?」

『お望みならそうしてやるつか?(ポキポキ)』

私が指の関節を鳴らしながら近づくと……

「げ……外道だ!! 此処に外道がいる!!」

「人間として最低な野郎だ!!!」

「無抵抗の俺達を甚振って優越感に浸る気だ!!」

「このクズ野郎!! てめえみてえな野郎は地獄に堕ちやがれ!!」

「……………お前には良心が無いのか!?」

FFF団(ムツツリーニ含む)は好き勝手な事をほぞき……。



「女の子を殴るなんて最低ね!!」

「てめえは人として間違っただけやがるぞ!!」

島田と雄二も好き勝手にほざいてくれた。

『……………少なくとも下らん理由でお仕置きをしたり、袋叩きする貴様等には言える台詞じゃないな』

私はコイツ等に物凄く呆れた。

『まあいいや。さてと……………お仕置きタイムの時間だ(スッ)』

「……………!!!!!!!!!!」

私が指を鳴らすとすると怯えるかのような顔をする。

『安心しろ、お前等に暴力などは振るわん。そんな物よりもっと効率的な物があるよ(パチンツ)さあ出て来い!! 出番だ!!』

私が指を鳴らして大声を出す……………。

「(ピシュツ!) あは〜ん パフパフしてあ・げ・る」

「(ピシュツ!) ああ〜ん スカートの短くてパンティが見えちやうわあ〜」

雄二達の目の前には、気持ち悪い化粧をしてバニーガールの衣装を着た常村とミニスカメイド服を着た夏川が現れた。



まえて操り人形にした言えは分かるかな？

『ハハハハハハハハ……さあ二人とも、その連中にお持て成しをしてあげな』

「はあゝい」

『バニー常村はパフパフを、メイド夏川は頼にチュウをしてあげなさい』

「分かりました」

『まずは雄二からね』

私が二人に恐ろしい指示を出す……。

「ま…待て旅人！！ テメエはただでさえ恐ろしい化物を出したのにも拘らず、更に惨い仕打ちをするのか！？」

『だから言っただる雄二？ お仕置きタイムだつて』

「てめえは俺達の精神を崩壊させるつもりか！？」

『大丈夫だよ、死にはしないから』

「別の意味で死にまうだろうが……！！！！！！（ジタバタジタバタ……！！）」

雄二は逃げ出そうと必死に抵抗していた。



私が恐ろしい事を言うと、気絶した雄二以外の連中が身震いした。

『さあ常夏コンビ……行け』

「「はあ〜い」「

常夏コンビは先ず……。

「や…止める!! 俺はまだ死にたくは% ( % ) & ( ) ' = & ( ' !!!!!!!!!!!!!!!」

「助けてくれ!! そんな目に遭う位なら% 『& = 『& ( ) & = ' & ( ) ' ' & !!!!!!!!!!!!!!!」

「まだ殴られた方がマシ』 ' & % 『 ' \$ % 『& ' % ( ) & !!!!!!! !!!!!!!!!!!!!!!」

「頼む!! アンタの奴隷になるから = \$ ' 『& & 『 ' & = ' ( ) & & !!!!!!!!!!!!!!!」

「こんな事になるなら刃向かわなければ = % 『 ' & ' 『& 『 ' & 『& & ( ) \$ ( ) !!!!!!!!!!!!!!!」

FFF団を始末し……。

「……………(ブンブンブンブンブン!!!!!!!!!!!!!!) ( ) \$ % & ' \$ % & ' ( ) ! " # \$ % & !!!!!!!!!!!!!!!」

ムツリーニも……。



「何でこんな所にあるんだ？」

「誰かの落とし物かな？」

教室には明久、秀吉、愛奈、そして光一がいた。（念の為に言っておくが、光一が廊下で白夜と会った事は私の暗示で忘れさせている）  
明久が携帯テレビを持ってオンにすると……。

「おい明久、勝手に付けていいのか？　それが旅人さんのだったらどうするんだ？」

光一がすぐに注意した。

「まあいいじゃない光一。もし旅人さんの物だったとしても、見られて困る物が入っているとは思えないし」

「だからってなあ……」

「どれどれ……え？」

明久が携帯テレビの方に目を向けると固まった。

「どうした明久？」

「何か変な物でも映っておったのかの？」

「吉井君、変な顔になってるよ？」

光一、秀吉、愛奈が様子のおかしい明久を気にしながら画面を見ると……。

「……………は？」

「……………何じゃこれは？」

「……………」

明久と同様に固まった。

その画面には……………。

《私はオールマイティ白夜です！！ 旅人様！！ 私に倫理を教えてください！！》

《お〜〜！ 私の素晴らしき配下、オールマイティ白夜！ 君に倫理を教えてあげるよ！》

《はい！》

《それではオールマイティ！ 今から倫理の授業を始めるよ！！》

《心得ました旅人様！！》

白夜が私に跪いて懇願していた。

「……………この映っている人は旅人さんと……………光一のお兄さんだよね？」



「……………何故……白夜殿が旅人殿をあんなに敬っておるのじゃ？」

「この人はさつき会った人だけど……………さつきとイメージが全然違うね」

「……………」

明久、秀吉、愛奈は白夜の豹変に疑問に思い、光一は無言であった。しかし……………。

「……………ぷっ……………ぷぷっ！！！！」

「光一？」

「どうしたのじゃ？」

「久遠君？」

「く……………クク……………ククククク……………アハハハハハハハ！！！！ あ……………あの兄貴が……………旅人さんに跪いている……………アッハッハッハッハッハッハッハッハッハ！！！！」

光一はいきなり腹を抱えながら転げ回って大笑いをした。

明久達は光一の行動に呆然と見ていた。

**Fクラス殲滅物語 ？（後書き）**

次回は傷心の光一をカウンセリングです！！  
お楽しみに！！

## 光一のカウンセリング

Fクラスのバカ共を殲滅した翌日の放課後。

『やあ光一、待ってたよ』

「旅人さんか。俺に何か用か？」

光一が学園の門から出ようとした直後に私がいた。

『ちよつと光一をある所へ連れて行きたくて……』

「ある所？ また何処かへ連れてって遊ぶのか？ だったら俺だけじゃなく優子達も呼んだ方が良いと思うが……」

私が遊び目的で来たのだと思っていた光一であったが……。

『残念だけど違う。まあ、着いて来れば分かるよ（スタスタ）』

「はあ？ ちよ……ちよつと待ってくれよ！」

私が目的地へ向かうと、光一は私に着いて行った。

私と光一がとある住宅街で、10階建てのマンションの前に立っている。

『ここだよ』

「ここって住宅街だろ。俺に誰か紹介でもしたいのか？」

『まあ、いいからいいから（グイグイ！）』

「お…おい!？」

私が光一の腕を引っ張ってマンションの中に入って行くと……。

「お待ちしていました旅人さん」

『やあ、明菜』

そこには私の友人である吉田明菜がいた。

『悪いな明菜、まだ仕事の最中だったろ？』

「大丈夫です。今日は早めに終わりましたので」

『そうか。じゃあ早速だけど、患者を連れて来たよ』

私が光一を明菜の前に出すと……。

「……………え？ 明久の姉がどうして此処に？」

「初めまして久遠光一君、私は吉田明菜と申します。以後お見知りおきを」

「こ…此方こそよろしく（ペコッ）」

明菜を見て玲だと勘違いしていたが、明菜に挨拶された光一は戸惑いながらも頭を下げながら挨拶する。

『どうだ光一、驚いたか？』

「久遠君は私を吉井君のお姉さんだと思っているみたいですが、残念ながら違います」

『明菜は玲と違って常識人で、街中でバスローブを着て歩く人じゃないから』

「……………旅人さん、後半は余計ですよ」

『これは失礼 でもこうでも言わないと光一は納得してくれそうに無かったからつい……………』

「…………………………」

私と明菜が話している所を見ている光一は啞然としていた。

『では光一が呆然としている隙に明菜の部屋へGO（パチンツ！）』

私が指を鳴らして姿を消すと、明菜と光一も姿を消した。

場所は明菜の部屋のリビングに変わる。

『それじゃあ光一、君には明菜にカウンセリングをして貰うよ。さあその椅子に座ってね』

「それでは久遠君、よろしく願いしますね」

「……………ちょっと待て、何で俺がカウンセリングを？」

光一に椅子に座らせようとするが、光一は納得がいかない顔をする。

『そりゃあ……………お前が大神白夜によって深い心の傷を負ったから、

それを……………」

「断る！！！！俺にそんな必要は無い！！！」

言っている最中に光一は反対しながら出て行こうとするが……。

『（ガシツ！！）待て光一、何処へ行く？ まだ話の途中だよ』

すぐさま私は光一の腕を掴んで帰さないようにする。

「アンタの言いたい事は分かる！ どうせ“兄貴が俺に今までしてきた事をその人に言っただけ”って話なんだから！？」

『よくお分かりで。分かっているんなら早く椅子に……………』

「だから嫌だっけ言ってるだろうが！！ 例えアンタが無理矢理座らせても俺は何も言わないからな！！！」

『……………それほどまでに嫌なのか？』

「当たり前だ！！！！」

光一が白夜の事について思い出し始めたのか、恐ろしい顔になっていた。いや、“凶王”になりかけていると言った方が正しいだろう。

『お前が白夜を心から憎んでいるのは分かる』

「だったら俺の事はほっといてくれ！！！」

『だが何時までも、そんな状態が続くと取り返しのつかない事にな

るぞ?』

「うるせえ!! 何も知らないくせに分かったような言い方をするな!! (バチバチ!!)」

「旅人さん!!」

光一が掴まれていない手でスタンガンを出して、私に攻撃をする事に明菜は止めようとしたが……。

『(ガシッ!) 大丈夫だよ明菜』

光一の手首を掴んで攻撃を防いだ私は明菜に問題ないと言う。

「(ググググググ!!) は…離せ!!」

『フフフフ……ご自慢の武器も当たらなきゃ意味が無いよね? にしても本当に非力だね。ちょっと力を込めて腕を掴んでいるだけに離す事が出来ないとは……』

「ほっとけ!!」

『さあ光一、椅子に座ろうね(グイグイ!)』

「止める!! 俺は絶対にカウンセリングなんて受けないからな!!」

光一を無理やり椅子に座らせようとする私であったが……。

「はあっ……旅人さん、久遠君を離して下さい」



明菜が溜息を吐きながら、いきなり離せと言ってきた。

『え？……………ちょっと待て明菜、それは何故だ？』

「久遠君が喋りたくないんですしたら、カウンセリングをした所で無意味です」

『いや、だからって……………』

「おい旅人さん！！その人の言うとおりにさっさと離せよ！？（ジタバタジタバタ！！）」

私が光一から目を逸らしていると、光一は抵抗しながらも離せと大声を上げる。

『光一は黙ってる。けど明菜、無意味だからと言っても……………』

「いいんです。さあ、久遠君の腕を離して下さい」

『……………分かったよ（パツ！）』

私は掴んでいる光一の腕を離した。

「イテテテ……………ったく！掴んでいる所で痣が出来たぞ……………」

『痣が出るほど掴んではないがな……………』

「とにかく！俺は帰らせてもらっからな！！（ガチャッ！）」

光一がリビングから出ようとする。

が……。

『おい明菜、本当にいいのか？』

「何時までもお兄さんに怯えて逃げている久遠君に用はありません」

「！！！！（ピタッ！）……（ギロツ！）おい吉田さん、アンタ今何  
つった？」

明菜の一言に光一は足を止めて此方に顔を向けながら殺気を込めて  
睨む。

「どうしたんですか久遠君、帰るのでしょうか？ そのドアを開けて  
真っ直ぐ行けば玄関に……」

「その前に俺の質問に答える。アンタはさっき俺に何て言った？」

「言えば帰ってくれるのですか？ ならば答えましょう。過去を話  
す事が出来ない臆病者に用はありません」

「！！ てめえ！！（ガシッ！！）」

完全に“凶王”になった光一は明菜に近づいて胸倉を掴む。

「おいアンタ、いくら旅人さんの友人だからって言って良い事と悪  
い事があるぞ？ 覚悟は出来ているんだろうな？ 言うておくが俺  
は本気だ……」

『おい光一!!』

「旅人さんは手を出さないで下さい」

『……………』

光一を止めようとした私であったが、明菜に止められたので私は黙る事にした。

「覚悟？ 私は事実を言っただけなのに、どうして覚悟する必要があるのですか？」

「……………もういい!! アンタはもう喋るな!! (バチバチ!!)」  
スタンガンの電源を点けて明菜に攻撃をしようとする光一であったが……………。

「言い返す事が出来ないから暴力で黙らせる、と言う事は自分が臆病だと認めている証拠ですよ?」

「!?!?! (ピタッ!)……………」

明菜の言葉に攻撃を止めた。

「どうしました? そのスタンガンを使って私を黙らせるのですしょう? 早くやったらどうですか?」

「……………」

「ああそうですか。私を黙らせたなら臆病者と認めてしまっから攻撃

するのを躊躇っているんですね。ではさっき言った事は撤回しましょう。さあ、どうぞ遠慮無く私をそのスタンガンで気絶させて下さい。それでも気が済まなかったら、他の武器を使って私を甚振るのも結構ですよ」

「……………」

『（光一……………迷っているな）』

光一は無言になりながらも体が震えている。

私は光一の頭の中を読んで見ると、止めろと叫んでいる光一と明菜を甚振れと言う“凶王”の光一が戦っているかのような状態であった。

「（ガクガク）……………う……………う……………」

「何を迷っているのですか？」

「（ガクガク）……………俺は……………俺は……………」

「今度は怒りから葛藤ですか？ でしたら早く出て行って下さい。何時までも此処に居られると迷惑ですので」

「違う……………俺は……………兄貴に怯えてなんかいない……………」

明菜が早く出て行けと言うが、光一がいきなり怯えるかのような声で訴えて来た。

「でしたら、どうしてそんなに怯えているんですか？」

「お……怯えてなんか……」

「……………久遠君、何時までも意地を張らないで下さい。そして……私に心の底からその思いをぶつけて言っして下さい」

「……………（ガタンッ！……ストッ）」

光一が明菜の胸倉を掴んでいる手を離してスタンガンを落とし、床に膝を着いた。

「う……う……」

「久遠君（スッ……ギュウッ！）……………」

「あ……あ……ああ……うああ……」

明菜が光一を息子のように抱き締め……………。

「先程はすいませんでした。さあ、今まで溜め込んでいた物を私にぶつけて下さい」

「う……う……う……！（ギュウッ！）」

光一は涙を流しながら明菜を力強く抱き締めた。

『……………』

そして私はただただ黙って見続けている。

## 光一のカウンセリング

「わ…悪い吉田さん、俺……」

「いいんですよ」

明菜に泣きじゃくった後に光一はすぐに離れて謝るが明菜は気にしていないかった。

「久遠君（ギユウツ）」

「ちよ！？ よ…吉田さん！？」

光一は明菜に再度抱きつかれて戸惑ったが……。

「確かに私は貴方が今まで辛い目に遭っていた時の気持ちは分かりません。ですが…」

「……………」

「貴方が話す事によって分かり合うことが出来ます。お願いです久遠君、私に全て話して下さい」

「……………分かった」

愛しい息子のように接してくる明菜に全てを話そうと決心する光一であった。

「では椅子に座りましょうか」

「……………ああ」

光一から離れた明菜は椅子に座るように示唆し、光一はそれに従って椅子に座る。

「申し訳ありませんが旅人さん、ここからは私と久遠君だけにして貰えますか？」

『元からそのつもりだよ。それじゃあ私は一時退散するから（ピシユッ！）』

私は二人の邪魔にならない為に姿を消した。

「では久遠君……………お願いします」

「……………あれはまだ俺と兄貴と一緒に住んでいた時……………」

そして光一は椅子に座っている明菜に全てを語った。

そして光一が語って1時間後……………。

「そうですね……お兄さんが今まで久遠君にその様な事を……」

「ああ。兄貴が突然俺を愚弟と蔑み、果ては出来底無いや失敗作だなんて言われた事があったよ。拳銃には背中に大きな傷を付けられてな」

「……………」

「そして兄貴を恨んでいる連中は、兄貴に勝てないから弟の俺に責任を取れと何だの言っつて、ストレス発散の為のサンドバック代わりにされていた」

話を聞いている明菜はこれ以上無いくらいに真剣に聞きながらも、光一が今までに負っていた心の傷がどれ程深く、そして重いのがよく分かった。

「それから俺は自分の身を守る為に武器を使い、俺をサンドバック代わりにする連中を駆逐していくと、段々兄貴に対する憎しみが増大していった」

「それが“凶王”になる切っ掛けになったんですね」

「まあな。それで今現在、兄貴の事となると衝動が抑えられない位に憎しみに駆られるんだ」

「そうですね……………」

光一が全て話すと明菜は悲しい顔をする。

「始めは神童と呼ばれていたお兄さんを尊敬していた久遠君が……」



……」

「お……おい吉田さん、何でアンタが泣くんだよ？」

涙を流す明菜に光一はハンカチを取り出して明菜に渡す。

「……すみません。今までの患者さんでも涙を流さずに聞いていましたが、こればかりは……」

「……………」

明菜は光一に渡されたハンカチで涙を拭ってテーブルに置く。

「久遠君、お兄さんを許す事は出来ないと思いますが……」

「ああ、俺はこの先ずっと兄貴を恨み続けるだろう」

「ですが何時までも憎しみに囚われていると、貴方はいずれ大切な人を傷付けてしまいます」

「……………」

それは光一にも分かっていた事であった。光一は以前に白夜を攻撃する際に優子に止められていたが、その優子が邪魔になって払うどころか傷付けようとした。

明久によってそれは回避されたが、もしまた同じ事になったら優子だけではなく明久達にも被害が及ぶと危惧している。しかし白夜に対する憎しみが強い為に光一は抗う事が出来ないのだ。

こればかりはどうしようもないと……。

「……………それは分かっているんだが……………兄貴を見ると俺はまた……………」

「（スツ）落ち着いて下さい」

白夜の事を思い出した光一はまた憎しみに囚われたが、明菜が光一の頬に触れる。

「……………（何だ？ この人に抱き締められたり触れられたりすると、妙に落ち着いてくる）」

「大丈夫ですか？」

「あ…ああ」

「それは良かった（ニコツ）」

「……………（この人の笑顔を見てると凄く癒されてくる……………って俺は何を考えてんだ！？）」

明菜の笑顔に見とれていた光一であったが、すぐに戻った。

「久遠君、申し訳ありませんが今度はソファーに座って頂きますか？」

「え？ あ…ああ……………分かった（スツ）」

光一は明菜に言われたとおりに椅子からソファーに座り込み……………。

「ちよつと失礼」

明菜もソファ―に座った。しかも光一の隣に。

「ちよつと吉田さん？ 何で俺の隣に？」

「それはですね……………（ギユウツ！（こつする為です）」

「ちよ…ちよつと！？」

また明菜に抱き締められる光一。

「久遠君、このまま私をずっと抱き締めて下さい」

「な…何で？」

「それは後で分かります。さあ、私を母親だと思って」

「……………わ…分かった（ギユウツ！）」

光一は恥ずかしながらも明菜を抱き締めた。

と、その時……………。

「あ…あれ？ 何だか急に眠気が……………」

「無理をしなくていいですよ、そのまま眠って下さい」

「あ…ああ……………すっ…すっ……………」

何故か光一が眠ってしまった。

「ふふふ……いい夢を見て下さい、久遠君」

明菜は眠っている光一を包み込むように抱き締めて横になった。

光一が眠って2時間後。

「……………ん……………あれ？ 此処は？」

「目が覚めましたか？」

「え？ ………………うわあ！！（バツ！！）」

光一が目覚め、間近に明菜の顔が見え抱き締められるのを確認すると、すぐに眠気が吹っ飛んで明菜から離れた。

「な……な……な！？」

「……………そんなに驚かれると少々傷付きますね」

「な……何で……………俺がアンタと一緒に寝てたんだ？」

「ふふふ……可愛い寝顔で、お母さんと眩きながらずっと抱き締め  
ていましたよ？」

「うわああああ~~~~!!!!!!」

光一は恥ずかしさの余りに大絶叫を響かせた。

明菜を抱き締めていた事は覚えていたが、まさか寝ている時にそんな恥ずかしい事を明菜の目の前でやっていたと思うと羞恥心が更に増大した。

「（あ…穴があつたら入りてえ~~~~!!!!!!!!）」

「久遠君、ちょっといいですか？」

「（も…もしこれが旅人さんに知られたら……俺は死ぬ!!）」

明菜が声を掛けても光一は全く聞いていないが……。

「聞いてますか久遠君!？」

「は…はい!」

大声を出したら漸く返事をした。

「もう……そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに」

「あ…アンタがそう言っても俺は凄く恥ずかしいんだよ!!」

「大袈裟だと思えますが……まあいいでしょう」

「良くない!!」

明菜が一言で片付けると光一は即座に突っ込む。

「まあまあ……………それで久遠君、突然ですが今でもお兄さんを恨んでいますか？」

「何をそんな当たり前の事を……………あれ？」

光一が白夜の事を思い出すと、前とは違ってそれほど憎しみに囚われなかった。

「（何だ？ 兄貴が今までしてきた事を思い出しても……………）」

「ふふ……………その様子だと大丈夫そうですね」

「……………吉田さん、アンタ俺に何をしたんだ？」

さつきまで羞恥心全開だった光一が急に真剣な顔をして明菜に問いただすが……………。

「何をしたと言われても……………私は貴方を抱きしめただけですよ。まあそれ以外は久遠君の可愛い寝顔に見とれて思わず頬にキスをしていますでしたが……………けど久遠君が眠っている時に私を……………」

「わあああ……………!!!!!! やっぱ言わなくていい……………!!!!!!」

質問が藪蛇だったので光一は撤回する事にした。

「何だか久遠君の弱みを握ったかのような感じですね」

「……………し…死にたくなつて来た」

まだ会つて間もない明菜に弱みを握られた光一は不覚と言わんばかりに自己嫌悪に陥る。

「よ…吉田さん、俺が寝ていた事は旅人さんに……………」

「分かってます。誰にも言つ気はありませんのでご心配なく」

患者の守秘義務ですので、と明菜は付け加える。

「絶対だぞ！」

「そんなに念を押さなくてもいいですから。では本日のカウンセリングはここまでにしましょう」

「……………」

「折角ですから此処で夕食を食べて行きますか？」

「……………遠慮しとく。今日は愛しい彼女と一緒に夕飯を食べる約束をしてるから」

光一は明菜の誘いを断つて帰り支度をする。

「それはそれは。では今度来る時にその彼女さんと一緒に来てはどうですか？」

「考えておくよ。じゃあ俺はこれで（ガチャ）」

「何かあったらまた来て下さい。力になりますから」

「ああ、そうさせて貰うよ（ボタン）」

そして光一はリビングを出て帰って行った。

「……………さて、レポートを纏めておきますか」

光一が帰ったのを確認した明菜はカウンセリングレポートを書く為にノートパソコンを起動した。

と、その時……………。

『（ピシュッ！）どうやら終わったみたいだね』

「旅人さん」

椅子に座っている明菜の背後に私がいきなり現れた。

「随分とタイミングの良い登場ですね」

『ああ、光一が君の家から出て行くのを見たからな』

「そうですか……………」

『それで結果は？ 光一の白夜に対する憎しみは取り除けたか？』



「……………残念ですが、完全に取り除く事は出来ませんでした。憎しみを和らげるだけが精一杯で……………」

『……………そうか』

明菜の返答に私はやはり簡単には行かないかと思い少々落胆した。

『まあいい、此処からは光一次第だ。後は優子達が光一を何とかしてくれるだろう』

「だといのですが……………」

『何だ、明菜にしては随分と弱気だな』

「……………あの子が眠っている時に少しだけ心を覗いて見たのですが、凄まじいと言うほどの憎悪が……………」

『けど明菜がそれを和らげたんだろ？』

「確かにそうですが、あくまで和らげたに過ぎません。あの子がまた憎しみに囚われて暴走する可能性があります」

明菜は光一が再び暴走する事を危惧していた。

ここで明菜の事について少し説明しておこう。明菜は眠っている相手を抱き締める事で相手の感情を読み、そして暴走している感情を正常に戻すことが出来る能力を持っている。

この能力によって明菜が今まで診察した患者達は救われているので

ある。私はその能力を「精神回復マインドリフレクشن」と呼んでいるが。（注：明菜はとあるシリーズでの学園都市で能力開発されてはいませんので）

とまあそう言う訳で光一が明菜の精神回復マインドリフレクشنで完全回復出来ないとなると、此処からは光一自身で乗り越えて貰うしかない。

『ま、それ以降は私達が口を出す事じゃない。後は見守るだけだよ』  
「……………そうですね、私に出来る事は全てやりました。後は久遠くん次第です」

『光一が来た時は、また頼むね』

「分かりました。……………それと旅人さん、ちょっとお聞きしたい事が」

『ん？』

私が姿を消そうとすると明菜が待ったを掛ける。

「その……………夕食はまだ食べていませんか？」

『ああ、これから何処かのレストランで食べようかと思っているけど』

「……………でしたら今日は私の家で食べていきます？」

『いいのかい？』

「ええ……………それと（スツ……………ギユウ）」

明菜は立ち上がった私に抱き付いてくる。

『明菜？』

「今日は私の家に泊まって貰えますか？　ちょっと人肌が恋しくなつて……」

『おいおい、光一と一緒に寝て今度は私か？　そんなに人肌が恋しいなら彼氏でも作ればいいだろうに』

「そうですけど、やはり私としては抱き心地がいい旅人さんが……」

『私は抱き枕じゃないんだが……まあいいか』

明菜の理由に私は呆れながら突っ込みながらも明菜の家に泊まる事にした。

「では今から夕飯を作りますので少し待ってもらえませんか？」

『おい、レポートを書かなくていいのか？』

「大丈夫です。久遠君とカウンセリングしている時に必要な所をメモしましたので」

『さいですか……』

そして明菜は妙に嬉しそうに夕飯を作り始めた。

おまけ

光一がカウンセリングをした翌日の昼休み……。

「……………」

「何だ？」

光一は廊下で偶然に白夜とバッタリ会った。廊下にいる他の生徒は光一と白夜を見てハラハラしている。

「……………」

「私に何か言いたい事でもあるのか？」

「……………いや、別に」

「ほう？　一昨日は私に襲い掛かってきた貴様が何もしないとはな。

どう言う風の吹き回しだ？ まあ貴様が襲い掛かった所で、すぐに叩きのめすが」

白夜は光一に挑発じみた事を言っただけで怒らそうとしていたが……。

「……………」

「言い返すことも出来ないか。所詮、貴様は出来底ないだな（スタスタ）」

光一は特に何もしなかったので、白夜は興奮めと言わんばかりに去って行った。

しかし……。

「……………フン、旅人さんの前であっさり負けたアンタに言われたくないな、オールマイティさん」

「その名で呼ぶな！！ と言うか光一、それを何処で知った!？」

光一が言い返すと、白夜は過敏に反応した。

「さあね。じゃあな、オールマイティ兄貴（スタスタ）」

「待て!!! 今すぐ貴様を平伏してやる!!!」

白夜は颯爽と去って行く光一を追いかけるが、すぐに見失ってしまった。

「プクククク……………あゝ面白かった、あの兄貴の慌てよう。今度

は放送室で兄貴の失態を全校放送してみようかな？」

白夜に対する憎しみが完全に晴れた光一では無いが、それでも“凶王”にはならなく、今の所は恨みを晴らす為の悪戯小僧になっていた。

寸劇劇場 文月BASARA ?

寸劇? 工藤愛子 視聴覚室を偵察する。

キャスト

猿飛佐助役 工藤愛子

かすが役 木下優子

ザビー役 さすらいの旅人

視聴覚室の前に愛子がいた。

「うっん、光一君に頼まれて来て見たけど、面白い事になっているねえ〜」

愛子は光一に……。

《聞いた話だと、旅人さんが視聴覚室を占領して何かしているみたいだから、ちょっと確かめて貰えないか?》

《光一君の頼みだったらお安い御用だよ》

《ホントだったら俺が行きたい所だが、バカ共が明久を狙う準備をしているからな》

《手伝う?》

《いいよ、恋人の愛子にそんな危険な目に遭わせたくないし。おっと、バカ共が動き出したな。それじゃあ頼む》

《頑張つてね》

と言つ訳で、愛子は視聴覚室前にいるのだ。

「それじゃあ、ちよつと入って見ますか」

愛子が視聴覚室に……。

「どーも、ちよつと入らせてもらいますよ」

こそこそと忍び込むように入ってきた。

「って何なの此処!? 既に視聴覚室じゃ無いよ!!」

視聴覚室の室内が変な空間になっていた。

『お、今度は愛子ちゃんが来ましたか。君もお忍び大作戦かな?』

「あれ? 旅人さんの声が……ん? ちよつと待って、君も……つてどういう事?」

愛子は何処からか私の声が聞こえたのでキョロキョロと見回したが、私の言っている事に疑問を抱いた。

『まあ誰でも大歓迎だよ。それでは愛子ちゃん、私の所まで来るの



をお待ちしていますよ』

「……………旅人さんは完全に遊びモードに入っているね。まあボクもボクでここを楽しみますか」

そして愛子は第1関門まで進むと……………。

『先ずは第一関門！ 私が作ったロボットFFF団を倒して下さい。！』

《ギギギ……………ココハ……………トオサナイ……………ガガガ……………モテルオトコハ  
テキジャー……………》

ロボットFFF団が扉を守っていた。

「旅人さんも変なロボットを作ったねえ」

『それは召喚獣を使って倒して下さいね フィールドはもう展開済みだから、すぐに出せるよ』

「なるほど、それじゃあ試してみますか。サモン！」

愛子が召喚獣を出現させると……………。

《ほいっと 人呼んで工藤愛子！ さうて、ボクに勝てるかな？》

戦国BASARAのキャラクターである“猿飛佐助”の格好をした

愛子であった。

「あれ？ ボクの召喚獣が全然違う……」

『ほほう、愛子ちゃんは猿飛佐助ですか。ではとりあえず、第1関門を突破してねえ』

「……………ま、いつか。早く門番を倒しちゃおうと」

愛子はすぐに順応して、召喚獣でロボットFFF団を蹴散らし、第1関門を突破した。

『やりますねえ。にしても、今日は2人目の恋人さんも来るとは意外だよ。私の倫理に撃ち抜かれたかな？ なぐんちゃって』

「2人目の恋人、って…もしかして」

そして愛子が第2関門へ進むと……

「あ…愛子？ どうしてあなたが？」

「やっぱり優子だったんだ。優子がここに来るなんて意外だね」

そこには優子がいた。

「ねえ優子、ここで何しているの？」

「ちょ…ちょっとね…あはは……」

「？」



優子が走っていったので、愛子は追いかけて私の所に着くと……。

『ハツハツハツハ！ 待ってたよ愛子さん。よく2つの関門を突破したね』

「あんなの簡単だったよ。ねえ優子………あれ？ 優子がない。優子……！ 何処に行ったの……？」

優子がないのに気付いたので声を掛けたが、反応が無かった。

「何で優子がないのかな？………仕方ない、一人だけ旅人さんの相手をさせてもらおうよ」

『あれ？ 光一の妾である優子は何処に行ったんだ？』

「それはボクも知りたいんですけどね」

『………まあいいか、それじゃあ私自ら相手をしてあげるよ！ さあ！ 召喚獣を出したまえ！』

「行くよ旅人さん！ サモン！」

愛子が再び召喚獣を出して、愛子 VS 私の戦いが始まった。

寸劇？ 島田葉月との戦い

キャスト

いつき役 島田葉月

伊達政宗役 久遠光一

片倉小十郎役 吉井明久

視聴覚室にて……。

「旅人さんに呼ばれて来たが……これはまた……」

「もう此処は視聴覚室じゃ無いよね？」

光一と明久が視聴覚室に來ると、そこは辺り一面真っ白な雪に覆われていた。

「なあ明久、この視聴覚室……妙に広く感じないか？」

「うん、僕たちの知ってる視聴覚室と違う広さだよ。まるで外と中が別世界になっているような……」

“まあまあお二人とも、そんな事は気にしない気にしない”

「「！！！！」」

突然、何処からが私の声が聞こえたので光一と明久は見回したが誰もいなかった。

“私を探しているみたいだけど其処にはいないよ”

「じゃあ何処にいるんだ？」

“この視聴覚室の奥にいる。さあ、果たして私の所まで来れるかな？”

「上等だ、後悔するなよ？ 行くぞ明久」

「う…うん。にしても光一、随分と楽しそうな顔しているね」

光一が笑みを浮かべている事に明久は気付く。

「まあな」

「どうして？」

「周りをよく見てみる明久。どっかで見たこと無いか？」

「え？ ……（キョロキョロ）……あ！ 此処って戦国BASAR Aの！？」

「ああ、最北端のステージだ」

面白くなってきたぜと言いながら光一は更に笑みを浮かべる。

“さあ二人とも、召喚獣を出してね。此処は召喚獣を呼ばないと進めないからね”

「了解、サモン!!」

「さ…サモン!!」

光一と明久が召喚獣を呼び出すと、伊達政宗の格好をした光一と片倉小十郎の格好をした明久が現れた。

と、そんな時……。

「待ってたです！ バカなお兄ちゃんに鉄砲のお兄ちゃん！（ギョウツッ!）」

「な!？」

「ええ!？ な…何で葉月ちゃんが此処に!？」

島田美波の妹 島田葉月がいきなり光一達の目の前に現れて明久に抱き付く。

“こら葉月ちゃん、勝手に行っちゃだめだよ。折角の段取りが台無しじゃないか”

「あつ……ゴメンなさいです」

「ちょ…ちょっと旅人さん！？ どうして葉月ちゃんがいるんですか！？」

葉月を注意すると明久が私に質問をする。

“葉月ちゃんが学園に来たっていうから私が連れて来た”

「でも学園長の許可を得ないと不味いんじゃないんですか？」

“大丈夫だ、ちゃんと学園長に許可を取ってあるから”

「（どうせまた小切手を使って黙認させたんだろうな）」

私と明久の会話に光一は私が学園長を懐柔したのだろうと思った。

“段取りが狂っちゃったけど仕方ない。葉月ちゃん、明久から離れてアレを出して”

「あ、はいです（スッ）……バカなお兄ちゃん、勝負です！！ サモン！！」

「……は？」

葉月が召喚獣を出すと……。

《葉月は負けないです！！（ブオンッ！！）》



“いつき”の格好をして巨大ハンマーを振り回す葉月が現れた。

「えええ〜!!!?? な…何で葉月ちゃんが召喚獣を!? しかも“いつき”の格好だし!?”

「どうせ旅人さんの方で召喚できるようにさせたと思うが……葉月ちゃんの召喚獣は中々似合ってるな」

いつきと同じく葉月ちゃんも天真爛漫だしと光一は付け加える。

“さあ葉月ちゃん! 明久に勝てたらデート出来るよ!!!”

「はいです! バカなお兄ちゃん、行くです〜!!!”

「ちょ…ちょ!?”

葉月の召喚獣(以降はづき)が明久の召喚獣に襲いかかってきた。

「頑張れ明久、俺は見物させて貰うから」

「ええ!? 待ってよ光一!!!”

「えい! 雪ころがしです!!”

「うわあ!!”

明久は完全に見物モードになった光一に声を掛けるが、はづきは“いつき”の技である“雪ころがし”を使う。

それを咄嗟にかわした明久の召喚獣であるが……。

「隙あります、バカなお兄ちゃん!!」

「え!? そ…それってBASARAじゃ……」

「やあああ~~~~!!!! (ブオンブオンブオン!!!!)」

「(ドガンツ!!) グハツ!! (バタンツ!!)」

はづきがBASARAを仕掛けてきたので、明久の召喚獣は強烈な一撃を喰らって消滅すると、痛みをフィードバックした明久が倒れた。

「随分と決着が早い事で……」

“葉月ちゃんの勝ち~~~~!!!!”

「やったです!! バカなお兄ちゃんに勝ったです!!」

ピヨンピヨンと飛び跳ねる葉月は嬉しそうに明久に近づく。

「バカなお兄ちゃん、どうして倒れているんですか?」

「あ…あはは……何でも無いから…… (ま…まさか葉月ちゃんの攻撃力があんなに高かったとは……)」

召喚獣の痛みによるフィードバックで倒れたとは口が裂けても言えない明久であった。

“さあ明久、勝負に負けたから葉月ちゃんとデートしてもらおうよ”

「は……はい……じゃあ行くところか葉月ちゃん」

「はいです!!」

明久が立ち上がって葉月を連れて視聴覚室を出た。

と、明久と葉月がいなくなったその時……。

『（ピシュッ！）あゝあ、本当だったら葉月ちゃんは最後の関門で明久と戦わせる予定だったんだけどな』

「お、漸くご登場か」

私が光一の目の前に現れた。

『葉月ちゃんったら明久を見た途端に飛び出しちゃって』

「それだけ明久の事が好きだって証拠だろ？」

『まあそうなんだけど……でだ、どうする光一？ このまま帰るかい？』

「折角呼ばれたんだ、せめてこのステージをクリアしてから帰らせてもらおうよ」

『そうかい、それじゃあ急遽私がボスになりましょう。奥で待つてるぞ（ピシュッ！）』

光一が最後までやると言ったので、私は再び姿を消した。

「さてと……行くとしますか」

そして光一は奥に進む為に第一へと向かった。

沢井真美 文月学園に訪れる

文月学園が昼休みの時間になっていると、正面玄関には私と真美がいた。

『さあ真美ちゃん、光一に会いに行くのでしょうか』

「……………一度、文月学園に来た筈なのに何故こんなに違和感が……………」

『ストオ〜ップ！ それ以上言っちゃだめだよ』

文月学園の制服を着ている真美が危険発言をしている所を私は言わせない様にする。

「……………すみませんでした」

『分かれば宜しい。では行きましょう（スタスタ）』

「ちょ…ちょっと待って下さいよ（スタスタ）」

私が学園に入ると真美が私に追いかける様に付いて来た。

……………

文月学園の廊下内を歩いている私と真美。

『さてさて、今は昼休みだから光一達はAクラスで昼食中かな?』

「……………どうやら違うみたいですよ」

『え?』

「あそこを見て下さい(スッ)」

真美が指をさした方向を見ると……………。

「久遠光一!! てめえみたいなSSS級異端者は判決を下す必要は無いから即時死刑だ!!」

「……………うおおおお……………!!……………!!……………」

「お前等いい加減にしろよ!!」

FFF団が光一の行く手を阻んでいたのである。

『アイツ等……………お仕置きをしたのに全然懲りてないな』

「あの連中はもう“学習”という単語が存在していませんね。ニワトリ団って呼んだほうがいいと思いますよ」

『ニワトリ団?』

「“鶏は二歩歩けば忘れる”と言う諺だけで分かります」

『……………成程ね』

真美の言い分に私は納得した。

確かにFFF団は私の方で人の恋愛の邪魔をするなど何度も言ってお仕置きをしているが、奴等は

忘れているかの如く懲りずに同じ事を繰り返している。

真美の言つとおり、私はアイツ等をニワトリ団と呼ぶのに相應しいと思う。

「で、どうします？ 久遠君を助けなくていいんですか？」

『言われなくても助けるよ。真美ちゃんは見物してる？』

「いえ、丁度技の実験台が目の前にたくさんいるので私もやりませうと言う訳で旅人さん、私の服をジャージにして貰えませんか？」

『ほいほい（パチンツ！）……………それじゃあ行くよ（ダツ！）』

「はい（ダツ！）」

私は指を鳴らして、真美がジャージ姿になったのを確認するとFFF団の所へと向かっていき、真美は戦闘準備バツチリと言わんばかりに突撃して行った。

「『久遠！！ 死に晒せえ！！！！』」

「邪魔だ！！（ドギョーンッ！ ドギョーンッ！ ドギョーンッ！）」

「『グアッ！！』」

FFF団数名が襲い掛かったが、光一は私から貰ったデザートイグルを使って撃破する。

「へえ〜中々の威力だな。流石は旅人さん、強力な銃器を持ってる事だ」

おまけに大した反動が無いなと思いき撃破したFFF団数名を見ると……。

「ぐえええ……な……何だよあの銃は……メチャメチャ痛え……」

「あああ……み……鳩尾に当たった……痛えよう……」

「か……かか……%）’&（%」

腹や胸や股間に手を置いてかなり痛そうな顔をしていた。



「卑怯だぞ貴様!! そんな物を持って恥ずかしいと思わないのか!? 正々堂々と戦え!!」

「一人相手に寄って集ってリンチするお前等に言われたくねえよ!!」

「総員一斉攻撃だ!! この卑怯者には俺達が制裁を下さねばならん!!」

「「「「うおおお~~~~~!!!!」」」」

須川の発言に呆れながら言い返す光一であったが、須川はそれを無視してFFF団全員で一斉攻撃していた。

が……。

『ではその卑怯者である光一に加勢しますか(ドガッ!)』

「アンタ等が一番卑怯だと思っけど(ドゴッ!)」

「「%’&(\$)&||&)%&&(!!!!!!!」」

「「「「「!!!!!!」」」」

私と真美が揃ってFFF団の二人に金的に蹴りを入れると、喰らった二人は凄いい顔をしながら股間に手を当て、光一を含むFFF団全員は私と真美の方を見た。

『やあ光一』

「旅人さん、アンタいつの間に学校に来てたんだ？　ってかソイツは？」

「こんな格好で失礼ですが、初めまして久遠光一君。私は沢井真美です、よろしく」

「あ、ああ。此方こそよろしく（ペコッ）」

真美に挨拶された光一は、それに応える為に頭を下げながら挨拶をする。

「貴方とゆっくり話したい所だけど、先ずはコイツ等を殲滅しなきゃね（スッ）」

「それは同感だ（ジャキッ!）」

『（あれ？　もしかして私って必要無い？）』

何か真美と光一だけで倒してしまいそうな雰囲気であった。

「じゃあ私が8で久遠君が2でいいかしら？」

「冗談、俺が8でアンタが2だ。寧ろ俺一人だけで全員倒すが？」

「ならどっちが数多く倒すか競争する？」

「……フッ、面白え。それじゃあお先に!!」（ドギョーンッ!）

「グアッ!!!」

光一が銃を使ってFFF団に撃つて一人倒し……。

「あつ！ ずるい！！（ダッ……ドゴツ！！）」

「グオツ！！」

真美もすぐに一人倒して競争が始まった。

「……ま……待ってくれ真美ちゃん！！ 俺達は君の味方で……」

「」

真美の登場に呆然としていたFFF団であったが、正気を取り戻すといきなり馴れ馴れしい態度を取り……。

「初対面の貴方達に名前と呼ばれたく無いわ！！ さっさと伸されなさい！！（ドガッ！ バキッ！）」

「……ギヤアアアア……！！！！」「」「」

それを不快に感じた真美は強烈な蹴りを喰らわせた。

『あらら……どうやら私は必要無いみたいだね』

ちよっぴり寂しい思いをしながらも、私は急遽出来た 武芸コンビ  
真美・光一の戦いを見物していた。

それから5分後

「ふうっ（パンパン）……一応コイツ等には感謝しないかね。技の練習台になってくれたから」

「すげえなアンタ、パンチやキックだけじゃなく投げ技まで出来るとは。思わず見とれたよ」

FFF団を全員は真美と光一によって斃されていた……殆どは真美が斃していたが。

どうでもいい事であるが、廊下にいた生徒達は真美がFFF団を簡単に薙ぎ倒すのを見て恐怖している。

『しかしまあ……真美ちゃんが合気道の使い手なのは知っていたけど、まさか空手まで出来るとは知らなかったよ』

「言ってませんでしたっけ？ 私は合気道の他に空手も少々出来るっつて……」

『……初耳だよ。っつか真美ちゃん、君は演劇部だよね？』

「そうですよ」

私の質問に真美はあっさりと答える。

けれど、私としてはどうしても気になる事があった。

『じゃあさつき最後の奴に喰らわせた派手な回し蹴りは何？ とてもじゃないけど素人が出来る技じゃないよ？』

「ああ、アレですか。胴廻し回転蹴りと言って、あるお爺さんに教えて貰ったんですよ。初めてやった技ですけど、何の躊躇いも無く当てると気分爽快でいいですね」

『……………』

「へえ、そりゃ凄いな」

私は真美の格闘センスに舌を巻き、光一は感心していた。

「それで旅人さん、今日も俺に会いに来たのか？」

『……………ああ。光一や明久達に真美ちゃんを紹介しようとAクラスに行こうとしたんだけど……………』

「その途中で久遠君がこの連中に絡まれているのを見て助っ人に来たって事」

「成程ね……………」

私と真美の説明に光一は理解する。

「じゃあ俺と一緒に屋上に行くと思いますか」

『あれ、Aクラスじゃないの?』

「そのつもりだったんだが、優子と愛子が屋上で食べようって提案を出してな。俺は行く途中にトイレに寄って出た後、コイツ等に邪魔されてな……ところで沢井、さっきから気になっていたんだが、何でジャージ姿なんだ?」

光一が理由を言い終えると、真美の格好について問う。

「ああコレ? コイツ等を倒すのに制服だと不味いと思って、旅人さんに頼んでジャージ姿にして貰ったの」

「……………確かにな。制服姿で蹴りなんかやったら見えちまうからな」

文月学園の女子の制服のスカートは短いしと光一は付け加える。

「と言う訳で旅人さん、元に戻して貰っていいですか?」

『了解……………いや、屋上に行ってからにしよう』

「どうしてですか?」

『(クイツ)……………』

私が指を倒れているFFF団の方を指すと……………。

「……………ああ、そういう事ですか」

「コイツ等まだ意識があったのか……………」



沢井真美 文月学園に訪れる ?

光一に付いて行った私と真美は屋上に着いて、私の方で明久達に真美を紹介した。

「紹介します。私の友人である沢井真美ちゃんです」

「初めまして、沢井真美です（久遠君以外は既に会っている面子ですけど……）」

「……」

真美が自己紹介すると明久達は無言になっていた。

念の為に言っておくが、真美の容姿は明久の女装版なのだ。そんな真美を見て明久達が無言になるのは無理もなかった。

特に明久は……。

「は……はは……はははは……嘘だ……！！！！！！！！！！」

「明久！！ しっかりするのじゃ！！」

かなりショックを受けているのか、錯乱状態になり始めたのである。と言うか、明久のこんな状態を見るのは凄く久しぶりだった。

「ハハハ……まさか此処でも明久の大絶叫を聞く事になるとは……」

「あの日以来ですね。まあ私もあの時に吉井君を見て驚きましたけ



ど……」

「何言ってるんだ二人とも？ 沢井は明久と初対面じゃなかったのか？」

『……………こつちの話だから気にしないでくれ』

「久遠君は気にしないで」

「????？」

私と真美の言っている事に光一は頭に“？”ばかり浮かび上がるばかりであった。

明久を何とか落ち着かせて10分後。

「ハハハハ……………世界の広さを知ったよ……………」

『何を訳の分からん事を言ってるんだ、明久』

「吉井君、そんなにショックを受けられると私もちょっと傷付くんだけど……………」

明久の呟きに私と真美は即座に突っ込む。

確かに明久の大変複雑な気持ちは分からんでも無いが、流石にオ―

バーでは無いかと思った。しかし他にも複雑な気持ちを抱いている者が2名いた。

それは……。

「……女の子なのは分かるんだけど、それでも何か吉井君に負けている気分だわ……特に胸が……この複雑な感情を何処にぶつければいいの？」

「どうして神様はボクや優子に胸の脂肪を恵んでくれなかったんだろっ……お腹の脂肪なんかどうでもいいのに……」

Ortの体勢になって打ちのめされている優子と愛子であった。

「姉上達まで……」

「おいおい、明久だけじゃなく君達もか？」

2人を見た秀吉と光一は呆れながら見ていた。

「あの〜？ 私としてはあんまり胸があっても邪魔なだけで、逆に貴方の方が羨ましいのですが……」

撃沈している優子と工藤に真美は声を掛けたが……。

「……貴方にアタシ達の気持ちなんて分からないわ……」

「……沢井さん、今はボク達の事は放っておいてくれないかな？」

「は……はい。失礼しました」

哀愁を漂わせている2人に真美は退く事にした。

『……………所で、今日は此処で弁当を食べるんじゃないの？  
そうでしょ、木下さん、愛子ちゃん？』

「……………そうね、早くお弁当を食べてみましょう。時間が勿体無いから」  
「……………うん、そうだね」

『……………（これは相当なダメージだな）』  
完全に敗者の顔になってお弁当の準備をしている二人を見て私は何か悪い事をしたかのような罪悪感が湧いた。

私としてはこれ以上見るに忍びなかったのである事を提案して2人にしか聞こえないように囁く。

『なあお二人さん。今度エステでも紹介してあげようか？ 私の知り合いでエステティシャンがいるからそこで胸を大きくして貰ったら？ 絶対大きくなる訳では無いけど。言うまでも無いが、勿論タダだね……………（ヒソヒソ）』

「……………」

エステと聞いた瞬間に優子と工藤は私の方に顔を向ける。

「行く！ 絶対に行く！！ だから紹介して！！」

「旅人さんのお誘いを断っちゃういけないよねえ」。是非とも行かせ

て貰いますよ」

『……………急に元気になったな』

まあ元の状態に戻ってくれたから良いかと思って、私は光一達と一緒にたくさん量が入っている弁当のおかずをつまみ始めた。

優子と工藤の作ったお弁当を食べて20分後……………。

「ほお〜沢井は演劇部に入っておるのか」

「ええ、私は女優の道を目指すため演劇部に入っているの。旅人さんから聞いた話だと、確か木下君も演劇部に入っているみたいね」

「うむ。お互い頑張ろうのう」

演劇の話題となった秀吉と真美は仲良く談笑していた。

「沢井さんと秀吉が意気投合してるね……………何かちょっと妬けるな」

「そりゃそうだろ、同じ演劇部員だからな……………あの程度で嫉妬するなよ明久」

「他校の演劇部員となれば秀吉も喜ぶでしょうね……………吉井君が秀吉と話してる沢井さんに嫉妬してる……………いいわ」

「もしかして旅人さん、沢井さんを弟君に合わせたいが為に連れて来たの？……ちょっと優子、顔がにやけているよ」

『いや、今回は光一に真美ちゃんを紹介しようと思って来たんだよ……木下さん、腐女子タイムは真美ちゃんがいなくなっただけからにしてね』

秀吉と真美の談笑を見ていた私達は思った事を言う……後からは突っ込みであつたが。

そして私が此処である一言を呟く。

『真美ちゃんと秀吉……演技力はどっちが上かなあ？（ボソッ）』

「「！！！」」

私の呟きに真美と秀吉は過敏に反応する。

「何を言ってるんですか、旅人さん。演技に上手いも下手もありませんよ」

「そうじゃぞ旅人殿。熱意の籠った演技をすれば、そんなの関係ないのじゃ」

『ふん』

過敏に反応した割には随分と控えめな答えを返す二人であつたが……。

「まあもし此処で演技勝負をするんですたら……私が勝ってるで

しょうね」

「（ピクッ！）」

真美の勝利発言に秀吉は顔が引き攣る。

「沢井よ、冗談が過ぎるのじゃ。ワシが勝つに決まっておろう」

「へえ〜木下君も随分と強気ねえ〜」

「演劇はワシの生き甲斐じゃからな（バチバチ！）」

「それは私だって同じよ（バチバチ！）」

2人は笑顔で会話しているが目は全く笑っていないかった。

「ね…ねえ皆、僕の気のせいかな？ 秀吉と沢井さんの間に火花が飛び散っているけど」

「大丈夫だ明久、俺にも見えるから。てか秀吉があんなに對抗心を剥き出しにするとはな……」

「ねえ優子、弟君って負けず嫌いななの？」

「演劇に関してはね。秀吉は演劇に一切妥協しないから」

『……………（ちょっと数蛇だったかな）』

優子の発言に思わず私は余計な事を言ってしまったかと後悔していた。てつきり一言で片付けられるだろうと予想していたのだが。

そんな私達を他所に、真美と秀吉は……。

「木下君の演劇に対する熱意はよく伝わったけど、それは私も一緒よ。けど女優を目指す私の方が上ね」

「ほう？ 女優を目指すだけで熱意がワシより上とは随分と見縊られたもんじゃのう」

「私は思った事を言ったまでよ」

更にヒートアップしていた。

「ではワシも言い返させて貰うぞい。女優を目指すだけで熱意がワシより上とは片腹痛いのう。それだけで優劣を決めるとはお主も存外に器が小さいのじゃ」

「……………（ヒクヒク）……………言ってくるわね……………けど木下君だつて器が小さいんじゃないかしら？」

「それはどういう意味じゃ？」

「私が勝つと言っただけで過敏に反応して言い返すなんて……………心に余裕が無い証拠よ」

「……………（ヒクヒク）……………ほほう、お主も中々言つものう」

「……………」

真美と秀吉の暗雲の漂う会話に私達は黙って見ていた……………ではなく、

恐くて何も言えなかった。

「じゃあこの際、どっちが上か勝負しない？」

「そうじゃのう。ワシとしてはそっちの方が分かりやすくもいいのじゃ」

「決まりね。審査員は……旅人さんをお願いしてもいいかな？」

「光一達もいいかのう？」

2人が私達の方に顔を向けてお願いをすると……。

『……わ……分かりました……』

「あ……ああ。俺は別に構わないが……」

「う……うん。僕もいいよ、秀吉」

「そ……そうね、こう言った勝負は審査員がないとダメよね。何より弟の頼みだし……」

「ぼ……ボクもいいよ。反対する理由は無いし」

私達はドモリながらも承諾した。

「それじゃあ審査員は旅人さん達で、勝負の内容は木下君が決めていいわよ。当然、貴方の得意分野で構わないわ」

「いやいや、此処は沢井に譲るのじゃ」



「あらどうして?」

「ワシとしてはお主が考えている方が気になるから」

「?」

何故この2人は相手に譲っているのかは光一達は分からなかった。

『(成程。二人は相手の得意分野で挑み、そして勝つって寸法か)』

敢えて相手に有利な立場にさせて、それでも自分が優雅に勝つと二人はそう考えているのだろう。だから2人はお互いに譲り合っている。

しかし、これでは何時までも譲り合いが続きそうだと思ったので…。

『じゃあ私が決めるってのはどうだい? その方がお互い同じ条件だからいいでしょ?』

私が立候補する事にした。

「旅人さんが決めるんですしたら私は構いませんよ」

「そうじゃのう。旅人殿だったら文句は無いのじゃ」

『そ…そうかい? それじゃあ勝負の内容は(キーンコーンカーンコーン!!)……………』

私が言い出そうとしたら昼休み終了前の予鈴がなった。

沢井真美 文月学園を訪れる ? (前書き)

今回は戦国BASARAネタがあります。

沢井真美 文月学園に訪れる ?

学校の授業が終わって放課後の空き教室……。

『それではこれより、第一回 演劇王者決定戦を開催しま〜す！  
！！！』

「いえ〜い！！（パチパチパチ！！）」

「……明久と愛子はノリノリだな」

「あの2人はイベント好きだからね」

私の開催宣言に明久と工藤は拍手をしており、光一と優子は苦笑しながら見ていた。

『では沢井真美と木下秀吉の入場です！！（パチンツ！！）』

ボンツ！

私が指を鳴らすと白い煙が出てきて、それが晴れると真美と秀吉がいた。

「随分と派手な演出だな、俺達しかいないのに」

「まあいいじゃない、光一。こういったイベントは演出が必要な  
だから」

「そうだよ、光一君」

「それで旅人さん、勝負のお題は何なの？」

優子が私に勝負の内容を聞いてくると……。

『今回の勝負は……ものまね対決だ！！（ババーン！！）』

私が内容を言った途端に背後から爆発音が鳴る。

「へえ、中々面白そうだな」

「でも光一、ものまねって芸人とかがやる一種のコントじゃないの？」

「確かにそうだが、演劇にとってコレは結構難しいぞ」

「と言いつと？」

光一に難しいと言われても明久は未だに分からなかった。

「つまり本人の性格や普段の仕草、そして口調までもマネするんだ。それは一見簡単そうに思えるが、実は凄く難しい。例えば明久、お前は普段の雄二の性格や口調までもマネをしろと言われたら出来るか？」

「……………出来ないね」

漸く明久は理解したみたいだ。

「だろ？ それだけものまねってのは高度な演技を要求されるんだ」  
「けど今回は2人がかなりの実力を持っていると思うから、審査するアタシ達も結構難しいと思うわよ」

「旅人さんが誰のマネをしるというのか楽しみだけだね」

3人の言い分に明久は先程までおちゃらけた顔から真剣な顔になって2人を見始める。

『ってか光一、私が説明する筈だったのに……』

「え？ あ……悪い、明久が俺に聞いてきたからつい……」

『……まあいいけど。では説明は省いて勝負に入るとしましょうか。二人とも、準備はいいかい？』

「うむ」

「いいですよ」

私の問いに秀吉と真美は笑みを浮かべて答える。

しかし……。

「お互い頑張ろうのう、沢井（ゴゴゴゴー!!）」

「ええ、悔いが残らないようにね（ゴゴゴゴー!!）」

握手している秀吉と真美であるが内心では絶対負けないオーラが漂っていた。

『……………』

「……………」

それを見ていた私達は少し引いている。が、私は2人のオーラに負けまいと頑張って司会を進める。

『ではお題は……………戦国BASARAです!!（パチンツ!!）』

私が指を鳴らすと2人の姿が……………。

「YA! HA! 奥州筆頭 伊達政宗!! 推して参る!!」

「貴様の思うようにはさせん!! 天! 覇! 絶槍!! 真田幸村、見参!!」

秀吉が伊達政宗、真美は真田幸村の姿となった。

「おお、戦国BASARAか……………姿まで変えるとは随分とリアルだな」

「秀吉と沢井さんが、あのキャラになってすぐ役になりきってるね」

「それと同時に威厳に満ちているわね」

「まさかゲームのキャラになるなんて……………ボクはてっきり学園の生徒の誰かを真似するかと思ったけど」

『ではお二人さん、始めて下さい』

光一達がそれぞれ思った事を言い、私は2人に開始の合図を出す。

「……………」

「……………」

伊達正宗となつている秀吉（以降は秀吉）と真田幸村になつている真美（以降は真美）は距離をとつて対峙する。

「……………真田幸村」

「……………伊達政宗」

2人が伊達政宗、真田幸村の声を出すと…………。

「……………ウオオオオオ……………！！！！（ブンブン！）ふっ！！」

「ウオオオオオ……………！！！！（ジャキンッ！！）」

真美は声を上げながら槍を振り回して構え、秀吉も声を上げて6本の刀を抜いて構え…………。

「行くぞ！！（ダッ！！）」

「Here We Go！！（ダッ！！）」

2人は相手に向かって突進する。



「（おいおい、伊達政宗 最終章の流れかよ）」

「（声や動きまでそっくりだし）」

「（まるでゲームから飛び出したかのような感じね）」

「（どうなるのかな?）」

『（さて、2人の演劇勝負を見せて貰おうか）』

私達は声を出さずにハラハラして見ている。

「さあ始めようぜ、真田幸村!! ここから先は俺達だけの舞台だ!!」（ビュオッ!!）」

「（ガキンッ!）伊達政宗、いざ尋常に勝負! 来い!!」（ググググ!）……ブオンッ!!）」

秀吉が刀を振り、真美が槍で受け止めて押し勝つと槍を振るう。

「（ビュッ）（Ha! 相変わらず暑苦しいぜ! そつら!!）（ビュオッ!!）」

キンッ! ガンッ! ガギンッ! ガンッ!!

秀吉が真美の攻撃をかわしてお返しと言わんばかりに六爪を振るう。

「アンタの首、この独眼竜がもらっつー!! (ビュオツ!)」

「(ヒュヒュ!) ならば我が炎、竜の身を燃やし尽くしてみせようぞー!! 烈火!! (ビュオオオ!!!!!)」

真美は秀吉の攻撃をかわした後に高速の突きを繰り出す。

「やるじゃねえか!?!」

「まだまだ! 全力で来い、伊達政宗!!」

「OK! アンタに手加減は無用だったな!?!」

そして2人の攻防が続く。

「……………おいおい旅人さん、何だよアレは……………」

『何って、2人の演劇だよ』

「いや、アレは演劇と言うより死闘と言った方が……………それに2人の周りから出てる雷や炎は何なんだよ……………」

『2人から出ているオーラは私のちよつとした演出さ。よく出来ているだろ?』

秀吉と真美の死闘を繰り広げている中、光一は私に聞いただけだ。

『最初は演出負けするかと思ったけど、中々迫力のある演技をするね』

「ってかアレは完全にゲームそのままじゃねえか」

『ほらほら、私と話していないで二人の演劇に集中しなさい。審査員なんだからじっくり見ないと』

「……………（コレ凄く難しいぞ）」

光一は大人しく2人の劇を見ることにしたが、二人の演技を見てどつちを選ぶのかを迷い始めた。それは明久達にも言える事であったが。

光一が演技を見ると……………。

「　腕を上げたんじゃないか？」

「貴様こそ…！」

秀吉と真美は距離をとって互いに相手を賞賛している。

「いいね、今日は最高のpartyになったぜ！（ビュオンッ…！）」

「（ガッ！）くっ…！」

再び攻防になると真美が若干不利な表情をする。

「独眼竜、やはり強い…！　されど、この幸村は倒せぬわ！（ブオンッ…！）」

「Ha！ 言うようになったじゃねえか！」

真美が再び押し返すと秀吉は笑いながら防御する。

「全力で来い！ それを受け止めた上で、貴様を超える！！」

「上等だ…後悔するなよ？」

秀吉が笑みが深くなり……。

「魅せてやるぜ、Show Time！！」

「燃えよ！ 我が魂！！」

更なる攻撃を繰り返すと、真美も負けじと反撃する。

「ウオオオオオ~~~~~！！！！！！」

ガギンツ！ ギンツ！ ガギャン！ ガンツ！

「真田幸村！！」

「伊達政宗！！」

ガガガガガガガン！！！！！！

「うおらあ……！」

「ぐっ……！」

剣劇が数分続くと、真美が隙を付いて秀吉に一撃を与える。

「幸村が槍、まだ折れはせん……！」

「Get Up……！喰らいやがれ真田幸村……！」

「何！？」

秀吉が戦極ドライブを発動させてBASARAを繰り出し……。

「Ha……！！……！」

「ぐっ……！！……！」

「Ya！ Ha……！（ズガンッ……）」

「（ドゴツ……）グハッ……！」

最後の一撃を真美に喰らわせた。

「うっ……うっ……我が……生涯……（バタンッ……）」

「……………（シャキンッ）」

真美が倒れると秀吉は六爪の刀を鞘に納めると……。

「楽しかったぜ、真田幸村」

最後の台詞を言って舞台から出た。

「……」

光一達は2人の演技に最早言葉が出なく、ただ見つめるばかりであった。

そして……。

『以上、秀吉と真美ちゃんの演技でした~~~~!!!!!!!!』

「~~~~」（パチパチパチパチパチ!!!!!!!!）「~~~~」

私が終了宣言をすると、光一達は大きな拍手をする。

『ではお二人さん、元に戻ってもらおうよ（パチンツ!）』

「~~~~」

秀吉と真美が元の姿に戻っても、2人はまだ動かなかった。

『……おい？ もう終わったんだぞ？』

「~~~~!!!!」

2人に声を掛けると気付いたかの様に私に顔を向ける。

「~~~~」ごめんなさい旅人さん、役になりきっちゃってつい……」

「わ…ワシも同じじゃ」

真美が立ち上がりながら私に謝り、秀吉も私に謝る。

『中々見事な演技だったよ二人とも、審査するのが難しいほどにね  
……』

「そ…そうですか？」

「ワシと沢井は思ったままに演技したのじゃが……」

真美と秀吉ははまるで大した事は無いと言う。

『……まあいい、それじゃあ私達は審査をするから二人はちょっと待っててくれ』

「え…ええ」

「分かったのじゃ」

私は二人から離れて光一達に近寄る。

『さあ皆、これから審査するからじっくりと考えてね。秀吉と真美ちゃんの内、どちらが良かったかを』

「」「」「」

『どづじしたっ？』

「…………俺、物凄く迷ってる」

「うん、どっちが良いかなんて僕にはとても…………」

「アタシも…………二人のあんな素晴らしい縁起を見せられて優劣を付けられないわ」

「ボクもはっきり言って甲乙付けがたいんだけど…………」

まあそれは確かに分かる。さっきの二人の演技は最早プロと言ってもいい位のレベルであり、

素人である私達に審査するなんて出来ないだろう。

『気持ちは分かるけど、こればかりは君達で審査して貰うよ』

私も含めてねと私は付け加える。

『それじゃあ審査タイムと行くよ』

「……………」

光一達はどつすねば言いかと言う位に迷いに迷っているのであった。



沢井真美 文月学園を訪れる ? (後書き)

どうでもいいんですけど、秋雨さん。  
最近感想が来なくて寂しいですよ。

沢井真美 文月学園に訪れる ？

真美と秀吉の演技を審査して一時間後

『結果発表〜〜！！！！！！』

「（ゴクツ）」

漸く審議が終わった私と審査員である光一達は秀吉と真美の目の前に立っており、2人は息を呑んで私達を見ている。

『いや〜お二人さん、待たせてすみませんねえ〜。何しろ素晴らしい演劇だったので迷いに迷っちゃって』

「俺は今でも悩んでいるがな……」

「僕も……」

「本当だったら二人に票を入れたいけど……」

「ボク達は審査員だから公平にしないとね……」

審査員の光一達は未だに苦渋の色を浮かべている。

「……………何か久遠君達が物凄い顔になっているわね」

「そうじゃのう。ワシ等の演技にそんなに悩む事かのう？」

「……」(人事だと思って……)「……」

真美と秀吉の一言に光一達は恨めがましい視線を送る。

どうしてこんな事になっているのかはちょっと時間を遡る。

……  
私たちが秀吉と真美から少し離れて審査している時の事……。

「……やばい、これは正直……」

「どちらを選ぶかなんて僕にはとても……」

「くっ！ アタシにはレベルが高過ぎるわ……」

「こんなに悩まされるなんて……」

言うまでも無いと思うが、光一達は秀吉と真美の演技を見てどちらがいいかと真剣に考えていた。しかし考えれば考えるほどに甲乙付けがたい状況になっている。

と、そんな時……。

「なあ旅人さん、この勝負は引き分けにする事は出来ないか？」

光一が私に提案を出してきた。

「うん！　それがいいよ！！」

「アタシも……どっちも名演技だったから此処は引き分けで良いわ」

「そうだね。ボク達にはどっちを選ぶかなんてとても……」

明久達は光一の提案に賛成していたが……。

『ダメ。審査員なら審査員らしくちゃんと決めないとね　それに演劇に妥協しないあの二人が引き分けなんて納得出来ると思うかい？』

「」「」「」

私が反対と理由を言うと、光一達は言い返すことが出来なかった。

『私だって引き分けにしたい所だけど、此処は厳正に審査しないといけないからね。皆さんもそこは理解して下さい』

「……………分かったよ！」

「うん…うん…どっちが……」

「ダメ……どっちかを選ぶなんてアタシには……」

「ああ……審査員なんて引き受けるんじゃないよ……」

.....

と言う事があつて光一達は今でも悩んでいるのであつた。

『（まあ私も結構悩んでいたけどね）……今回の勝敗の決め方は多数決制となつています。では光一達、旗を持つて下さい』

「「「（スツ）「「「」

光一達が私の指示で赤と白の旗を持つのを確認する。

『私と光一達の手を持っている赤と白の旗ですが、赤が真美ちゃん  
で白が秀吉となつています。そのどちらかの旗が多かったら勝者とな  
ります』

「「「.....」」」

私の説明に真美と秀吉は黙つて聞いている。

『旗の揚げ方は全員一斉ではなく、一人ずつ順番に揚げる事になつ  
ています』

「え？ 一斉に揚げないんですか？」

「ワシ等は一斉の方が手っ取り早くていいのじゃが.....」

『まあまあ、そこは気にしない気にしない　では先ず最初に愛子ちゃんから揚げて貰います』

「う…うん…」

真美と秀吉を宥めた私は愛子に旗を揚げる様に指示すると、工藤は前に立つ。

『ではお願いします』

「分かりました。ボクは…  
……………こつちです!!（バツ！）

」

「くっ!」

「おおっ!」

愛子が白の旗を揚げると、真美は悔しく、秀吉は嬉しそうな顔になる。

『先ずは秀吉か…愛子ちゃん、理由もお願いね』

「……………言わなくても良いと思うけど。えっと……………ボクが弟君を選んだのは、伊達政宗になっている弟君の演技に見惚れました。勿論沢井さんの演技にも見惚れましたけど、ボクとしては弟君が6本の刀を使いながら演技する所を見て、ほんのちよつとだけ技術が上かと思ひました。ホントはどっちも選びたかったけど、沢井さん……………ゴメンなさい!」

理由を言った後、愛子は真美に頭を下げて謝ると後ろに下がった。

「武器の差で負けたか……悔しいけど確かにアレは私じゃ持てないわね……」

「アレを6本同時に持つと手が凄く疲れるのじゃ」

真美は秀吉の器用さを認め、秀吉は先程の演技を思い出したのか手を開いたり握ったりしている。

『なるほどね。愛子ちゃんは絶対誰も持てそうに無い六爪を見て秀吉を推したか……では次に木下さん』

「ええ。分かったわ」

私が呼ぶと優子は前に立った。

『ではどうぞ』

「アタシは………こっち!! (バツ!)」

「やったっ!!」

「な…何故じゃ姉上!??」

優子が赤の旗を揚げた事により、真美はガッツポーズを取り秀吉は少しシヨックを受けた。

『まさか木下さんが真美ちゃんを選ぶとは……てつきり弟の秀吉を選ぶかと思ってたのに』

「アタシは身内だからって臍原はしないわよ。沢井さんを選んだ理由は……表情の差と言った所かしら」

『続けて』

「沢井さんの覚悟を背負った表情や攻撃を受けた時の苦しそうな表情が印象強かったわ。そして最後の倒れるシーンでの表情を見て、本当に死んだかと錯覚したの。だからアタシは沢井さんを選んだって事。と言う訳で分かったかしら秀吉？」

理由を言い切った優子は下がる。

「うっ……沢井に表情の差で負けるとは……悔しいのじゃ」

「ふうっ。取り合えずこれでお互い1勝1敗ね」

秀吉は物凄く悔しそうな顔になっており、真美は良かったと一先ず安堵する。

『まあまあ秀吉。ホントは木下さんも秀吉を推し』（ギロツ！！）

……ゴホン！ 次は明久ね』

「は……はい……」

秀吉を元気付けようかとしたが優子に睨まれた為に私は次の審査員を呼んだ。

『では判定を』

「（ジ~~~~~）」「



「……………」  
旗を揚げようとした明久であったが、秀吉と真美に見られて揚げるのを戸惑った。特に恋人である秀吉が物凄い視線を明久に送っている。

「ぼ…僕は……………やっぱりこっち!!（バツ!!）」

「明久!!（ギユウツ!!）」

「やっぱりね……………」

明久が白の旗を揚げ、秀吉は嬉しさの余りに明久に抱き付き、真美は予想通りかと思った。

「ちょ…ちょっと秀吉!？」

「ワシは嬉しいのじゃ!! 明久がワシを選んでくれて!!」

『はいはい秀吉、明久とイチャ付くのは後にしてくれよ（ベリッ!）』

「あ……………」

明久に抱き付いている秀吉に私はすぐに離すと、秀吉は残念そうな顔をする。

『それで明久、秀吉を選んだ理由は？ まさか恋人だからって選んだ訳じゃないよね?』

「は…はい。勿論理由はあります」

私が少し声を低めにして明久に問うと、明久は理由を言う。

「僕が秀吉を選んだのは……立ち振る舞いや仕草が伊達政宗その物だったからです」

『ほう？』

「僕は戦国BASARAのゲームをやってて伊達政宗を使っていたけど、秀吉が演じている正宗がゲームから飛び出してきたんじゃないかと思う位に似てて……だから僕は秀吉を選びました。沢井さんも同様に真田幸村に淒く似ていたけど、伊達政宗を好んで使っていた僕としてはやっぱり……」

明久が真美に申し訳なさそうにしていたが……。

「別に私は怒って無いわよ吉井君。気にしないでいいから」

『伊達政宗を知り尽くしているが故に推したって事か……まあそれも十分な理由にはなる。ゲームをやっているかいないかの違いの差だな。では頼むよ、光一』

明久らしい理由だと思った真美は素直に納得し、私は次の審査員の光一を呼ぶ。

「おう。俺の判定は……」

「……………」

光一の判定に秀吉と真美は無言で見ている。

『（此処で光一が白を揚げたら秀吉の勝ちになるが……）』

「こつちだ！！（バツ！）」

「あら？」

「ぐうつ！！」

何と光一は赤の旗を掲げた。それにより真美は意外な展開になった事に驚いた顔をし、秀吉は悔しそうな顔をする。

『これは予想外だな』

「久遠君が私を選ぶなんて……」

「嘘……光一が沢井さんを推した……」

「アタシはてつきり秀吉を選ぶかと……」

「ボクも……」

「光一……ワシの何処がいけなかったのじゃ？」

光一を除く全員が珍しい物を見るかのような目をする。その中で秀吉は悲しそうな顔をして光一に問う。

「あのな、俺にもちゃんと理由があるからな」

失敬だと言わんばかりに光一は私達を睨む。

『では聞こう。光一が真美ちゃんを選んだ理由を……』

「ああ。俺が沢井を推したのは……沢井の戦闘シーンが良かったからだ」

『ふむ』

「沢井の戦闘シーンは演技としての物じゃなく、本当の戦いその物だったからな。合気道や空手等の武道をやっている沢井にとってはどうって事は無いだろうが、俺からして見れば凄いなと思っただよ。何しろあのFFF団相手に沢井は無手で斃すほどの腕前だからな。武器を使う俺とは違ってな……」

『なるほど、確かに過激派筆頭の光一としては羨ましいだろうねえ』

光一の理由に私は納得した。

「え？ 光一、沢井さんが武道をやっているって何処で知ったの？」

「アタシは初めて聞いたけど」

「それにFFF団を斃したって何の事？」

「そう言えば、5時限目の授業に須川達がいなかったような気がするのじゃ」

『ああ、それはね……』

何故そんな事を知っているのかと思っっている明久達に、私が昼休みでの出来事を説明すると……。

「……………そんな事があつたんだ」

「通りで光一が来るのが遅かった訳じゃ」

「相変わらず懲りないバカな人達ね……………」

「それで沢井さんが強いって事を知つたんだね」

一斉に呆れ顔になる明久達であつた。

「つてな訳で俺は沢井の戦闘シーンが良かったって事だ」

「……………確かに……………」

『まあそつたろつな』

「何だよその目は……………」

「吉井君達は妙に納得しているわね」

私や明久達が納得している事に光一は睨み、真美は分からない顔をしている。虚弱な体である光一が無手でFFF団を倒す真美が羨ましいのだからと私達は思った。

と、何時までも思つてたら光一に蜂の巣にされるだろうと思つて私は再び審査を続けようとした。

『えっと……今の所はお互い2勝2敗だね。次の審査員は……って私じゃん!!』

「何一人で突っ込んでるんだ……」

「ほら、旅人さんが最後なんだから」

「早くしてね」

「ほら、弟君と沢井さんが早くしろって言ってるんだから」

ちよっとした仕返しのつもりか、光一達は私に早く判定をしろとせがんで来る。同様に秀吉と真美も私をジッと見ているので私は判定する事にした。

『ゴホンッ！ では発表します』

「」「」「……」「」「」

「」「(ゴクッ)」「」

私の言葉を待っているのか、光一達は無言で私を見ており、秀吉と真美は唾を飲んで見守っている。

『第一回 演劇王者決定戦の勝者は……(バツ!)』

私が旗を揚げたのは……。

沢井真美 文月学園に訪れる ?

私が揚げたのは……。

『勝者は……………（バツ！）真美ちゃんだ！！』

赤い旗であった。

「やった〜！〜！〜！〜！」

「ぐっつ！〜！」

真美は万歳しながら喜んでおり、秀吉は手と膝を床に付いて悔しそうな表情をしている。

『ではこれにて勝者が決まりましたので終了と……………』

「……………ちよつと待った！〜！〜！〜！」

私が終了宣言を言い切る前に光一達はストップをかけてきた。

『どうしたの君達？ もう終了するのに何故待ったんだ？』

「おいおい、理由も言わず勝手に終了するなんてそれは無いだろ…

…」

「僕たちだってちゃんと言ったんだから」

「沢井さんと秀吉だけじゃなく、アタシ達にも納得の行く理由を言

ってよね」

「そうですね、旅人さん」

光一達は私を逃さんと言わんばかりに理由を言えと要求する。

「勝ちましたけど一応教えてください」

「旅人殿……どう言う基準でワシは負けたのかのう？」

念の為に聞こうとする真美と、恨めしそうな目で見てくる秀吉に私は一通りの理由を言う。

『えっとね、理由なんだけど……木下さんと光一が言った理由と殆ど同じなんだよね』

「殆どって事は他にもあるのか？」

『まあ一応……』

光一の問いに答えながらも私は続ける。

『私が真美ちゃんを推した理由は……演出の差と言った所だ』

「演出じゃと？」

『そう。今回のお題だった戦国BASARAで、二人は私によって特定のキャラになったよね？』

「ええ」



最初は良く出来た演出だと思った秀吉と真美はキャラに変身した事を思い出す。

『君達は伊達政宗・真田幸村に変身し、そしてその二人になりきっていた。最初はどんなに演技をした所で違う部分が出てしまう。けど二人はゲームから出てきたと思わせる位の演技力だった』

「……………」

『最初は演出によって審査をしようかと思ったけど、どちらも素晴らしい演出負けしていなかったら別の視点に切り替えたんだ』

「別の視点って事は俺と優子が言ってた理由か？」

『ああ。演出で審査するのがとても無理だったから、光一と木下さんが言った戦闘シーンや表情で決める事にしたって事だ。以降はお二人さんと全く同じ理由だから省かせてもらうよ。これで納得してくれたかい？』

私が言い終わると光一達は少々難しそうな顔をする。

「……………まあ確かに演出がダメならそこに行き着くしか無いな」

「そうね。アタシも演出について色々考えて見たけど、秀吉と沢井さんはお互い役になりきっていたから、とてもソレだけで優劣を決めるのは無理ね」

『理解してくれて何よりだよ。と言う訳で明久、愛子ちゃんもいいかな？』

私が明久達に問い……。

「まあ光一や木下さんにそこまで言わせたなら、僕は文句無いですよ」

「ボクも……」

『真美ちゃんと秀吉は？』

真美と秀吉に問い……。

「……………理由を言ってる筈なのに何故か褒められている感じがしますね」

「……………ワシとしてはまだ不満じゃが、これ以上は無理そうじゃから納得するしかあるまい」

漸く納得してくれた。

全員が何も言い返さなかったので私は終了宣言をする。

『と言う訳で、第一回 演劇王者決定戦の勝者は沢井真美ちゃんでした~~~~!!!! 真美ちゃんと一緒に素晴らしい演技をした秀吉にも拍手をお願いしま~~~~す!!!!』

パチパチパチパチッ!!!!

私が拍手をするように促すと光一達は二人に向かって拍手をした。

「僕としては秀吉が勝って欲しかったけどね…」

「明久がワシを推してくれただけでも充分じゃよ」

「……………それじゃあ負けた秀吉には僕から（チュツ）」

「あ…明久！？（// // // // // // // // // // // //）」

明久が秀吉の頬にキスをすると、秀吉はいきなりの事に驚きながら顔を赤らめる。

「い…いきなり何をするのじゃ！？」

「あれ？ 僕からのキスは嫌だった？」

「そうではない！ お主がいきなり……………」

「だったら（ギュツ）……………合意を得てからキスしてもいいかな？」

「な……………」

『』『』『……………』『』『』『』

「ああ……………いい…いいわ……………」

明久は秀吉を抱き締めながら顎をクイツと掴んで何時でもキスが出る体勢となっていた。私達はいきなりイチャ付き始めた二人に何とも言えない顔をする……………けれど腐女子である優子はウツトリしながら明久と秀吉をガン見していた。

「ねえ秀吉、キスしていいかな？」

「わ……ワシは……」

「嫌なら止めるけど？」

「べ……別に嫌とは言っておらんじゃ！」

「じゃあいいんだね？」

「う……うむ……ん」

秀吉が目を瞑り無防備な顔をして明久のキスを待っている。

『では皆さん、明久と秀吉は完全に二人だけの世界に入っているの  
で私達は退散しましょう（スタスタ）』

「そうだな。お邪魔虫の俺達はさっさと出よう（スタスタ）」

「あの二人は此処でも恋人同士なのね……（スタスタ）」

「はあっ……この間のプールを思い出したよ（スタスタ）」

私達は空き教室から出る。が……。

『（ガシッ！）何時まで見てる木下さん、さっさと行くよ（ズルズ  
ル）』

「えー!? ちょ……ちょっと待って!!! アタシは最後まで見たいの  
に……!!!」

優子が出なかつたので私は襟首を掴んで引き摺っていった。

「秀吉……んん」

「んんん……あきひさぁ……（ギョウツ！）」

明久にキスをされた秀吉は何とも気持ち良さそうな顔をして抱き締めていた。

おまけ

『どうだった真美ちゃん、秀吉と一緒に演技をして』

「凄いとしか言い様がありませんね。正直負けるかと思いました」

光一達と別れた私と真美は学校から出て少し歩いていた。

「木下君の演技はそこら辺の役者と違って物凄くレベルが高かったですね」

『真美ちゃんにそこまで言わせるとは……流石は秀吉と言った所か』

「ええ、私もまだまだ精進しなければいけないと思います」

『フッフ、まあ頑張る事だね……あ!』

「どうしたんですか？」

いきなり声を上げた事に真美は何かあったかと問う。

『いけねえ……学園長にこの間の試召戦争についての報告をするのを忘れてた……』

「この間のって……もしかして愛奈を学園につれて来た時ですか？」

『そうだよ。ゴメン真美ちゃん！ ちょっと学園長に会ってくるから少しの間、時間潰してて！（ピシユッ!）』

「ちょっとちょっと旅人さん……消えちゃった」

まだ他にも言いたい事があった真美だったが、急に私が消えたので何も言えなかった。

「時間を潰せって……こんな所でどうやって時間を潰せばいいの？」

真美が周りを見ると住宅街であったので店らしい所が何一つ無かった。

「あ、猫だ……おいでおいで」

「にゃ〜」

可愛らしい小さな白の子猫が真美を見ていたので相手をする事にした。

子猫は嬉しそうに真美に近づく。

しかし……。

「旅人さんが来るまで、この子の相手でもしてるか……」

「おい女、貴様は異物の関係者か？」

「ん？」

横からいきなり男の声が声を掛けてきたので真美は振り向くと、そこには大神白夜がいた。

「どなたですか？ 私は貴方を知りま……ああ、貴方は確か大神白夜さんでしたか。旅人さんから聞いていますよ」

「そんな事はどうでもいい、私の質問に答えろ。女、異物は今どこにいる？」

「……………ホントに旅人さんの言った通りの人ですね。初対面に相手に随分と横柄な……………」

「何度も言わせるな。異物が何処にいるかと聞いている」

真美が聞いたとおりの男だと感心すると、白夜はイライラしながら再度問う。

「残念ですが、旅人さんは此処にはいませんよ。今は文月学園の学園長さんと面会中です」

「……………ちっ（スタスタ）」

私がない事が分かった白夜は舌打ちをしながら去って行く。

が……………。

「（ガシッ）ちよっと！ 人に聞いておいて、礼を言わずに去るのはどうかと思いますよ？」

真美が白夜の右腕を掴んだ。

「放せ、もう貴様に用は無い」

「もしかして学園に行つて旅人さんに会つつもりですか？」

「貴様には関係ない。それに放せと言ってるのが分からののか？（ブンッ！）」

白夜が裏拳で殴ろうとしたが……………。

「おっと！（スカッ！）……………女相手でも容赦しませんか」

「ほお？ 私の攻撃をかわすとは……………」

真美がかわして距離を取った事に少しだけ目を見開く。

「……………（ポキポキ）どうやら貴方を一度叩きのめした方がいいみ



たいですね」

「愚かな。神に選ばれし者である私に挑むとは……」

「その自意識過剰な顔を今すぐ変えてあげます……よ！！（ブオンッ！）」

「！！！！（ガシッ！）」

一瞬で懐に入って攻撃を繰り出す真美に白夜は驚きながら真美の右腕を掴む。

「驚いたな、あの一瞬で私の懐に入るとは（ググググー！！）しかも中々の腕力だ」

「それはどう…も！！（ビュオッ！）」

「甘い（ガシッ！）その程度の攻撃を予測していないと思ったか？」

真美の左腕での攻撃も受け止める白夜。

しかし真美の表情は好機と言わんばかりに……。

「残念、私には足技もあるのよ！！（ビュオッ！！）」

「！！！！（パッ！ ヒュッ！）……やるな女、まさかこの私を引かせるとは」

「あら残念。当たったら儲け物でしたけど……」

ゼロ距離からの回し蹴りを繰り出したが、光一はすぐに真美の両腕を放してすぐに回避した。真美もかわされると予想していたのか、あまり残念そうな顔をしていなかった。

「しかし凄いですね。あの距離から即座にかわすなんて……」

「あの程度は造作も無い。しかし、この私相手に強気で挑む女がいるとはな……中々興味深いな」

「そうですね。でしたら今度はその顔にキツイ一撃を当ててやりますよ（スッ）」

「……………」

真美が構えを取ると白夜は目を細めながら警戒する。

と、その時……。

『（ピシュッ！）お待たせ真美ちゃん、遅くなってゴメ……あら？』

私がいきなり現れた。

「た…旅人さん」

「異物……」

真美と白夜は私が現れた事に構えを解く。

『何で真美ちゃんが白夜と戦ってるの？』

「あ……それは……」

真美が口籠っていたので私は白夜の方に視線を向けて問う。

『おい白夜、何でお前が真美ちゃんと戦っているんだ？ 返答次第ではタダでは済まさんぞ？』

「……………ふんっ、興が削がれた」

白夜がやる気を無くしたかのような顔になり……………。

「おい女、名はなんだ？」

「……………沢井真美」

「そうか……………貴様の名は覚えておこう、沢井真美（スタスタ）」

そして去って行った。

『あ……アイツ、私の質問に答えず去りやがって……………それで真美ちゃん、帰ったらじっくり聞かせてもらおうからね』

「……………はい（あ……あの猫がいなくなってる）」

『さ、帰るよ』

私が真美に言って歩き始めると、真美は付いていきながら子猫がいなくなっていた事に残念そうな顔をしていた。

沢井真美 文月学園に訪れる ? (後書き)

今回は雄二と霧島のウエディング体験ミッションです!!

光一! 優子! 明久! 出陣の準備は万全か!?

そしてGAUさんの所にいるクリスティーナ・ウエストロード!!

君も出陣の準備を頼む!! 返信待ってますよ!!

## ミッション 如月グランドパーク編(前書き)

今回はGAUさんのオリキャラ クリスティーナ・ウェストロード  
が登場します！

それではどうぞー！

## ミッション 如月グランドパーク編

とある休日の事。

『やあ皆さん、お待ちしていましたよ。態々お休みの日に来て下さり誠に有難う御座います（ペコッ）』

文月学園の校門前にいる私が紳士の挨拶をすると……。

「そんな礼を言うほどの事じゃない。俺はやる事が無かっただけだし……」

「僕としては旅人さんのお誘いは嬉しいし……」

「うむ。この間は楽しかったから、また楽しい事になりそうじゃからのう」

「アタシも楽しみにしてたからね」

「ボクもです」

いつもの仲良し5人組がおり……。

「きよ……今日は宜しくお願いします（ペコッ）」

姫路も参加し……。

「……呼んでくれてありがとう、旅人さん」

「俺は参加するなんて一言も言っただけぞ!!」

坂本夫婦（笑）もいた。

「誰が夫婦だボケ!! 俺はまだ独身だって言っただろうが!!」

「おい雄二、お前誰に向かって言っただけぞ？ そこには誰もいないぞ」

『暑さでやられたのかい？』

雄二の不可解な行動に光一と私が突っ込む。

「……………何か聞き捨てならねえ事を言われた気がしてな」

『では此処でもう一人ゲストを呼ばせていただきます』

「人に突っ込みを入れておいてスルーかよ!!」

私がもう一人呼ぼうとすると雄二が即座に突っ込む。

『それではどうぞ！（パチンツ!!）』

ボンツ!

「……………!!」

指を鳴らすと私の隣からいきなり煙が出ると光一達は一齐に驚く。

そして煙が晴れると……。

「ごういつちゃ〜ん!! 会いたかったよ〜ん!(ギョウツ!)」

「!!! お…お前は!?!」

金髪美少女がいきなり光一に抱き付いて来た。その少女は何とクリスティーナ・ウエストロードである。

「……………クリス(さん・クリスティーナ先輩・ウエストロード先輩)!?!」「……………」

「にはは、旅っちに呼ばれて参上〜 ブイ!」

驚く光一達にクリスはブイサインをする。

「ありがとねえ〜旅っち おねーさんを呼んでくれて嬉しいよん  
」

『どついたしましたして。それじゃあ全員揃ったので移動を(スツ)』

「オイ待て旅人!!! 俺はまだ行くとは言ってねえぞ!!!」

私が指を鳴らすとした所、雄二が私に文句を言ってくる。

『何だよ雄二、人が案内しようって時に』



「テムエは一体何を企んでいやがる!? 何時もなら光一達と一緒にいるお前が俺を誘うなんておかしいだろうが!？」

『別に私はお前を誘う気なんて無かったよ。本当だったら霧島だけを誘うつもりだったんだがな……』

「……私は雄二と一緒にいたいから（ググググッ!）」

「イダダダダダ!! 何しやがる翔子!？」

に霧島が雄二の腕を掴んで間接を極めていた。

「おい坂本、行く前からソレは止めとけ」

「そうだよ坂本さん。これから皆で楽しむのに、そんな事をしちゃダメだよ」

「代表、夫と一緒にいたい気持ちは分かるけど今回は自粛してね。まあ坂本君が何か仕出かすなら話は別だけど」

「そのの三人!! 勝手に翔子を入籍させるな!!」

光一、明久、優子の発言に雄二が即座に突っ込む。

「光一達は完全に霧島を雄二の妻と見ておるのう」

「あはは……まあ事実だしね。ボクとしても代表の幸せの為に坂本君と結ばれて欲しいけど」

「坂本君も素直になれば良いと思いますけど」

「相変わらずだねえ〜もっちゃんは」

秀吉、工藤、姫路、クリスは思った事を言う。

『（パンパン！！）はいはい！ お喋りはそこまでにして！！ もう行くからね！』

私が手を叩いて全員に大きな声を出して行くと言つと、光一達は一斉に私を見る。

『それでは皆さんを如月グランドパークへとお連れします！！（パチンツ！！）』

「！！！！ オイ待て旅（ピシュツ！）」

私が行き先を言いながら指を鳴らすと、雄二が私に何か言おうとしたが消えてしまった。

『フム、流石に行き先を知ると雄二も疑問を抱くよねえ〜……でもな雄二、たとえ気付いた所で如月グランドパークへ行つた時点ではもう逃げられないんだよ……クツクツクツク』

後は明日が楽しみだと私は付け加え……。

『さてと、私も行くとしますか（ピシュツ！！）』

そして私も姿を消した。

## ミッション 如月グランドパーク編 ?

如月グランドパークに着いた私達は中に入ろうとするが……。

「（ググググググ！！）……雄二、どうして帰ろうとするの？」

「イデデデデデ！！！ 放せ翔子！！ 俺は帰らなきゃいけない気がするんだ！！」

雄二が逃げようとしている所を霧島が抑えていて入れないのであつた。

『やれやれ、入る前からこれかよ（まあ、ああなる事は予想付いているし）』

「あのゴリラには困ったもんだ（坂本から逃げた所で俺と旅人さんが捕まえるけど）」

「ホントに往生際が悪いわね。夫と一緒にいたい代表の気持ちが分からないのかしら？（無駄な事を……）」

私、光一、優子は内心では雄二が逃走する事は予想が付いていると分かっていながら呆れた様な感じで言っており……。

「雄二もいい加減に観念した方がいいと思うのじゃが……」

「無駄だよ秀吉、あのゴリラは坂本さんと結婚しない限り何時までも抵抗するだろうし。僕としては雄二がどうして霧島さんと一緒にいたくないのが理解できないよ」

秀吉と明久も同様に呆れており……。

「どうして坂本君は翔子ちゃんと一緒にいたくないんでしょうか？」

「うつひゃつひゃつひゃ　それはねお姫ちゃん、もっちゃんはおね

ーさん達の前できりりんとイチヤ付くのが恥ずかしいからだよん」

「それは違うと思いますよ」

姫路の疑問をクリスが間違った解答をすると愛子が違うと突っ込んでいたのであった。

「もっちゃん、早く入ろうよ。旅つちが折角予約したんだから  
楽しまないと損だよん」

「嫌だ！！　このクソ野郎の事だからきつと何か企んでいる！！  
そつでなきゃこんな所に来る訳が無いからな！！」

「……雄二、そんな理由で私と一緒にいたくないの？　だつたら……

…（スツ）」

「ん？　何でいきなり離れるんだ、翔子？」

雄二はさっきまで間接技を仕掛けていた霧島が急に離れる事に疑問を抱く。

が、それは直ぐに分かった。

「……旅人さん、今から私と雄二を無人島に転送して」

「はいはい、それじゃあお二人さんを（スツ）」

「分かった！！ 入るからそれだけは止めてくれ！！」

霧島の頼みで無人島に転送させようとした私であったが、雄二は阻止する為に一緒に入る事を即決断した。

「チツ！ 折角のリゾート地なのに（それじゃあ雄二が漸く決断してくれたので、早く入るとしますか）」

「……………雄二と一緒に過ごしたかったのに（……………じゃあ入ろう雄二）」

「お前ら本音と建前が逆だぞ！？」

私と霧島の発言に雄二が即座に突っ込む。

……………  
……………

如月グランドパークに入った私達一行は……………。

「それじゃ先ず最初にお化け屋敷に入りましょうか。とは言え全員で入るのはちょっと面白くないので、ペアを作って入るとしましょ

『う』

お化け屋敷に着くと私はペアを作る為の箱を出す。

「あ…あの…私はお化け屋敷はちよつと……」

姫路はそつと手を上げながら遠慮すると言おうとしたが……。

『そうか、君には明久とペアを組ませようかと考えていたんだが…』

……』

「え！？ 僕はもう決定なの！？」

「やっぱり入ります！！」

明久とペアになれる事を知ると打って変わり入ることを決意する。

「旅人殿！！ それは臆戻じゃぞ！？」

明久の秀吉である秀吉が私に近づいて抗議してきた。

『そんな事で怒るなよ秀吉。それ位は大目に見てくれ……秀吉はその程度の事で明久が取られると思っているのか？（ボソボソ）』

「……………そんな事は無いのじゃが……………でも面白くないのじゃ」

『後で明久とイチャ付かせてやるから今は我慢しろ。それなら文句は無いだろ？』

……………絶対じゃぞ」

私が妥協案を出すと秀吉は不機嫌が顔になりながらも大人しくなつて引き下がる。

「あ…明久君…今日は宜しく願いします（ペコッ）」

「いや、お化け屋敷に入る位で……」

姫路はペアである明久に挨拶をし、明久は姫路の対応にどう言っただけがいいか困った。

他の面々は……。

「旅人さんも秀吉の扱いには慣れてるみたいだな」

「秀吉って吉井君の事となると、すぐにああなるわよね……でもそれがいい」

「弟君って独占欲が強いよねえ」

「うひゃ ひでっちの意外な一面を見たよん」

「……それだけ吉井は木下に愛されている証拠」

「ってか秀吉はホントに明久の事が……これは須川達に（スッ）」

光一とその恋人3人と霧島は温かい目で見ているが、雄二は懐から携帯を取り出して須川に連絡しようとするが……。

「そこのゴリラ、妙なマネをしたら分かってるんだらうな？」

「旅人さんに頼んで今すぐにも貴方と代表を無人島へ転送させるわよ?」

「……………ちっ!(スッ)」

光一と優子の警告に携帯を懐にしまう事となった。

そんなやり取りをしている光一達に私はペアを決める為の方法を言う。

『ではでは、この箱の中には“1〜4”の数字の入ったクジが2枚ずつ入っています。そのクジを引いて自分の持っている数字と相手の誰かが同じで数字であつたらペアになると言う仕組みです。因みに明久と姫路さんは既に決まっていますので、私を含めた8人がクジを引きます。私は最後でいいのでお先にどうぞ(スッ)』

私はクジを引く様に促し、クジを引いた7人の数字は…………。

「えっと…………俺は3番か」

「アタシは2番…………光一とペアじゃないのね」

「ボクは1番だね」

「やったねい　おねーさんは3番だよん」

「ワシは4番じゃ」

「…………私は2番。雄二は?」



「俺は1いだだだだだだだだ！！！！！いきなり何しやがる翔子!？」

『最後の私は4番か……』

以上のようになったが、霧島は雄二の顔面を掴んでアイアンクローをかましていた。

「……愛子、番号を交換して」

「え？ あ……いや……それは……（チラッ）」

雄二にアイアンクローをしながら霧島は愛子に持っている番号クジの交換を頼むが愛子は私の方を見て何とかして欲しい懇願する。

『霧島、悪いけど番号交換は無しだよ。そんな事を認めてしまえば、木下さん達だつてやつちやうんだから。ここは我慢してくれ』

「……でも雄二が愛子に手を出したら」

『いくら雄二でも光一の彼女に手を出すとは思えないよ。けど万が一に手を出した場合は……』

私が光一の方へと顔を向けると……。

「その時は俺が制裁を下した後に無人島へ直行だ（ジャキッ！バチバチ!）」

光一は武器を用意して構えていた、

『と言つ事ですので』

「代表、ホントだったらアタシもウェストロード先輩に頼みたいけど我慢して」

「……分かった」

私が説得する中、優子の台詞が決め手となったのか霧島は引き下がった。

『てな訳で雄二、間違つても愛子ちゃんに手を出さないように』

「誰が自分から地獄へ行くような事をするか!!」

『よろしい。では先ず最初に明久と姫路さんから入つて。5分経つたら次は番号順で雄二と愛子ちゃんが入るように』

雄二に釘を刺した私は明久と姫路にお化け屋敷に入るように促す。

「あ……はい。行こう姫路さん」

「そ……そうですね。あ……あの、明久君。手を……繋いでもいいですか？ 私、お化け屋敷が苦手ですから」

「!?!?!」

明久と姫路がお化け屋敷に入り、姫路の発言に秀吉は過敏に反応する。

「（ジタバタジタバタ!!）放すのじゃ旅人殿!! ワシの明久が

「!!」

『落ち着け秀吉。大目に見ると言った筈だぞ?』

秀吉が姫路に抗議しようとお化け屋敷に入ろうとするが、私によって阻止された。

「旅人さんの言うとおりだぞ秀吉、あの程度の事で怒るなよ」

「そうよ、少しはアタシ達を見習いなさい」

「あの程度で怒るなんて弟君もまだまだだね」

「ひでつち、アッキーがそんな簡単にお姫ちゃんに靡くと思う?」

「.....」

『いや、アンタ等を見習うのはちょっと無理だよ』

秀吉を諭す様に言う光一達に私は無理だと突っ込む。

「.....雄二、愛子に手を出したら」

「だから言ってるだろ!? んな事はしねえって!!」

『.....はあっ.....やれやれ』

霧島と雄二のやり取りに私は溜息を吐く。

そして5分後……。

『ほい、次は雄二と愛子ちゃんが入ってね』

「はーい 宜しくね坂本君」

「ちっ！ さつさと行くぞ（スタスタ）」

雄二と愛子がお化け屋敷に入った。

「……雄二、愛子に手を出したら……雄二を殺して私も死ぬ」

『霧島、頼むからその恐ろしい殺気を抑えてくれ』

霧島がドス黒いオーラを放っているので私は宥める。

如月グランドパークに入って早々、霧島の行動に段々呆れてくる私であった。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (前書き)

今回は少しエロい所があります。  
それではどうぞ！

ミッション 如月グランドパーク編 ?

さて此処からはお化け屋敷に入ったペア達の状況を見ます。

? 明久・姫路ペア

「姫路さん、大丈夫？ やっぱり戻った方が……」

「い…いえ、平気です…はうつ！！（ギユウツ！）」

「ちよ！？ 姫路さん！？」

中に入ってお化けを見た姫路は手を繋いでいる明久に引っ付く。

「うつうつ……」

「ひ…姫路さん、いきなりそんな…（もしこんな所を秀吉に見られたら物凄く不味い……）」

突然抱き付かれた姫路に明久は此処にいない秀吉の事を考えると、後で恐ろしい目に遭いそうだと想像する。

お化け屋敷入り口前で……。

「……………何なのじゃ？ 胸が物凄くムカムカするのじゃ

が……」

『だからって中に入ろうとするなよ?』

秀吉が大変不快な表情をしていた。

.....

「お…お願いです明久君、このままの状態に進ませて下さい」

「え?」

姫路のお願いに明久は言葉を失った。

「だ…ダメだよ姫路さん。それは不味いから! そ…そっだ、僕が誘導するから姫路さんは目を瞑ったままで……」

と、明久が最善の方法を提案するが……。

“アアアアア~~~~~!!!!!!”

「ひっ!!!(ギョウツ!!)」

「.....」

ゾンビみたいな呻き声が聞こえると、姫路は離れたくないと言わん

ばかりに力を込めて明久に抱き付く。明久は呻き声を上げた相手が目の前にいたとしたら絶対に殴り飛ばしているだろう。人の考えた方法をぶち壊して余計に悪化させたのだから。

完全に怯えきっている姫路にもう梶子でも動かないと判断した明久はさっさと進んで出ようと決断する。

「ぜ…絶対に放しませんから……」（ギユウツ！）

「（秀吉、これは浮気じゃ無いからね。恐がっている姫路さんを思つての処置だからね。決して浮気じゃないよ！！）」

絶対に明久から離れない姫路と内心で秀吉に言い訳をする明久は早く進もうと出口まで進んでいった。

？雄二・愛子ペア

「ったく！ あのクソ野郎の所為で、とんだとばっちりだ！」

「ちょっと坂本君、旅人さんを悪く言うのは良くないよ？」

雄二は私に悪態を吐きながら進み、愛子はそんな雄二の後を追う。

「翔子も翔子で俺のペアが別の奴と知った途端にアイアンクローをかましやがって……！ 理不尽にも程があるだろうが！」



「まあ代表の気持ちも分からなくは無いけど……」

「光一と妾も俺が何かする度に邪魔しやがるし……！」

「それは自業自得じゃないかな？」

雄二の悪態に愛子は突っ込み続けるが、雄二は全く聞いていなかった。

「……………おい工藤、お前は旅人が俺と翔子を誘った理由を知ってるか？」

「いいや、ボクは何も知らないよ。て言うか、旅人さんは代表だけ誘うって言うてたじゃん。それなのにまだ疑ってるの？」

「当たり前だ。あのクソ野郎は絶対に何か仕出かす筈だ。そうでなきゃ俺と翔子を誘うなんて絶対にあり得ねえからな……」

「でもさあ坂本君、仮に旅人さんが何か企んでいるとしても対策はあるの？ 坂本君が何かした所で代表と一緒に無人島に送られるのがオチだし、それにもう此処にいる時点で坂本君が抵抗をしても無駄だと思うよ」

「……………」

愛子の指摘に雄二は何も言い返す事が出来なかった。

「もう疑うのを止めたら？」

「……………俺は……………無力だ!!」

「いや、旅人さんがいる時点で既に無力だと思うよ。あの人凄く強いし」

力尽きたも同然の台詞を言う雄二に愛子は更に突っ込む。

そして二人は出口まで進んだのであった。

？優子・霧島ペア

「……………」

「代表、旅人さんも言ってたけど殺気を抑えてくれないかしら？お化け役の人達がずっと引っ込んでいるわよ」

霧島が進みながらドス黒いオーラを放っているので、優子の指摘どおりにお化け役スタッフが脅かそうにも、逆に自分達が脅かされているので姿を現せなかった。そんな霧島に優子が宥めても一向に抑える気配が無い。

「……………」

「（やれやれ、仕方ないわね）代表、ちょっと聞いてもらえる？」

「……………何？」

「（恐っ！！）」

霧島が優子の方に振り向くと生気が感じられない目であったので、優子は震えながらも何とか言葉を発する。

「あ…あのさ、ホントだったら今夜ホテルで言つつもりだったんだけど……明日は坂本君と代表の仮想結婚式を……」

「……詳しく聞かせて」

優子が言っている最中に霧島は一瞬で殺気を押さえると、進んでい  
る足を止めてすぐに問い詰めるかの如く近づいてきた。

「……そう言う事に関しては凄い食いつきね」

「……そんな事はどうでもいいから、早く教えて」

「え…えつとね……」

優子は霧島に明日の内容を一通り説明すると……。

「……ありがとう優子。流石は私の親友」

霧島は幸せそうな顔をして優子に礼を言う。

「コレ位どうって事は無いわよ。それに今回の事は旅人さんが提案  
した物だし」

「……旅人さんは本当にとっても良い人。あの人には恩がありすぎて  
頭が上がらない」

「取り敢えず今は坂本君に黙っててね。下手に知られると面倒な事になるから」

「……分かった」

「じゃあ行きましょう。何時までも此処にいる気は無いから」

「……うん」

念を押す優子に霧島は了承すると、2人は出口に向かう為に進み始めた。

? クリス・光一ペア

「おいクリス、少々歩きづらいんだが……」

「だってえ〜〜、こういつちゃんとこうして2人つきりで歩くなんて思わなかったんだよん」

光一と腕を組んで歩いているクリスは嬉しそうな顔をしている。余程二人つきりになるのが嬉しいのだろう。

「ねえこういつちゃん、今は誰もいないからおねーさんとエツチな事を……」

「大変魅力的な誘いだが大メだ。そんな事している最中に旅人さん

と秀吉が来ちまう」

「旅つち達の事だから空気を読んでくれると思うよ？」

「空気読む以前に此処は人の出入りが激しい。それになクリス……  
(スツ)」

光一はクリスの耳元でこう呟く。

「後でちゃんとしてやるから、それまで我慢しろ。その時になったら優子達と一緒にいっぱい可愛がってやるから」

「……………でもおねーさんとしては今して欲しいなあ？」

光一の呟きに一瞬従おうとするクリスだったが、それでも今から光一とエッチな事をしたみたいだ。

「しょうがないな、だったら(ムニユツ)」

「ひゃあん！ こ…こういつちゃん……………」

光一は歩いている最中に、服越しからクリスの胸を触り始めた。

「どうした？ クリスのリクエストに応えているんだが？ (ムニユムニユ)」

「あ…ああ……………」

「何だ、もう感じ始めているのか？ (ムニユムニユ)」

「あん！！　だ…ダメえ…　こっいつちゃん…　そんなに揉まれたら…　服に皺が出来ちゃう…　だから…　直に触ってえ」

「しょうがないな…　（スルスル…　モミモミ）これで良いか？」

「あ…　あああ…」

光一がクリスの上着の中に手を突っ込んで胸を揉みしだくと、クリスは感じる声を出す。

「い…良い…　もっと…　もっとお揉んでえ…」

「ほら、早く進むぞ。早く行かないと旅人さん達が来ちゃうぞ」

クリスが相当感じている事が分かっているながらも光一は早く進もうと言ってくる。。

「あああ…　だってえ…　光一の触り方が…　巧過ぎて…　あたし…　もっと」

「何だ？　もう我慢出来なくなってきたのか？　じゃあ今すぐ止めてこのまま進もうか？」

「あつ…　だ…ダメ…！」

喋り方が元に戻り始めているクリスであったが、光一はそんな事はお構いなしにクリスの胸を揉むのを止めて進み始めるが引き止められた。

「ま…待ってえ…　もっと触ってえ…　あたしの胸を…　もっと触

って気持ちよくさせてえ……」

「……はいはい（スル……ムニユムニユムニユ）ほら、これで良  
いか？」

「あ……ああ……も……もうー！」

クリスがいきなり体がビクンビクンと震えた。

「あ……あ……ああ……」

「何だ？ 突然クリスの体が震えたって事は……クリス、もしかして」

「……うん」

「……取り敢えず、これ以上は不味いから出口に進むぞ」

クリスが震えた理由が分かった光一は、クリスと手を繋いで出口に進み始める。

と、その途中に……。

「……ねえこういつちゃん、後であたしも気持ちよくさせてあげるね」

「……後でな」

クリスの誘いに光一は少々揺れ始めていた。

？私・秀吉ペア

お化け達が脅かしているのだが、私と秀吉は全く気にも留めていなかった。

『そんなに拗ねるなよ秀吉、私が嫌なのは分かるが我慢してくれよ』

「……………別に旅人殿が嫌ではない、ワシはただ……………」

「明久とペアを組んでいる姫路に嫉妬している？」

「…………………………」

最後の番である私と秀吉が進んでいると、秀吉は未だにご立腹であった。大好きな明久が姫路とペアを組んでいる事に相当気に食わないのである。だからと言って拗ねられても私としては困るのだが。

『後で明久とイチャ付けばいいんだから……………』

「それでも面白くないのじゃ……………姫路がワシの明久に……………」

『……………はあっ（秀吉って意外と嫉妬深いんだな）』

まあそれだけ明久の事が好きなのが良く分かるのだが。

『秀吉、明久を独り占めしたい気持ちは分かるが、少しは広い心を持って。そうじゃないと以前の姫路さんと島田さんみたいな事になる』



ぞ？』

「！……！」

『束縛なんかしなくても、明久の心は既に秀吉の方に傾いているんだから』

「……………ふんじゃ（プイッ）」

私に諭されたのが気に食わないのか、言われなくても分かっているのか、秀吉は完全に拗ねてしまった。

「どうせワシは嫉妬深くて、以前の姫路と島田と大して変わらないのじゃ」

『……………（このままじゃ明日の計画に支障が出そうだな。仕方ない……………）おい秀吉、だったらお前に良い事をしてあげるよ』

「ん？」

『ほれ（パチンッ！）』

私が指を鳴らすと……………。

「！……（ガクン！） はあ……はあ……な……何じゃ？……………き……急に……体が……………熱い……………のじゃ」

突然視界がグラツとした秀吉は膝を付き、自身の体を抱き締める。

果たして秀吉に何が起きたのだろうか？

それは……。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (前書き)

今回はいつもより短いです。

## ミッション 如月グランドパーク編 ?

私と秀吉以外、お化け屋敷を出た面子は……。

「明久君、また機会があつたらお化け屋敷に入りましょうね」

「いや姫路さん、怖いんならもう入らないほうがいいと思うけど……」

明久と腕を組んで歩き幸せな気分浸っている姫路に、明久は突っ込み……。

「ねえ光一、アタシと代表が歩いている際に後ろからウエストロッド先輩の喘ぎ声が聞こえたんだけど、何をしていたの？」

「それはボクも聞きたいな」光一君？

「あ……いや……それは……その……」

「にははは、こういつちゃんに気持ち良くして貰ったんだよん」

優子と愛子が光一を問い詰め、クリスが答えると更に不穏な空気になっっていたり……。

「……雄二、愛子に手を出してはいないよね？（スツ）」

「出してねえよ！！ ってかまだ疑ってるのかよ!？」

霧島が雄二にアイアンクローをかまそうとしていたので、雄二はす

かさずNoと意思表示をしていたのであった。傍から見ればちょっとしたカオスな光景である。

と、そんな時……。

『よお、待たせたな……何なんだ？ このカオスっぽい光景は』

「……………」

私と秀吉が出口から出て来た……何故か秀吉が無言であったが。

「あれ？ どうしたの秀吉、何か不機嫌そうだけど……………」

秀吉の様子が妙であったので明久は姫路から離れて近づく。

「……………（ガシッ！）明久よ、ちょっとワシと一緒に来てくれんかのう（スタスタ）」

「え？ ちょ…ひ…秀吉！ 僕を何処へ連れて行くの！？（ズルズル）」

秀吉はいきなり明久の腕を掴んで何処かへと行ってしまった。

「あ…明久君！？ 木下君！ 明久君を何処に連れて（ガシッ！）え！？」

『やれやれ、秀吉はまだ怒ってるみたいだねえ』

姫路が秀吉と明久の後を追おうとしたが、私に両肩を抑えられて足を止められた。

「放して下さい旅人さん！ 明久君が木下君に……」

『心配するな、別に明久を痛めつける為に連れて行った訳じゃない。ちよつとしたお仕置きをするだけだ』

「おし……だつたらダメじゃ無いですか！ すぐに木下君を止めないと明久君が危ないです！」

お仕置きと聞いた姫路は明久が危ないと思っているのか私に放せと  
言つて来る。

『だから言つたでしょ？ 別に痛めつける訳じゃないって。つてか君がその台詞を言うか？ 前まで島田さんと一緒に明久を痛めつけていた君が……』

「うっ……」

ちよつと意地の悪い事を言つと姫路は抵抗を止めたが……。

『言つておくけど、私も光一と同様に姫路さんを完全に信用した訳じゃないから。もし君がまた嫉妬に狂つて明久を痛めつけるような事をしたら即刻此処から追い出すからね。それを覚えておくように』

「……………」

『これは脅しじゃなくて本気だよ。分かったね？』

「……………はい」

私が少し低い声で警告すると、完全に大人しくなった姫路であった。  
『（スツ）分かってくれれば良い。さてと、今はあの面子をどうにかするか（チラツ）』

姫路の両肩を放して私は別の方向に視線を向けると……。

「アタシがしたいのを我慢している時にアンタって人は……！」

「光一君、ちょっと向こうでお話しない？」

「悪かった！！ 今夜は優子と愛子を優先するから……」

「ええ〜？ おねーさんは除け者なの〜？」

「クリスはちょっと黙っててくれ！」

優子と愛子に謝罪しながら埋め合わせをすると、クリスは不満を言っており……。

「……雄二、愛子に手を出していない証拠は？」

「ある訳ねえだろ！！ ってか何時までこんな質問するんだよ!？」

未だに霧島は雄二を問い詰めていた。

『……………姫路さん、君は霧島を宥めてくれ。私は光一達を宥めるから』

「は……はいっ！」

『……………あの光景を見ると独り身が良いような気がしてくるな』  
姫路は私の指示で霧島の方に向かうと、私は呆れながらも光一達を宥め始めた。

そして数分後

『お二人さん、もう光一を許してあげなよ。今夜は君達を優先する  
って言ってるんだから』

私は光一に問い詰めている優子と愛子を宥めていた。

「……………光一、約束を破らないでよ」

「絶対だからね光一君」

「わ…分かってる」

漸く許してくれた優子と愛子が釘を刺すと光一は了承する。

『ってな訳でクリス、光一をその気にさせた罰として今夜は一人部屋で一夜を過ごして貰うよ』



「ええ！？ それは無いよ旅っち〜！！ おねーさんを生殺しにさせないでよ〜〜！！」

『恨むんなら私ではなく、軽率な行動をした自分を恨む事だね』

「うっ……うっ……うっ……いっちゃん！（ギユウツ！） 旅っちがいじめるよ〜〜！！」

クリスは泣き真似をしながら光一に抱き付いて助けて欲しいように言ってくる。

「悪いがクリス、今の俺にはお前を助ける事は出来んから諦めてくれ」

「そんなあ〜……」

「ウエストロード先輩、それ以上抜け駆けをするとアタシも黙ってはいませんよ？」

「勝手に光一君を独り占めした罰だと思って下さい」

「うっ……うっ……ゆっこりんといぼんもおねーさんを苛める」

これ以上は無理だと判断したクリスは大人しく引き下がる事にした。漸く事態を何とか収めたので、私は霧島の方を見てみると……。

『ふむ、あちらも収まっているな』

姫路の説得によって霧島は雄二の執拗な詰問を止めていた。

『(さてと、女になった秀吉の事だからお仕置きと称して、明久とエッチな事をしているだろうから空間を断絶しておくか)』  
秀吉の行動を予想していた私は光一達に見られる事無く、指を鳴らしていたのであった。

10分後

『ここまでが限界かな……………』

私がポツリと呟くと……………。

「なあ旅人さん、明久と秀吉はまだ戻ってこないのか？」

「そうね。いくらトイレに行ったとは言え遅すぎよ」「

光一と優子が痺れを切らしたかのように俺に詰め寄ってきた。

『ああ、君達は秀吉が明久にお仕置きしてるって事を知らなかったんだね』

「え？ お仕置きって……………」

「それってまさか……………」

『2人が考えている通りの内容だよ。じゃあそろそろ呼び戻すとするか(ゴソゴソ)……ピッピッピ(これで良しっ)』

「携帯弄って何したんだ？」

私は懐から携帯を取り出し特定の機能を使って、すぐにまた懐に入れる。その事に光一が何をしたかと聞き出す。

『あの二人が戻って来る為のアラームだよ。あと5分経てば2人は戻ってくるよ』

「……………ならいいが」

そして5分後

「……ゴメン皆、待たせちゃって」

「申し訳無いのじゃ」

明久と秀吉が取り繕うかのように笑顔で戻って来た。

「随分と遅かったな明久」

「一体何をしていたのかしらねえ、秀吉？」

「どんなお仕置きをしたのかなあ？　ボクそこが気になるんだけどお〜？」

「アッキーにひでっち、何をしていたのかおねーさんに分かるように説明して」

「明久君、大丈夫でしたか？」

「……木下、吉井にどんなお仕置きをしていたの？」

「随分と長いお仕置きだったなあ、明久に秀吉（ニヤニヤ）」

「……………」

秀吉と明久が戻って早々、光一達にネチネチと言われていた。その中で姫路は明久の安否を心配しており、雄二は完全に嫌な笑みを浮かべていた。

「（後で須川に連絡しておくか）」

と、雄二は懲りずに下らん事を考えていたが……。

『その学習能力の無いゴリラ、本気で霧島と一緒に無人島に転送するぞ？（スツ）』

「……………」

私の一声ですぐに撤回する事となった。

『では皆さん、そろそろ12時になるので昼食にしましょうか』

雄二に釘を刺した私は光一達に昼食を取ろうと提案する。

「そ…そうですね。僕もお腹空いてきたし（スタスタ）」

「今日は何を食べようかのう」（スタスタ）」

私の提案に明久と秀吉は光一達の呆れた視線から逃れたかったのか、すぐにレストランへと向かおうとする。

『……………（逃げたな）……………』

無論私達は、二人の行動を見抜いていた。

そんなこんなで、私達も昼食を取るために明久と秀吉が向かったレストランへと向かったのであった。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (後書き)

明久と秀吉がトイレに行っている時の状況を知りたい人は、アッチの方へと移って下さい。

既にあっちの方で更新していますので。

## ミッション 如月グランドパーク編 ?

レストランで昼食を取った後、私達は再び如月グランドパークのアトラクションを回った。

その中で特に目立ったのは観覧車だ。

此処からもお化け屋敷と同様に各ペアが観覧車に乗っての実況をします。

まずは光一、優子、愛子、クリスの状況。

「……なあ二人とも、どうして俺の隣に座って腕に引っ付きながらクリスを睨んでいるんだ？」

「そ…そうだよお、ゆうこりんにあいぼん。そこまで睨まれると流石のおねーさんも……」

優子と愛子の行動に呆れる光一と怯むクリスに……。

「気にしないで、アタシは光一に抱き付きたいだけだから」

「そうだよ、光一君」

二人は何事も無いように振舞っている。

「……ねえ二人とも、おねーさんがこういっちゃんにやった事をま

だ恨んでるの？」

3人の向かいに座っているクリスは一応聞いてみたが……。

「アタシは別に気にしていませんよ、ウエストロード先輩」

「そうそう、ボク達は別にどうして抜け駆けしたのかな？何て思っていますよ」

「……（まだ根に持ってたのねい……トホホ）」

未だに許してもらっていない優子と愛子に内心で涙を流しているのであった。

？明久・秀吉・姫路の状況

「き…木下君、何で……本物の女の子になっているんですか？」

「お化け屋敷に入っている時、旅人殿がワシを女にしてくれたのじや。と言うか姫路、何故お主は明久にくっついておるのじや？」

「（や…やっぱりそう言う事だったんだね。ってそんな事より！僕の両腕には秀吉と姫路さんの胸が当たってるよ！！）」

未だに女になっている秀吉と姫路が明久の隣に座って腕に抱き付いてくっ付いていた。その所為で明久の両腕には2人の柔らかい胸がモロに当たっていて、明久は冷や汗を掻きながらも少々興奮してい



た。秀吉（ ）とトイレでの出来事があった所為か、明久は自身の下腹部のとある部分が興奮していた。

「ね…ねえ二人とも、この状態だと風景を見る事が出来ないと思うから僕から離れた方が……」

明久はやんわりと2人から離れるように言っている最中に……。

「「嫌じゃ（です）」」

「……………そう」

秀吉と姫路がすかさず断わられたので諦めるしかなかった。

「姫路よ、明久はワシの恋人なんじゃから離れてくれんかのう?」

「こ…!?! ふ…不潔ですよ木下君! 同性愛は……………」

「今のワシは女じゃから問題ないのじゃ」

「う… (木下君がこんなに強気だなんて……………」

姫路は秀吉の発言に早くも敗北しそうな感じであった。

「 (旅人さん、この状況を何とかして……………」

明久はひたすら私に助けを求めていた。

？雄二・霧島の状況

「くそう！ こんな所には乗りたくなかったのに……！」

「……雄二、どうして旅人さんを連れて来たの？」

雄二の隣に座っている霧島が問い……。

『そうだぞ、雄二。私なんかいても意味無いだろうが』

雄二と霧島の向かいには何故か私もいた。

『と言う訳で私は消えさせて……』

「（ガシッ！）待て！！ テメエがいなかったら俺の身が危険なんだ！！」

私は消えようとしたが雄二が逃さんと言わんばかりに私の両肩を掴む。

『何がどう危険なんだ？ お前の言ってる事がさっぱり分からんよ』

「翔子と2人つきりでこんな所にいたら何か仕出かしそうだからテメエを連れて来たんだ！」

『そんな事でか……』

雄二の理由を聞いた私は呆れた視線を送る。

「だから消えるんじゃないやねえぞ旅人！！ 絶対逃さねえからな！！」  
グググググ！！！！」

『……………あのさあ雄二、何時までも私にそんな事してると後ろの人が（スツ）』

「……………雄二、旅人さんに対する乱暴は許さない（スツ）」

霧島が雄二の頭にアイアンクローをやるうとしたが…………。

『霧島、頼むから観覧車でそんな事するのは止めてくれ』

「……………分かった」

私の一声ですぐに止めた。

『それと雄二も放してくれ。勝手に消えたりはしないから』

「何で翔子は旅人の言葉一つで大人しくなるんだよ！？」

『うーん……………私の人徳？』

「……………旅人さんは私の恩人だから。それに明日……………」

『……………！ ゴホンツ！ ゴホンツ！』

「……………！……………何でもない」

霧島が明日の計画を言いそうだったので私はすかさず咳払いをする  
と、霧島はすぐに何事も無かったかのように言う。

しかし……。

「明日？ おい翔子、明日は何があるんだ？」

雄二が気付いてしまった。

「……私は何も知らない」

『（バカ〜〜！ それじゃ自白してるのも同然だよ！）』

「………おい旅人、もしかして俺と翔子を連れて来たのは（ドンツ！）うっ！……（ガクン）」

霧島が余計な事を言ってしまった事に雄二はすぐに私に詰問をしよ  
うとしたが、すぐに私が手刀で気絶させられてしまった。

『おいおい霧島、何処で聞いたのかは知らないが余計な事を言わな  
いでくれ』

「……ゴメンなさい」

『私が此処にいて正解だったかもしれないな。取り敢えず雄二の記  
憶はちょっと弄らせてっと（スツ…トン）』

霧島に注意した私はすぐに雄二の額に右の人差し指を当てて暗示を  
掛ける事にした。

『で、霧島。何処で知ったんだ？』

「……お化け屋敷に入っている時、優子が教えてくれた」

『……成程ね（……だから黒いオーラが無くなっていたのか）』

私はお化け屋敷から出たときの事を思い出し、殺気が無くなっている霧島が雄二に詰問していたから何かあったかと疑問を抱いていたが漸く解決した。

『（まあ優子の判断は間違っではないがな）……まあいい。とにかく次から明日の話題に関しては一切言わないでくれよ？』

「……（コクツ）うん。気を付ける」

『よろしい』

霧島が頷くのを確認した私は再び雄二に暗示をかけ始めた。

.....  
.....

とまあ観覧車で少しやばい事になっていたが、また何時も通りの状態になったので一先ず事無きを得た。

観覧車に乗り終えた私達は、今夜泊まるホテルへと向かっていった

のであった。

『ではホテルの部屋割りを発表します！ ご覧下さい！！（バツ！）』

ホテルに着いて早々私は光一達に部屋割りの紙を見せると……。

202号室 久遠光一・木下優子・工藤愛子

203号室 クリステイナ・ウエストロッド・エキストラ

204号室 吉井明久・木下秀吉

205号室 姫路瑞希・霧島翔子

206号室 さすらいの旅人・坂本雄二

以上のメンバーが上記の部屋に入る事となっていた。

それを見た面々は……。

「はあっ……やっぱりこうなるんだな」

「気が利いてるわね旅人さん」

「うんうん。やっぱり旅人さんはボク達の事を考えてくれているねえ」

光一は溜息を吐きながら満更でもなく、優子と愛子は嬉しそうにホクホク顔となっており……。

「……………ねえ旅っち、エキストラって誰？」

エキストラが誰かを知ろうとするクリスに……………。

「……………ひ…秀吉、僕と相部屋で大丈夫かい？」

「何を言っておるのじゃ明久。恋人のワシと一緒に泊まりたくないのかのう」

「そんな事は無いよ」

秀吉と一緒に泊まれて嬉しく思いながらも念の為に聞く明久に、何を今更と言つ秀吉……………。

「まあ翔子と一緒にじゃないだけマシだな」

私と相部屋なのは気に食わないと思いつながらも、霧島と一緒にないことに安堵する雄二であった。

当然、この部屋割りに……………。

「旅人さん！！ どうして明久君が木下君と同室なんですか！？」

「……………旅人さん、私は雄二の妻。私が雄二と一緒にいるのは当然」

『言つと思つてたよ』

反対する姫路と霧島が抗議して来た事に私は容易く予想が出来た。

『えつとね……先ずは姫路さん。君は何故明久が秀吉と同室なのがダメなんだい？ 別に2人は恋人同士だから問題無い筈だよ』

「そ…それは……」

『言っておくけど変更する気は無いからね。それに（スツ）……私が午前中に言った事を忘れたのかな？（ボソボソ）』

「！……！」

途中から姫路に耳打ちをすると、姫路はハツと思い出した。

『もし此処で駄々を捏ねたら……分かってるよね？（ボソボソ）』

「……はい。旅人さんに従います」

『宜しい（スツ）……で、霧島だけど』

姫路から離れる私は霧島の方に顔を向ける。

私と姫路のやり取りを見ていた光一達は……。

「今の所は旅人さんの言う事をちゃんと聞いているみたいだな」

「そうみたいね」

「問題が起きなければいいけど……」

「お姫ちゃん、此処で堪えないとダメだよん……ところでエキストラ」



「って誰なのん？」

取り敢えず安堵していた。

そんな光一達の会話に聞き耳を立てながらも私は霧島を説得している。

「……………どうして優子と愛子が久遠と相部屋なのに私はダメなの？」

『申し訳ないけど今回は我慢してくれ』

「……………答えになって無い！」

霧島は少々怒気を込めて私にきつく言ってくる。

『とにかく霧島、悪いが部屋割りの変更に関しては却下だよ。此処は大人しく引いてくれ』

「…………………………」

『じゃあこれでどうだ？ もし雄二が君の目を盗んで浮気をしたら即座に部屋を替わってあげよう。それなら文句は無いだろ？』

「おい！！ テメエは俺の監視役かよ！？」

「……………分かった」

「翔子も了承してんじゃねえ！！」

私が条件を言っていると霧島は何とか了承してもらえた……………雄二の突っ込

みは無視していたが。

そして私達はそれぞれの部屋へと向かっていった。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (前書き)

警告です。

最後辺りはとんでもない事になりますので、どうか気を抜かないで  
下さい(笑)

ミッション 如月グランドパーク編 ?

私や光一達はそれぞれ部屋に入って荷物を置いた後、レストランへと向かっていた。

『ここはバイキングだから好きなだけ食べれるぞ』

と私が言った途端に……。

「よ〜〜し！！ 今日は一杯食べるぞ〜〜！！！！」

「待ちやがれ明久！！」

明久と雄二が真っ先に料理を取り始めた。

『やれやれ……あの二人は』

「まあ、あれだけの料理を見てはしゃぐ気持ちは分かるがのう」

「それじゃあ俺等も取りに行くか。……どれも凄く美味そうだな」

二人を見て呆れる私に、秀吉と光一はゆっくりと料理を取っている。

「（ゴクツ……）……ど……どれも美味しそう。でも食べ過ぎたら太っちゃうし……」

「優子、今は気にしない気にしない……あ、あれは高級シュークリーム ボク食べてみたかったんだよ」

「おおつ、フォアグラにキャビア　どれも美味しそうな料理ばかりだよん」

「あ…あまり食べ過ぎたら…でも……」

女性陣は目の前にある大量の高級料理を見てどれを取るか悩んでいる。そして5分後には、私達は料理を取り終えて席に座った。

因みに席順は以下のようになっている。

|       |        |       |
|-------|--------|-------|
| 光一・優子 | 明久・秀吉  | 霧島    |
| ?テーブル | ?テーブル  | ?テーブル |
| 私・愛子  | クリス・姫路 | 雄二    |

先ずは?テーブルから。

『(モグモグ)……此処の料理は中々美味いな』

私がステーキを頬張っていると……。

「にしても旅人さん、ホントにいいのか?　費用は全部アンタ持ちだが……」

「何か凄く申し訳無い気がするんだけど」

「今更ながら、ボク達がホントにこんな立派なホテルに泊まっちゃ

っていいのかな〜って思ってるよ」

光一、優子、愛子が私に申し訳なさそうに言ってたが……。

『気にするな、コレくらい安いもんだ』

私は問題無しと言い放つ。

『まあソレはさておいて……光一、木下さん、明日のミッションは抜かりなく頼むよ』

「了解……明日が楽しみだなあ、優子」

「ええ、早く明日になってくれないかしら」

『「フフフフフフ」』

「……………」

私と光一と優子の笑みを見て愛子は少し引き気味であった。

次に？テーブル。

「明久、あ〜んじゃ（スツ）」

「あ……明久君！ 私の方も食べてみて下さい！（スツ）」

「そ…そんないっぺんに…」

「にゃはは、アッキーはモテモテだねい」

秀吉と姫路に食べさせられて戸惑う明久に、クリスは面白そうに見ていた。

「姫路よ、邪魔しないでもらえるかのう」

「木下君には負けません！」

「ほほう。それはワシに対する挑戦と見なしてよいのじゃな？」

秀吉 VS 姫路による明久争奪戦のゴングが鳴ったかのように聞こえたのであった。

「んふふふふ　ねえアッキー、この際こういつちゃんみたいに、ひでつちとお姫ちゃん二人を大事にしたら？」

「ええ！？」

秀吉一筋である明久に迷いが生じ始めた。

最後は？テーブル。

「……雄二、私達も木下と瑞希に負けない為にあぐんして（スッ）」

「訳の分からねえ事を言っただけで、普通に食べる（あの場面を須川に教えたいが……）」

霧島が食べさせようとしても雄二は無視して、内心では明久の様子を携帯で撮って須川達に写メールをしようかと考えていたが、私に睨まれていたので出来なかった。

「……なら力づくでも（ガシッ！）」

「いであであであであ！……いきなり何しやがる翔子！？」

雄二に無視されている霧島はアンアンクローを仕掛けて無理矢理食べさせようとしていた。

それを見ていた私は……。

『（フフフフ……精々楽しむといいよ、雄二。明日になったらお前の人生のゴールは目の前だ）』

仮想結婚式の筈なのに、何故か本物の結婚式を挙げるかのような事を考えていた。

.....

夕飯を食べ終えて私達はそれぞれの部屋に戻り、私と雄二は206



号室に戻っていた。

「（ボスツ！）あ~~~~やっつと翔子から開放されたぜ！」

『おいおい、部屋に戻って早々ベッドで横になるのかよ……』

雄二は腕を伸ばしながらベッドで仰向けになり、漸く自由になれたと寛いでいた。そんな雄二に私は椅子に座りながら突っ込みを入れる

『ってかそんなに霧島と離れたかったのか？ 彼女が聞いたら怒るぞ？』

「お前な……今日は俺がどれだけ翔子にやられたと思ってんだ？ 関節技やアイアンクローを散々やられていたんだぞ？」

『……まあそれは確かに』

私は雄二が霧島に理不尽としか言いようがない位の仕打ちを受けていた事を思い出すと、納得せざるを得なかった。確かに今の時間が雄二の解放される時間だと言っても無理もないだろう。

『けど雄二、いくら霧島と別部屋だからと言っても妙な真似はするなよ？ 霧島が見ていない隙にフロントのお姉さんにナンパでもしたら……』

「誰がナンパなんかするか！ んな事したら俺は間違いなく地獄行き直行じゃねえか！」

『……もう殺される事は決定なんだな』

私はヤンデレの度を完全に越していると思ったと同時に、どれだけ嫉妬深いのが分かった。

「とにかくだ。俺は明日の朝まで、この部屋から一歩も出ないからな」

『お好きなように』

「……………とは言っても、この部屋には何か暇潰しになる物はねえのか？」

雄二がベッドから起き上がって、退屈しのぎになる物を探していたが見付からなかった。

『だったらコレでも見るか？（パチンツ！）』

「ん？（パツ！）……………コレは？」

私が指を鳴らすと雄二の手から表紙が無い一冊の本が出てきた。

『思春期の男が見たがる本だと言えば分かるか？』

「へえ〜テメエにしては随分と気前がいいじゃねえか」

『まあ霧島に散々な目に遭ったお前に対する褒美だと（トゥルルルル！！）ん？ 電話か…（ガチャッ！）もしもし、ルームサービスですか？』

私が電話に出ると……………。

《旅人さん！ ちょっと聞きたい事があるんですけど！》

『明久か。何だ？』

相手は妙にせっかちになっている明久であった。

《あ…あのですね…》

『明久、取り敢えず落ち着け』

少し話が長くなると思った私は電話の方に意識を向けた。

.....

私が電話で明久と電話しているとき……。

「電話の相手は明久か……まあ俺にはどうでもいいな。さてと（ボ  
スッ）」

雄二は私が出した本を見る為にベッドに横になっていた。

「（もしかしたらこのエロ本で旅人の好みの女が分かるかも知れね  
えな……だとしたらこれで今までの仕返しが出来るかもしれねえ）  
どれどれ……」

下らん事を考えていながらもニヤニヤして本を広げる雄二であった。

「中身はどんな女が（パラッ）……………何だよ、ヌード本じゃなくてグラビアの写真集かよ。まあこれはこれでスタイルの良い女がたくさんいるかも（パラッ）……………ウギヤアアア……………」

『ん？』

他のページを開いた数秒後に雄二はでかい悲鳴をあげた。

……………

『用件はそれだけか？ ならもう「ウギヤアアア……………」  
……………」ん？』

《え！？ な…何！？》

突然、悲鳴が聞こえたので私は何が起こったかと雄二の方を見ても、電話をしている明久にも聞こえていたようで戸惑っている。

「め…目が……………目が……………！！！！！！ ウプツ！！」

『気にすんな明久、じゃあもう切るね。おい雄二、吐くならトイレで吐けよ（ガチャッ！）』

明久に何でもない風に言いながら電話を切り、雄二が今にも吐きそうな顔をしていたので私はトイレに行けと指示をする。

ダダダダダッ！！！！！

ガチャッ！ バタンッ！

ウオエエエエ~~~~~！！！！（ゲボゲボゲボ！！！！）

雄二がダツシュしてトイレに入った瞬間に嘔吐する声が聞こえた。

『……………アイツは一体何を見てあんなになつたんだ？ 奴にはエロ本を与えた筈だが（チラッ）……………あ……………』

さっきまで雄二が見ていた本を見ると……………。

『あちゃ~~~~~確かにコレは吐くよ』

その中身は私の部下であるオカマ軍団のリーダー“ローズ”がピンクのランジェリーを穿いて仰向けでVの字型の大股開きをしており、文月学園の“学園長”がセクシービキニを纏って四つん這い状態でお尻を向けながら男を誘うポーズが写し出されていた。

気持ち悪い化粧をした筋肉モリモリの男と、光一達からは妖怪と罵っている化物の老婆がこんな姿していたら誰だって吐くだろう。

ウオエエエエ~~~~~！！！！（ゲボゲボゲボ！！！！）

『バカ共用（異端審問会・アンチ久遠派残党）のお置き本を間違  
って出してしまった。ってかアイツはまだ吐いてるし。相当ダメー  
ジが大きかったんだろうな』

恐らく雄二は肉体だけでなく精神的にもかなりの打撃を喰らったと  
思われる。

そして10分後

ガチャツ…パタンツ

『やっと出てきたか……って雄二、お前だけ吐いたんだ？ 顔  
がゲツソリしてるぞ』

「て…てめえ……うつ……何て……恐ろしい物を見せやがるんだ  
」……！！！！！！」

トイレから出てきた雄二は弱々しくなりながらも最後の気力を振り  
絞るかのようになら私に向かって叫んでいた。

『その様子を見る限りではかなりのダメージみたいだな』

「あんな見るに耐えねえおぞましい物を見たら誰だってああなるわ  
ボケ！！！！ テメエぶっ殺す！！！！」

雄二が私に襲い掛かりそうだったので……。

『ほれ（バツ！）』

「！！！！ うぷっ！！（ダッ！）」

ガチャッ！ バタンッ！

ウオエエエエ~~~~~！！！！（ゲボゲボゲボ！！！！）

さっきのお仕置き本を捲って雄二に見せると、再び吐きそうな顔をした雄二はトイレに入って嘔吐したのであった。

因みに雄二が見た中身はローズと学園長の無修正ヘアヌード。ローズの“とある大きい部分”と学園長の素っ裸が映し出されている。言うまでも無く雄二はそれ見た瞬間にまた吐いているのだ。

『アイツはいつまで吐いているのやら……………』

胃の中が空っぽだと思われるのに、これ以上何を吐くのだろうかと思つた。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (後書き)

あのお仕置き本が販売されたら………間違いなく全国で大絶叫が響くでしょう



ミッション 如月グランドパーク編 ?

雄二が再び吐いて10分後

「はあっ…はあっ…はあっ… ……何か分からねえが地獄を見たような気がしたぜ」

『地獄ねえ……（まあ雄二からして見れば確かに地獄だろうね）』

トイレで吐き続けている雄二を見て、これ以上は明日の計画に響くと思った私は雄二に先程の記憶を無くす為の暗示を掛けた。お蔭で何とか雄二は吐かなくなり回復している……しかし私が暗示を掛けても雄二は未だに何か苦しんでいるような顔になっていたが。そんな雄二に私は謝罪を込めてある物を出そうとする。

『雄二（パチンツ！ パツ）良かったらコレでも見るか？（スツ）』

「何だそれは？」

私が指を鳴らすとDVDが出てくると、雄二は内容を確認する為に私に聞く。

『保健体育の参考書と云えば分かるか？』

「へえ、お前にしてはいい物を……はっ！ テメエまさか俺がコシを見ている隙に翔子を呼ぶつもりじゃあ無いだろうな!？」

雄二はDVDの中身を知ると元気になって笑みを浮かべたが、私を嵌めようとしているのではないかと考える。

『……………お望みなら呼ぼうか？（スッ）』

「ま…待て！！俺が悪かった！！」

疑り深い雄二に私は携帯を使って霧島を呼ぼうとしたが、雄二がすぐに謝ってきた。

『まったく、何処までも疑り深い奴だな。そこまで疑われると流石の私も怒るぞ？』

「元はと言えば手前が俺に対する非道な事をしたからだろうが！？」

『うーん、否定できないなあ。まあそんな事より、ソレ見るんなら向こうの部屋で見えてくれ』

あそこにはDVDデッキがあるからと私は付け加えると、雄二はその部屋に行ってドアをボタンと閉めた。

『さてと、少し明日の計画についての内容を確認しておくか』

と言って私は懐から手帳を出して、パラパラと捲って内容の確認を始めた。

3分後

ガチャッ!!

「テメエ!! 何て物を見せやがるんだ!!」

いきなり雄二が私に抗議して来た。

「ん？ 何だよ。私は雄二が見たかった保健体育の参考書を出したんだぞ？（今度はちゃんとした奴を出したつもりだがな）」

私は怒鳴る雄二を見ながら手帳を懐にしまって不満な顔をして言う。

「何で俺と翔子がヤツてる物を見せるんだよ!？」

因みにそのDVDは以前の“抹殺物語 その後”で雄二と霧島が激しくしていた物である。

「その方が雄二にとっては好都合だと思ったんだが」

「どこがだ！ 見た瞬間に血の気が引いたぞ！」

「何だよ、人が折角出したってのに……………」

と、私が言い返したそんな時…………。

ピンポン！

『「！」「』

いきなり呼び鈴がなった事に私と雄二は入り口のドアの方に顔を向けた。

『はいはい、今出ますよ（ガチャツ）……おや？』

私がすぐに入り口に向かい、ドアを開けると目の前には……。

「……今晚は」

霧島が立っていた。

『おお霧島じゃないか。雄二に用か？』

「！……！（ダツ！）」

私が霧島と言った瞬間に雄二は部屋に立て込もうと走ろうとしたが……。

「（ガシツ！）……雄二、何故私を見て逃げようとするの？」

「イダダダダダダダダダ！！！！ お前は部屋に来てまで何しやがるんだ！？」

霧島が一瞬で部屋に入って逃げようとする雄二を速攻でアイアンク

ローを仕掛けて拘束する。

『アイツは雄二の事になると物凄い身体能力を發揮するんだなあ』

「（ググググググ！！！！）イデデデデデ！！！！ 感心してねえで助けろよ！！！」

『はいはい、今助けてやるよ』

そう言つて私は雄二にアイアンクローをしている霧島に近づき……。

『おい霧島、そこまでにしてくれないか？ 私のいる部屋で何時までもそんな事していると君を力づくで追い出すよ？』

「……………分かった（スッ）」

「だから何でお前は俺とは違ってソイツの言う事だけは素直に聞くんだよ！」

開放された雄二は何か納得出来ずに霧島に不満をぶつける。

『で、霧島は何の用で此処に来たのかな？』

「……………旅人さんにお問い合わせが来て来たの」

「無視するなよ！！！」

霧島は雄二の叫びを無視して私の方に顔を向けて本題に入ろうとする。

「私をこの部屋に泊めて欲しい」

『ほづ?』

「……! おい待て翔子! その話はホテルに入る前にもう決まった事で……」

変える事は出来ないと言おうとした雄二であったが……。

「……部屋割りの変更が出来ないのは雄二に言われなくても分かっている」

「だったら!」

「……けど旅人さんが言ったのは“部屋割りの変更”に関してのみ。私がこの部屋に来て泊まるのは何の問題も無い」

「……………ハッ!」

『何だ、霧島も気付いていたのか』

霧島の台詞に雄二はホテルに入る前の事を思い出してハッとすると、私は感心するかのようになり笑みを浮かべていた。

『にしても気付くのが随分と遅かったな、霧島。姫路さんとはとっくに気付いて明久と秀吉の部屋へ行ったのに』

「……此処に来る前に部屋でシャワーを浴びてたの。雄二と何時でも寝れるように」

『成程ねえ、だから君の体から芳しい石鹸の匂いがしてたって事が……おっとスマン、これはセクハラだな』

「……別に気にしてない。さあ雄二、今日は私と一緒に……」

「待て！ 俺はまだお前と泊まるなんて言っただけで……！」

近づこうとする霧島に雄二はNOと意思表示をする。

『では私は姫路さんと霧島がいた部屋に行くとするか。構わないだろ霧島？』

「……うん、瑞希は吉井と木下の部屋で泊まるって《あん！ あん！ あん！ ゆうじい！ そんなに激しく……》……雄二、さつきまで何をしていたの？」

「ハッ！ しまった！！」

奥の部屋から女性の声が聞こえた霧島は黒いオーラを放ちながら雄二に問い、雄二は部屋で見ていたDVDを付けたままにしていたのを忘れていた。

「……まさか雄二、本当に浮気をシテイタノ？」

途中から霧島が狂気に目覚めて雄二を殺そうとする雰囲気になっていたが……。

『違うよ霧島。雄二は部屋で君と小作りしていた時の映像を見ていたんだよ』

「……（ポツ）雄二のエッチ。そんなのを見なくても私はすぐに……」

「旅人！！ テメエは俺の人生を破滅させてえのか！？」

私がさっきまでの事を言うと霧島は黒いオーラからピンク色のオーラになって恥ずかしがっており、雄二は即座に私に突っ込みを入れた。

『事実を言わなきゃ殺されてたと思うけど？』

「元と言えばテメエがあんな物を俺に見せるからだろうが！？」

「……雄二、今から小作りを（スルツ）」

「だあ~~~~！！！！ 待て待て！！！！ いきなり何脱ぎだしてんだ！？」

雄二が私に憤慨している最中に霧島は服を脱ぎ出そうとしていた。

「……映像で見るより実物で体験した方が良いと思って」

「俺はお前と小作りする気は微塵もねえよ！！」

「……けど雄二はあの時……」

「それはコイツが仕組んだ事だ！！」

『さてと、私は別の部屋で……』



「逃すかあ〜〜!!!(ガシッ!)」

私が部屋から出ようとした所を雄二は私の両肩を背後から掴んできた。

『(ググググググググググ!!!)おい、肩が痛いんだが』

「絶対逃さねえからな旅人!!!」

「……雄二、旅人さんに乱暴は許さない」

『(っつかこのやり取り観覧車でやった筈だよな?)』

結局、雄二は霧島にアイアンクローを喰らっても私を逃すまいと必死に肩を掴んでいたので私は諦めて残り、霧島は雄二と小作りが出来ない事に物凄く残念がっていたのであった。

おまけ

その頃、クリスは……。

「ふんぬ〜〜〜!!!! どうかしら、クリスちゃん?」

「おお〜〜〜 にしむーと互角と言って良い位の素晴らしい筋肉だよん」

部屋で相方のエキストラであるローズと談笑していた……談笑中にローズがクリスに自慢の筋肉を披露していたが。

「ねえろーじいー、触っていい？」

「いいわよお〜」

「どれどれ（ピトツ）……おおっ！（カッ！）」

ローズの腕に触れたクリスはいきなり開眼する。

「こ……この筋肉は……！」

「あら？ 何か気付いたのかしら？」

「一見膨れ上がっていきそうに思われるけど、触ってみると物凄く引き締まって無駄な肉と言われる部分が一切無く、更には鋼鉄とも言える硬さ！」

「触っただけで分かるのね、クリスちゃん」

クリスの解析にローズが思わず感心している最中、クリスはローズの筋肉を触り続けている。

「これ程の筋肉は滅多にお目にかかれないねい。あちしが思うに、ここまでの筋肉になるまで凄い時間が掛かる筈だよん」

「そうよお。何年も研鑽してやっと、ここまで辿り着いたの。今でも欠かさずちゃんとトレーニングをしてるわよお」

「……………ろーじい〜!! あちしは感動したよ〜!!」

感動したクリスは思わずローズに抱き付き……………。

「では感動している最中に、ワタシがこの筋肉に至った経緯をお話ししましょうか?」

「モチのロンよ!!」

過去話を聞く事となった。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (後書き)

次回は光一達の部屋での出来事をお送りします。

因みにアッチの方にて更新しますのでご注意ください。

## ミッション 如月グランドパーク編 ?

翌日の事。

『(ムクッ)……………ふわああ……………ねむ……………』

朝の6時に目覚めた私は上半身を起こして腕を伸ばした。

『向こうは…と(スッ)』

私はベッドから離れて雄二と霧島が寝ているツインベッドを見てみると……

「ぐが……………」

「すっ……………」

『よし、まだ眠ってるな』

そこには大の字になって寝ている雄二に抱き付いて幸せそうな顔をしている霧島がいた。

勿論言うまでも無いが、雄二と霧島が一緒に寝ているのには理由がある。



.....  
.....  
『さてさて、光一と優子は起きてるかなあ〜？（パチンツ！）』

私は奥の部屋に戻って服を着替え、指を鳴らすと……。

「（ピシュツ！）おはよう。待ってたぜ旅人さん」

「（ピシュツ！）おはよう。この時を待ってたわ」

準備万端状態の光一と優子が私の前に現れた。

『おはよう、お二人さん。では首尾良く頼むよ』

「」「了解」「」

『うむ。ではこれより……“雄二と霧島の仮想結婚式ミッション”を開始する！』

「」「おうー！」「」

私の開始宣言に光一と優子は力強く返事をした。

結婚式会場の控え室

「んんん…………んあ…………知らねえ天井だな…………ん!? (バツ!)」

雄二は寝ぼけながら目を覚ますと、ホテルで見ていた天井と違った事に気付くと一瞬で覚醒して周りを見た。

「な…何だ此処は!? ホテルの部屋じゃねえぞ!? ってか何時の間にか服がタキシードに変わっていやがるし!」

部屋の周りと自身が着ていたパジャマから白のタキシード姿へとなっている事に気が付く雄二は訳が分からない状態になっている。

と、そんな時…………。

『おはよう、雄二』

「やっと起きたか」

「雄二、今日は大事な日なんだから起きなきゃダメだよ」



「……………」

雄二と同様にタキシードを着ている私と光一と明久、無言になっている秀吉がいた。

『さあ秀吉、雄二のメイクを頼むよ』

「う…うむ。雄二、その椅子に座って……」

ソファーに座っている雄二に秀吉が鏡の近くに設置してある椅子に座る様に言ったが……。

「待て、これは一体どう言う事だ？ キチンと説明してくれるんだろうなあ。旅人さんよお？」

雄二が引き攣った笑みを浮かべながら私に質問してきた。

『説明って……この場所とお前が着ている服を見るだけで分かると思うんだが……』

「普段から悪知恵に長けているお前がこんな簡単な事に気付かないとは……」

「やれやれ、雄二ってホントにおバカさんなんだから……」

「明久だけにバカつて言われたくねえ！！ それと旅人！！ さつさと説明しやがれ！！」

明久の発言に過敏に反応した雄二は即座に突っ込んだ後、再度私に

問いかけて来る。

『仕方の無い奴だ。じゃあ言おう、雄二には、この後……』

「……………」

雄二は自身の考えている事が当たって欲しくないと願っていたが……。

『霧島と仮想結婚式をやってもらいます』

ダツ!!! ガチャツ! バタンツ!

私が笑みを浮かべながら真実を告げた瞬間に控え室から出て行ってしまった。

「(ダツ!!!) 待て雄二!!! 逃げるな〜!!!」

『さてと、颯爽と逃げた雄二は今……おお、もう此処から50m以上離れているぞ』

逃げた雄二を明久が追い掛け始めるのを見た私は慌てず、近くに置いてあるテレビを付けると、それには如月グランドパークのマップが映し出され、急速に移動している赤と青の点があった。その赤い点は言うまでも無く雄二であり、青い点は明久だ。

「あのゴリラは霧島に関してのみ逃げ足が物凄く速くなるからな……」

「もう1000m超えたのじゃ……じゃがどの道捕まる事に変わりないからのう」

感心と同時に呆れながら見ている光一と秀吉も雄二が捕まるのは時間の問題だと思っている。

コンコンッ！

『ん？ どうぞー！』

突然ドアからノックが聞こえた私は入っ正しいように言つと……。

ガチャッ！

「旅人さん、代表には説明しておいた……あれ？ 坂本君は逃げたのかしら？」

入ってきたのはドレスを着ている優子であった。

『すぐに捕まえるから大丈夫だ』

「そう。でもなるべく早く捕まえといて。スタッフの人達がもう始められるように準備をしてあるって言うってたから」

『ほいほい』

「じゃあアタシは坂本君のお母さんと一緒に代表のウェディングドレスの着付けの手伝いに入るから、坂本君をお願い。光一、後でね」

「ああ」

バタンッ！

優子は用件を言ってすぐにドアを閉めた。

一方、逃走している雄二は……。

「(ダダダダダダダダダダ！！！！)ちくしょ~~~~~~~~！！！！  
！！あのクソ野郎は俺の人生を終わらせる為に此処に誘いやがったなあ~~~~！！！！！！！！」

「(ダダダダダダダダダダ！！！！)待て雄二~~~~~~~~！！！！！！」

！ 旅人さんが折角企画してくれたのに逃げるのは失礼だろうが  
く！！！！！！！！」

如月グランドパークから出ようと全力で逃げているが、明久に追い掛  
けられていた。

「（ダダダダダダダダダ！！！！！！）失礼な訳あるかバカ！！  
あのクソ野郎は俺を地獄に叩き落そうとしてやがるんだぞ！！！！？？」

「（ダダダダダダダダダ！！！！！！）何で地獄なんだよ！？ 僕  
からしたら天国だと思うよ！？ 頭おかしくない！？」

「（ダダダダダダダダダ！！！！！！）翔子と仮想結婚式なんかし  
ちまったら俺の自由が完全に無くなっちまうだろうがくくく！！！！  
！！！！」

雄二は必死に仮想結婚式から逃れるために全速力で走っていたので  
あった。

.....  
.....

「分かってはいたが、あのゴリラは無駄な努力が相当好きみたいだ  
な」

『フッフッフッフッフ、アイツが何時まで持つか見物みものだねえ』

「お主等……顔が悪役みたいになっておるのじゃ」

「にははは、もっちゃんが必死になって逃げてるよん」

「あ……あはは」

「坂本君は酷いですね。翔子ちゃんから逃げるなんて……」

結婚式会場で雄二の逃走劇をテレビで見ている光一と私は嘲笑うかのように見ている。

秀吉は私達の顔について突っ込み、そして何時の間にか控え室に来ていたクリス、愛子、姫路も一緒にテレビを見ているのであった。

『お、そろそろ雄二が罠ポイントに到達しそうだな。光一、明久に連絡を』

「オツケ〜（ピッ）……明久、雄二が罠ポイントに入るからもう追いかけていい」

《了解！（ピッ）》

光一はトランシーバーを使って明久に退くよう指示をすると、青い点が減速し始めた。赤い点は未だにスピードは変わらず出入り口の方へと向かっている。

『では雄二がそろそろ此処に来るから、女性陣は霧島がいる控え室に行っててくれ』

「は〜い」

「ほいほ〜い」

「分かりました」

「秀吉は雄二のメイク準備を頼む」

「了解じゃ」

私と光一が言うと、クリス達は霧島がいる控え室へと向かい、秀吉はメイクの準備を始めた。

『それにしても光一、お前も随分と惨い策を考えた物だな。出入り口にアイツ等を配置させようなんて言い出した時は少し驚いたぞ』

「フツ……すぐに結婚式を始めた所で雄二は絶対に逃げ出そうとするからな。だから逃げてても無駄だと悟らせる為に態と逃したんだが……」

『今のところ必死に逃げ切っている雄二を見ると、全く気付いていないみたいだね……愚かだな』

「全くだ。あのゴリラはホントに俺の掌の上で踊ってくれるよ」





「誰がテメエ等みてえな醜いバケモノなんかとするかボケ!! 放  
しやがれ~~~~!!!!」

「だあれがバケモノですつてえ〜! そんな雄二ちゃんにはお・し・  
お・き! チユツ!」

「\$&『\$#%』&『,,\$&,%\$&〕!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!(ガクッ)」

ローズに頬をキスされた雄二は悲鳴にならない声を出した後に気絶  
すると、再び結婚式会場へと強制送還されるのであった。

おまけ

「うわ~~~~代表すっごく綺麗」

「.....そう?」

雄二が逃走している時、霧島がいる控え室では、ウェディングドレ  
スの着付けを終えた霧島の姿に優子が見惚れていた。

そして……。

「ホントに綺麗ねえ〜。翔子ちゃんのドレス姿、凄く似合ってるわよ」

雄二の母親である坂本雪乃がいたのであった。

何故この人がココにいるのかと言うと……優子の提案により、私が連れて来たのだ。

「最初は旅人さんって人に無理矢理連れてこられて何をされるのかと思っただけど、まさか雄二と翔子ちゃんの結婚式に呼んでくれるなんて……旅人さんには感謝しなければいけないわあ〜。これで翔子ちゃんは、おばさんの義娘になるのねえ〜」

「お義母さん……嬉しい」

「（仮想なのに、本物の結婚式だと思ってるし……まあいいわ）」  
霧島と雄二の母親のやり取りを見ていた優子は、呆れた顔をしていたが気にしないようにした。

「……でも大丈夫かな？ また前みたいになっただら……」

「大丈夫よ、代表！ そうならない為に旅人さんがいるから安心だから！」

霧島は前回のウェディング体験で中断された事を思い出して不安があると、優子は問題無いと言い切って安心させる。

「さあ代表、後はアタシと光一と旅人さんに任せて待つてね。必ず代表を満足させるから」

「翔子ちゃん、おばさん応援してるからバッチリ決めてね！」

「……優子、お義母さん、ありがとう」

涙が出そうになった霧島であったが、何とか堪えて優子と雄二の母親に礼を言うのであった。

ミッション 如月グランドパーク編 ?

『さてと、おバカさんが戻ってきたので此方も準備を始めますか』

「そうだな。秀吉、そこで生きた屍状態になっている雄二のメイクを終わらせといてくれ」

「わ…分かったのじゃ」

ガチャッ バタンッ

再び控え室に戻ってきた雄二に私と光一は控え室を後に結婚式会場へと向かった。

「雄二よ、すぐに終わらせるからのっ」

「……………」

「………… ホントにこんな状態でやっても大丈夫なのじゃろうか」

真っ白となっている雄二を見た秀吉は先が不安になりながらもメイクを始めたのであった。

そしてついにウェディング体験が始まった。会場には如月グランドパークのスタッフやその他の観客がいる。

配置はこんな感じである。

祭壇

私

光一

優子      霧島（予定）      雄二      明久

以降は席

愛子・秀吉・姫路・クリス・雄二の母

スタッフ      その他の観客

明久と優子が雄二と霧島の隣に立っているのは、隣の相手に指輪を渡す為です。

「皆さん、こんにちは。これよりウェディング体験を始めさせていただきます。司会は私 久遠光一と……」

『神父は私“さすらいの旅人”が勤めさせて頂きます。不慣れではございますが、一生懸命勤めさせて頂きますので、どうぞよろしくお願いいたします』

パチパチパチパチパチ！！！！

私が言つて礼をすると観客側の方から拍手が響いた。

「まもなく後方より、新婦入場されます。ドアが開きましたら、盛大な拍手をお願いいたします」

光一が言つてすぐに後方のドアが開き、ウェディングドレスを纏いブーケを持った霧島が入場しバージンロードを進むと……。

）  
）  
）  
）  
）

パチパチパチパチパチ！！！！

オルガン演奏と盛大な拍手を送られた。

「（……………大丈夫かな？）」

「（何だ？ 俺の目の前にウェディングドレスを着た翔子がいるな。これは夢か。だったら一通りやってさっさと終わらそう）」

霧島は前回の件でまた邪魔が入らないかと不安になりながらも雄二の一步手前に止まる。雄二はまだ意識が戻っていない為に今やっている事が夢だと勘違いしているのか、霧島のウェディングドレス姿に見とれていた。

「皆様、もう一度拍手をお願いします」

盛大な拍手の最中、雄二は霧島の手を取る。雄二と霧島は祭壇の前に進み、私の前に立つと一礼をする。

「これより、新郎新婦の結婚式を執り行うことをおごそかに宣言します」

「（夢とは言え、この野郎が神父をやるのか）」

「（……………ああ、雄二と誓いの言葉を……………私はこの時を待っていた）」  
雄二は嫌そうな顔をしており、霧島は満たされ始めている顔になっている。

『（二人が対照的な顔になっているが……………まあいい）』  
嫌気が差している雄二に幸せそうな霧島、私は気にしないようにしながら誓いの言葉を言う。

『新郎、坂本雄二よ。汝は富める時も貧する時も、霧島翔子を愛し、共に暮らしていくことを誓いますか?』

「（ホントだったら嫌だと言うが）はい、誓います」

雄二は誓い……。

『新婦、霧島翔子よ。汝は楽しい時も辛い時も、坂本雄二を愛し、共に歩んで行く事を誓いますか?』

「（……これで……私は雄二の妻になる……嬉しい）………はい、誓います」

霧島は間がありながらも誓った。

『では明久、新郎に指輪をお渡し下さい』

「はい。雄二、ほら（スッ）」

「（何で明久がココにいるんだ? ……まあいいか）ああ、ありがとう  
とな」

『では新郎、新婦に指輪を』

雄二は明久から受け取った指輪を……。

「翔子………いいか?」

「……………うん（スッ）」



手袋を外している霧島の左手の薬指に指輪を嵌めた。(手袋とブリーケは優子の方で回収済み)

『では木下さん、新婦に指輪を』

「はい。さあ、代表<sup>スッ</sup>」

「……ありがとう、優子」

『では新婦、新郎に指輪を』

霧島は優子から受け取った指輪を……。

「……雄二」

「(ああ、今度は翔子が俺に指輪を嵌めるのか)ほら(スッ)」

霧島はは雄二の左手の薬指に指輪を嵌めた。

『では此处で、誓いのキスをお願いします』

指輪を嵌めたのを確認した私は最後の誓いを言う。

「翔子……(スッ)」

「……雄二」

雄二は霧島のベールを上に向けて両肩に手を置きながらキスをしようとする、霧島は目を瞑る。

そして二人は……。

「んん……」

キスをした。

パチパチパチパチパチパチ！！！！！！

2人が誓いのキスをした瞬間に、盛大な拍手が鳴り響く。

「きゃ～～～！！ 代表おめでとう～～～！！！！！！（パチパチパチパチ！！）」

「きりり～～～ん！！！！ もっちゃん～～～ん！！！！ お幸せに～～～  
～～～！！（パチパチパチ！！）」

「素晴らしいのじゃ！！（パチパチパチ！！！！）」

「翔子ちゃん！！ おめでと～～～ごさいま～～～す！！！！（パチパチパチ！！！！）」

「雄二～～～！！ 翔子ちゃんを泣かせたら許さないんだからねえ～～～  
！！（パチパチパチ！！！！）」

愛子、クリス、秀吉、姫路、雄二の母親は満面の笑みを浮かべながら拍手をしております……。

「～～～成功だ～～～！！！！！！（パチパチパチパチ！！！！）」

「「「おめでとぅ〜〜!!!!（パチパチパチパチ!!!!）」」」  
スタッフや観客達も盛大な拍手をしていた。

「これにてウエディング体験を終了させていただきます!」

光一が終了宣言をしても未だ拍手の音が鳴り響いているのであった。

ウエディング体験を終えて……………。

『「雄二と霧島の仮想結婚式”ミッションコンプリート”!!!!」  
』

「「「イエ〜〜〜〜イ!!!!」」」

パアンツ!!

控え室でミッションに成功した私、光一、優子、そして何故かクリスが手を叩きあっていた。

「凄かったですねえ〜木下君」

「まあ…………じゃが（チラッ）」

姫路、秀吉が椅子に座っている雄二と霧島を見てみると…………。

「翔子ちゃん、これで私達は本当の親子になったわねえ〜」

「…………お義母さん」

「俺は何をやった？ 俺は何をやった？ 俺は何をやった？  
俺は何をやった？（ブツブツ）……………ウアアアアアア〜」

霧島が雄二の母親と抱擁しており、雄二は漸く意識が戻って自分ごとんでもない事を仕出かした事を気付いて独り言を呟いては叫んでいた。

「…………雄二、一緒に幸せな家庭を作ろう」

「雄二、さっきも言ったけど、翔子ちゃんを泣かせたら許さないわ

よ

「アアアアア〜……………!!!!!!……………!!!!!!」

『どうだったクリス、雄二と霧島のウェディング体験の感想は？』

坂本一家の会話を無視している私はクリスマスに感想を聞いている。

「もう最っ高だったよん おねーさんも何時かこういつちゃんとあんな結婚式をやってみたいって思ったねい」

『ほほ〜う？ では機会があつたらやつてみますか』

「その時は頼むよん それとゆーこりんとあいぼんも一緒にお願いだよん」

『ご心配なく、それもちゃんと考えておりますので』

私とクリスが完全にノリの良い感じになっている。

「おいおい、日本じゃ重婚なんて出来るわけ無いだが」

そんな二人を見て、光一は出来ないと言うが……。

「いいじゃない光一。どうせウェディング体験なんだから」

「そうそう。それにボクとしても光一君とウェディング体験をやってみたいと思ってたし」

「……………まあ二人がそう言うなら」

優子と愛子に言われて満更でもないみたいだ。

「あ…明久君、いつか私と……ウェディング体験をしてみませんか？」

「ええ!？」

「姫路よ! 明久とウェディング体験をするのはワシじゃぞ!！」

「ひ…秀吉!？」

別の方では姫路と秀吉が明久に迫ってウェディング体験をすると言  
い出していた。

『おやおや………』

今度は光一達がウェディング体験をやりたいと言う雰囲気になって  
いる事に、私は微笑ましく見ていた。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (後書き)

雄二と霧島の仮想結婚式ミッション完了〜〜!!!!  
協力者の光一、優子、感謝するぞ!!

そして次回はアッチの方を更新します。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (前書き)

今回は短めです。



ミッション 如月グランドパーク編 ?

それから夕方頃、私は光一達を集めて帰る支度をしていた。

エントランスで……。

「終わりだ……終わりだ……俺はもう終わりだ……俺はもう翔子から……うあああああああ~~~~~!!!!!!」

「……雄二の子供が出来ないなんて……凄く残念」

既成事実が完全に発覚した雄二は絶望の雄叫びをあげ、私から媚薬のデメリットを教えられた霧島はどんよりとした空気を纏って非常に残念がっており……。

「秀吉、姫路さん、ホントにゴメンなさい。僕は人としてやってはいけない事をやってしまった」

「明久よ、ワシは別に気にしておらん。じゃから謝るのはもう止めてくれんかのう。アレは合意の上なのじゃから」

「そうですよ明久君、私達は明久君なら全然構いませんから……それに凄く気持ち良かったですし（ボソツ）」

秀吉と姫路を未だに陵辱したと勘違いして土下座する明久に、秀吉と姫路は明久を無理矢理立たせながら問題無いと言い……。

『光一、腰は大丈夫か？』

「ああ、今の所は何とも無い。だが油断したらまた……」

私が腰の安否を聞くと、光一は腰を摩りながら私の傍におり……。

「今は下手に動かないでね、光一」

「また前みたいにぎっくり腰になったら、ボク達も凄く罪悪感を感じるから」

「ゴメンこういっちゃん。そんな事があつたなんておねーさん知らなくて……」

光一を氣遣う優子と愛子に、調子に乗りすぎてエッチしすぎたと謝るクリスがいた。

「い…いや、いいんだクリス。俺としてはクリスとのエッチは凄く気持ち良かったから。だからそんな気にしなくていい」

『それに万が一の為に私がいるんだ』

「ならいいけどねい……」

『まあそれはそうと……おい明久、何時まで謝っているんだ？』

私は話題を変えようと、土下座を止めない明久に声を掛ける。

『あれは私が秀吉と姫路さんに指示をただけで、お前は決して悪くないんだぞ？』

「そう言っても僕が最低な事をした事に変わりませんよ！」

『はいはい、もうそんなに自虐的にならないでいいから（スツ…ト  
ン）』

「あつ……」

明久に言ってもきりが無いと思つた私は明久に暗示を掛けることにした。

『では襲つてしまった責任として、秀吉と姫路さんをずっと大事にする事。いいな？』

「……………分かつたよ旅人さん。秀吉、姫路さん（ギユウツ）僕は君達の傍にいて、ずっと大事にするから」

「！！（／／／／／／／／／／）い…いきなり何を言うのじゃ!？」

「そ…そうですね！（／／／／／／／／／／／／）明久君は何時も  
そうやって……」

暗示を掛けられた明久は、私から離れ、秀吉と姫路を抱き締めてプロポーズ紛いな台詞を言うと、2人は突然の事に戸惑いながら顔を赤らめた。

『ホント明久つて大胆な台詞を不意打ちで言うよな……天然の女殺  
しもいい所だよ』

「た…旅人殿!! ワシは男じゃ!!」

『今のお前は女だろうが』

「あっ……………」

明久に抱きつかれながら私の言った事を否定する秀吉であったが、私に言われて自分がまだ女だと言う事を忘れていた。

と、その時……………」。

「ちょ…ちょっと待って旅人さん、秀吉が女ってどう言う事？」

『え？……………ああそうか、木下さん達に秀吉が昨日から女になつてるって言うてなかったか？』

優子に突っ込まれた私は言うの忘れていた事を思い出した。

「何だ優子、気付いてなかったのか？俺はとっくに気付いていたぞ」

「ボクも。優子が何も言うてなかったから、てっきり……………」

「おねーさんも気付いてたよん　まさかひでつちがあんなにナイスバディだったなんて驚きだったねい」

『あらら、もう知ってたのね』

どうやら光一と愛子とクリスは既に気付いていたみたいだ。

「……………（ガクンッ）やっぱりアタシの見間違いじゃ無かったのね」

『き……木下さん?』

優子がいきなり両手両膝を床に付けOTLの姿勢になると……。

「どうして秀吉が女になる度、あんなに胸が大きいのよ……同じ遺伝子を持つ双子の筈なのに、何で……何でよお……うつつ……」

『「「「」……………」」』

「「「」……………」」

本気で悔しがって、ぶつぶつと怨念じみた事を呟く優子に私、光一、愛子、クリスは気の毒に思いながらも何も言えなかった。その様子を見ていた明久と秀吉と姫路も同様に優子を気の毒そうに見ている。

『（パンパンッ!）さ……さて! もう帰りましょうか! ほら雄二と霧島、何時までもシヨックを受けていないで早く帰るよ!』

私はこのどんよりとした空気を無くす為に、手を叩きながら帰ろうと催促するのであった。

私が光一達を文月学園前に転送した後に、光一達と別れると……。

『今日は来てくれてありがとうなクリス』

「別にお礼を言う必要は無いよん旅っち。逆におねーさんがお礼を言いたい位なんだから」

クリスと一緒に歩いていた。

『では君を元の場所に送り返すでしょう』

「こづいつちゃん達とは、まだ一緒にいたかったんだけどねい」

『流石にこれ以上君を此処に置いておくと、君の作者さんに迷惑を掛けてしまいそうだからね』

「うーん、それを言われちゃあ……」

『ではクリス。また会いましょう（パチンツ！）』

「またねえ〜旅っち（ピシュツ！）」

私が指を鳴らすと、クリスの姿が消えたのであった。

『と言つ訳でGAUさ〜ん！！ クリスをお返ししますよ〜〜  
！！！！！！！！』

以上、“ミッション 如月グランドパーク編”でした。

おまけ

「……さあ雄二、今から私のお父さんに今日の出来事を報告しな  
「や」

「待て！！んな事したら俺はお前の父親に絶対殺されるだろ！？」

「……そんな事無い。お父さんは私と雄二の結婚を心から望んでい  
るから……子供が出来ないのは残念だけど」

「早まるな翔子！？それに俺とお前はまだ学生だ！！結婚なん  
か出来るわけが……」

「……大丈夫。お父さんはきっと認めてくれるから」

「誰か~~~~~！！！！  
誰でも良いから翔子を止めてくれ~~~~~  
！！！！！！！！！！」

雄二は霧島に引き摺られて父親のいる所へと連行されるのであった。

ミッション 如月グランドパーク編 ? (後書き)

次回は大神白夜と一騎討ち……………で良いのかな？



## 大神白夜との対決

とある休日の昼頃の空き地にて……。

「待っていたぞ異物、私はこの時をどんなに待ち侘びた事か……」

『随分と嬉しそうだねえ』

大神白夜と私が出た。何故此処にいるのかは昨日まで時間を遡る。

それは昨日のこと。

「う……う……」

「く……く……この人数を相手に……（ドゴツ！）ぐはっ！  
！」

「私が貴様等みたいな雑兵に負けるとも思っていたか？」

白夜が町の路地裏でチンピラ共を始末していた。

「神に選ばれし者である私に喧嘩を売るとは身の程知らずの連中だ。

その身で償うがいい（ドガッ！ バキッ！ ドゴッ！）「

「「「「「グアアアアアア~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!」「「「「

チンピラ共は白夜に渴上げをやるつとした事を後悔しながら潰されるのであった。

5分後

「詰まらんな。どいつもこいつも弱すぎる」

白夜は蔑んだ目をしながら気絶しているチンピラ共を見ていた。

もう此処には用は無いと路地裏からさっさと出ようとしたが……。

「少しは齒応えのある連中がいてくれた方が、私としては好都合なのだが……」

『相変わらず強いねえ〜白夜』

「……………異物か」

私に声を掛けられたので、白夜は目を細めながら此方を見てくる。

『お久しぶり。流石は神童と呼ばれるだけの事はあるねえ。見て惚れ惚れしちゃうよ』

「何か用か異物？ 私は忙しいのだが……」

『あらま、随分とつれないのね。久々に会ったのに……挨拶くらいはしてくれよ』

「今の私は少々機嫌が悪い。用が無ければ失せろ」

『あつそ、では早速本題に入りましょうか………大神白夜、貴様に一騎打ちを申し込む。諾か否か？』

「！……！」

私が急に声を低くして殺気を放つと、白夜は私を見て……。

「……くく……くく……くく………良かろう。受けてたとうではないか」

最高の獲物を見つけたかのような顔をして私からの一騎打ちを承諾した。

『では明日の午後2時、この町の近くにある空き地に来い。そこで待っている(ピシユッ……)』

「………漸く来た。楽しませてくれる獲物が私の前に………」

用件を言い終えた私は姿を消すと、白夜は笑みを浮かべながら……。

「異物、我が最大の敵となりうる貴様を倒し、さらなる高みに立つてくれよう」

私との戦いを心待ちにしていたのであった。

とまあ、昨日にこんな事があつたのである。

『フフフ……そんなに私と戦いたかつたのかな？』

「当然だ、貴様を倒せば私は更なる高みに立つことが出来る。これが喜ばずにいられるか」

『同時に私がお前に今までやって来た屈辱を晴らす事が出来るってか？』

「私をそこら辺の有象無象と一緒にするなよ異物。確かに貴様が私にやった事は許せんが、そんな下らん私怨に囚われる私ではない」

『それは失礼……（やはりコイツは他の連中とは大違いだな。全然隙が無い）』

私がちよっとした挑発をしても、すぐ感情に走らない白夜に謝罪し

ながら観察する。

「（分かってはいたが、やはりコイツ相手に小細工は一切通じないな）」

「……………貴様は相変わらずだな」

「ん？ 何がだい？」

白夜の発言に私はおちゃらけた態度を取るが……………。

「いつもふざけた事を言いながらも、常に私の動きを観察している。私が動いたら何時でも対応出来るように…」

私の行動をお見通しだと言わんばかりに言う。

「何の事かな？」

「貴様は私の眼を常に見続け、私が動作をする度に何時でも動けるように構える。それに……………」

「……………」

白夜が威圧感を放ちながらも私は微動だにしなかった。

「私を前にしても全く微動だにしない……………くっくっくっく」

「……………お前が笑うなんて初めて見たな……………まあいい。ではそろそろ始めるか（スッ……………ギンッ！）」

笑う白夜を見るのは意外であったが、私は先程までのふざけた態度から一変して構えながら殺気を放つと……。

「くつくつくく………異物、貴様を倒して、私は更なる高みへと立つ（スツ……ギンツ！）」

白夜も構えて更に威圧感を放ったのであった。

私の殺気と白夜の威圧感が放たれた空き地の周りでは……。

カア~~~~!! カア~~~~!!（バサバサバサ!!）………シ~~~~ン

カラスや小鳥が一斉に逃げ出して静かになるが、私と白夜は全く気にしていない。

更には……。

『……………』

「……………」

構えて5分以上経っても互いに構えたまま静止していた。

『……………どうした白夜、来ないのか?』

「貴様こそ、かかってきたらどうだ? 私は何時でも構わんぞ」

『……………そうか。ならば……………（フッ!!）』

「!!!!!!」

私が言った後、一瞬で姿を消した事に白夜は眼を見開く。

フツ！ ブオンツ！！

ヒュツ！

白夜の懐に入った私は回し蹴りを繰り返すと、白夜はすぐにかわし、私から離れて距離を取る。

『へえ〜中々の反射神経じゃないか。あの攻撃をかわすなんて流石だな』

「……………掠ったか……………」

白夜が自分のシャツを見ると、下の部分が横一直線と切れていた。まるで刃物で切り裂かれているかのように。

しかし白夜はソレを全く気にせず再び構え……………。

「ならば此方も行かせてもらおう（スツ……………フツ！！）」

『何！？』

一瞬で姿を消した白夜に私は驚き……………。

フッ！ ブオンッ！！

『ちっ！（ヒュッ！）』

お返しかの様に白夜が私の懐に入って回し蹴りを繰り返すと、私は舌打ちをしながらかわして、白夜と同様に距離を取った。

「ふむ。初めて使ったが、まだ異物に比べたら程遠い。練習が必要だな」

『……………驚いたぞ。まさか一度見ただけで私の移動法を真似るとは……………』

「何を驚いている。神に選ばれし者である私には造作も無い事だ」

『…………………………』

さも当然の様に言い放つ白夜に、私は少し戦慄する。

「それにしても流石だな異物、まだ本気では無いとは言え、私の攻撃を難なくかわすとは……………やはり貴様は私の高みへと登る通過点として相応しい相手だ」

『あれでまだ本気じゃないのかよ。お前の身体能力にはつくづく驚かされる』

「貴様にも言えることだがな……………まあいい。では続けるぞ（スッ）」



『……………(スッ)』

再び構える白夜と私は無言となってジリジリと相手に近寄る。

そして相手に攻撃出来る距離になると……。

ガッ!!!

互いに相手の拳を凄い勢いでぶつけ……。

ガガガガガガガガガガガガ!!!……………!!!

パンチャキックを使った攻防が始まった。

『はあっ!!!』

「ふっ!」

ガスッ!!! ガッ! ガガガガッ!!!

私と白夜は互いに攻撃をしていると……。

「遅い!」

『ちっ！』

白夜が一瞬の隙を突いて私の顔を目掛けて正拳突きをしてきたので、私は両腕を交差して防御する。

ドンツッ！！ズズズズズズ……

防御したのにも拘らず、正拳突きによる威力が高かった為に衝撃で吹っ飛び、私が両足に力を入れて思いっきり踏んで土埃を撒き散らしながら立ち止まった。

『いててて……ふうっ。まるで何処かの達人と相手をしているみたいだ』

「さて、準備運動はここまでとするか」

私が両腕をプラプラとしている最中に、白夜は次の段階に移るかのように構える。

「異物、そろそろ本気を出したらどうだ？」

『だったらお前も出せばいいだろうが』

「それは貴様次第だ」

『どうあっても白夜は私から本気を出さないと、その気になってくれないみたいだな……（フツッ！……）』

「!!!!!!」

私が喋りながら移動法を使うと、白夜は即座に反応し……。

「ふんっ！」

ガアンッ!!

私の側面からの攻撃を受け止めた。

『つたく。隙を突いても、すぐに防がれるな……』

「私に隙などありはしない」

『そうかい。なら……はあっ!!』

「ふっ！」

ガガガガガガガガガガ!!!!!!!!

再び私と白夜の攻防が始まった。

また同じ行動みたいに思われるだろうが……。

「（バキッ!!）（ぐっ!!）」

『(ドゴッ!!(ぐふっ!!)』

今度はお互いに攻撃を受けていた。私が白夜の顔を殴ると、白夜がお返しと言わんばかりに私の鳩尾に膝蹴りをかます。

ズガガ!! ガガ!! ドゴッ!! バキッ!! ズガンッ!!  
ドドッ!!

ダメージを受けている私と白夜はそんなのを構い無しに激しい攻防を続けている。最早これは喧嘩と言うレベルではなく戦闘と呼ぶに相応しかった。

私と白夜の攻防が1分ほど続くと……。

『ぜりゃあ!!(ブオンッ!!)』

「(ドゴッ!!(うぐっ!!)」

白夜の腹にパンチを決めると、白夜は激痛のあまり動きが一瞬止まったので……。

『おらあっ!!(ブンッ!!)』

「(バキッ!)(ぐっ!!(バタンッ!!)」

私は白夜の顔を殴ると、勢いがあったせいか白夜は背中地に地を付いて倒れた。

『はあ……………はあ……………はあ……………はあ……………いって……………(スッ)』

白夜が倒れたのを見た私は息が少し上がりながらも一旦距離を取って再び構える。

「……………」

『おい白夜、お前があ程度の攻撃でやられる訳がないのは分かってる。さっさと起き上がったらどうだ?』

「……………」

『?』

声を掛けても反応が無かったので、私が不可解に思うと……………。

「……………(ムクッ)……………」

白夜が起き上がった。

「この私に血を見せるだけでなく、私の背中を地に付けさせるとはな……………」

『……………もしかして怒ってるのか?』

「怒る? 何を見当違いな事を言ってる。私は嬉しいんだ。この私をここまでさせる貴様をな……………くっくっくっくっくっく……………あーっはっ



私の背中目掛けて蹴りを繰り出す白夜に私は当たってしまった。私はその衝撃で前のめりになると……。

「はあっ!!!(ブンッ!)」

『おっと!(ヒュ! バババッ!)』

今度は私の顔にパンチを繰り出してきたので、私はすぐにかわしてバク転しながら白夜から距離を取る。

「ふっ……そうこなくては」

『はあっ…はあっ…はあっ……(コイツ、私の移動法をもう完全に使いこなしている……)』

かわされた事に悔しがない白夜を見て、私は息が上がりながら白夜の冷や汗をかく。

『(時間が長引くほど白夜は更に学習して完全に物にする奴だな。チッ! あの移動法をコイツに見せたのが仇となったか!!)』

「くっくっく……さあ異物、貴様の技を私に見せてみる!!(フッ!!!)」

そして白夜はまた姿を消して私に襲い掛かってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0674w/>

---

バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ IFシリーズ

2011年12月16日00時49分発行